

奈良文化財研究所史料 第68冊

古代東アジアの金属製容器 I (中国編)

独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所

2004

古代東アジアの金属製容器 I (中国編)

正誤表

| | | 誤 | 正 |
|----|-----------|---------------------------|-------------------------|
| 本文 | 30頁 16行 | 内蒙古出土銅器 (1 - P a4 · R5) | 内蒙古出土銅器 (1 - P a4 · R6) |
| | 45頁 19行 | 以後は途絶える。 | わずかに五胡十六国時代に残る |
| | 46頁 6行 | 67年の江蘇・邗江 | 後漢前期の浙江・龍游 |
| | 57頁 3行 | 新興出土瓷器 (7 - A b1 · A b12) | 新興出土瓷器 (7 - A b1) |
| | 61頁 8・37行 | 521~589年頃の河北 | 521年の河北 |
| | 65頁 1行 | 北周567年 | 北周569年 |
| | 66頁 2行 | 古式の I 類 | 古式の II 類 B 種 |
| | 70頁 3行 | 浅目になる (以下、VI 類 B) | 浅目になる (以下、VI 類 C 種) |
| 付図 | 2 | A c (前14C) | A c (前140) |
| | 4 | G b3 豆 II | G b3 豆 I |
| | 4 | N b7 深銅 I | N b7 浅銅 I |
| | 6 | N d3 三脚鍋 | N d3 三脚鍋 II |
| | 6 | R c1 球胴釜 II C · 甑 II | R c1 球胴釜 II B · 甑 II C |
| | 7 | C d (後漢中) | C d (5 C 前半) |
| | 7 | C a6 丸底杯 VI | C a 丸底杯 VI |
| | 7 | I a4 小盤 IV B | I a4 小盤 VI B |
| | 7 | M b8 高足香盒 | M b8 高足香盒 II |
| | 8 | M d (北齊後) 山西太原 文献384 | N a (569) 寧夏李賢墓 文献355 |
| | 9 | H a1 把手付壺形杯 | H a1 把手付壺形杯 III |
| | 9 | N c (565) | N c (7 C 末) |
| | 9 | T 6 小花盤 | T 6 小花盤 III |
| | 10 | G b5 豆燈 V B | J b5 豆燈 V B |
| | 11 | (器種名) 飯器 | 飲器 |
| | 12 | P b3 有柄注壺 VI F | P b3 有柄注壺 IV F |

序 文

2003年度の研究成果の一つとして、毛利光俊彦君が著した『古代東アジアの金属製容器』を奈良文化財研究所史料第68冊として上梓します。毛利光君はこれまで古代の日本列島と朝鮮半島の交流関係に興味を持ち、古墳時代の金属製冠・金属製容器、歴史時代の瓦埴類などを素材にして調査研究を進め、少くない研究成果をあげてきました。今回の研究テーマとしてとりあげる金属製容器については、先年行われた法隆寺昭和資材帳に関連する調査研究が導火線になっております。法隆寺には飛鳥時代以来の優れた金属製容器が仏具として使用され、保存の良好な状況で残されており、それに関連する朝鮮半島あるいは中国大陸の関連資料を搜索する段階で知らず知らずのうちに中国漢代にまで遡ったというわけです。この壮大な研究を通じて食器の変遷、食生活の変容、地方色の成立など食文化を基点とする東アジアの文化交流を具体的再現しようとする野心的な試みであります。

今年度はまず中国における歴代の金属容器を観察編年することに主眼をおき、2004年度には母国から出発した金属容器が朝鮮半島、日本列島に舞台にしてどのように華開くかという点を描写することになりますが、研究の始発点になった法隆寺の金属製品に関する研究成果は来年度のお楽しみというところです。

中国における歴代の金属容器を通観する研究は中国においても研究事例が少なく、大胆な視点にたつ研究といえましょう。それだけに少くない誤解や過ちを秘めている可能性が多々あるやもしれませんが、その点について読者のお許しを願うとともに忌憚のない叱正を賜れば幸いです。

今回の研究及び刊行に際して法隆寺をはじめ、東京国立博物館、奈良国立博物館等の皆様に大変お世話になったことに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2004年 3月

独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所長
町田 章

古代東アジアの金属製容器 I (中国編)

目 次

| | |
|-------------------------------|----|
| I はじめに | 1 |
| II 古代中国の金属製容器 | 2 |
| 1 器種名について | 2 |
| i 殷周銅器の概観 | 2 |
| ii 漢代以降の器種名とその用途 | 4 |
| iii 研究略史 | 24 |
| 2 漢代における変遷 | 26 |
| i 前漢・新 | 26 |
| ii 後漢 | 40 |
| 3 三国時代から隋代における変遷 | 47 |
| i 三国時代～五胡十六国時代・東晋 | 47 |
| ii 南北朝時代・隋 | 55 |
| 4 唐代から五代・十国時代における変遷 | 67 |
| i 初・盛唐 | 67 |
| ii 中・晩唐～五代・十国時代 | 78 |
| 5 小結 — 古代中国における食生活等の変遷とその画期 — | 87 |

挿 図

| | | |
|------|----------------------------|----|
| 第1図 | 前漢の自名金属器 | 8 |
| 第2図 | 絵画資料 1 前漢・後漢の壁画・画像石等 | 9 |
| 第3図 | 絵画資料 2 後漢の河南及び山東の画像石墓 | 10 |
| 第4図 | 絵画資料 3 河南・密県打虎亭画像石墓（後漢晩期） | 11 |
| 第5図 | 絵画資料 4 山東・沂南画像石墓（後漢末頃） | 12 |
| 第6図 | 絵画資料 5 遼寧・遼陽壁画墓（後漢晩期頃） | 13 |
| 第7図 | 絵画資料 6 甘肅・嘉峪関画像磚墓（三国時代～西晋） | 14 |
| 第8図 | 絵画資料 7 五胡十六国時代～北魏の壁画・石刻画等 | 15 |
| 第9図 | 絵画資料 8 南北朝後期の石刻画等 | 16 |
| 第10図 | 絵画資料 9 隋代の壁画・石刻画等 | 17 |
| 第11図 | 絵画資料 10 初・盛唐の壁画等 | 18 |
| 第12図 | 絵画資料 11 盛・晩唐～五代の彫像・絵画等 | 19 |
| 第13図 | 前漢・新代の竈 | 20 |
| 第14図 | 後漢～唐代の竈 | 21 |
| 第15図 | 新～三国時代の案 | 23 |
| 第16図 | 銅製提梁筒 | 38 |
| 第17図 | 前漢・新代の爐 | 39 |
| 第18図 | 後漢の爐 | 46 |
| 第19図 | 西・東晋の有脚盤 | 49 |
| 第20図 | 後漢～東晋の虎子 | 53 |

付 図

- 付図 1 中国古代金属製容器編年 1 (前漢・新代の供膳具・水器)
付図 2 中国古代金属製容器編年 2 (前漢・新代の貯蔵具・注器)
付図 3 中国古代金属製容器編年 3 (前漢・新代の煮沸具・雑器)
付図 4 中国古代金属製容器編年 4 (後漢～東晋の供膳具・水器)
付図 5 中国古代金属製容器編年 5 (後漢～東晋の貯蔵具・注器)
付図 6 中国古代金属製容器編年 6 (後漢～東晋の煮沸具・雑器)
付図 7 中国古代金属製容器編年 7 (南北朝～隋代の供膳具・水器)
付図 8 中国古代金属製容器編年 8 (南北朝～隋代の貯蔵具・注器・
煮沸具・雑器)
付図 9 中国古代金属製容器編年 9 (初・盛唐の供膳具・水器)
付図 10 中国古代金属製容器編年10 (初・盛唐の貯蔵具・注器・煮沸具・雑器)
付図 11 中国古代金属製容器編年11 (中・晩唐～五代十国時代の供膳具・水器)
付図 12 中国古代金属製容器編年12 (中・晩唐～五代十国時代の貯蔵具・
注器・煮沸具・雑器)

例 言

- 1 本書は、『古代東アジアの金属製容器』の第1分冊として、中国を取り扱ったものである。2004年度には、韓半島と日本を対象として、第2分冊を刊行する計画である。
- 2 本研究は、1992年度から1995年度に奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部と埋蔵文化財センターが実施した法隆寺所蔵金属製容器の考古学・科学的調査の成果や1997・1998年度の科学研究費補助金(基盤研究C:代表 毛利光俊彦「南都七大寺所蔵青銅製容器の形態と製作技術に関する編年的研究」課題番号09610416)の成果、そして筆者がこれまでに蓄積した日本各地の古墳・寺院等出土金属製容器資料や古代中国・韓半島の金属製容器資料を基として、日本・韓半島・中国の主として古代の金属製容器の編年と相互比較を試みようとしたものである。
- 3 『古代東アジアの金属製容器』Iでは、漢代は銅製容器がほとんどだが、三国時代からは金属製容器が少ないため、陶・瓷器で補ったことをお断りしておく。
- 4 本書は毛利光俊彦が執筆、編集した。本文の入力や図面作成にあたっては、花谷めぐむ・八木あゆみさんの多大な協力をえた。また、上田素土子・東仁美・菊川弥生・脇田涼子・野秋百代・吉村旭輝(帝塚山大学院生)・上地美智子(天理大学生)さん達の助力もえた。

古代東アジアの金属製容器 I (中国編)

I はじめに

金属製容器は、日本では6世紀前半の古墳から出土した青銅器（以下、銅器と称す）が嚆矢で、6世紀後半から平安時代にかけては古墳や寺院跡、宮殿、集落跡、祭祀遺跡からの出土品及び寺院などでの伝世品が相当量ある。また、奈良・平安時代の諸寺院の資財帳などには、数多くの銅器や銀器などの金属製容器が記載されている。だが、中・近世になると、密教系の法具を除くと、金属製容器はごくわずかな例しか残っていない。

韓半島では、中国前漢の武帝が設置した四郡の一つ、楽浪郡（前108～313年）の古墓などから出土した金属製容器が古いが、例は多くない。出土例が増加するのは、三国時代の5、6世紀頃からであり、統一新羅（668～918年）・高麗（918～1392年）時代にも墳墓や寺院跡などから相当量出土している。朝鮮時代（1392～1910年）の出土例も多く、韓国では現在も金属製食器を日常的に使用している。

中国では、紀元前千数百年に遡る殷代と次の西・東周時代に、彝器（祭器）や礼器として重厚な銅器が数多く製作された。東周時代後半にあたる戦国期（前5世紀から前221）の晩期から秦（前221～前202）代にかけては、伝統的な銅器がすたれ、かわって日常的な銅器が数多く製作され、漢代（前202～220年）に継承される。三国時代（前220～265年）から隋代（581～618年）にかけて金属製容器の出土例は減少傾向にあるが、唐代（618～907年）には銅器以外にとくに鍍金銀器が盛行し、北宋代（960～1127年）や遼代（916～1125年）にも継承された。明代（1368～1662年）、清代（1616～1911年）にも金属製容器は使用されつづけた。

本研究では、まず、出土例が豊富でしかも墓誌などから年代の明白な古代中国の金属製容器を取り上げ、器種の消長と器形の変遷を追求する。時代は、韓半島や日本との関連を考慮して前漢から五代・十国時代までとする。時代ごとにほぼ供膳具、貯蔵具、煮沸具、雑器の順に記述し、案（食台、お膳）や竈、香爐や燈（燈火器）などにも触れる（金属製品が欠落した場合は陶・瓷器などで補う）。小結として、金属製容器類の組成の変化から、古代中国における食生活等の変化を類推する。

韓半島や日本の金属製容器類は、出土した墳墓に墓誌があるとか、年代がわかる寺院の創立や修造に関わる遺物と判断できる例は少なく、伴出した他の遺物の編年観を斟酌しながら、器種の消長と器形の変化を追求せざるをえない。時代は、韓半島では三国時代から高麗まで、日本では古墳時代から平安時代までとする。取り上げる対象と記述の順は、中国の場合とほぼ同様である。小結として、古代の韓半島と日本それぞれにおいて、金属製容器類の組成の変化から、食生活等の変化を類推する。韓半島の場合だと、中国からの影響、日本の場合だと、中国や韓半島からの影響がどのように及んだかを探る。また、それぞれの国々の独自性も明らかにする。

II 古代中国の金属製容器

1 器種名について

本研究で取り上げる漢代以降の古代金属製容器については、器種名を記したいわゆる自名の器が極めて少ないが、漢代の金属製容器には殷周銅器から変化したものが多いことから、それらに記された器種名を準用するのが一般的である。ただし、報告者によって幾分か混乱があり、整理しておく必要がある。

i 殷周銅器の概観

ここでは、1967年刊行の樋口隆康著『中国の銅器』（以下、樋口1967と称す）を基に、殷周銅器の器種名を再認識し、その消長も概観する。

樋口1967では、殷周銅器を、自名器を基に以下のように分類した（*を付した器種は、殷周代だけに特有で、漢代以降のものと直接関わらないため省略した）。

A 食器

- I 煮炊器 テイ 鼎、レキ 鬲、ゲン 甗・甑、ソウ 釜、フ 鍑（または錡）
- II 盛食器 タイ 殷（または簋）、キ 孟、ウ 簠*、ホ 盥*、シュ 盨*、トン 敦*、トウ 豆
- III 挹取器 ヒ 匕

B 酒器

- I 盛酒器 ソン 尊*、ホウイ 方彝*、ジ 兕觥、コウ 卣、ユウ 卣、コ 壺、ホウ 觥、ヒョウコ 瓠*、ヘイ 罍、レイ 罍、フ 缶、ソウフ 鬲、ライ 缶、ホウ 甗、オウ 卣
- II 温酒器 シヤク 爵*、カク 角*、カ 斝*、カ 盞
- III 飲酒器 コ 觚*、シ 觶*、ジ 耳杯、ハイ 卣
- IV 挹注器 シヤク 勺、ト 斗

C 水器

- I 盤、バン 匱、イ 鑑、カン 盆、ボン 盆、セン 洗

(中略)

F 雑器 鑪

それぞれの解説を抜粋すると、以下の如くである。

テイ 鼎（脚付鍋） 鍋状の器に両耳をつけ、三足あるいは四足で支えたもの。豚や羊のほか、穀物も煮たらしい。殷・西周代では一般に青銅の蓋でなく、茅でおおったという。春秋期にはボウル形の胴に蓋がつき、脚が蹄形となる。漢代に存続する。

レキ 鬲（湯沸し） 鼎に似るが、脚が中空であり、物を煮るというよりも、湯を沸すのに適している。この上に蒸器をのせて、五穀やイモ、パンを蒸したが、鳥や豚を煮た可能性もある。戦国期にも盛んにつくられた。

ゲン 甗（蒸器） 上の甑（こしき）と、下の鬲が一つづきに作られた器。東周以降になると鬲と甑が分離し、やがて竈が発達すると、鬲の代わりに釜ができ、甑と組み合わせられて、新しい形式の蒸器となる。

甗（こしき） 蒸器の上半部のせいろである。戦国期のものが多く、すぼまった底に小孔がいくつも透してある。

釜・**鍔**または**錡** 茶釜に似て口がすぼみ、球形に近い形の炊器であるが、脚のないものを釜、三脚をつけたものを鍔または錡という。釜は竈の上にかけて、その上に甗をのせた。鍔は戦国期から漢代にかけて盛んにつくられた。

簋または**簠**（**鉢**） 鉢形の器で、圈台（高台。圈足ともいう）のついているのを原則とする。把手がつくものとなないもの、蓋のあるものとなないもの、方台のつくものなどがある。殷から周末まで広く使用された円形の器である。字はもみがらと匕（さじ）の象形であり、穀類を盛ったものをいう。漢代には、『説文』のように、すでに簋と後述する**簠**との混乱がある。

盂（飯ちゃわん） 大口の深鉢で、圈足と両耳のついた形は、簋のあるものに似ているが、一般に大型で、耳は両脚が水平に器腹につき、中ほどで折れ上がるのが特色。殷から西周前期に限られ、それ以後はみない。東周代に後述する**匱**の器名に「**盂**」**盂**としたものがあり、この時期にはすでに盂が転用されるようになっていた。

豆（高坏） 両環耳のある浅皿の下に、裾ひろがりの高足をつけたもの。黍（きび）や稷（高粱）を盛ったと解されるが、肉やスープ、カユなども盛った。銅器は西周晩期からであるが、この器はその後も長く用いられた。

匕（匙） 料理した穀物や肉をすくい取る匙である。先が尖り、柄に曲がったものと真っ直ぐなものがある。西周初期の自名器がある。

卣（酒壺） 基本的には、壺に提梁（釣り手）をつけたもので、蓋がついている。形は扁円壺、細壺形や**卣**形の円壺、筒形などバラエティに富む。殷から西周まで盛んにつくられた。

壺 酒や水を入れた器。長頸で、蓋、両耳、圈台がついているものが多い。すでに殷代から口頸部が幅広の豊壺と、頸部が強くくびれる細壺の2種がある。

斝（酒壺） 方形の壺。戦国期から漢代にかけてあった。

斝（壺） 台のない平底の壺。古典によると「**斝**は小形で、常に大きな**斝**から酒をうける」とある。春秋期に限られている。

罍（壺） 春秋期の自名器でみると、平底の小形壺で、肩が張り、口は外に反って短頸である。漢代の『説文』に「**罍**は**斝**に似て耳あり」とあるのに一致する。

卣（壺） 自名器によると、球形に近い胴に、筒形の口頸と低い圈台がつく壺。蓋と胴に環耳をつけている。春秋・戦国期に限られる。

卣 高さより横が広くなり、口が広く頸がとくに短い点で、卣と異なり、むしろ次述する**斝**に近い。提梁がつき、蓋を伴う。手洗い用の水をいれたものと推定している。自名の器は春秋期のもの。

斝（大甕） 大型の壺で肩が張り、頸は短く、両肩と下腹の三ヶ所に環耳がつく。酒や水を貯蔵する甕である。殷・西周代のものである。自名の器はなく、本来の器形ははっきりしない。

甗（甗） **斝**に似るが、高さより横が広く、大口である。殷にあるが西周以後は消えていく。自名の器はない。

匱 扁壺である。戦国期から漢初に限られる。

盂 筒状の注口と把手をもった器で、器形は甗形と壺形とがある。前者は古く、後者は殷末・

1 器種名について

西周初にある。戦国・漢代には提梁をもった葉罐形で、三蹄脚をつけたものがある。

耳杯（さかずき） 浅い楕円形の長辺に、櫛形の耳をつけたものである。戦国期からあるが漢代に多い。「杯」「栝」「羽觴」の自名がある。さかずきとして酒をいれる以外に、羹（あつもの。肉と野菜のシチュー）を盛ったようで「羹栝」という銘がある。後漢の墓では鶏・豚の骨も入っていた。

卮（さかずき） 楕円形の小盥で、長い方の側面に環耳を二ないし三個つけている。東周代に限られる。自名の器はない。漢代の『説文』では「卮は円い器」とある。「舟」と呼ぶ人もいるが、『周礼』に「舟は尊（盛酒器）の承盤」とあり、あわない。羹を盛った可能性もある。

勺・斗（ひしゃく） 勺は瓠を縦割りにしたもの、斗は小さなコップ状の容器の腹部に柄がついたもの。

盤 祭祀や饗宴の前に、客人が手を洗うのが沃盥の礼。そのとき、次述する匱で水をそそぎ、下に盤を置いて水を受けるのである。大きくて浅いお盆に、圈台と両耳をつけたのが一般で、内面に魚、鳥などの文様を配する。殷代にあり、漢以降にも存続する。

匱（水指し） 楕円形の器の前方に注口、後方に把手があり、底には四足をつけるのが一般で、時に三足あるいは圈台、平底のものもある。西周晩期から東周に限られる。蓋付きや平底の類は戦国期に多い。自名器があり、「匱」と呼ばれた。また、酒を注ぐ用にも使われた。

鑑（たらい） 大きな鉢形をした器で、圈台がつき、器側に両耳ないし四耳がある。春秋末期の器に自名がある。水浴に用いたり、氷とともに食物を入れて保存したり、水をいれて姿をうつした鏡の用もはたした。春秋以後と、戦国の交替期に多い。

盆・銅（鉢） 盆の自名器をみると、腹部に折稜があり、大口で、小さな平底の鉢である。口唇は広い水平帯をなし、両耳をつけている。東周代に限られる。古典によると、盆は鑑の小さなもので、犠牛の血を盛る特別な用途のほかに、盛水器や炊器などとして用いられた。漢代の『説文』は「小さな盆を銅という」。

鑪（火鉢） 長方形か円形の盤状器で、短い足が三ないし四個あり、器側に環や長い鎖がつく。自名器は隅丸方形。春秋期や漢代の例がある。

ii 漢代以降の器種名とその用途（第1図）

幾分かまとまって自名器があるのは、前漢の前113年に没した河北・中山王劉勝墓（以下、満城M1）と、前118～104年の間に没した妻の墓（以下、満城M2）、前漢晩期の湖南・張璠君墓及び唐墓出土品などである。自名のない器種は、主に中国の報告書等で混乱している名称について、樋口1967や1976年の林巳奈夫『漢代の文物』（以下、林1976と称す）を勘案し、整理した上で用いることにする。以下、基本的には供膳具、貯蔵具、煮沸具、雑器の順に取り上げる。ただ、漢代には、沃盥の礼などに関わる水器が残り、供膳具と区分しがたいものもある。便宜上、水器を供膳具のところでも取り上げる。

高足杯・卮・曲長杯 長い脚の付いたワイングラス状の杯を高足杯と呼ぶのが一般的である。身部が半球状のものも含めており、これに従う。卮は、樋口1967では環耳を持つ楕円体の小盥としているが、漢代以降の用例では円筒形で横に環状把手をもマグカップ状のものに使用している^{註1)}。混乱を避け、前者を把手付杯Ⅰ類、後者を把手付杯Ⅱ類と呼ぶ。これらのなかには量器

(梔はかり)があり、注意を要する。

高足杯を壁画や画像石・磚などの資料(以下、絵画資料)で見ると、片手にもって口に運ぼうとする北齊から隋の諸例(第9図1・7・8、第10図1)があり、飲酒器とみて誤りがない。高足杯を下盤の上においた北魏例(第8図4)や手に捧げる唐例(第11図1)などもある。把手付杯らしきものを片手にもつ後漢例もある(第2図3・6)。

曲長杯のルーツは西アジアにある。これを両手あるいは片手にもって口に運ぼうとする絵画資料は、五胡十六国時代例(第8図)、隋例(第10図2・3)などがあり、飲器とみてよい。耳杯で飲もうとする南北朝後期例(第9図5)もある。

杯・碗・鉢・酒甕 杯・碗・鉢の自名器はないようである。これらは、通常は食器や飲器であり、環耳はなく、口縁が強く外折したり、あるいは強く内弯しないものに使用している。小型品を杯、中型品を碗、大型品を鉢と呼んでいる。高台のあるものもないものもある。南北朝頃からは小型品と中型品それに大型品とセットになって出土しており、口径10cm前後の小型品を杯、口径15cm前後の中型品を碗、大型品を鉢と、ほぼ呼び分けているようである。中国では、杯の一部のものを盞や盞と呼ぶ場合もあるが、ここでは用いない。杯には、器体が横長な長杯と呼ぶものを含む。日本・正倉院の八曲長杯のようなものと楕円形とがある。前者を曲長杯、後者を楕円長杯と称する。

絵画資料では、後述するように、杯か碗を盤にのせて運ぶ後漢～唐の諸例がある(第4図3、第6図1～3、第11図8)。そのうちの一つでは、後述する「温酒器」から勺で、托上の容器に掬い取ろうとしている後漢例(第4図3)がある。杯か碗を片手に持ち、口に運ぼうとする北周例(第9図10)も飲器である。小型品である杯の、少なくとも一部は飲酒器であった可能性は高い。後述する晩唐の「茶托」は大きさからみて、碗がこの上にあり、飲茶器として用いられたことがわかる。他方、碗や丸底の鉢か碗には、匕(匙)や勺(散蓮華)を入れたものが、後述するように、前漢早期、後漢中期や後期例、西晋例、隋例などにあり、羹・粥あるいは五穀の食器であったことを示す。

自名器は張瑞君墓の「酒甕」(第1図12)である。口縁が外反する碗形だが、口径22.4cm、高さ12cmと大きい。後述するように、この時期としては高い高台をもつのも特色である。飲酒器としては大きく、酒を一時的にいれるか、北宋代にみるように、注酒器を内に入れて温める器の可能性が有る。『説文』は「甕は小盆」という。甕は、本来は酒専用ではなかったのかもしれない。

鉄鉢形・盂・舟 鉢の中で、体部が内弯気味のもの、日本の用語に従い鉄鉢形と呼ぶ。内弯の程度が強いものは、中国で通常用いている盂を採用する。盂は水盂と称されることが多い。

舟は、既述したように、『周礼』に「舟は尊(盛酒器)の承盤」とある。楕円形の器で、大小がある。後述するように、大型品では勺(杓子)の入っていた例があり、鉢のような用途が考えられる。端に1個の環状把手がつくものもあり、液体あるいはスープなどを一時的にいれたソースパンのような用途も考えられよう。大小を入れ子にした例からは量器との見方も出されている。

魁・匜 匜は鉢形に片口状の注口をつけたもの。自名器がある(文献43)。円形品は前漢代に多い(第1図10)。王振鐸の論文(文献301)では、『説文』に「匜は羹魁に似る」とあること

1 器種名について

から、魁は匱に似ているが、片側に注口ではなく把手をつけた器に比定。絵画資料には、片手で魁の把手をつかみ、他方の手に持った箸キョウか筴ツで魁内の食べ物をはさんだ後漢例（第2図5）がある。王振鐸は煮芋をいれていたことも示した。

盤・沐盤・浴銅・托 盤と呼んでいるものには、口径15cm前後の小型品から60cmを超える特大品まである。特大品や大型品には、次述する沐盤や、食膳として用いた扁平な円案の他、絵画資料では肉などの食物を盛った前漢例（第3図5）や三国時代・西晋例（第7図2・6・8）、おそらく果物を盛った北周例や隋例（第9図10、第10図3・4）もある。中・小型の盤では、桃を盛った前漢例（第2図1）のほか、既述したように、1個の杯か碗をのせて主人に差し出している後漢以降の諸例（第4図3、第6図1～3、第11図8）、高足杯をのせた北魏例（第8図4）、などがある。北燕415年の馮素弗墓では銅杯をのせた銅盤（付図4-X5）が出土しているが、この盤内には低い凸帯があり、托と認定できる。

張瑞君墓の「沐槃（盤）」（第1図19）は、口径64cm、高さ13.5cmの特に大型の盤状品。口縁が水平状に折れて伸び、環耳がつく。高台もつく。体部に強い稜があるのは後で詳述するように漢代頃までの特色。自名から、手洗いの水を受けたもので、前述した匱と組み合う。沃盥の礼器である。後述するように、沐盤には口径30cm程のものもある。

前漢早期の江蘇・徐州楚王墓出土銀器（第1図11）も口径47.2cm、高さ11.4cmの特大品で、これには「浴沐銅」の自名がある。口縁下がくびれたのち、口縁が水平にのびるのが特徴である。満城M1の「常浴」も口径66cm、高さ19.5cmの特大品（第1図8）。徐州楚王墓例と器形は異なるが、一括して浴銅として取り扱うことにする。

唐代の銀器には、稀少例ながら「茶托」（付図11-Lb3）の自名器がある。「托」は台付皿で、内面に杯や碗の高台を承ける突帯（以下、承け台）がある。以下では、承け台のあるものによって托を用いることにする。承け台が細くて高いのは燈蓋の台であるので注意を要する。南北朝頃からの小盤に碟の名称を使う人がいるが、盤との区別が難しく、ここでは碟を用いない。**盆・銅・洗** 満城M1の「盆」（第1図1）とM2の「銅」（第1図2）は酷似した器形で、ともに口縁がわずかにくびれたのち外折し、体部上寄りに突帯がある。環耳がつき、低い高台をもつ。口径は前者が29.3cm、後者が27.8cm、高さは前者が12.5cm、後者が12.5～12.8cmで、ともに容量は当時の「三斗」。漢代の『説文』に「小盆を銅という」が、満城漢墓例では区分できない。林1976では、平底で、体部がほぼ直に外傾して口縁で水平に外折する器形に「銅」の自名器がある。漢代には多い器形であり、これを以下では銅とし、盆の器形は満城漢墓の「盆」「銅」のように口縁下でくびれるものとしておく。

盆は、後述するように、釜・甑と一具と明記した例があり、蒸した穀類や芋などを盛ったと推定される。絵画資料だと、盆に似た大型品に勺を入れ、傍らに食物を盛った容器を置いた例があり、参考となる（第2図6）。『通鑑紀事本末』には玄宗が「銀淘盆」を賜う（文献16）とあり、米をとぐことなどにも用いられた。林1976によると、盆は水や屠殺した動物の血も入れた。銅とする器形は、絵画資料だと、箸が置かれた後漢例（文献13）、宴会の食膳脇に置かれた後漢末の例（第4図3）がある。動物の血をうける後漢例（第3図5）や西晋例（第7図5・9）や炊事用の後漢例（第3図5、第4図4、第5図4）もあり、用途は盆に類した点もあったと推測できる。

洗は、『儀礼』によると、士冠礼や士婚礼に「設洗」の儀があり、その注に「洗は盥で洗った汚水を捨てるための器」とある。張瑞君墓の刻名がある器（第1図14）は、上述の銅に酷似するが、体部は内穹気味で、口縁が上向きに折れて伸びる点が特徴。刻名を報告書では「洗」とみたが、林1976では「汗」とみて盃と理解している。樋口1967によると、盃は殷周代には円形の飯じゃわんで、水をいれる器にも転用されたという。張瑞君墓例は、水を受けるに適した器形であり、中国でも洗を通用していることから、これに従う。なお、張瑞君墓ではミニチュアの銅製小洗と小壺（付図1-N8・2-N3）があり、文様の一致から、これらが一具であったと推測できる。樋口1967では、洗は漢代に限られるという。

豆・高足盤 日本の高杯にあたるもの。南北朝後半頃からは、高足盤の名称も使われているが、以下では豆を用いる。周代には穀類やスープ・粥などを盛った食器（樋口1967、林1967）であり、それにふさわしく蓋のつくものもあったが、戦国期に有蓋豆はすたれ、無蓋豆のみが残る。絵画資料には、食物、おそらく果物を盛った北周例（第10図1）がある。隋代の大形豆（高足盤）には多数の杯をのせた出土例があり、器台としても使用された。

盒 蓋を伴う円筒状や碗形のもので、遅くとも戦国期にはある。前者は、化粧材などをいれた漆器が主で、唐代には銀器の自名器（文献16）もある。後者のうちで、身の口縁端に蓋受けをつくるものは盒としても、それ以外は蓋を伴う碗とすべきで、以下では碗で取り扱う。盒には酒や粥をいれたものがあり、丈の高い円筒形容器は「簞」で飯を盛ったという（文献13）。盒というより蓋付の罐とすべき、前漢の大型の陶製容器には「飯」と墨書する（付図2-Ua5）ものがある。おひつである。大型の碗形盒や大型の蓋の付く碗や鉢にはおひつになる可能性があることは、注意すべきである。

扁壺 樋口1967によれば區^{オウ}だが、漢代のものに榘^{註2)}を用いる人もいる。だが、中国でも一般的なものは扁壺であり、これに従う。

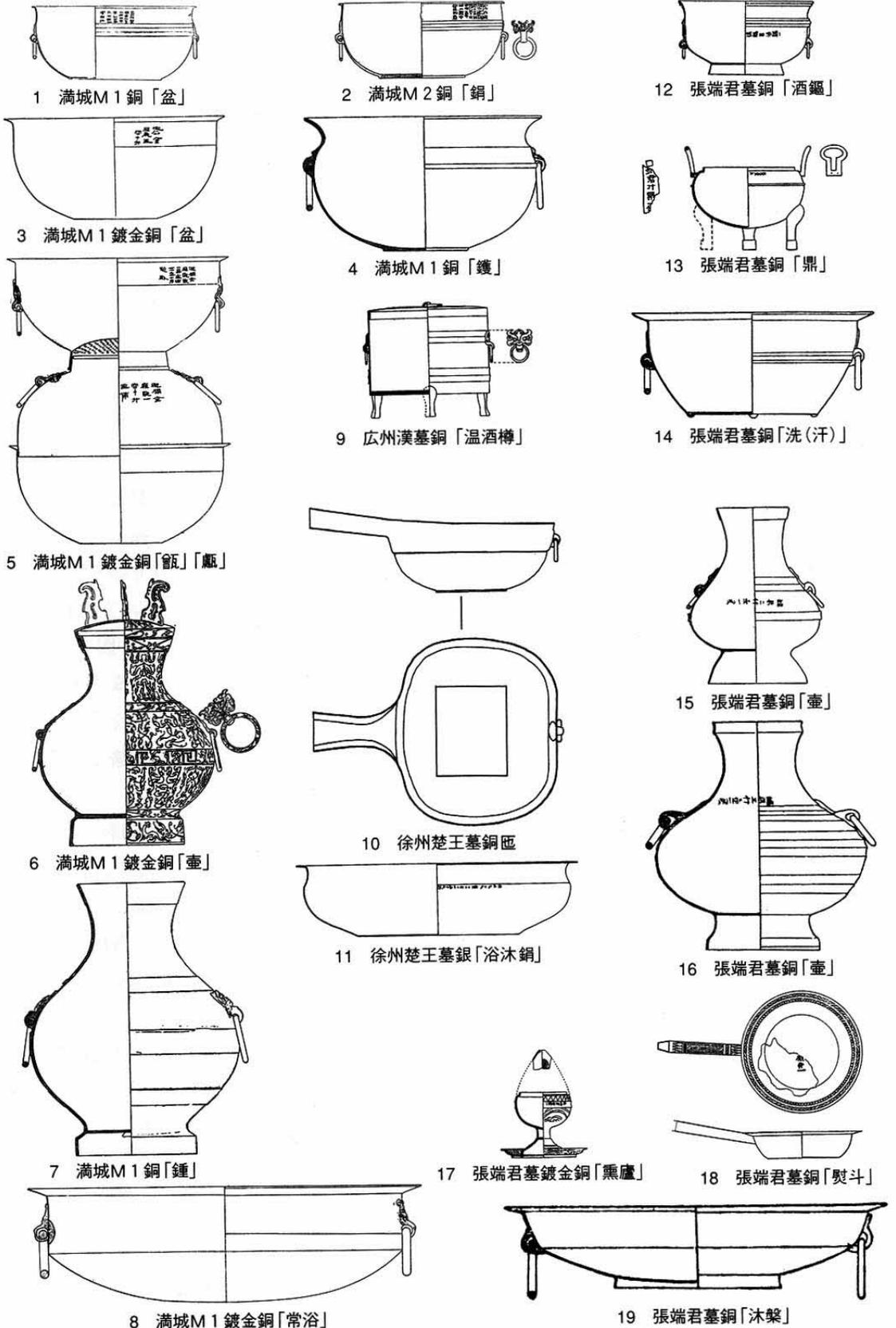
壺・鍾・唾壺 自名器は満城M1の「壺」（第1図6）と「鍾」（第1図7）、張瑞君墓の「壺」（第1図15・16）だが、似た器形で区別できないことから、壺を通用する。壺のうちで、丈が低く、口が大きなものは唾壺を用いるのが一般的である。左手に壺状の提梁罐、右手に角杯を持って運ぶ初唐例（第11図2）は、そのなかに酒の入っていたことを示そう。漢代の出土品で、壺に「米」「豉」と墨書（付図2-Ua3）があり、酒や水だけでなく穀類やみそなどもいれていたことがわかる。

細頸壺・瓶・投壺 頸の細長い壺と瓶の区別は、中国でも明確ではない。日本の自名器などから、胴部の形状の差異に関わらず、頸が極めて細長いものを瓶とする。従って、中国で蒜頭壺^{サン}と称しているものや鉞^{ケン}（長頸壺）と称しているものも瓶とし、頸が長くても太い細頸壺とは区別する。

絵画資料でみると、瓶は北魏や隋代の石窟で菩薩が手にもつ例（第10図6）や、供養者が盤（浅い洗）に瓶をのせて運ぶ例（第12図2・3）、中・晩唐の石窟で坐した僧の傍らの木に網袋状に入れて吊した例（第12図6）などがある。水瓶である。花を挿し込んだ北齊や北周例（第9図2・6）や晩唐例（第12図8）などもある。細頸壺は、矢投を楽しんだ投壺が後漢例（第2図4）にもあり、注意を要する。

注壺・把手付注壺 壺ないし瓶に注口・把手をつけたもの。把手付で片口をもつものは、高足

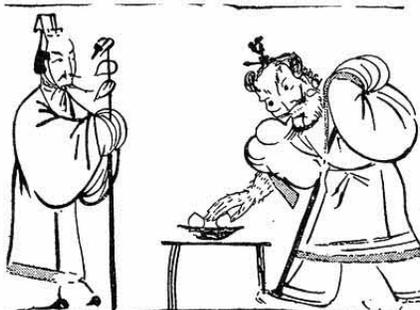
1 器種名について



1~8 河北・満城M1 (前113年) 及びM2 (前118~104年頃 文献3)
 10・11 江蘇・徐州楚王墓 (前漢早期 文献433)

9 広東・広州漢墓 (前漢早期 文献4)
 12~19 湖南・張端君墓 (前漢晚期 文献70)

第1図 前漢の自名金属器 1:10



1 河南・洛陽壁画墓
(前漢晚期 文献217)



3 日本・東京大学所蔵画像磚
(漢代 文献38)



2 山東・金雀山出土帛画
(前漢晚期 文献331)



4 河南・南陽出土画像石
(漢代 文献525)



5 山東・武氏祠画像石
(後漢 文献301)



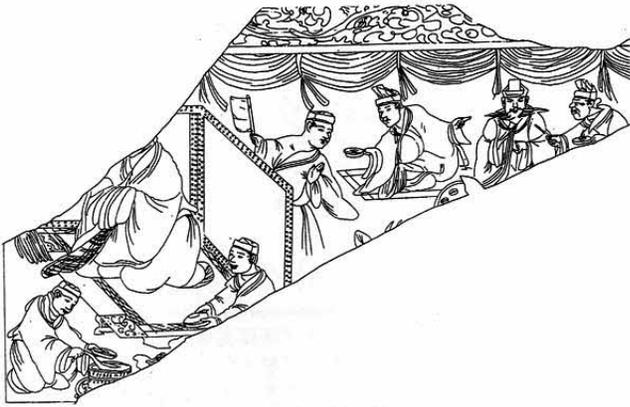
6 四川・成都出土画像磚
(後漢 文献49)



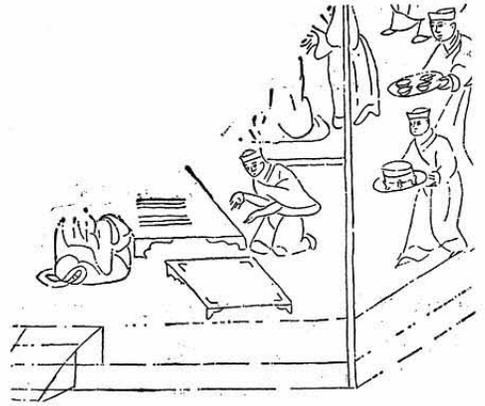
7 四川・成都出土画像磚
(後漢晚期 文献49)

第2図 絵画資料1 前漢・後漢の壁画・画像石等

1 器種名について



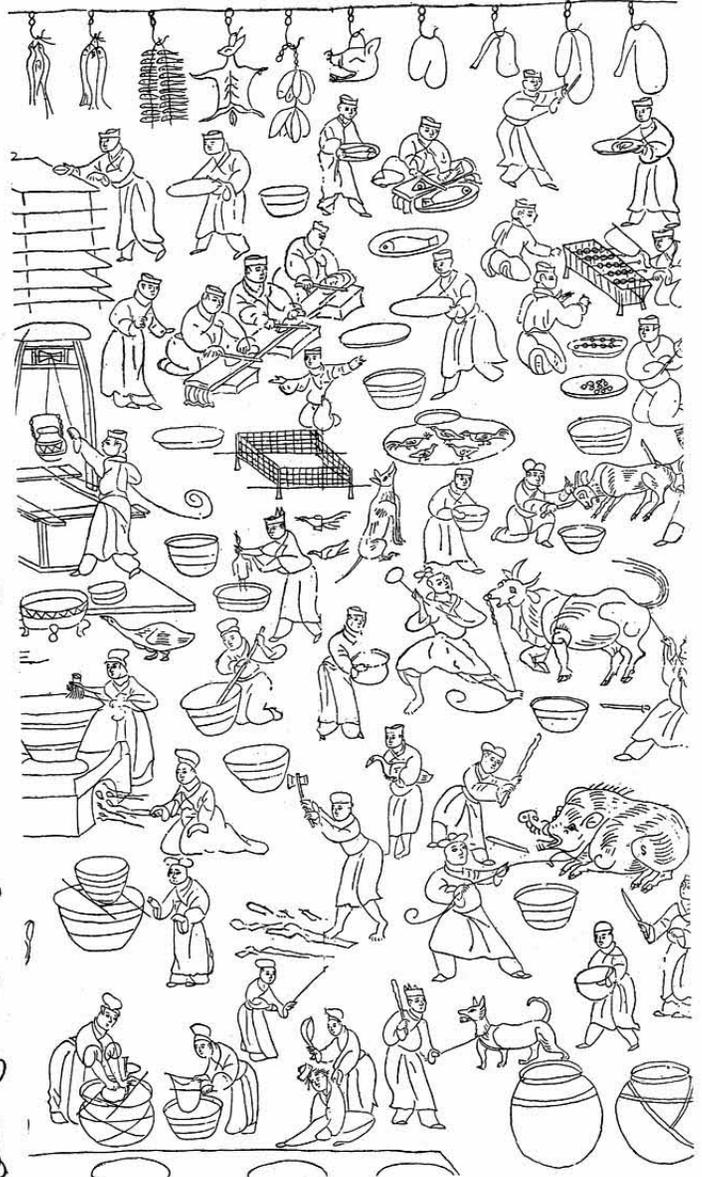
1 河南・淮陽画像石墓
(120年頃 文献388)



3 山東・諸城画像石墓
(後漢晚期 文献45・524)



2 山東・沂水画像石墓
(後漢 文献15)



4(左)・5(右) 山東・諸城画像石墓 (後漢晚期 文献45・524)

第3図 絵画資料2 後漢の河南及び山東の画像石墓



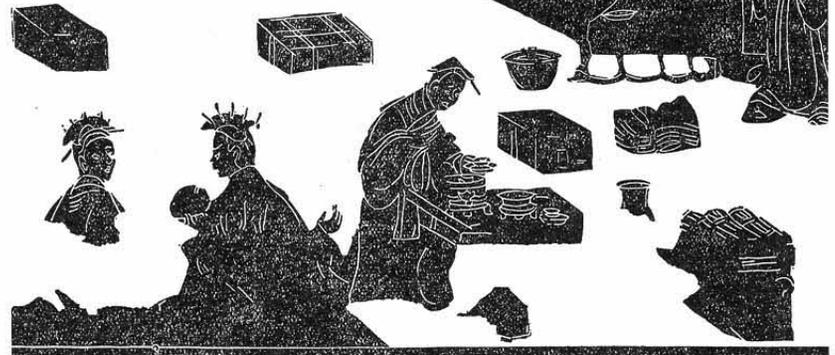
1 地主収租図



3 宴飲図



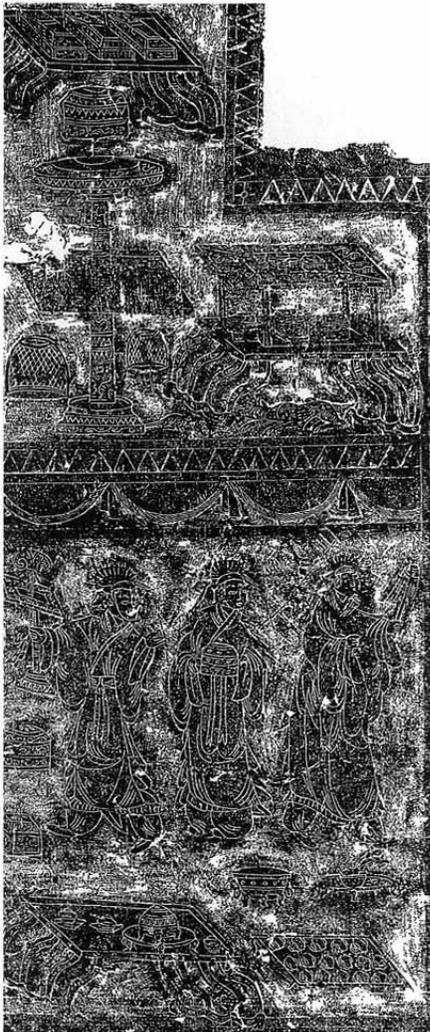
2 執燈對話図



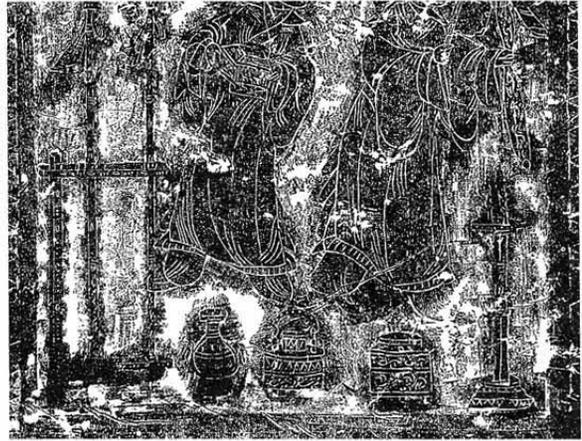
4 庖厨図

第4図 絵画資料3 河南・密県打虎亭画像石墓（後漢晩期 文献313）

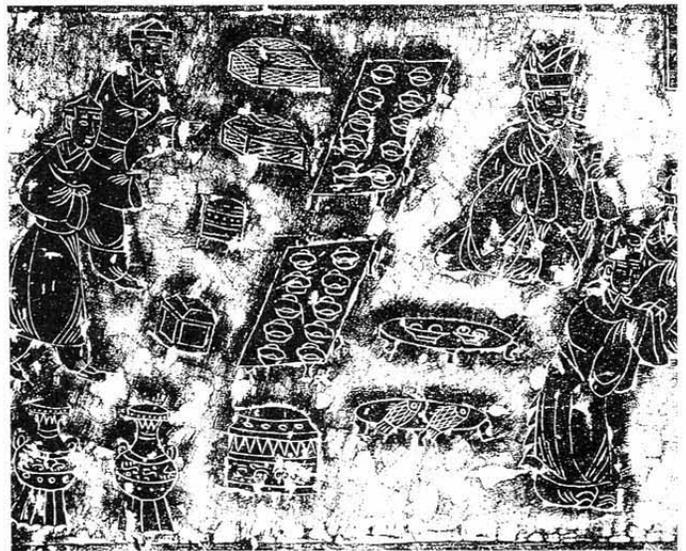
1 器種名について



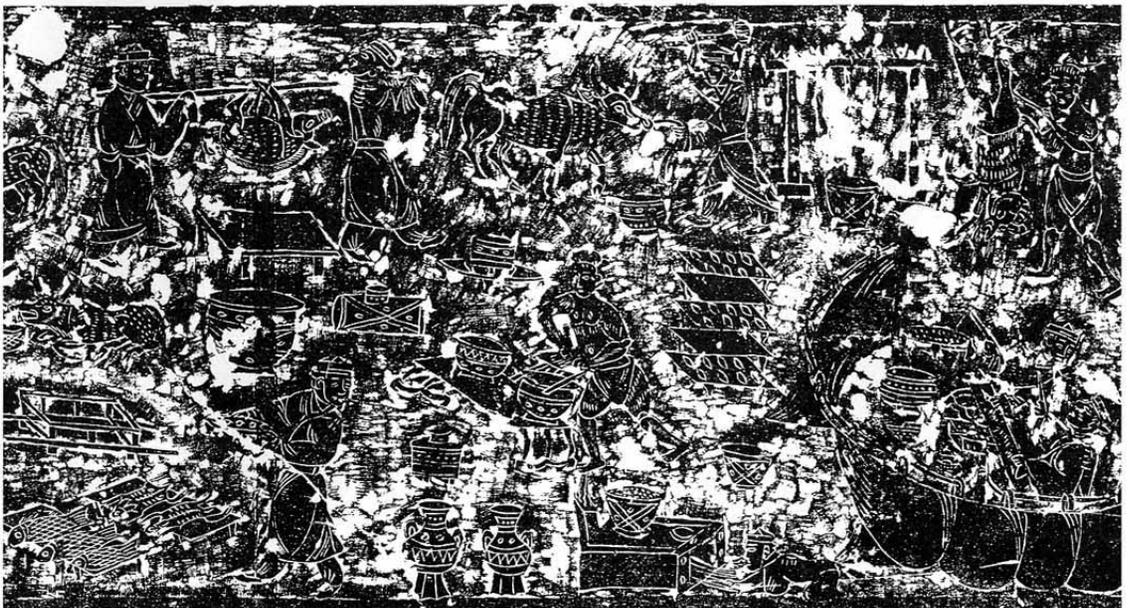
2 食膳・器財図



1 器財図



3 進講・宴会図

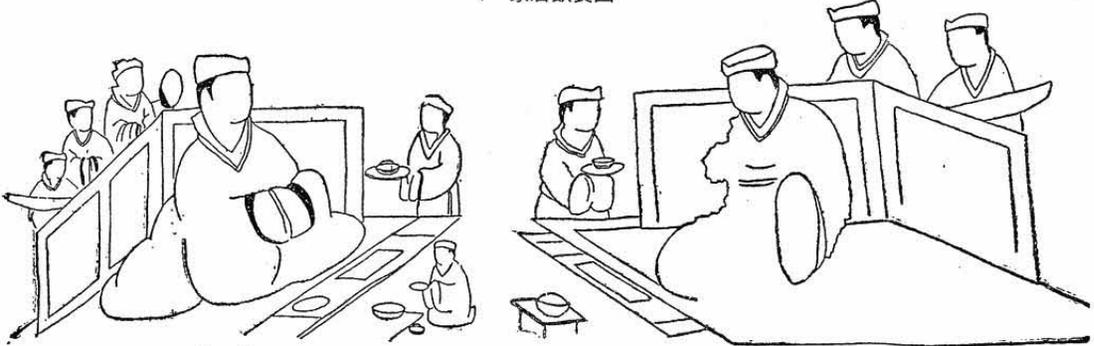


4 庖厨図

第5図 絵画資料4 山東・沂南画像石墓（後漢末頃 文献10）



1 家居飲食図



2 飲食図

3 飲食図



4 家居図



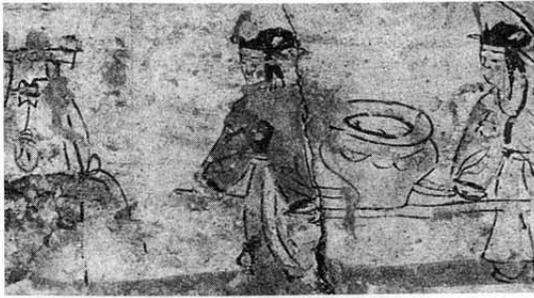
5 庖厨図(汲水)



6 樂伎図

第6図 絵画資料5 遼寧・遼陽壁画墓(後漢晚期頃 文献278・497)

1 器種名について



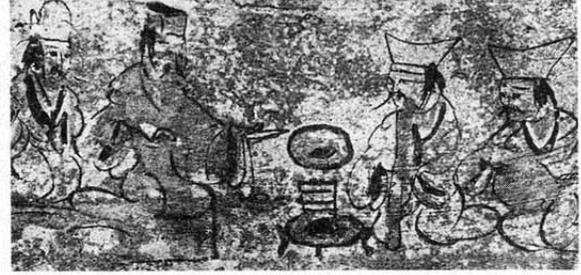
1 汲水図(257年カ)



2 宴飲図(257年カ)



3 庖厨図(257年カ)



4 宴飲図(257年カ)



5 宰猪図(西晋)



6 進食図(西晋)



7 進食図(西晋)



8 宴飲図(西晋)



9 殺鶏図(西晋)



10 進食図(西晋)

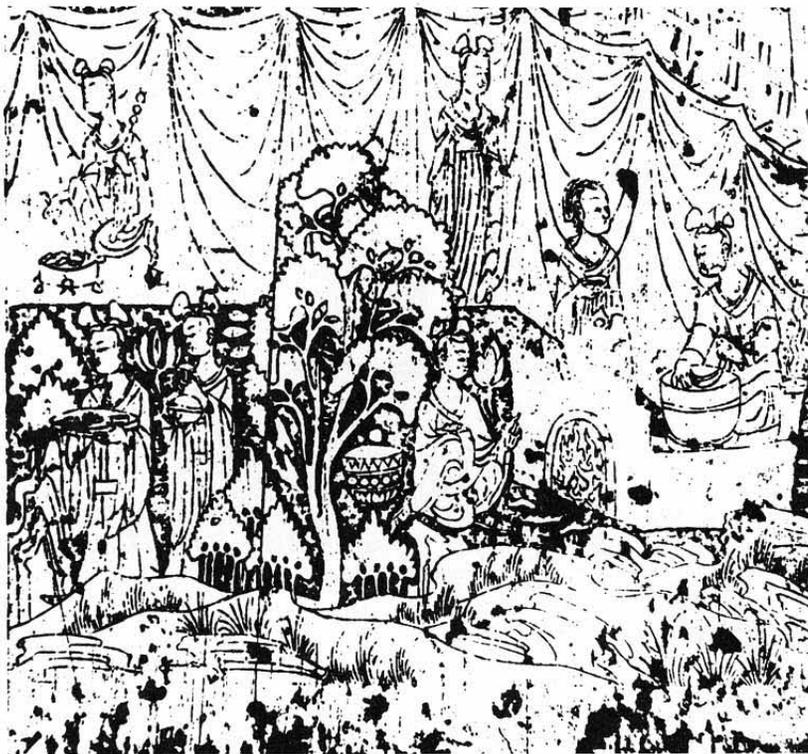
第7図 絵画資料6 甘肅・嘉峪関画像塼墓(三国時代~西晋 文献17・315)



1 新疆・庫車石窟壁画
(4世紀 文献186)



2 山西・大同石柳壁画
(北魏5世紀末 文献456)



5 河南・甯懋石室刻画
(501年 文献14)



3 河南・龍門石窟彫像
(6世紀末 文献40)



4 孝子伝石棺刻画
(522年 文献39)



6 河南・甯懋墓石室刻画
(501年 文献14)

第8図 絵画資料7 五胡十六国時代～北魏の壁画・石刻画等

1 器種名について



1 山東・益都画像石墓
(北齊573年 文献354)



2 山東・臨朐画像石墓
(北齊 文献466)



3 陝西出土仏座線刻画
(北周 文献285)



4 陝西出土仏座線刻画
(北周 文献12)

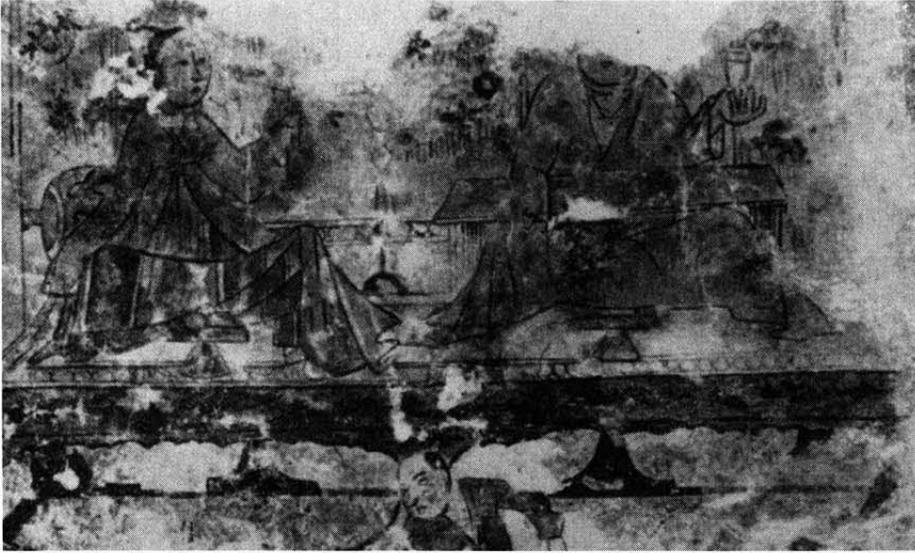


5 南京・西善橋磚室墓
(南朝後期 文献14)

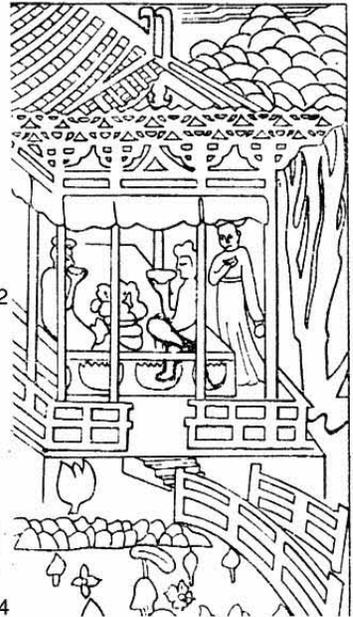


6~10 西安・安伽墓石門・石榻屏刻画
(北周579年 文献36・449)

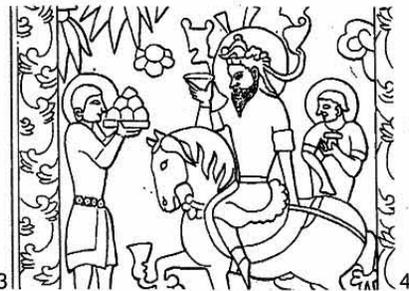
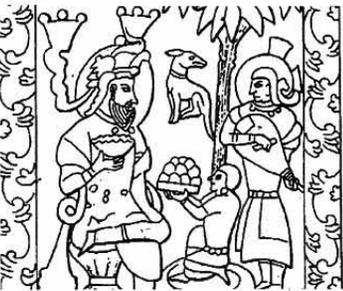
第9図 絵画資料8 南北朝後期の石刻画等



1 山東・徐敏行墓壁画 (隋584年 文献338)



2

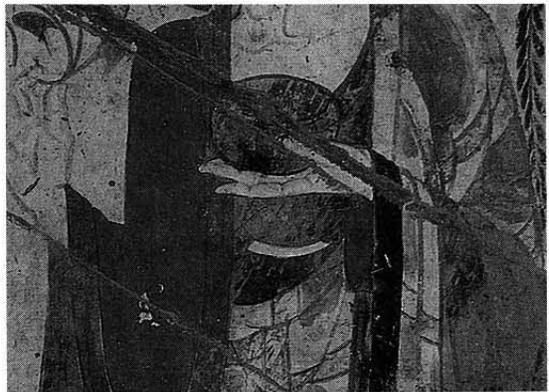


3

4

2~4 山西・虞弘夫婦墓石棺刻画 (隋598年 文献449)

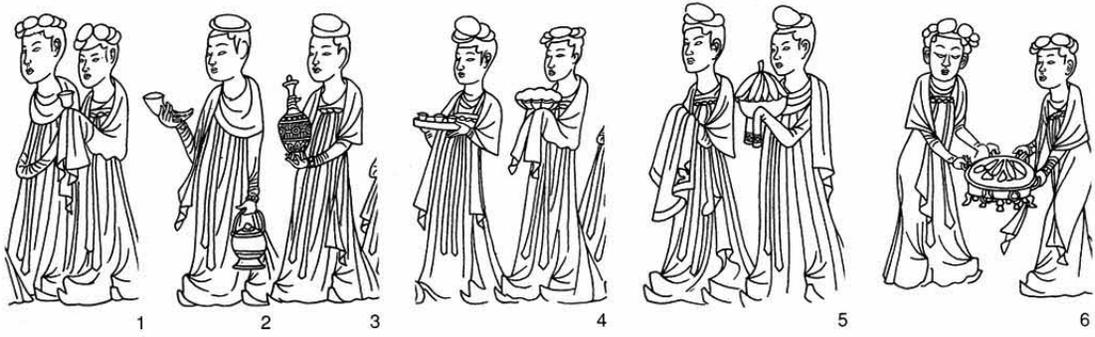
5 甘肅・天水墓石屏刻画 (隋~初唐 文献151)



6(左)・7(右) 敦煌・莫高窟第276窟壁画 (隋代 文献44)

第10図 絵画資料9 隋代の壁画・石刻画等

1 器種名について



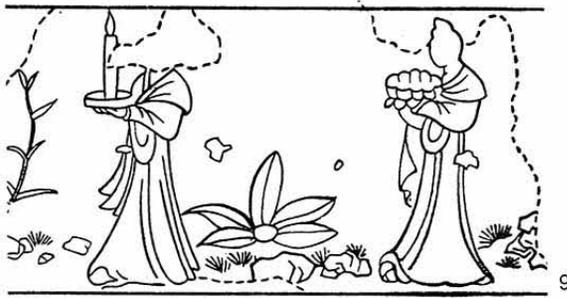
1~6 陝西・李壽墓壁画 (唐630年 文献421)



7 陝西・永泰公主墓壁画 (唐706年 文献300)



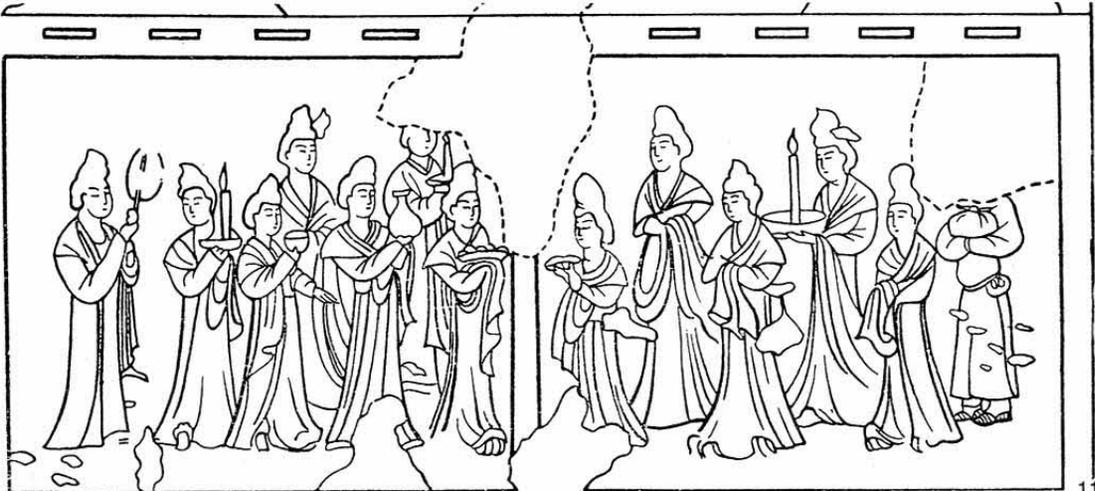
8 新疆・西州出土絹絵 (唐8世紀前半 文献324)



9



10



9~11 陝西・懿德太子墓壁画 (唐706年 文献81)

第11図 絵画資料10 初・盛唐の壁画等



4 四川・広元千仏洞彫像
(唐710年~712年 文献379)



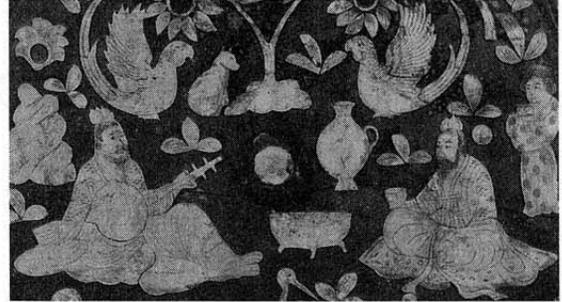
2 敦煌・莫高窟壁画
(8世紀前~中頃 文献421)



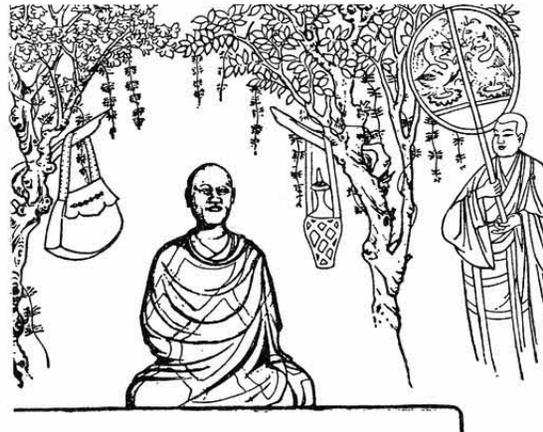
3 敦煌・莫高窟壁画 (8世紀前~中頃 文献14)



4 河南・慶山寺塔地宮壁画
(唐741年 文献484)



5 河南出土銅鏡背文
(唐784年 文献283)



6 敦煌・莫高窟藏經洞壁画・彫像
(中・晚唐 文献332)



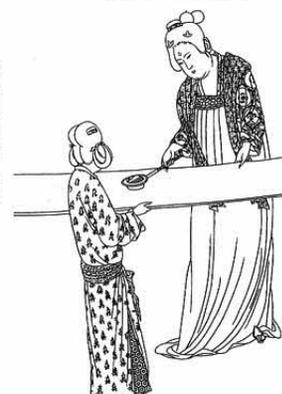
7 同左藏經洞出土紙画
(晚唐力 文献332)



8 陝西・法門寺地宮壁画
(唐874年 文献370)



9 “宮樂図”,
(原画9世紀前半 文献14)



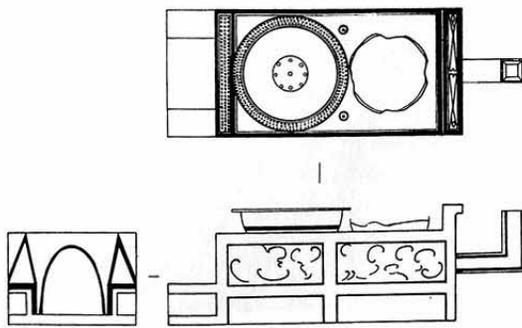
10 “搗練図”,
(原画唐代 文献14)



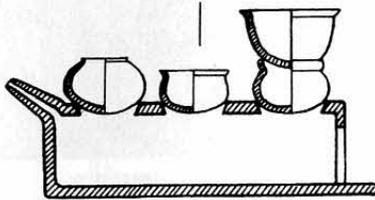
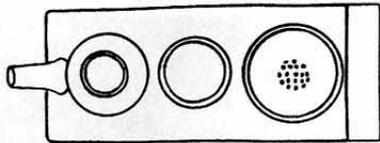
11 河北・王処直墓壁画
(五代923年 文献423)

第12図 絵画資料11 盛・晩唐~五代の彫像・絵画等

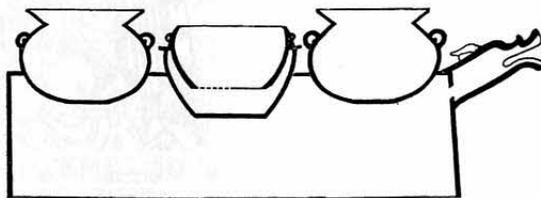
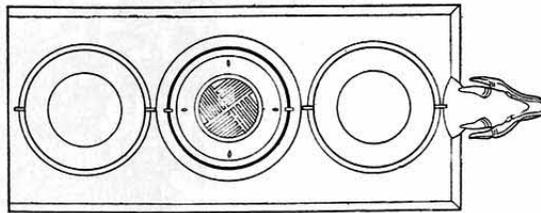
1 器種名について



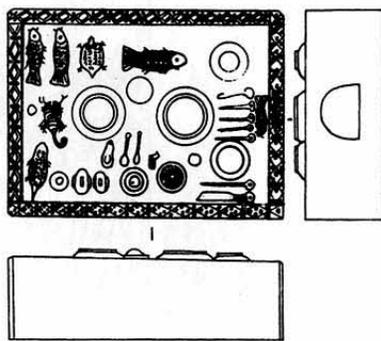
1 江蘇・徐州出土陶竈 (前漢早期 文献426)



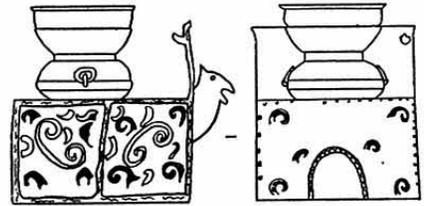
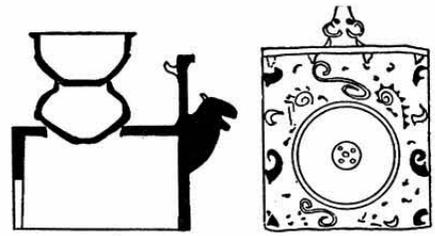
4 広東・広州出土陶竈
(前漢中期頃 文献207)



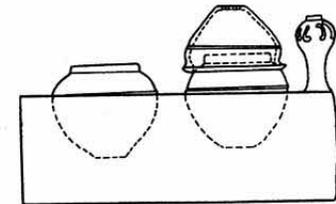
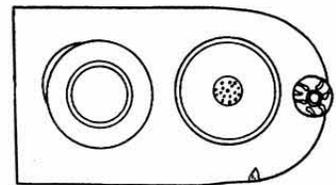
6 広西・合浦出土銅竈
(前漢晩頃 文献75)



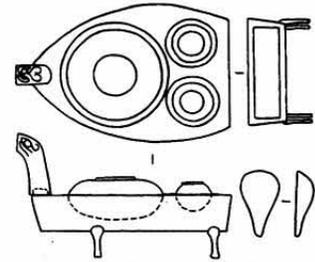
8 河南・洛陽出土陶竈
(新代 文献403)



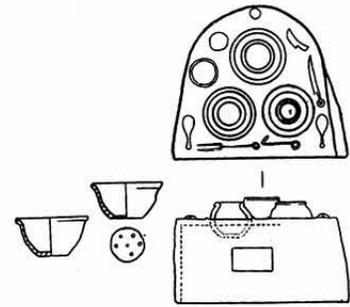
2 湖北・宣昌出土陶竈
(前漢前期 文献218)



3 陝西・景帝陽陵從葬坑出土陶竈
(前漢早期 文献397)

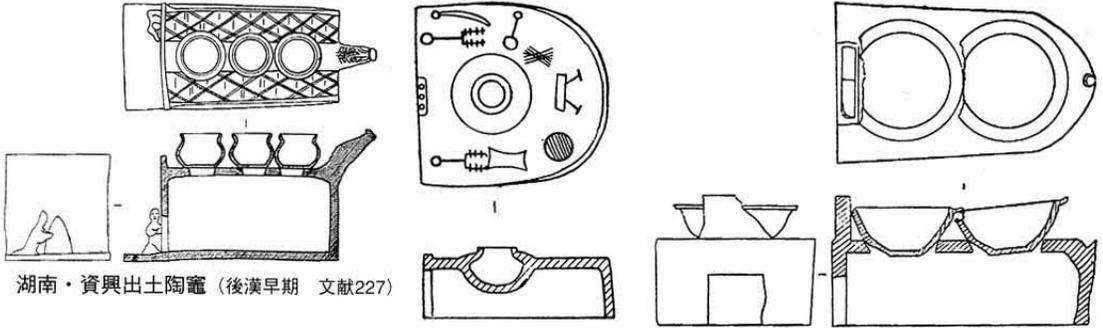


5 内蒙古出土銅竈
(前漢中期頃 文献30)



7 内蒙古出土陶竈
(前漢晩期 文献30)

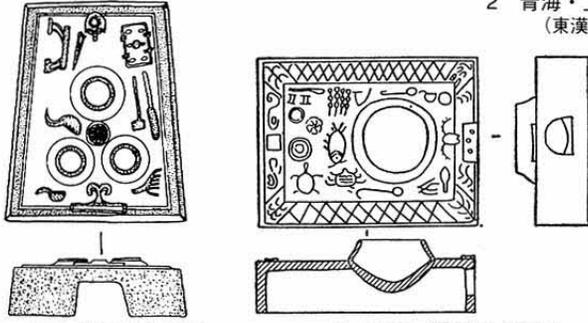
第13図 前漢・新代の竈 1:8 (6のみに10)



1 湖南・資興出土陶竈 (後漢早期 文献227)

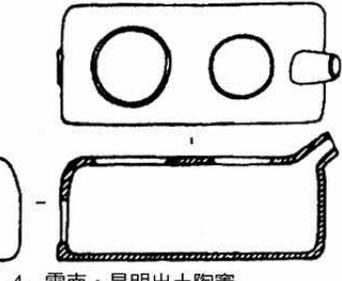
2 青海・上孫家寨出土陶竈 (東漢早期頃 文献26)

3 湖北宜昌出土陶竈 (後漢前期 文献218)

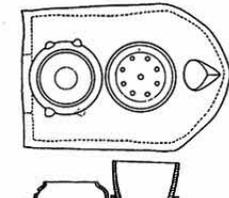
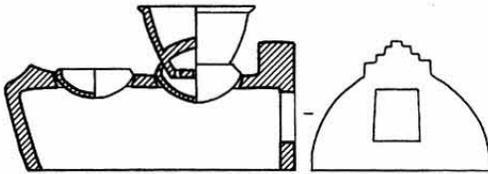


4 雲南・昆明出土陶竈 (後漢中期 文献455)

5 山西・離石出土陶竈 (後漢晚期 文献420)

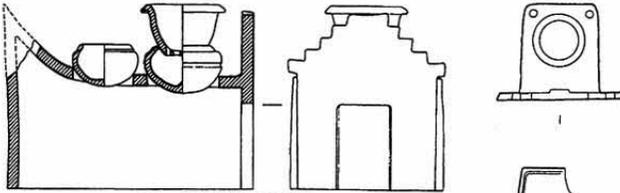


6 河南・鞏義出土陶竈 (後漢晚期 文献235)

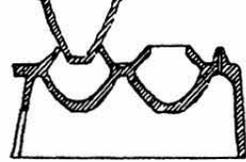


7 江西・端昌出土陶竈 (西晉前期 文献83)

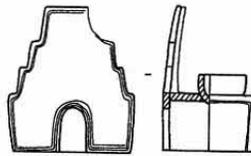
8 遼寧・朝陽出土陶竈 (北燕代 文献491)



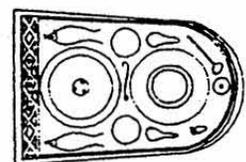
9 南京出土陶竈 (三国時代晚期~西晉 文献461)



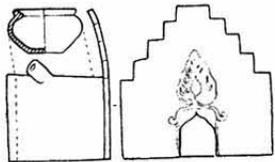
10 南京出土陶竈 (劉宋代 文献464)



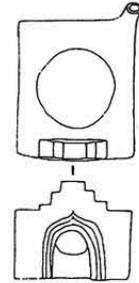
11 河南・洛陽出土陶竈 (北魏522年 文献467)



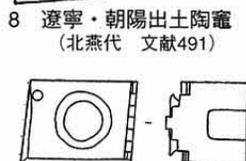
12 山西・庫狄迴洛墓出土陶竈 (北齊562年 文献221)



13 山西・武帝孝陵出土陶竈 (北周578・582年 文献264)



14 河南・恭陵哀皇后墓出土陶竈 (唐675年 文献273)



15 河南・鞏義出土陶竈 (7世紀~8世紀初 文献235)

第14図 後漢~唐代の竈 1:6

1 器種名について

杯を持つ人の前に置かれたり、右手に高足杯を持つ人が左手に吊げている北周例（第9図8）があり、注酒器とみてよい。ワイン用らしい。肩に筒状の注口を付けた把手付注壺は、後述するように「茶杜瓶」や「酒注」の墨書や刻名があり、茶用と酒用とがあったことがわかる。

鑊 シヨウコ 殷周代の温酒器である盃カには、葉罐形があった。これは戦国晩期になると、器腹の一方に把手がつく急須形に変化する。このタイプを鑊と呼ぶことが多い。樋口1967の指摘のように「鑊」は鑊斗にあてるべきだが、慣例に従う。

罐・罍・甗・瓮・壺 カン ライ ホウ オウビン 日本でいう甕類や一部は壺類も含めて、中国では罐と総称しており、バラエティに富む。殷周銅器の系譜をひく器形は罍、甗を用いる。罐は比較的口の大きなものに限られ、口が小さなものは壺や壺として取り扱う。唐代には「酒瓮」の自名銀器がある。短頸で肩が張った器形である。瓮は甕の簡略字。絵画資料には、罐を2本の木組みの上のせて井戸に向かう三国時代例（第7図1）もある。『通鑑紀事本末』によると、玄宗が「金飯罍」を賜ったとある（文献16）。罍は甕類の総称でもあり、特定の器形ではないようであるが、その一部がおひつに用いられたことは注目される。壺は罐の中でも口が小さなもの。後漢のところで触れるように「甗」の自名（付図5-I a1）がある例もあるが、日本の自名器とはそくわないので、中国でも一般に用いている壺に従う。

釜・甗・甗・鍋 フ ソウ ゲン カ 自名器は満城M1の「甗」「甗」一組（第1図5）とこれに備えていたことを明記する「盆」（第1図3）の一具である。甗は甗を備えたものであり、茶釜状を呈する下半部は通例に従い釜とする。鏝のないものもある。大口で無頸壺のようなものや、甕に近いものもあるが、底に火をうけているものがあり、釜として扱う。

満城M1・M2の報告書では、他の報告書等と同様に、半球状の器で、口縁が外折する丸底の器も釜としているが、混乱を避け、鍋と称する。比較的小形のものでも底に火をうけた例がある。環耳があるものと、ないものがある。鍋に脚がつくものを三脚鍋と呼ぶが、浅いものは爐であるので注意を要する。

鑊 カク **鑊** ボウ 自名器は満城M1の「鑊」（第1図4）。環耳があり「盆」「鍋」に似た器だが、口径41cm、高さ22.5cmの大型品で、頸部が強くくびれている点で異なる。低い台が付くが、『説文』によると、鑊は煮るための器になる。鍋の一種だが、類例は少ない。

鑊と呼んでいるのは、壺に似るが、口が大きく、肩に1個ないし2個の環耳がつく。底に火をうけている。自名器がある（文献43）。主に中国南部で出土している。地域色を考慮して、この名称を使用する。

鼎 テイ **鑊斗** シヨウト 自名器は張瑞君墓の「鼎」（第1図13）。蓋の報告はないが、身の口縁の形状から、もとはあったと推測できる。鼎には蓋受けのないものもある。鍋状の容器の底部に三脚、腹区部に1本の長い把手が付くものを一般に鑊斗と称している。『説文』の廣韻注に「温器なり。三足にして柄あり」というのにあたる。自名器もある（文献43）。注口の付いたものもあり、液体を温める温器でもあった。

鑊 フク 鑊は、樋口1967では三脚の釜だが、『説文』では「大口釜」とあり、混乱している。以下では五胡十六国時代や、北魏代の出土資料で、把手付の深鍋形を鑊と呼ぶに従う。三脚付の茶釜形は釜として取り扱う。

温酒樽 ソン **壺** レン **鑊尊** シヨウソン 壺は円筒形の器で三脚が付くものもある。漆器の場合は、化粧用品をいれ

たことがあきらかであるが、漢代の金属製容器には「温酒樽」の自名（第1図9）がある。三脚付の盤を伴うことが多い。絵画資料は後漢や魏晋の諸例があり、勺を伴うことが多い（第2図4、第3図3・4、第4図3、第5図4、第7図4）。林1976によると、羹をいれたこともあった。だが、後漢の絵画資料（第3図4、第4図3）だと、温酒樽と、中国で鑊尊と呼んでいる三脚壺がセットで描かれており、それぞれが酒、羹類の専用温器と推測する。

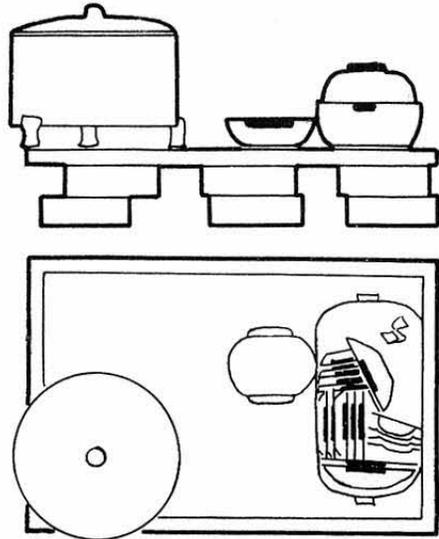
竈・架 竈は、陶製が主だが銅製もある。明器が多いが、釜や鍋を備え、勺や箸、叉などを配した例があり、参考となる（第13・14図）。架は釜、釜、鍋をこの上に置いて煮沸したもので、釜、釜の底について出土した例がある、

案・奩 案は食台あるいは食膳。扁平なつくりで、方形と円形とがあり、それぞれ2ないし4個の脚のつくものとつかないものがある。案は方形で、円形は椀（文献43）だが、通例によって方案、円案と呼ぶ。方案は前漢、円案は後漢から出土例があり、複数の耳杯や、杯、碗あるいは小形盤を上におく（第4図3、第6図6第15図1・2など）。北魏で触れるように、円案上に瓷杯5個と銀製盤状高足杯1個それに銀製小瓶と金製小鑊斗各1個をのせた北魏例もある。

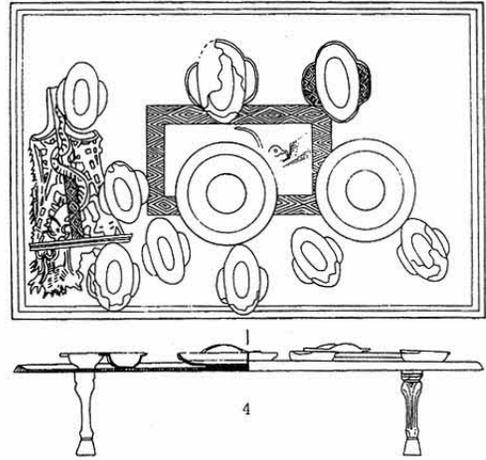
絵画資料も後漢からの例が多く、宴会では主人が方案上に器物を並べた円案（第15図3）、他の人は円案という状況が窺える（第4図3、第5図1）。円案や方案上では、実際に箸（箸）や勺、匕が杯や碗とともに置かれた資料（第3図2・3、第6図6、第7図2・8）などがある。

奩と呼んでいるのは、複数のおそらく杯をいれた容器である。円案に比してやや深目で、蓋受けがあるものもある。日本で茶器をいれる容器に似ている。

匕・勺・斗 匕は匙で、主に食事具。勺と斗は、酒や水あるいは羹やスープなどを大型容器からすくい取るもの。円形もしくは楕円形の浅目の



1 洛陽・五女塚出土陶案（新代 文献418）



2 雲南・昆明出土銅案（後漢中期 文献455）



3 洛陽・朱村壁画墓案（後漢晚～三国時代 文献402）
第15図 新～三国時代の案 1・2 1:10

1 器種名について

容器に斜めに柄がつくのを勺、円筒状の深目の容器にほぼ直角に柄がつくのを斗と呼び分けている。瓢を縦割りにしたいわゆる散蓮華形も勺と呼んでいるが、後漢から盛行する小型品（以下、とくに散蓮華と称す）は、羹や粥やスープを食べた可能性があり、注意を要する。

筴・筴・叉 ^{カイ} 筴は箸、火箸もある。筴は細板を曲げて挟むようにしたもの。食事具以外に火鉢もある。叉はフォーク状品。小型品は食事用だが、大型品は肉を刺して調整したり串焼きに用いた（第7図2・8）

熨斗・薰爐・燈 ^{ウット} 熨斗は北魏の太和3年（479）銘の例では柄が長く、透かし彫りのある蓋がつき、柄を差し込んでおくスタンドもあることから、ひのし（アイロン）にふさわしい（文献41）。唐代とみる絵画には張った布に熨斗をあてている（第12図10）。柄の短いものは把手付鍋とする説がある。張瑞君墓例は柄は短い、中空であり、木柄を差し込んだもの。鍋か熨斗かは、底が丸底か平底かに拠ろう。

「薰爐」はいわゆる博山爐と呼ぶ薰爐（香爐）である。薰爐は、前漢代には博山爐以外にもいくつかのタイプがあり、バラエティに富む。三国時代頃からは次第に種類も出土量も減少する。「燈」は動物脂の膏や蠟燭を燃した燈火器（以下、燈）。漢代の自名器がある。これもバラエティに富む。絵画資料には、蠟燭をつけた燈は後漢例（第5図1）や盛唐例（第11図9・11）などがある。

第2～4節では、原則として、供膳具（水器の一部を含む）、貯蔵具（注器を含む）、煮沸具、雑器の順に、時代によってどのように変遷したかをみる。

iii 研究略史

殷・西周銅器は中国内外の研究が多く、東周（春秋・戦国期）銅器の研究も少なくはない。だが、銅器がまだ多い漢代については、後で触れるように、河北・満城漢墓や広東・広州漢墓などのように個々では詳細な報告があるものの、前漢あるいは後漢に中国の広い範囲で銅器の諸器種・器形がどのように変遷したかを提示した研究は見当たらない。金属製容器が概して少ない三国時代～隋代では、総括的な論功はない。銀器や鍍金銀器が盛行する唐代では、後述するように韓偉らによる『唐代金銀器』などがあり、それらの成果を基に研究が進展している状況にある。

漢代 主に銅器を対象とした論功では、既述した1976年の林巳奈夫『漢代の文物』が史料と考古遺物の両面から、器名と器種・器形を総括的に研究したほぼ唯一のもの。他に1985年の李陳奇「蒜頭壺考略」（文献353）、2001年の李龍章「西漢南越王墓“越式大鉄鼎”考弁」（文献197）、2002年の蔣延瑜「漢代鑿刻花紋銅器研究」（文献244）などがある。後二者では中国南半部の諸銅器の特色を示した。1994年の陳文領博「銅釜研究」（文献261）も主に中国南半部で展開する釜について変遷を提示した。陶器では、1981年の姚仲源「浙江漢、六朝古墓概述」（文献483）などが、省単位で容器の変遷をとらえようとしている。1964年の王振鐸「論 漢代飲食器中の卮と魁」（文献301）は、飲器の卮と食器の魁を文献と考古遺物によって同定した論考として、後の研究の母胎の一つになったといえる。春秋期の銅器を対象としたものではあるが、1956年の陳夢家「寿鼎蔡侯銅器」（文献209）は、各種の銅製容器や匕（匙）の器名や用途について研

究したもので、漢代からの銅器研究にとってもバイブル的存在として高く評価できる。

三国時代～隋 金属製容器について、省の範囲を超えた研究は極めて少ないが、1989年のB.I. マルシャーク・穴沢味光「北周李賢夫婦墓とその銀製水瓶について」(文献502)、孫機による1989年の「固原北魏漆棺画研究」(文献376)や1999年の「建国以来の西方古器物の我国における発現と研究」(文献437)、1990年の初師実「甘肅靖遠新出土東ローマ鍍金銀盤略考」(文献377)は西方との比較研究を試みた論功、1996年の尚曉波「大凌河流域鮮卑文化双耳鏤孔圈足釜及相關問題考」(文献490)はいわゆる鍍の編年を行った論考として特記できる。陶・瓷器については、馮先銘による1959年の「略談魏晉から五代に至る瓷器の裝飾特性」(文献292)、「瓷器浅説」(文献297)、1965年の「新中国陶瓷器考古と主要收穫」(文献305)が早い時期の、しかも的を得た研究である。陶・瓷器の編年については、1977年の智雁「隋代瓷器の發展」(文献327)、1979年の李知宴「三国、兩晉、南北朝制瓷業の成就」(文献333)、1983年の魏正瑾・易家勝「南京出土六朝青瓷分類探討」(文献105)、1986年の宋百川・劉鳳君「山東地区北朝晚期と隋唐時期瓷窯遺址の分布と分期」(文献133)、1987年の内丘県文管所「河北省内丘県邢窯調査簡報」(文献367)、1990年の林忠于ほか「福建六朝隋唐墓葬の分期問題」(文献138)、2000年の楊效俊「東魏、北齊墓葬の考古学的研究」(文献269)、2003年の張増午・傅曉東「河南北朝瓷器芻議」(文献277)などがある。

唐～五代・十国時代 唐代には銀器や鍍金銀器が多い。1956年の梅原末治「中国古代の金銀器」(文献498)は、中国解放後の研究の最も早い研究成果の一つ。桑山正進による1977年の「1956年来出土の唐代金銀器とその編年」(文献499)や1979年の「唐代金銀器始原」(文献501)は、解放後の中国出土資料に一早く取り組み、しかも西アジアを含めた広い視点から編年して歴史的な位置付けも行った本格的な研究である。中国側では、1985年の韓偉らによる『唐代金銀器』が、代表的な資料を集め、しかも唐代を4期に編年した優れた論功。中国ではこれに刺激され、1986年の盧兆蔭「試論唐代の金花銀盤」(文献486)、齊東方による1994年の「唐代銀高足杯研究」(文献488)と1996年の「西安沙波村出土のソグト鹿紋銀碗考」(文献419)、1996年の王維伸「試論日本正倉院珍藏の鍍金鹿紋三足銀盤」(文献262)、1998年の齊東方・張静「ササン式金銀多曲長杯の中国における流伝と演變」(文献186)などが相次いで出来る。1988年の韓偉「飲茶風尚を法門寺出土の唐代金銀器茶具にみる」(文献374)、孫機による1991年の「論 西安何家村出土の瑪瑙獸首杯」(文献390)、それに1996年の「唐李寿石槨線刻“侍女図”“樂舞図”散記(上)」(文献421)なども、中国出土の金属製容器を歴史的に位置づけた研究として高く評価できる。

陶・瓷器では、李知宴による1972年の「唐代瓷窯概況と唐瓷の分期」(文献311)や1981年の「西安地区隋唐墓葬出土陶瓷器の初歩研究」(文献245)が早い段階の卓見である。三国時代～隋代で取り上げた研究の他に、1980年の長沙市文化局「唐代長沙銅官窯址調査」(文献222)、1982年の周世榮「長沙唐墓出土瓷器研究」(文献225)、1989年の徐殿魁「洛陽地区隋唐墓の分期」(文献231)、1992年の権奎山「中国南方隋唐墓の分区分期」(文献232)などがある。ただし、五代・十国時代は、期間が短いこともあって、広い視野に立った研究は見当たらない。

2 漢代における変遷

i 前漢・新 (付図1～3)

a 供膳具・水器 (付図1)

飲器 飲器には高足杯、把手付杯、角杯などがあり、横長の長杯や耳杯もここで扱う。高足杯には、杯身が縦長で、体部が直なもの（以下、I類）が主流である。この時代のI類はまだ足がそれ程高くなく、途中で突帯もない（1-Bb1・Eb1・Ga1）。後漢代まで大きな変化はない。金属器は前漢晩期の広西・合浦出土銅器（1-Ma1）ぐらいで、他は玉器や陶器。前122年頃に没した広州・南越王墓の玉器には、返りのある内被せの蓋が伴う（文献47）。初現は秦末～前漢初の広西・羅泊湾墓例出土玉器（文献503）。戦国中期後半の四川・雲陽墓M17出土銅器は、台が極めて低く、杯身の両側に環耳がつく。外被せ蓋も伴う（文献242）。前118～104頃に没した河北・満城漢墓M2出土の陶器（文献3）は、盟約などに用いた朱雀を飾る連繫杯で特殊例。以後にはつづかない。

前113年に没した河北・満城漢墓M1出土の鍍金銅盒（1-H1）は通高14.5cm、口径5.5cm。用途は不明だが、飲器の可能性がある。（以下、筒状杯I類と称す）。類例は前433に没した湖北・曾侯乙墓の漆器筒状杯（文献6）。以後の例は少ない。

把手付杯には、杯身が円筒形のもの（以下、I類）と、底に向かってすぼまる通常の杯（以下、II類）とがある。把手は環状で、体部上半に1個つけるのが原則。I類は、底に三脚のつくもの（1-Eb2・Ga2・Kb1・Lb1・Oa1・Ta1）とつかないもの（文献477）があり、外被せないしは内被せ蓋のつくことが多い。蓋には原則として3個の立飾がつき、環状把手に角状の突起があるのが特徴。総じて杯身は縦に長いのも特徴である（以下、I類A）。銅器、玉器、象牙製、陶器それに漆器もある。戦国中期の河南・洛陽墓出土銅器（文献150）が最も古そうである。II類は前漢晩期の広西・望牛岭墓出土鍍金銅器（1-Ma3）や湖北・光化墓出土漆器（1-Mb2）。ともに低い高台と、突起付き環状把手がつく（以下、II類A）。南京・栖霞山出土の銅器（文献504）は後者に近いが、高台は幾分か高い。前漢中頃かというのが、晩期と推測する。湖南・永川の劉彊墓出土銅器（1-La2）は把手に突起がない（以下、II類B）。時期は前漢中期というのが、他の器種も新しいものがあり、晩期に比定すべきであろう。これらより古い例は知らない。

なお、景帝（前140年没）陽陵従葬孔出土の銅器（1-Ac1）はI類Aに似るが、高さより口径が大きいもの。大小5種を入子にしており、量器と考えている。後漢のI類Bの祖形と考えるが、定かでない。高台のない半球状の身に1個の環状把手をつけた前130～124年頃の山西省博物館蔵銅器（1-Ad2）は、「田官」の陽刻があり、口径約17cm、高さ約10cmで、漢代一升にあたることから、量器と考定されている。

角杯は、前122年頃の広州・南越王墓から玉器が出土（文献8）。角杯は新石器時代に陶器（文献390）があるが、漢代の例は少ない。この時期には曲長杯はない。

耳杯は銅器、玉器、陶器それに漆器がある（1-Ba1・Ga3・H2・Ia1・Kc2・Lb3・Oa2・

R1・Tb2)。耳の形は、戦国中期頃に、三翼形から半月形に変わり、前漢に継承される。耳杯の口縁はほぼ水平で、耳が上向きなのが特徴（以下、I類）。耳杯は飲器に限らない。小盤が普及する以前は羹や肉などを盛った食器でもあった。

杯・碗・^き簋・鉢 高足杯や耳杯など除くと、前漢・新代で杯と呼んでいる例は、それ以前を含めていない。口径10cm以下のものをあえて抽出すると、前漢早期の湖南・資興出土陶器（1-E_{d3}）や前118～104年の河北・満城漢墓M2出土象牙製品（1-H₅）のように、体部が丸味をもって立ち上がる浅目のもの（以下、高台付杯I類A）と、前漢中期の湖南・資興出土銅器（1-K_{a4}）や前漢晩期の広州漢墓出土陶器（文献4）のようにやや深目のもの（以下、高台付杯I類B）とがある。新代の湖南・零陵出土銅器（1-W₁）は、高い器台をもったもので、酒甕とするが、環耳がなく、小型である点が異なる（以下、高台付杯II類）。いずれも初現である。II類は器形が酷似する大型の酒甕とセットをなし、酒杯として用いられた可能性が高い。この他に、口径が10cm前後で、平底の浅目の陶器（1-S_{b3}）が新代の四川・綿陽から出土している。三国時代では、これに類したものを杯と呼んでいるのに従う。体部が外傾気味である（以下、平底杯III類）。

簋は碗の祖型の一つである。殷・西周代の簋は大型であるが、前433年の湖北・曾侯乙墓では、半球状の身に環耳と三足をもつ口径14.6cm、高さ6cmの金器が出土（文献6）。蓋付きで、透しのある七（漏七）を伴い、中に羹などが入っていたと推定できる。戦国早・中期には低い高台をもち、身あるいは蓋にも環耳をつけた口径15cm前後の河南・陝県出土銅器がある（文献7）。前漢早期の湖北・宜昌出土銅器（1-E_{a4}）はその最終例である。

碗は、前漢・新代には、高台付碗、高台のつかない丸底碗と平底碗がある。次述する鉢との区別が難しいものがあるが、鉢は比較的大型で概して浅目、碗は深目とした。

高台付碗は、丸味をもった体部がほぼ直に立ち上がるもの（以下、I類）と、体部が外傾気味となって口縁で外反するもの（以下、II類）がある。I類は前313年の河南中山国王墓や戦国末期の洛陽出土の陶器がある（文献28・495）。例は少ない。前漢早期で、江蘇・徐州出土の陶器（1-B_{b2}）がある。比較的浅目なのが特徴（以下、I類A）。II類は、新代の湖南・零陵出土銅器（1-W₂）。以後の例に比して浅目で、高台も低い（以下、II類A）。類例はきわめて少ない。後漢につづく。

丸底碗は、前漢晩期の江蘇・南京出土銅器（文献55）や湖南・劉彊墓と広西・合浦出土銅器（1-M_{b5}・O_{a3}）が初出のようである。深目なのが特徴（以下、I類）。新代の四川・綿陽出土銅器（1-S_{b4}）は、丈がやや低い（以下、II類）。ともに後漢につづく。

平底碗は戦国晩期の山東・臨淄出土銅器（文献429）があり、前漢中期の湖南・資興出土銅器（1-K_{a5}）や前漢晩期の内モンゴロウ出土銅器（1-R₅）に継承される。深目なのが特徴（以下、I類）。後漢以後にもつづく。

鉢は、碗に似るが、比較的大型で浅目のものである。高台付と、高台がつかない丸底と平底とがある。高台の有無にかかわらず、体部がゆるやかに内湾してそのまま直立するもの（以下、I類）と口縁で外反するもの（以下、II類）に分類する。なお、内縁部が強く内湾するものを、中国では水盂あるいは盂と呼ぶ。内湾の程度が弱いものは、日本で用いている鉄鉢形の用語をあてる。

高台付鉢のⅠ類は、前313年の河南・中山王国墓出土の陶器（文献28）、戦国晩期の漆器（文献341）などがある。前118～104年頃の河北・満城M2出土陶器（文献3）も大差ない。Ⅱ類は、戦国晩期の山東・臨淄出土銅器（文献429）が初現のようである。前漢早期には湖北・雲夢出土漆器（1-Ba3）がある。大形で浅目なのが特徴（以下、Ⅱ類A）。前漢中期の山東・臨沂出土鍍金銀器（文献191）や河南・陝県出土銅器（1-Ib2）は、大型だがやや深目（以下、Ⅱ類B）。前漢中期の湖南・永川出土銅器（1-La4）は、さらに深目で、口縁のくびれがやや強い（以下、Ⅱ類C）。

丸底鉢はⅠ類の銅器が戦国晩期から秦代にかけてある（文献22・503）。前118～104年の河北・満城漢墓M2出土の陶器（1-H6）も同巧である。

平底鉢のⅠ類は、戦国中・晩期が初現のようである（文献22・28）。体部は直に開くのが特徴（以下、Ⅰ類A）。前122年頃の広州・南越王墓出土銅器（1-Ga4）は、体部が丸味をもつ（以下、Ⅰ類B）。

盃 盃は前122年頃の広州・南越王墓出土陶器（1-Ga5）が初現例の一つ。浅目で平底なのが特徴（以下、Ⅰ類）。前105年の安徽・汝陰侯墓出土漆器（文献505）は、低い高台がつき、扁平な蓋を伴う。銘文から唾壺の機能を果たしたことがわかる。唾壺は後漢以後に壺として定型化されるが、汝陰侯例はそれ以前の様相を示す。盃は前漢・新代には類例が乏しく、後漢から類例がやや増加する。

舟 楕円形の器。短側に1個の環状把手がつくもの（以下、Ⅰ類）と、つかないもの（以下、Ⅱ類）とがある。Ⅰ類は、前113年の河北・満城漢墓M1出土銅器（1-H7）で、1個の環状把手がつき、外面は雷文地に鳳などの文様を飾り、鍍金を施す。同形が5個有り、口径5.2×8.3cm、深さ2.8cmのものから、口径18.2～25.9cm、深さ9cmのものまで、少しずつ大きさが異なる。報告では、容量に一定の規律があり、専門的な用途とあったとする。飲器ではなく、量器の可能性が残る。Ⅱ類は、景帝（前140年没）従葬孔出土鉄器（1-Ac3）、前漢中期の山東・劉髡墓出土銅器（1-Ia3）がある。後者には勺が入って出土しており、酒か羹などを入れたと推測できる。以後の例はない。

魁 碗あるいは鉢形の容器に1個の把手をつけたもの。把手は龍頭形が基本。初現は、前漢晩期の銅器や陶器（1-R8）。前者のうち1点（1-Ma10）は把手が中空になっており、匱の機能も兼備する唯一例である。新代の銅器（1-Ta8）も大差ない。いずれも把手がほぼ水平であるのが特徴（以下、Ⅰ類A）。

酒罍 前漢晩期の湖南・張瑞君墓出土銅器（1-N6）が自名器。大型の碗に似るが、環耳がつき、この時期の碗に比して高台が高いのも特徴。同巧の銅器は、前漢中期の湖南・資興出土例（1-Ka6）が初現。後漢にも存続するが、前漢晩期はまだ高台が直で、また低いのが特徴である（以下、Ⅰ類）。

盤・沐盤・浴銅 盤は、口径が30cm以上を大盤、20～30cm程度を中盤、15cm前後を小盤と呼ぶ。沐盤は、既述したように口径60cm程の特に大きな前漢晩期の湖南・張端君墓出土銅器（1-N11）。口縁が水平に折れて伸び、体部に強い稜があり、2個の環耳がつく。同様の器形（以下、Ⅰ類A）で大型品の銅器は、前漢代に多い。（1-Ga11・Kb8・Lb8・Ob9）環耳のない銅器（以下、Ⅰ類B）も前漢代を通してある（1-Ab6・Ab7・Ba6・Da5・Ga10・H12・Ja5・Q

a9・T a10)。後者のうち、口径31cmと比較的小さい、前漢晩期の山東・五蓮M1墓出土銅器（文献366）、未盗掘で、伴出した銅匱と組み合うものは他になく、これらも沐盤であったと推定できる。ただし、盤の主流は大盤Ⅰ類が占めることから、沐盤だけでなく、食物を盛る器として使用されたものも含むと考える。ともに後漢に残るが、次第にすたれていく。

他に、盤あるいは混乱して盆、洗とも呼んでいるもので、30cmを超える大型品には、出土例は極めて少ないが、体部が直に外傾し、口縁端が外折して水平に伸びるもの（以下、Ⅱ類）、体部に稜があるが、口縁が外折せず直立気味のもの（以下、Ⅲ類）、体部が丸みを持ち、口縁端で外反するもの（以下、Ⅳ類）がある。Ⅱ類は、前漢前期の広州漢墓出土銅器（1-F8）。大きな平底で、環耳のつくものとつかないものがある。以後にはつづかない。後述する爐の下盤であった可能性が強い。Ⅲ類は前漢前期の広州漢墓出土銅器（1-F9）。平底で環耳がつく。口径47.2cmの特大型品であり、浴用（浴銅）であろう。類例は戦国早・中期の安徽・江蘇省出土銅器（文献169・229）にある。新・後漢に降る例はなく、古い時期の、中国南半部に限定されそうである。Ⅳ類は内モンゴ・フフホト出土銅器（1-P a8）。時期は前漢中・晩期とするが、伴出した銅釘などからみて晩期に比定する。

口径が30～20cmほどの中盤には、大盤と器形がほぼ同じⅠ類B種が前113年の満城漢墓M1出土ガラス器（文献3）や銅器などがあるが、大盤に比して出土例ははるかに少ない。この手のものの一部が、火爐や薫爐の下盤に用いられていることは後述する通りである。口径に比してやや深目のものは、鉢のような機能を果たしたのかもしれない。口径27.2cmのものに「飯槃」の自名器（文献43）があり、飯を盛ったことが知れる。中盤には、大盤Ⅱ・Ⅲ類と類似したもの他に、平底の扁平な盤で、体部がほぼ直線的に開くもの（以下、Ⅴ類）がある。Ⅱ類は、前漢早期の湖北・随州出土漆器（文献458）、前漢中期の湖南・資興出土の陶器（1-K a3）、晩期の内モンゴ出土銅器（1-R3）など。この類はすでに戦国中期の湖南・慈利出土陶器（文献506）、秦代の河南・三門峡市出土の口径21cm、高さ約3cmの銅器（文献175）などにあるが、例は極めて少ない。Ⅲ類は前118～104年の河北・満城漢墓M2出土銅器（1-H4）。前後の時期の類例はない。Ⅴ類は前漢晩期頃と推定する内モンゴ出土陶器（1-R4）。高台はつかない（以下、Ⅴ類A）前漢・新代の例は乏しく、後漢から多くなる。耳杯や杯・碗類の下盤に用いられた可能性が強い。

口径15cm前後の小盤は、Ⅰ類Bが前118～104年頃の満城漢墓M2出土銅器（1-H3）、Ⅱ類が晩期の内モンゴ出土銅器（1-R2）。内モンゴ例は薫爐の下盤の可能性が高く、満城漢墓例もその可能性がある。いずれにしても小盤は、極めて出土例が少ないといえる。

浴銅は、前漢早期の江蘇・徐州の楚王墓出土銀器（1-C a6）が自名器。平底鉢Ⅱ類に似るが特大品（以下、Ⅱ類）。前113年の満城漢墓M1出土鍍金銅器（1-H13）は盤Ⅰ類を深くしたような特大品。「常浴」の刻名がある（以下、Ⅰ類）。前122年頃の広州・南越王墓出土銅器（文献8）もⅠ類の同巧品。上述した大盤Ⅲ類（1-F9）も浴器の可能性もある。いずれも前漢中期以後はすたれる。

盆・銅 盆は、秦に近い前漢初と比定する河南・陝県墓出土銅器（1-A a5）が最も古く、初現。自名器でもあり、2個の環耳をもつ。体部は内弯気味で口縁部がゆるやかに外反するのが特徴（以下、Ⅰ類）。底に3個の突起（乳釘）がある。安定をはかるためか。釜・甑とともに

出土。前漢早期の湖北・宜昌出土銅器（1-Ea7）や前113年に没した河北・満城漢墓M1とその妻のM2から出土した自名器の鍍金銅器（第1図3、1-H9）もほぼ同巧。乳釘はなく、低い高台をつくものが出現する。前漢中期の山西・朔県出土銅器（1-Ja4）もほぼ同巧だが、前漢晩期の四川・重慶出土銅器（1-Lb6）、新代の四川・巫山出土銅器（1-Sb5）は頸部のくびれがやや強くなる（以下、Ⅱ類）。前漢晩期の湖南・劉彊墓出土銅器（1-Oa5）は、環耳がないが、Ⅱ類に似ており、これに含める。

銅は、深目のもの（以下、深銅）と浅目のもの（以下、浅銅）とがあり、それぞれ環耳のつかないもの（以下、Ⅰ類）とつくもの（以下、Ⅱ類）とがある。Ⅰ類は素面、Ⅱ類は体部に突線をめぐらす例が多い。深銅Ⅰ類は、戦国中期の河南・陝県出土銅器（文献7）が初出のようである。戦国晩期～前漢の陶器は例が多く、銅器は前漢晩期の陝西・西安出土例（1-Qb7）があり、後漢にもつづく。浅銅Ⅰ類は前漢早期の河南・洛陽出土例（1-Ab4）が初現。前118～104年の満城漢墓M2出土銅器（1-H8）、前漢前期の広州漢墓出土銅器（1-F5）や前漢中期の河南・陝県出土銅器（文献7）もほぼ同巧。深銅Ⅱ類は、前漢中期の湖南・資興出土銅器（1-Ka7）や前漢晩期の四川・重慶出土銅器（1-Lb5）。これらより古い例はない。浅銅Ⅱ類は、前漢前期の広州漢墓出土銅器（1-F6）が初現。大きな平底で浅目（以下、Ⅱ類A）。前漢晩期の内モンゴルフフホトや他の内モンゴロ出土銅器（1-Pa4・R5）は高台付で、体部が外傾気味となる（以下、Ⅱ類B）。

洗・鑑・匜 洗にも深目の深洗と、浅目の浅洗とがある。ともに環耳があるのが基本。深洗は前漢晩期の湖南・張瑞君墓出土銅器（1-N9）や広西・望牛嶺出土銅器（文献75）が初現例のようである。前者は底に乳釘がある。新代の四川・巫山出土銅器（1-Sb7）も同巧で、口縁の立ち上がりが弱いのが特徴である（以下、深洗Ⅰ類A）。浅洗は、ミニチュアながら、前漢晩期の張瑞君墓出土銅器（1-N8）や同じ頃の湖南・永川出土鍍金銅器（1-Oa6）が初出例。前漢末～新代の江蘇・邗江M102出土鍍金銅器（1-Sa6）も同巧。体部が内弯気味で、口縁がほぼ水平であるのが特徴（以下、浅洗Ⅰ類A）。

鑑はたらいであり、水浴や食物の保存器としても使われた。戦国期の鑑と類似するのは、前122頃の広州・南越王墓出土銅器（1-Ga8）。以後の例はない。

匜は鉢状の器に片口の注口を作ったもの。注口とは逆の端に把手か環耳をつけるのが古調。形は楕円形、円形、桃形、方形があるが、前三者は基本的に秦までで終わる。前漢は方匜が主で、一部に円匜が残る。前漢の円匜は、前113年の満城漢墓M1出土銅器（文献3）と銀器（1-H11）。銅器は8枚を入れ子にした比較的小型品で、沃盥の礼器というよりも宴会で酒などを注ぐのに用いられた可能性を示す。銀器は銀製針も出土していることから、医療用と推定している。以後はすたれる。方匜は、戦国晩期の湖北出土銅器（文献238）が初出例で、環耳をもつ。方匜の銅器は前漢各期（1-Ba5・Ca3・Da4・Ga9・H10・Pb7）にあり、新代（1-Sa9）にも及ぶが、後漢には途絶える。

盒 蓋付の碗は碗の項で取り上げるが、前漢・新代は身に蓋受けを作ったものばかりである。戦国期から、高台付の身に、環状撮みの蓋を伴うもの（以下、Ⅰ類）と、撮みがないか遊環をつけたもの（以下、Ⅱ類）とがある。前漢では前者が主（1-Ba4・Lb7）。後者のうち前122年頃の広州・南越王墓出土銀器（1-Ga6）は西アジア産とみる。前漢晩期から新代に限って

は、器体の前面に鋸歯文など飾った銅器（1-Mb7・Ub3）がある。長安からも出土しているが、中国南半部に多い。そのうちの一つである広西・合浦出土銅器（1-Mb7）には果核が入っていた。I類は後漢につづかない。他に漆器では、化粧用の円筒形の盒があるが、ここでは取り上げない。

豆 高杯である。西周代にあった環耳付きのものや有蓋豆は、戦国晩期までにすたれ、シンプルな器形のみが前漢に残るが、出土例は極めて少ない。陶器（1-Bc2）や漆器があるが、金属製品は知らない。杯部が角張るもの（以下、I類）と、丸味をもつもの（以下、II類）があり、脚も高いものと低いものがあるが、戦国期と大差はない。戦国期ではI・II類が一基の墓で相伴しており、用途の差があったと推測される。

有蓋豆の消失は、五穀や粥・羹あるいはスープを豆で食べる習慣が無くなったことを示す（文献43）。果物などを盛ったと想定される無蓋豆も出土例が少なく、その機能も盤に移ったと考えられよう。

b 貯蔵具・注器（付図2）

扁壺・俵形壺・瓶 扁壺は戦国期に出現する。前313年の河南・中山国王墓出土銅器（文献28）はその古い例の一つ。前漢初期の湖北・雲夢出土銅器（2-Ba2）、前漢早期の湖北・随州出土漆器（文献458）、前漢前期の広州漢墓出土銅器（2-F2）、ミニチュアである前118～104年の河北・満城漢墓M2出土銅器（2-H2）は戦国晩期・秦の伝統（文献238・341）をひき、丈が低目で、最大径が胴中位にある（以下、I類）。いずれも低い高台がつく。このうち、雲夢例のように口縁が蒜頭^{サン}で、蓋でなく栓をつめるのは、秦末～前漢初に限られる。後述する蒜頭瓶の特徴と一致する。前漢晩期の内モンゴルフフホト出土銅器（2-Pa3）や広西・望牛嶺出土銅器（文献75）は体部が下肥れになる（以下、II類）。後者は、両肩の環耳に鎖がつき、水筒にふさわしい。内モンゴロではI・II類の陶器が多くみられる（文献30）。前漢早期の江蘇・徐州楚王墓出土銅器（2-Ca2）は肩の張った壺型で、片口になる点も特異な扁壺（以下、III類）。他に例はないようである。

異形のものに、中国で繭形壺と呼んでいるものがある。林1976では榘に比定するが、日本的に俵形壺と呼ぶ。戦国晩期に陶器がある（文献394）。初現か。銅器は前漢早期の湖北・光化例（2-Cc1）が初出のようである。前漢早期でもやや遅れ、明帝末～武帝初とみる江蘇・徐州出土陶器（文献439）以後は、ほとんどすたれてしまう。

瓶の初現を飾るのは蒜頭瓶。口縁部を蒜形につくることからの命名で、筒状の中空の栓をしている例がある。体部は扁球状で、高台をもつ。戦国晩期頃が初現（文献394・429）で、秦の例（文献507）は多い。いずれも頸部の中程に突帯をめぐらせる（以下、I類）。前漢初の河南・陝県出土銅器（2-Aa1）は頸部に突帯がない（以下、II類）。前122頃の広州・南越王墓出土銅器（2-Ga1）も同巧。ただし、中国南半部はI類の銅器（2-Ba1・F1）が前漢早期に残る。前122年頃から以後の例は知らない。

漢代で他に瓶とみるものに、口縁が外反するもの（以下、反口瓶）と、口縁が直立するもの（以下、直口瓶）とがある。反口瓶は前漢中期の河南・陝県出土銅器（2-Ib1）、武帝（前140～前87年）末頃とみる河南・鄭州出土陶器（2-Jd1）。体部は蒜頭瓶に似て、扁球状であ

る（以下、I類）。反口瓶は後漢以降一時途絶え、南北朝から盛行する。

直口瓶の初出は、前漢中期とする湖南・劉彊墓出土銅器。伴出した他の遺物から前漢晩期と推定する。体部は扁球形で、高台がつく（以下、I類）。2点のうち、外面をあまり飾らない1点（2-La1）は、内部に「竹籩」5本が残っていた。飲酒を競う「酒令籩」をいれた器の可能性もあるが、投矢とみて、投壺と報告しており、これに従う。ほぼ同じ銅器は、前漢晩期から新代まで存続する（2-Ma1・Ub1）。中国南半部に多いが、1点だけ陝西・長安城内（2-Ub1）から出土している。前漢晩期の山東・五蓮出土例（2-Pb1）や内蒙古出土例（2-R8・R9）は陶器で、器形が若干異なる。後漢に残るが、出土例はきわめて少なくなる。**壺・提梁壺** 壺はバラエティに富む。以下では、頸が細長いもの（以下、細頸壺）、頸がそれ程細長くなくて、胴部が長いもの（以下、長胴壺）と、胴部が球状のもの（以下、球胴壺）に大別する。提梁壺もこれに準じる。鋬は方形壺である。

細頸壺は、戦国中期から秦代に、頸部がほぼ直で口縁がわずかに反る陶器がある（文献196・229・493）。前122年頃の広州漢墓出土陶器（2-Ga2）はその系譜をひくが、やや下肥れ（以下、I類A）。前漢中期もやや遅い山東・微山出土の原始瓷器（2-Jb2）は、胴や頸が長くなる（以下、I類B）。武帝（前140～前87年）末年頃とみる河南・鄭州出土陶器（文献276）は、口縁が屈折して立ち上がる、中国では盤口と呼ぶタイプの初出例。前漢晩期の山東・五蓮出土陶器（2-Pb2）も大差ない。球形胴で、高台が低いのが特徴（以下、Ⅲ類A）。

長胴壺は殷周代からある。前漢のものは、戦国期と同様に肩の張ったものが主流を占める。頸が長いのが典型（以下、I類）だが、中国では罐に含める頸の短目のもの（以下、Ⅱ類）もある。I類のうち、器身に文様を密に施した銅器は、前113年の満城漢墓M1出土例（2-H4）までで、以後はすたれる。突帯だけをめぐらす銅器は、戦国期にあり、前漢初の河南・陝県出土銅器（2-Aa2）につづく。前漢晩期の山東・五蓮出土銅器（文献366）や新代の四川・綿陽出土銅器（2-Tb1）が最終例で、以後途絶える。長胴壺Ⅱ類は、肩の張る陶器が戦国晩期頃にある（文献508）。前漢の景帝（前140年没）従葬抗出土陶器（2-Ac4）はほぼ同巧（以下、Ⅱ類A）。前113年の満城漢墓M1出土小型銅器（文献3）や新代の陶器（文献403）も大差ない。前漢中期の山東・劉髡墓出土銅器（2-Ia5）は、肩の張りがやや弱い。なお、新代の河南・洛陽出土陶器（2-Ua2）は、長胴壺の一種だが、味噌らしき「豉」の墨書があり、注目される。

球胴壺は、胴部の最大径がほぼ中位にあるもの（以下、I類）と、下肥れのもの（以下、Ⅱ類）とがある。I類は、既に戦国期にあり。文様を密に飾るものと、突帯だけのもの、素面のものがある。蓋は上面に複数の立飾をつけるのが原則。こうした伝統を残す銅器は前漢初の河南・陝県例（文献7）、前113年の満城漢墓M1出土例（2-H5）などである（以下、I類A）。ただ、中国南半部では、前漢中期から晩期（文献4・199）まで、文様を密に施す伝統が残るが、蓋の残る例は1個の環だけを付す（以下、I類B）。蓋に1個だけの環をもつ銅器は、すでに前313年の河南・中山国王墓例（文献28）にあり、前漢早期の湖北・襄樊例（2-Da4）や武帝末年頃の湖北・宜昌例（2-Fa2）につづくが、これらは提梁壺であった可能性があり、特殊例と考える。突帯だけを飾る銅器は前漢初（2-Aa3・Bc4）から新代までである。前漢中期の広州漢墓出土銅器（2-Kb3）以後は、蓋は立飾りがなく、1個の環だけ

を付す（Ⅰ類B）。

前122年頃の広州・南越王墓出土銅器（2-Ga4）は、胴が明らかに下肥れになったⅡ類の初現例。前漢中期から新代の諸銅器（2-Pa5・R11・Sa2・Ta2・Va4）につながる。後者では、蓋の残る例（2-Pa5・R11・Va4）はすべて立飾がなく、1個の環のみとなる（以下、Ⅱ類B）。密に文様を飾ったり、高台が八字状に高くなったりする（以下、Ⅱ類C）のは、中国南半部の地域色を示そう（2-N4）。

提梁壺は、戦国期の前313年の河南・中山国王墓から、銅製の長胴壺と球胴壺の二者が出土（文献28）。蓋は立飾がなく、1個の環があるのを原則とする。提梁長胴壺は前118～104年の満城漢墓M2出土銅器（2-H1）があるが、以後はすたれる。銅製の提梁球胴壺は前漢晩期の2例（2-La2・Ma2）。いずれも中国南半部の例で、密に文様を施す。後漢に入っても中国南半部では球胴の提梁壺が残る。

鈎 鈎は方形壺。戦国期に始まり、前漢・新代までかなりあるが、次第にすたれる。肩に環耳がつき、方形の高台と蓋を伴う。肩が張り気味か球胴なのが戦国期の特徴で、その伝統は前漢中期まで残る（以下、Ⅰ類）。他方、前漢に入ると体部が下肥れのものが登場する（以下、Ⅱ類）。蓋は戦国期では4個の立飾をつけるのが原則（以下、Ⅰ・Ⅱ類A）で、前漢初から前122年頃の広州・南越王墓までの銅器はⅠ類A（2-Da3・Ea1・Ga3）、Ⅱ類A（2-Ba3）ともその伝統をひく。密に文様を施したものは前122年頃の広州漢墓出土銅器のⅠ類A（文献4）のみで、素面が主となる。素面は戦国にもある。前漢中期の銅器（2-H3・Ja3）は、Ⅱ類であるが、蓋の残る例はない。いずれも素面。前漢晩期の銅器（2-Pa4・R10）は、体部が下肥れで、蓋は立飾がなく、中央に環1個をつけるものになる（以下、Ⅱ類B）。

罐・甌・瓮・壺 中国で罐と呼んでいるもののうち、基本的には口が大きいものを罐とし、口が小さいものは、中国でも使用している壺を用いる。ともに胴の長短、頸の長短や形状により区分する。甌は短胴罐、瓮は長胴罐の類になる。バラエティに富むが、陶器が主であり、大要を示すに止める。

甌は、樋口1967によると、高さよりも横が広がるもの。殷周代を通じてある。前122年頃の広州・南越王墓出土の銅甌と呼んでいるもの（2-Ga5）は、戦国中期の江蘇・淮陰出土銅器（文献229）と大差なく、環耳があり頸も短い、肩の張りが強くなる。3個の短脚がつき、温器である可能性もある。以後の例はない。なお甌に似るが、胴や頸がやや長いものを甌と呼ぶ銅器（文献243・429）が戦国晩期にあるが、以後はすたれる。

短胴罐は概して頸も短い。甌に似て肩が張るもの（以下、Ⅰ類）と、最大径が胴中位にあるもの（以下、Ⅱ類）、下肥れのもの（以下、Ⅲ類）がある。Ⅰ類は戦国中期の江蘇・淮陰出土陶器（文献229）にある。前122年頃の広州・南越王墓出土陶器（文献8）などにあるが、例は多くない。Ⅱ類は戦国中期かやや遅れる河南・洛陽出土黄釉陶器（文献508）が初出のようである。前漢では、前140年に没した景帝の従葬抗出土陶器（2-Ac5）がその系譜をひき、球胴に近い（以下、Ⅱ類）。Ⅱ類は後漢につづく。Ⅲ類は前漢晩期から新代の陶器（2-Oa7・Tb4）があるが、いずれも中国南半部から出土しており、地域性を示す。後漢につづく。

長胴罐は、短胴罐の分類にあわせ、肩が張るもの（以下、瓮と呼ぶ）、最大径が胴中位にあるもの（以下、Ⅱ類）に区分。下肥れのものは見当たらない。日本の典型的な甌のように、口

が胴と同じくらいに大きいものを、特に大口罐と呼ぶ。

瓮は、戦国晩期の四川・重慶出土陶器（文献242）があり、前漢初の山西・朔県出土陶器（文献363）、前漢晩期の四川・重慶出土陶器（文献129）も大差なく、肩の張りがまだ弱い。一方、前漢晩期の湖北・荊沙の出土陶器（文献171）は肩の張りが強い。両系統とも以後につづく。長胴罐Ⅱ類は前433年の湖北・曾侯乙墓（文献6）や戦国中期の河南・陝県墓（文献7）出土銅器がある。やや丈が高い。前漢前期には格好の例がないが、晩期にはいずれも陶器ながら、内蒙古・フフホト例（2-Pa6）、新代には江蘇・邗江例（2-Sa3）、四川・綿陽例（2-Tb3）がある。

大口罐は、秦代に陶器がある（文献509）。前漢初の河南・陝県出土陶器（文献7）も大差ない。前122年頃の広州・南越王墓出土陶器（文献8）などがある。

壺は、前漢晩期の四川・重慶出土陶器（2-Lb5）が初出のようである。短胴で、安定感がある。最大径はまだ肩近くにあるのが特徴である（以下、Ⅰ類A）。後漢には最大径が下端になる。**注器（鍬壺・水注）** 鍬壺の祖型は、盃と呼ばれているもののうち、殷末・周初に登場する葉罐形の器に三脚をつけたものである。その差異は、後者が提梁を注口と同方向につけているのに対し、前者は棒状把手を胴部に注口と直角になるようにつけたもの、いわゆる急須に三脚をつけたものといえる。ともに注口は龍頭形である。葉罐形の盃は戦国晩期でも前半の湖北・黄岡出土銅器（文献239）が最終例である。鍬壺の初出は戦国晩期の湖北・襄樊出土銅器（文献238）で、前漢早・前期（2-Da5・F4）、前122年頃の広州・南越王墓（2-Ga6）及び前漢中期（2-Ja6）の諸銅器も大差ない。把手が中程で強く折れ、端が高くなるのが特徴（以下、Ⅰ類）。前漢前期の湖北・宜昌出土銅器（2-Ea5）、前漢中期の山東・栄城出土銅器（文献167）は、把手の曲折が弱く水平に近くなる（以下、Ⅱ類）。前漢前期には、広州漢墓出土銅器（2-F3）のように、曲折のない短い把手を斜めにつけたもの（以下、Ⅲ類）も登場。中期の湖南・資興出土銅器（2-Ka4）も同様である。Ⅲ類は後漢早期にも残る。前漢晩期の山東・済寧出土銅器（文献510）や湖南・張瑞君墓出土銅器（2-N5）、新代の江蘇・邗江出土銅器（2-Sa4）や前漢末～新代の陝西・長安城出土銅器（文献122）は、把手に曲折がなく、ほぼ水平となる（以下、Ⅳ類）。Ⅳ類は後漢で盛行。Ⅲ・Ⅳ類とも前漢中期・新代のものの一部に、注口が壺口縁より高くなるもの（2-N5・Sa4）があるが、中国南半部の地域色を示すようである。

なお、前漢早期の江蘇・徐州からは、棒状把手で、脚のない陶器（2-Ec3）が出土。鍬壺の簡略品であろうが、脚がないことから、これを水注Ⅰ類とする。この他に、前漢早期の江蘇・西山からは、甌の肩に注口をつけた陶鍬と呼ぶもの（2-Eb4）が出土しているが、以後にはつづかない。

以上の他に、前漢・新代にある特異な器種を3種あげておく。その一は、大口罐に蓋をかぶせた新代の河南・洛陽出土陶器（2-Ua5）。蓋に「飯」と墨書しており、おひつであったと推測できる。その二は、長円筒形の容器に蓋を伴う陶器で倉と呼んでいる。前漢晩期（文献171）や新代の例（2-Ua3）がある。後者には「粟」の墨書があり、穀物を貯蔵したものである。戦国晩期が初現か（文献394）。その三は、桶状の銅器（文献4・8）。中国南半部でも前漢代の広州あたりに特有のものらしい。大小がある。提梁桶もある。

c 煮沸具 (付図3)

鍋・片手鍋・三脚鍋 鍋は、基本的には丸底で、口縁が外折する比較的浅目の容器。体部が開き気味で、把手のつかないもの（以下、Ⅰ類）と、体部が内弯して口縁で強く外接し、肩に環状把手をつけるもの（以下、Ⅱ類）とがある。他に、後述する無蓋鼎に似て、口縁に方形把手をつける鍋のうち、脚のないものは鍋として取り扱う（以下、Ⅲ類）。

Ⅰ類は戦国晩期の銅器が初出（文献394・429）のようである。前漢早・前期の銅器（3-Cb1・Ga1）はその系譜をひき、浅目で口縁もほぼ水平に短く折れる（以下、Ⅰ類A）。前113年の満城漢墓M1とその妻のM2出土鍍金銅器には、Ⅰ類A（3-H1）とともに、やや深目のもの（3-H2・H3）が出現する（以下、Ⅰ類B）。前漢中期（3-Jc1）や晩期（3-Qa1）の銅器も深目だが、口縁は上開きになる（以下、Ⅰ類C）。晩期の陝西・扶風出土銅器（3-Qc1）、新代の洛陽出土陶器（文献407）は体部の開きが大きい（以下、Ⅰ類D）。扶風例のみは半環耳がつく。Ⅱ類は中国南半部で出土する地域色の強いものである。初現は戦国晩期頃（文献241・437）。前漢では、前期の広州漢墓出土銅器（3-F1）、晩期の四川・重慶出土陶器（3-Lb1）などがある。いずれも口縁の立上がりはそれほど強くない（以下、Ⅱ類A）。新代の四川・綿陽出土銅器（3-Tb1）は口縁が立ち気味となる（以下、Ⅱ類B）。Ⅲ類は前113年の満城漢墓M1出土銅器（3-H5・H6）が初現。深目で体部が開き気味なのが特徴（以下、Ⅲ類A）。漢中期の広西・望牛岭出土銅器（3-Ma2）は体部がほぼ直立する（以下、Ⅲ類B）。後漢にもつづく。同じく中期の四川・成都出土銅器（3-Mc1）は既述した鍋Ⅱ類Bに似て、口縁が折れて上開きのもの（以下、Ⅲ類C）。底に乳釘がある。新代の浙江・龍游出土鉄器（3-Tc4）は浅いもの（以下、Ⅲ類D）。

片手鍋は、前113年の満城漢墓M1（3-H4）とその妻のM2からの鍍金銅器が初出例。鍋Ⅰ類Aの体部に棒状把手を水平につけたもの（以下、Ⅰ類A）。前者には蓋がつく。前漢晩期とする陝西・漢中出土銅器（3-Uc1）は鍋Ⅰ類Dに棒状把手をつけたもの（以下、Ⅰ類D）で、鍋Ⅱ類に棒状把手をつけたもの（3-Uc2）も出土（以下、Ⅱ類）。前者に類した銅器は新代の洛陽出土例（文献512）もあり、漢中例も新代と推定する。Ⅱ類の銅器は、新代の四川・綿陽例（3-Tb3）や貴州例（文献511）などで、中国南方的特色と推測される。片手鍋Ⅱ類の系統をひくものは後漢にもあるが、他はすたれる。

三脚鍋は前漢中期の山東・栄城出土銅器（3-Kd5）が初現。深目で、口縁がわずかに外接し、体部に環耳をもつ。平底であるのも特徴（以下、Ⅰ類）。前漢晩期の山西・朔県出土銅器（3-Qa4）もほぼ同巧。後漢につづく。

釜 球状の体部に上開きの口頸部がつく器。釜と鍋の中間的形態である。肩に環耳がつく。環耳は2個のものと1個のものがある。ともに戦国中期でもやや遅れる四川・綿陽出土銅器（文献368）が初現。秦を経て前漢につづく。環耳が1個のもの（以下、Ⅰ類）は、前漢初の河南・陝県出土銅器（文献7）や前漢早期の湖北・襄樊出土銅器（3-Cb2）が最終例。環耳が2個だが、片方が小さい（以下、Ⅱ類）銅器は、前漢初の河南・陝県例（3-Aa1）、前漢早期の湖北・雲夢出土銅器（3-Ba1）や湖北・宜昌出土銅器（3-Ea2）、前漢前期の広州漢墓例（3-F3）、前122年頃の広州・南越王墓例（文献8）。陝県例（3-Aa1）は底に鉄製架が

銑着。2個の環耳が同大（以下、Ⅲ類）の銅器は、前漢早期の湖北・房県例（文献513）、前122年頃の広州・南越王墓例（3-Ga2）、前漢中期の山東・劉髡墓例（3-Ia2）、前漢晩期の四川・重慶例（3-Lb2）、新代の四川・綿陽例（3-Tb2）と河南・洛陽例（文献407）。後漢にも存続する。前漢中期の山東・劉髡墓例（3-Ia2）は、蓋を伴った稀な例である。このことから、釜は釜の一種だが、甑をのせるものではなかったと推測できる。なお、新代の四川・綿陽出土銅器（文献203）は、釜に棒状把手もつけた特殊品。類例はない。

鑊 前113年の満城漢墓M1出土銅器（3-H8）は「鑊」の自名器。盆に似るが頸部のくびれが大きい大型の鍋の類。前漢早期の類例は湖北・襄樊出土銅器（3-Da5）。前漢晩期の四川・重慶出土銅器（3-Lb4）は鑑とするが、形からすると鑊。これらより後の例はない。

釜・三脚釜 釜は甑をはめ込むため、口はほぼ直口で、肩に環耳をもつのが通例。体部は、典型例は球形だが、長胴のものもかなりある。それぞれを球胴釜、長胴釜と呼ぶ。ともに胴部に、竈にかけるときのかかりとする鏝があるものと、ないものがある。なくても竈にはかかる。底に架（五徳）が銑着している出土例（3-Aa2）もある。架はすでに戦国期前313年の河南・中山王墓から出土している（文献28）。

球胴釜は、鏝のないもの（以下、Ⅰ類）が戦国中期でやや遅れる時期（文献368）、鏝付き（以下、Ⅱ類）が戦国晩期（文献394）には出現している。丸底と平底とがある。前漢の銅器でみると、鏝のないⅠ類は前漢初の河南・陝県例（文献7）と湖北・雲夢例（3-Ba2）、前漢前期の湖北・宜昌例（3-Ea4）。以後の例はない。いずれも口縁が外反し、環耳も把手状にするのが特徴。河南でも出土しているが、既述した鍋Ⅱ類と同じ、中国南半の地域色が濃い。鏝付きのⅡ類のうち、丸底のものは前漢初の河南・陝県例（文献7）、前漢前期の湖北・襄樊例（3-Da4）、前漢中期の山西・朔県（3-Ja3）にあるが、以後はすたれる（以下、Ⅱ類A）。平底のものは前漢初の河南・陝県例（文献7）、前漢前期の湖北・宜昌例（3-Ea5）以後、前漢晩期の陝西・西安例（3-Qb2）、新代の江蘇・邗江例（文献194）や湖北・襄樊例（文献174）までである。後漢にもつづく。

長胴釜は、鏝のないもの（以下、Ⅰ類）が前313年の河南・中山国王墓（文献28）から出土している程度で、戦国期の例は乏しい。中山国王墓例は平底で、肩に強い稜がある。前漢では、Ⅰ類は少し形が異なるが、前期の江蘇・徐州楚王墓出土銅器（文献433）がある。以後は鉄器に限られる。中期の陝西・西安例（文献270）、晩期の陝西・隴県例（文献268）、新代の陝西・西安例（3-Vc3）である。いずれも平底で肩が張り、口縁が立ち上がる（以下、Ⅰ類B）。後漢にも、一部残る。Ⅱ類は前漢初の河南・陝県出土銅器（3-Aa2）、陝西・景帝（前140年没）従葬抗出土鉄器（3-Ac3）が初出のようである。前者は丸底（以下、Ⅱ類A）で鉄製架が付着する。後者は平底（以下、Ⅱ類B）である。Ⅱ類Aは後につづかない。Ⅱ類Bの銅器は前113年の満城漢墓M1例（3-H7）、前漢中期の河南・陝県例（3-Ib4）や湖北・員陘例（文献192）、前漢晩期の陝西・西安例（3-Qb3）、新代に入る江蘇・邗江例（3-Sa5）があり、後漢にもつづく。他に、長胴釜と同様に肩が張るが、無頸か極めて頸の短い鉄器が、前漢中期や新代の浙江・龍遊（3-Lc3）、新代の陝西・西安（3-Vc4・Vc5）から出土している（以下、Ⅲ類）。後漢につづく。これらの例を含めて、鉄製釜はいずれも金属製甑を伴出していない。釜単独で使用したか、陶製の甑を使用したことになる。

三脚釜は前漢前期の広州漢墓出土銅器（文献4）や新代の山東・安丘出土銅器（3-Vb6）。鐔があり、しかも方形把手がつく点は釜と鼎の折衷といえる。後漢にもあるが極めて少ない。

甑 甑と鬲を一体にした獻は、殷以後戦国中期（文献4・229）まで残る。その甑は口縁に方形把手をつける。戦国中期もやや遅れる球胴釜Ⅰ類Aに伴う四川・綿陽出土甑（文献368）は、伴出の球胴釜と同様な、環状の把手をつける（以下、Ⅰ類）。前漢初の河南・陝県出土銅器（文献7）も同様だが、以後はない。前313年の河南・中山国王墓出土長胴釜Ⅰ類に伴う甑（文献28）や戦国晩期の河南・陝県出土球胴釜Ⅱ類に伴う甑（文献7）は、方形把手にかえて部部上半に環耳がつく（以下、Ⅱ類）。前者は丈が高いが、後者は丈が低めとなり、前漢代につづく。器形は、既述した盆に似ており、新漢・新代を通じて大きな変化はない。底の透しは、小円孔を多数穿つもの（以下、Ⅱ類A）、長孔を放射状に配するもの（以下、Ⅱ類B）、底を4区に区切り、長孔を放射状に配したもの（以下、Ⅱ類C）と、四区に横・縦溝を交互に配するもの（以下、Ⅱ類D）などがある。Ⅱ類A・B・Cは戦国期からある。前漢・新代の銅器でみると、Ⅱ類Aは前漢前期の広州漢墓例（3-F6）、前113年の河北・満城漢墓M1例（3-H7）、Ⅱ類Bは前漢初の河南・陝県例（文献7）、前漢中期の河南・陝県例（3-Ib4）や湖北・貝陟例（文献192）、前漢晩期の陝西・西安例（3-Qb3）で以後につづかないが、陶器ではⅡ類Aは残る。Ⅱ類Cの銅器は、若干の差異があるが、前漢中期の河南・陝県例（文献7）、前漢中期の山東・劉髡墓例（文献226）、前漢晩期の内モンゴルフフホト例（文献427）などで、後漢にも一部残る。Ⅱ類Dは前漢早期の湖北・光化出土陶器（文献219）が初出のようだが、銅器は前漢晩期の湖北・荊沙例（3-Ob3）や陝西・西安例（3-Qb2）、新代の江蘇・邗江例（3-Sa5）や湖北・襄樊例（文献174）があり、前漢晩期・新代の主流を占める。環耳の省略もⅡ類Dから始まる。後漢にもつづく。

鍑 鍑と呼んでいるのは鍋を深くしたような器である。多くは底に煤がつく。中国北方の遊牧民である匈奴や鮮卑などに用いられたもので、春秋期から北魏・北齊までつづく（文献200・490）。バラエティがあり、代表例を取り上げる。秦～前漢とみる寧夏・固原出土銅器（3-Ae3）は筒状の深い器であり、平底。肩の張りが弱いのが特徴（以下、Ⅰ類A）。前漢中期相当とみる内モンゴロ出土銅器（3-Gb3）は、底がすぼまり、高台がつく（以下、Ⅱ類）。

鼎 方形把手・三脚付の鍋である。樋口1967によると、殷・西周には銅製の蓋はなく（以下、無蓋鼎）、春秋期から銅製蓋付き（以下、有蓋鼎）が登場してくる。有蓋鼎は、蓋が扁平なもの（以下、Ⅰ類）と半球状のもの（以下、Ⅱ類）、無蓋鼎は把手が口縁端につくもの（以下、Ⅰ類）と口縁よりやや下につくもの（以下、Ⅱ類）に区分する。

有蓋鼎は、Ⅰ・Ⅱ類とも戦国期を通じて存在し、前漢代にも残る。蓋には複数の立飾があるのが伝統であり、脚の長いのが古調。銅器でみると、Ⅰ類は前漢初の河南・陝県例（3-Aa5）、前漢早期の湖北・襄樊例（文献174）、前113年の河北・満城漢墓M1例（3-H10）、前漢中期の山東・栄城出土例（3-Kd6）がある。以後にはつづかない。Ⅱ類は前漢各期（3-Aa6・Ba4・Da6・Ed10・F11・Ga6・Ib5・Ob6・R5など）と新代にあるが、大きな変化はない。概して脚は短い、中国南半部では脚が長いものが前漢中期や晩期（文献4・8）、新代（文献393）まで残る。後漢には激減する。

無蓋鼎Ⅰ・Ⅱ類とも戦国期にあるが、Ⅱ類は中国南半部でしか出土しておらず、地域色を示

す。前漢のⅠ類は、前漢初の河南・陝県出土銅器（3-Aa4）、陝西・景帝（前140年没）従葬抗出土鉄器（文献405）、前113年の河北・満城漢墓出土銅器（3-H9）。ともに深目だが、脚は戦国期より短くなっている（以下、Ⅰ類B）。広州の前漢前期や前122年頃の広州・南越王墓出土銅器（3-F8・F9・Ga4）は、Ⅰ類でも口縁が外折して立ち上がる特異なものである（以下、Ⅰ類C）。地域色を示す。以後はすたれてしまう。おそらくⅠ類は、前述した三脚鍋や鍋Ⅲ類に変わっていくのであろう。無蓋鼎Ⅱ類は、前漢前期の湖南・資興出土銅器（3-Ed7）や広州漢墓出土銅器（文献4）、前122年頃の広州・南越王墓出土銅器（3-Ga5）。以後は途絶える。

温酒樽 円筒形の容器で、身に三脚と環耳、蓋に複数の立飾をつけるのが典型（以下、Ⅰ類）。三脚付き盤を伴う例が多い。同形の漆器は主に化粧具なので省略し、「温酒樽」と自名があった銅器をここでは取り上げる。銅器の最も古い例は前漢中期の広州漢墓例2点。うち1点が自名器（3-F12）。後漢につづく。一方、前漢晩期には、湖南・永川例（文献199）のように、蓋を山形につくり、頂部に鳥を飾るものが登場する（以下、Ⅱ類）。新代の江西・南昌例（3-Td7）なども同巧。中国南半部に特有で、地域色を示す。後漢にもつづく。

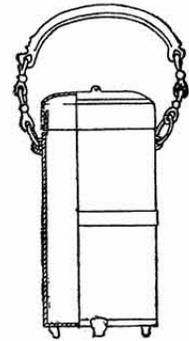
なお、温酒樽に類した銅器だが、提梁の細身の容器が、前漢中期の山東・栄城（第16図1）、前漢晩期～新代の内蒙古（第16図2）や西安・長安城（第16図3）から出土している（以下、提梁筒）。旅具か。樋口1967によると、西周に例がある。後漢にはつづかない。

鑊尊 壺形の器に三脚がついたもので、自名器もある（文献43）。提梁が主と思われるが、腹部に棒状把手をつけたものもある。祖形は戦国中期から晩期にある鼎の一種で、頸が立ち上がる類（文献196・506）^{註4)}にあり、その方形把手を環耳・提梁としたのが鑊尊になろう。

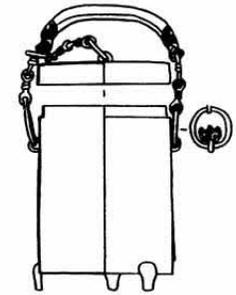
鑊尊の初現は前漢初の河南・陝県出土鉄器（3-Aa7）。戦国期のものより、頸が長く、脚は短い（以下、Ⅰ類）。類例は前114年の河北・常山国王墓出土銅器（文献162）や、前漢晩期の湖南・湘郷出土鉄器（文献516）。前漢中期には提梁を伴う銅器が、河南・陝県（3-Ib6）、江西・南昌（文献531）にあり、晩期の四川・重慶例（3-Lb7）、湖南・張端君墓例（3-N5）、山西・朔県例（3-Qa6）につづく。頸はやや長くなる（以下、Ⅱ類）。新代頃の江蘇・邗江出土鉄器（3-Sa6）は鑊尊の三脚を高台に替えた可能性がある（以下、Ⅲ類）。重慶例では下盤が伴った可能性が高い。鑊尊に棒状把手をつけたもの（以下、Ⅳ類）は、前漢前期の湖北・光化出土銅器（文献219）が初出。類似の銅器は前漢晩期の湖北（3-Ob4）や広西（3-Ma3）にあり、後漢にもつづくが、中国北半部の出土例はなく、地域色を示す。

d 雑器（付図3）

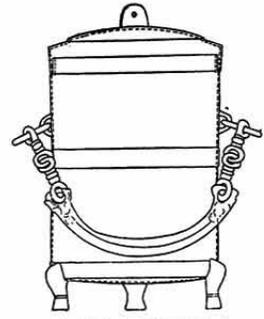
熨斗 前漢晩期の湖南・張瑞君墓出土銅器（3-N7）、湖南・永川出土銅器（3-Oa6）が初



1 山東・栄城出土
（前漢中期 文献167）



2 内蒙古出土
（前漢晩期 文献30）



3 西安・長安城出土
（前漢末～新 文献122）

第16図 銅製提梁筒
1 : 6

現のようである。前者は自名器。ともに平底で、中空の棒状把手をつけている。短柄だが、木柄を差し込んだと推定できる（以下、Ⅰ類）。前漢晩期の山東出土銅器の把手は長さ約22cm中実の棒状把手（文献510）。柄の茎部や先端につくり出しがないのが特徴（以下、Ⅱ類A）。

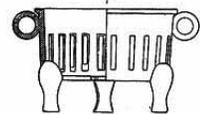
爐 方爐と円爐があるが、方爐はほぼ前漢に限られるので割愛し、円爐とその下盤のみを取り上げる。円爐はすでに戦国時代には類例がある。多数の透かしをあけた爐（以下、内爐Ⅰ類）は、前118～104年の河北・満城漢墓M2出土銅器（第17図1）、前漢中期の山東・栄城出土陶器（第17図2）があり、後者では盤Ⅰ類の下盤が伴う。新代の江蘇・雒江出土鉄器（第17図3）は、透かしを底にだけあけたもの（以下、内爐Ⅱ類C）。これらの内爐は、鍋などを温めたのであろうが、以後は次第にすたれる。

燈 燈は、前漢代には油用と、皿に針状の突起があるため蠟燭用（以下、蠟燭燈Ⅰ）と推定されるものがある。それぞれに、安置するものと、持って歩くいわゆる行燈とがある。いずれもバラエティに富む。後漢に入るとかなりシンプルになる。本稿では、以後も出土例が多い、油用・安置式の豆（高杯）形のものを中心に既述し、他は割愛する。

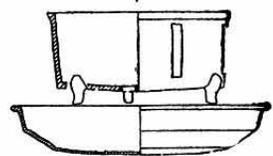
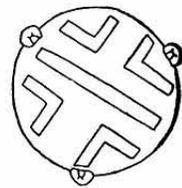
豆形のもの（以下、豆燈）は、食膳具の豆（高杯）とは、小形である点や脚が細長い点で区別する。杯部と脚部を分離したもの（以下、盞燈）は、低目の盞燈台をもつものや連枝燈のように高いものも含む。供膳具の碗や杯を燈にしている場合もあるが、確認している例は少ない。

豆燈は、前漢代には脚が極めて細長く、油皿が大きく扁平なものがある。脚の中程に太い節があるのも特徴である（以下、Ⅰ類A）。この器形では蠟燭用の針があるのが主だが、針を確認できない例を油用とみる。古いのは前116年銘の河北・満城漢墓M1出土銅器（3-H11）で、前漢晩期頃の山東・五蓮出土鉄器（文献366）や内蒙古出土陶器（3-R8）もある。満城漢墓M1例は皿と脚を別造りにして鋸で固定している。Ⅰ類Aは、後漢にはⅠ類Bに変化する。一方、前113年の満城漢墓M1出土陶器（3-H13）は、丈が低目で、半球状の身に太目の足を持つ新器形（以下、Ⅱ類A）。燈とみている。前漢晩期の内蒙古出土陶器（3-R7）も同類。ほぼ同形品で蠟燭用の針をもつ例に対して、油用とみる。Ⅱ類は後漢から次第に盛行する。

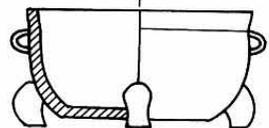
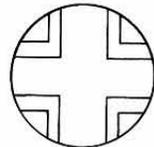
盞燈は、前113年の満城漢墓出土銅器（3-H12）。小型品では口縁に2個の環状把手が水平に付く。盞としていたが、後述する三国時代・西晋の例からみて、燈盞の可能性が高い（以下、Ⅰ類A）。ただし連枝燈があった形跡はない。行燈内においたものか。前漢中期とする広州漢墓出土銅器（3-Kb9）は、半球状の皿の下に柱状突起がつく（以下、Ⅱ類）前漢末～新代の陝西・長安城出土銅器（3-Ub7）は、底の中央に中空の柱がある。温器とみて盆に分類しているが、後述する西晋代の類例から、中空柱に、別造りの盞燈Ⅱ類をはめこんだと推定される（以下、Ⅱ類）。



1 河北・満城M2銅爐
(前118年～104年頃 文献3)



2 山東・栄城陶爐
(前漢中期 文献167)



3 江蘇・邗江鉄爐
(新代 文献194)

第17図 前漢・新代の爐
1・3 1:8 2 1:10

ii 後漢

a 供膳具・水器（付図1）

飲器 前漢・新代からつづくのは、高足杯Ⅰ類や把手付杯Ⅱ類Bである。高足杯Ⅰ類は広西・貴港出土銅器（文献244）程度で、例は激減する。把手付杯Ⅱ類Bは後漢に比定している広西・鍾山出土銅器（4-Kc1）。把手付杯Ⅰ類は、後漢に入ると、杯身が総じて低くなる。いずれも陶器で、前・中期の湖南・資興例（文献227・4-Fa1）や後期の広州漢墓例（4-Ka2）のように、低い脚を残すものや蓋のつく例はあるが、立飾は消失する（以下、Ⅰ類B）。早期の湖南・資興例（4-Aa1）、前期と後期の広東・広州漢墓例（文献4）のように、把手が板状になるものもある（以下、Ⅰ類C）。いずれも湖南や広東など中国南半部からの出土例で、地域色を示す。後漢前期には、広西・平樂出土銅器（4-Ca1）のように高台のない丸底風が登場。環状把手で突起をもつ（以下、Ⅲ類）。把手付杯は、中国北半部では一時すたれていたのかもしれない。長杯・角杯の例は知らない。

耳杯は、前漢・新代と同様に耳が半月形だが、後漢早期からは耳が上向きでなく水平になる（以下、Ⅱ類）。前期の内蒙古出土陶器（4-Ab2）が初出で、中期の滑石製品（4-Fb2）や陶器（4-Gb1）、晩期の銅器（4-Lc1）もほぼ同巧。後漢晩期～三国時代とする四川・開県出土銅器（文献250）も同巧で、三国時代に降らず、後漢晩期頃と推測する。133年頃の雲南・昭通出土銅器内には鶏骨（文献517）が残っており、盤としても使用されたことがわかる。

杯・碗・鉢 杯では、新代に登場した酒罎の小型品である高台付杯Ⅱ類が、後漢にも盛行するが、以後は途絶える。早期の湖北・蕪春の銅器（4-Ba2・Ba3）、133年の湖南・資興M204墓出土陶器（文献227）、中期の湖南・大庸出土陶器（4-Fb5）、後期の広州漢墓出土銅器（4-Ka4）、晩期の湖南・資興出土銅器（4-Lb5）。133年の湖南・資興出土陶器は内に陶勺（散蓮華）が入っており、羹などにも用いられたことを示すが、小型品であり、本来は飲酒器とみるべきであろう。

高台付杯Ⅰ類Bに似るが、平底（以下、平底杯Ⅰ類）の陶器（4-Fa4）が後漢中期の湖南・資興から出土。晩期の資興出土陶器（文献227）も大差ない。中期の広西・合浦出土銅器（4-Db2）はやや開き気味である（以下、平底杯Ⅱ類）。新代に登場した平底杯Ⅲ類は、後漢中期の広西・合浦出土陶器（4-Db1）や晩期の湖南・資興出土陶器（4-Lb4）にある。類例は少なく、三国時代から盛行する。

高台付碗のうち、Ⅰ類は後漢に入ると、深目で高台も高めのもの（以下、Ⅰ類B）も出現。早期の湖北・宜昌出土陶器（4-Bc5）、晩期の河南・洛陽出土銅器（4-Ja4）や広西・浦北出土銅器（4-La6）などである。Ⅱ類は、前漢晩期・新代のⅡ類Aに比して、体部が直立気味となる（以下、Ⅱ類B）。前期の広州漢墓出土銅器（4-Cb4）や内蒙古出土陶器（4-Ab6）である。中期には、湖南・資興出土陶器（4-Fa7）のように、口縁下がくびれたものも出現する（以下、Ⅱ類C）。後述する鉢Ⅱ類Cを小さく高くしたようなものである。ただし、以後にはつづかない。後期には、江南・南康出土銅器（4-Kb5）のように、体部が直立気味で浅目のもの（以下、Ⅱ類D）が登場し、三国時代に展開する。晩期の広西・浦北出土銅器

(4-La7) は豆とするが、高台付碗Ⅱ類Dの地域色を示すのであろう(以下、Ⅱ類D')。

丸底碗は、前漢代からある深目のⅠ類が後漢にも存続する。前期の広州漢墓出土銅器(4-Cb3)や、中期の湖南・大庸出土鉄器(4-Fb6)。平底碗は、後漢に入ると、高さが口径の半分程のもの(以下Ⅱ類)が出現する。早期の湖南・資興出土銅器(4-Aa5)、前期の広西・平楽出土銅器(4-Ca4)である。三国時代から盛行する平底碗Ⅲ類Aの祖形の一つになる。

鉢では前漢からつづく高台付鉢Ⅰ類の銅器が後期の広州漢墓から出土(4-Ka6)。環耳をもつ点は特異で、地域色か。前漢中期に登場したⅡ類Cは、後漢早期の湖南・資興出土陶器(4-Aa7)があるが、以後は途絶える。前期の浙江・龍游出土銅器(4-Cc5)は、体部が開き気味である(以下、Ⅱ類D)。後期の広州漢墓出土銅器(4-Ka7)もほぼ同巧。陶器では、後期の山東・淄博例(文献522)、晩期の河南・洛陽例(4-Ja5)や山西・夏県例(4-Hc6)があり、以後にもつづく。平底鉢や丸底鉢の例は知らない。

盂・鉄鉢形 盂は後漢にはバラエティに富む。後漢中期の湖南・大庸出土陶器(文献108)は、深目なのが特徴(以下、Ⅱ類)。早期や中期の湖南・資興出土陶器(4-Aa9)は、Ⅱ類に蓋を伴うもので、新しい器形の登場を示す。早期の湖北・宜昌出土陶器(文献218)は、三脚をつけた特殊品で、前後の時期に類例がない。晩期の湖南・資興出土陶器(文献227)は高台を伴う。

鉄鉢形は、後漢中期の河北・蠡県出土陶器(4-Ha4)が初出例。やや浅目で、小さな平底である(以下、Ⅰ類)。報告書では釜としている。体部が内弯するのは、本来は鍋的な用途をもったことを窺わせる。

魁 前漢晩期に出現した魁Ⅰ類Aは、後漢晩期まで存続する。早期の陶器(4-Aa10)、中期の陶器(文献216・363)、晩期の陶器(4-Ja8)がある。把手の竜頭を簡略して鍵状につくるⅠ類Bは、118年の広東出土陶器(文献518)が初出。中期の陶器(4-Fb10)や晩期の陶器(文献420)もある。山東・寿光出土銅器(4-Jc7)は把手が高い(以下、Ⅱ類B)。後漢初とするが、他の銅器からみても晩期頃となる。

酒甌 前漢晩期に登場した器種で、後漢に入ると、高台はより高くなる(以下、Ⅱ類)。銅器は、早期の湖南・資興例(4-Aa8)や湖北・蕪春例(4-Ba6)、前期の浙江・龍游例(4-Cc6)、後期の広州漢墓例(4-Ka8)、晩期の四川・綿陽例(4-Lc8)がある。以後はすたれる。

盤・沐盤・托 30cmを超える大盤で、前漢・新代から続くのはⅠ類。いずれも最大40cmほどで、前漢・新代のような特大品はない。環耳付きのⅠ類Aは、早期の湖北・蕪春出土銅器(4-Ba8)が最終例。環耳のないⅠ類Bは、152年の河南・洛陽出土銅器(4-Ia9)や陶器、晩期の山西・夏県出土陶器(文献408)で、類例は少なく、以後は途絶える。大盤ⅤA類は、後期の河南・洛陽出土陶器(文献519)や179年の洛陽・王当墓出土陶器(4-Kd11)で、食器をのせた円案であらう。

口径が20~30cmほどの中盤で、前漢・新代からつづくのはⅠ類B、Ⅳ・Ⅴ類で、出土例も比較的多くなる。Ⅰ類Bは、132年頃の河南・襄城出土陶器(4-Gb2)、後期の山東・済寧出土銅器(文献161)、晩期の湖南・資興出土銅器(4-Lb3)や江西・南康出土銅器(4-Kb3)

など。三国時代初に残る。深目のものは鉢とすべきかもしれない。Ⅳ類は、いずれも陶器で、早期の内蒙古（文献30）、中期の湖南・資興（文献227）、晩期の河南・洛陽（4-Ja2）出土品がある。深目のものは鉢とすべきかもしれない。三国時代につづく。前漢晩期に出現する扁平なⅤ類は、後漢とそれ以後に多くなる。後漢例はいずれも陶器で、早期の内蒙古（4-Ab3）や中期の広西・合浦（4-Db1）などから出土。後者の盤上には平底杯Ⅲ類がのっており、承盤であったことがわかる。ただし、杯を承ける突帯はない。

口径15cm前後の小盤は、Ⅰ類Bとして中期の湖南・大庸出土陶器（文献168）、Ⅱ類として晩期の四川・綿陽出土銅器（4-Lc2）や四川・開県出土銅器（文献250）、Ⅴ類としては中期の湖南・資興出土陶器（4-Fb3）などがある。Ⅱ類の2例は、薫爐を伴出していないので、その承盤ではない。後漢に入ると、Ⅴ類に似るが、体部に丸味をもつものが登場する。早・中・晩各期の湖南・資興出土陶器（4-Aa4）などであり、平底であるのが特徴（以下、Ⅵ類A）。

托らしきものは、中盤Ⅰ類Bにあたる132年の河南・襄城出土陶器（4-Gb2）、中盤Ⅳ類にあたる晩期の河南・洛陽出土陶器（4-Ja3）で、内底に近い突線がめぐる。初現例であるが、大きさからみて杯・碗用ではなく、爐などの下盤と推測する。

盆・銅・洗 盆は、新代に出現したⅡ類の銅器が、後漢中期頃の湖北・宜昌（4-Fc8）から出土しているが、以後は途絶える。

銅は、前漢中期に登場する浅銅Ⅱ類Bの系譜をひくものが、晩期の広西・浦北出土銅器（4-La9）にあるが、体部が直立気味となる（以下、Ⅱ類C）。前漢からつづく深銅Ⅰ類は、後漢早・中期の青海・上孫家寨出土銅器（4-Dc9）、中期の河南・新安出土銅器（4-Gc5）や陝西・漢中出土銅器（文献253）がある。深銅Ⅱ類は、後期の広西・南康出土銅器（4-Kb9）で、後漢晩期頃と推定する河南・鞏県出土銅器（4-Mb10）もほぼ同巧。ともに三国時代にもつづく。

洗は前漢以来の浅洗と深洗が後漢にも存続する。口縁の立ち上がりが弱い深洗Ⅰ類Aは、後漢早期の湖北・蕪春出土銅器（4-Ba7）、中期の湖南・資興出土銅器（4-Fa11）や湖南・南岳出土銅器（文献153）、後期の江西・南康出土銅器（4-Kb10）や広西・浦北出土銅器（4-La12）までつづく。106年の山東・章丘出土銅器（4-Ga7）や晩期の四川・開県出土銅器（文献250）は、口縁の立ち上がりが強くなる（以下、Ⅰ類B）。後者で出土した他の銅器は、口縁下がくびれる（以下、Ⅱ類）。地域色が強い。三国時代にもつづく。浅洗は、後漢に入ると環耳はなくなり、口縁の立ち上がりがやや強くなる（以下、Ⅰ類B）。早期の湖南・資興出土銅器（4-Aa11）、中期の湖南・衡陽出土銅器（4-Da7）がそれ。一方、中期には、山東・章丘出土銅器（4-Ga6）のように、口径が38cm、深さが10cm前後の大型品で、かなり浅目のものが登場する。口縁の立ち上がりは強いのも特徴（以下、Ⅱ類）。山東・章丘では同巧の深洗Ⅱ類と共伴しており、浅洗Ⅱ類は沐盤のような用途を果たしたのではないかと推測できる。浅洗Ⅱ類は後漢晩期頃と推定する河南・鞏県出土銅器（4-Mb11）にもあり、以後にもつづく。

盒・豆 盒Ⅰ類は前漢で終わる。盒Ⅱ類は後漢中期の陶器（文献30）などがあるが、例が激減する。豆は後漢早期や中期の陶器（4-Gb3）があるが、これも極めて少ない。盒・豆ともに、三国時代や西・東晋代には一時的にすたれるのかもしれない。

b 貯蔵具・注器（付図5）

瓶・細頸壺 前漢晩期に登場した直口瓶Ⅰ類が、後漢後期の広東・広州漢墓出土銅器（5-K a1）にある。この時期の広東では同巧の陶器もある。西晋までつづく。

細頸壺は、反口のⅠ類が67年の江蘇・邗江出土陶器（5-B b1）にある。球胴に近いのが特徴（以下、Ⅰ類C）。中期の河北・蠡県出土陶器（文献345）もほぼ同巧。前漢中期に出現した盤口の細頸壺Ⅲ類Aは67年の江蘇・邗江例（5-B b2）に残る。

壺・提梁壺・鈇 長胴壺は好例がない。球胴壺は球胴のⅠ類と下肥れのⅡ類がある。Ⅰ類は、中期の山西及び山東出土陶器（5-H b2・Ⅰ d3）のように口縁がはっきり盤口となる（以下、Ⅰ類C）。中期の広西・合浦出土陶器（5-D b1）や湖南・大庸出土銅器（5-F b1）、晩期の江西・南康出土銅器（5-K b3）などで、銅は算盤球状で、高台が特に高い（以下、Ⅰ類D）。中国南半部の地域色を示そう。ほぼ同巧の四川・開県出土銅器（5-M a1）や河南・鞏県出土銅器（5-M b2）は、後漢晩期～三国時代とするが、他の伴出した容器からみて、後漢晩期が妥当と考える。後者は中国南半部からの影響と理解できよう。いずれも陶器だが、中期の河南・新安例（5-G c1）や山西・朔県例（文献363）、晩期の山東・済寧例（5-I d2）や河南・洛陽例（5-J a2）は、直口長頸で高台が特に高い（以下、Ⅰ類E）。中国北半部の地域色か。Ⅱ類は67年の江蘇・邗江出土陶器（5-B b4）、中期の湖南・大庸出土釉陶（5-F b2）。

提梁壺は、中国南半部の出土例だけである。球胴壺が湖南・蕪春出土銅器（5-B a3）や後期の広東・広州漢墓出土銅器（5-K a2）、晩期の四川・綿陽や広西・浦北出土銅器（5-L c1・L a2）に残るが、三国時代にはすたれる。

鈇は、下肥れのⅡ類の系統が晩期の四川・開県出土銅器（文献250）などがある程度で、激減する。ただし、三国時代以降にも細々と残る。

唾壺 後漢に出現する新器種で、三国時代から盛行する。胴は下肥れ、頸は短く、口が大きいのが特徴。152年の河南・洛陽出土陶器（5-I a4）が初出例。頸が極めて短いのが特徴（以下、Ⅰ類）。唾壺の祖形は球胴壺Ⅱ類であり、中期の球胴壺Ⅱ類とした湖南・大庸出土釉陶（5-F b2）は唾壺かもしれない。

罐・瓮・壘 罐は、前漢にあった短胴罐、長胴罐、大口罐が後漢にもつづく。いずれも陶器。短胴罐のうち、肩の張るⅠ類は晩期の湖北・宜昌例（5-L c5）など、球形胴のⅡ類は前期の内蒙古例（文献30）や湖北・宜昌例（文献218）、中期の広西・合浦例（文献185）など、胴が下肥れのⅢ類は広西・合浦例（5-D b5）。Ⅲ類の類例は少ないが、以後にも残る。

長胴罐も陶器。このうち、肩の張りが強く、丈の長い瓮は、105年の湖南・南岳例（5-E a4）から、晩期の河南・洛陽例（5-I a5）や江西・南康例（5-K b5）まで、中国全土で後漢を通じて普及する。以後にもつづく。最大径が胴中位にある長胴罐Ⅱ類は、67年例（5-B b5）などがある。大口罐も中・晩期例があり、以後にもつづく。

壘は、いずれも陶器で、前期の内蒙古例（5-A b1）や152年銘のある河南・洛陽例（5-I a1）などがある。最大径が下端にある平底で、より安定感のあるものになる（以下、Ⅰ類B）。後者は墨書があり、当時は「瓶」と呼ばれ、神薬をいれたことがわかる。以後にはつづかない。

注器（鍬壺・水注・虎子） 鍬壺は前漢中・晩期の伝統をひくⅢ・Ⅳ類が残る。Ⅲ類は、後

漢早期の湖南・資興出土銅器（5 - Aa2）で、以後は途絶える。Ⅳ類は、中期の湖南・南岳出土銅器（5 - Ec3）、湖南・衡陽出土銅器（5 - Da2）、湖南・大庸出土銅器（5 - Fb3）、晩期の江西・南康出土銅器（5 - Kb4）がある。中期の湖南・大庸出土陶器（文献168）や、中・晩期の湖南・資興出土陶器（5 - Lb3）もこの類。

なお、133年頃の雲南・昭陽出土銅器（文献517）や、175年の山西・離石出土銅器（5 - Jb3）は、大きくみれば鍬壺Ⅳ類だが、胴部に鏝をもったり、注口と把手が同方向であるなど中国辺境部の特殊性で示す（以下、Ⅴ類）。

水注は、鍬壺を簡略化したⅠ類が、中期頃の湖南・衡陽出土陶器（5 - Da3）や湖南・南岳出土陶器（5 - Ec4）にある。中期の湖南・資興出土陶器（5 - Fa4）は注口だけで、把手のつかない新器形（以下、Ⅱ類A）。初出例である。晩期の湖南・資興出土陶器（5 - Lb4）も同様だが、三脚がつく（以下、Ⅱ類B）。

虎子は、尿瓶とみているが、日本ではこの系列の平瓶を注器と考えており、ここで少し触れておく。虎子の初現例は、戦国期（文献359）の虎形品だが、出土例が幾分か増えるのは後漢中期の湖南・資興出土陶器（第20図1）あたりからである。資興例は、球状の平底の器に大きめの口をつけたもので把手はない（以下、Ⅰ類A）。高さ18.2cm。同様だが、96年の広東・仏山出土陶器（文献520）はやや口が小さく温壺と呼んでいる。高さ18cm。三国時代につづく。

前漢・新代に登場した特殊な陶器で、おひつとして使用した広口罐は中期の湖南・資興例（文献227）、その類形で口縁を二重にしたもの（以下、二重口縁罐）が中・晩期の湖南・資興例（5 - Aa4）にあり、穀物をいれた倉は中期（5 - Gc5）、後・晩期（文献253・336）にも存続する。いずれも細々と以後にも出土する。三国時代にもつづく。

c 煮沸具（付図6）

鍋・片手鍋・三脚鍋 鍋は、前漢晩期・新代からの浅い半球状のⅠ類D、深目で口縁下がくびれるⅡ類、方形把手をつけたⅢ類が残る。Ⅰ類Dは中期の河南・新安出土銅器（6 - Gc1）や晩期の河南・洛陽出土銅器（6 - Ja1）。晩期と推定する河南・鞏県出土銅器（6 - Mb1）は体部が内弯気味で、口縁の立ち上がりも大きくなる（以下、Ⅰ類E）。Ⅰ類は以後にもつづく。Ⅱ類は、新代からはじまるⅡ類Bが、105年の湖南・南岳出土鉄器（文献153）や中期頃の湖南・衡陽出土鉄器（文献149）に残る。新器形は、133年の湖南・資興出土銅器（6 - Eb2）、中期の湖南・大庸出土鉄器（6 - Fb4）及び湖南・資興出土陶器（6 - Fa5）、晩期の四川・開県出土銅器（6 - Ma3）、広州漢墓出土銅器（6 - Ka3）、江西・南康出土陶器（6 - Kb2）、広西・浦北出土銅器（6 - La1）などで、口縁の立ち上がりが大きく、しかも口端で再び立ち上がる特徴をもつ（以下、Ⅱ類C）。若干のバラエティがあるが、いずれも中国南部の地域色を示す。広州漢墓例（6 - Ka3）は中に甑が入っており、釜の機能も果たしていたことが知れる。これは鉄架上に置いていた。Ⅱ類B・Cは以後にもつづく。Ⅲ類では、浅目のⅢ類Dが、早期の湖北・蕪春出土銅器（6 - Ba1・Ba2）、中期の湖南・資興出土陶器（6 - Fa1）に残る。丸底と、高台を伴うものがある。中期の湖南・資興出土陶器（文献227）や湖南・南岳出土陶器（6 - Ec1）は、平底の扁平なもの（以下、Ⅲ類E）。晩期の広州漢墓出土銅器（6 - Ka1）や四川・開県出土銅器（6 - Ma1）は、前漢晩期のⅢ類Bとほぼ同巧である。これ

らのⅢ類は、地域色の強いものと推測する。以後はⅢ類Bのみ残る。

片手鍋Ⅰ類の系統をひくものに、晩期の四川・綿陽出土銅器（文献387）や四川・開県出土銅器（6-Ma4）がある。熨斗の可能性もあるが、把手が口縁でなく胴部につくことや、綿陽例のように環状把手ももつ点で、鍋とした。三国時代には片手鍋はすたれてしまう。

三脚鍋は後漢になると平底から丸底になる。口縁下がややくびれるのも特徴（以下、Ⅱ類）。すべて陶器である。132年頃の河南・襄城例（6-Gb4）が初現。152年の河南・洛陽例（文献265）、晩期の河南・洛陽例（6-Ja4）も同巧。三国時代にも残る。なお、類似した器形で浅目のものは、なかに炭の入っていた例もあり、爐として後に触れる。

釜 前漢からのⅡ・Ⅲ類が残る。いずれも銅器で、Ⅱ・Ⅲ類は前期や中期の湖北・宜昌例（6-Bc3・Fc3）、Ⅲ類は晩期の四川・開県出土例（6-Ma2）などである。Ⅲ類は西晋にも中国南半部では残る。

釜・三脚釜 釜は、球胴釜Ⅱ類B、長胴釜Ⅰ類BとⅡ類B及びⅢ類が残る。球胴釜Ⅱ類Bは、106年頃の山東・章丘出土銅器（6-Ga2）、晩期の河南・洛陽出土銅器（6-Ja2）など。長胴釜Ⅰ類Bは晩期頃の陝西・漢中出土銅器（6-Ib3）や四川・開県出土銅器（6-Ma5）、Ⅱ類Bは早期の湖北・蕪春出土銅器（6-Ba4）、晩期の四川・綿陽出土銅器（6-Ic2）Ⅲ類は早・中期の青海・上孫家寨出土銅器（文献26）、晩期の河南・鞏県出土銅器（6-Mb3）などである。長胴釜Ⅰ類Bを除いて、他は以後も残る。

三脚釜は、67年の江蘇・邗江出土銅器（6-Bb5）や晩期と推定する山東・寿光出土銅器（6-Jc3）がある。新代のものとは大差ない。以後は途絶える。

甑 前漢からのⅡ類C・Dが残る。Ⅱ類Cは晩期の河南・洛陽出土銅器（6-Ja2）、Ⅱ類Dは早期の湖北・蕪春出土銅器（6-Ba4）、晩期と推定する河南・鞏県出土銅器（6-Mb2）である。晩期と推定する四川・開県出土銅器（6-Ma5）は丈が高く、底に小円孔を穿つなど、地域色を示す（以下、Ⅲ類）。中期の湖南・大庸出土陶器（文献168）もほぼ同巧。中期の湖南・資興出土陶器（6-Fa5）は円筒形で、底に小円孔を穿つ（以下、Ⅳ類）。後期の広州漢墓出土銅器（6-Ka3）も同巧。これらも中国南半部の地域色といえる。

鼎・鍑 鼎は有蓋鼎Ⅱ類のみが残る。銅器は早期の湖北例（6-Ba6）、後期の広州漢墓例（6-Ka4）、陶器は中期の湖北・宜昌例（6-Fc6）などであるが、例は激減する。以後はすたれるが、東晋代にはミニチュア（水滴か）が、北齊・隋代には鼎形爐として登場する。

鍑は中国北半部で存続。秦～前漢のⅠⅠ類Aの系統をひくのは、後漢晩期の河南・鞏県出土銅器（6-Mb4）、肩が張り、丈も低めとなる（以下、Ⅰ類B）。以後にもつづく。後漢初とみる内蒙古出土鉄器（6-Ac1）は肩が張り、口縁が立ち上がる初出例（以下、Ⅲ類）。北齊に類例がある。Ⅱ類は、後漢代の格好の例をしらないが、北周到類例がある。

鍑尊・温酒樽 鍑尊は、中国南半部では、前漢からのⅡ・Ⅲ類が出土。Ⅱ類はいずれも陶器だが、96年の広東・仏山例（文献520）、晩期の広東・封開例（文献473）などがある。Ⅱ類に棒状把手をつけたⅢ類は、早期の湖北・蕪春出土銅器（6-Ba7）や湖南・資興出土陶器（6-Aa2）、中期頃の広西・合浦出土陶器（6-Db4）、晩期の広東・広州漢墓出土銅器（文献4）などがある。以後は途絶える。中国北半部の出土例は知らないが、2世紀後半頃とみる山東・諸城の画像石（第3図4）には、宴席に、既述した温酒樽と、鍑尊らしき器が1対で描

かれており、存在していた可能性が高い。この資料では、二器とも中に勺をいれ、三脚盤でうけている。温酒樽と対になる鍬尊は羹などを温めたのであろう。

温酒樽（銅製）は前漢代のⅠ・Ⅱ類が存続する。Ⅰ類は48年の河北・邯鄲例（文献521）、中期頃の広西・合浦例（6-Md5）、晩期の広州漢墓例（文献4）など。Ⅱ類は晩期の広州漢墓例（6-Ka5）など。三脚盤を伴うのが基本。以後は途絶える。

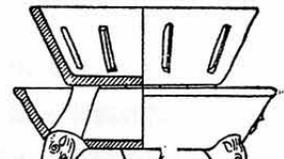
鍬斗 後漢に入って登場する新器種で、浅い三脚鍋に長い把手を1本つけたもの。67年の江蘇・邗江出土鉄器（6-Cc3）が初現例のようである。口縁が斜めに大きく立ち上がるのが特徴（以下、Ⅰ類A）。把手が龍頭形でなく棒状なのも特徴。三国時代初にも残る。鍬斗は三国時代から盛行し、把手も龍頭形が主流となる。

d 雑器（付図6）

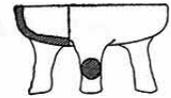
熨斗 いずれも銅器。前漢晩期に登場するⅡ類Aは、67年の江蘇例（6-Bb8）。106年頃の山東・章丘例（6-Ga5）、晩期の河南・偃師例（6-Mc7）や河南・鞏県例（6-Mb6）は柄の基部に補強の突起をつくるもの（以下、Ⅱ類B）。晩期の河南・洛陽例（6-Ja6）は柄が龍頭形になる（以下、Ⅲ類）。106年頃の山東・章丘例（6-Ga6）は、柄が龍頭形で、基部にも補強のための突帯をつけた初出例（以下、Ⅳ類）。同巧品は、晩期と推定する山東・寿光例（6-Jc7）。Ⅱ～Ⅳ類とも以後につづく。

爐 円爐のうち透かしのある内爐は、67年の江蘇・邗江出土陶器（第18図1）が最終例。この下盤は三脚盤。同巧品は中期の湖南・資興出土陶器（第18図2）。晩期の洛陽出土鉄器（第18図3）は環耳をもつ。これらも下盤であろう。後漢晩期の内蒙古出土陶器（第18図4）は、口縁が外反するが、底が脚に沿ってわかれるものである。爐本体であろう（以下、爐Ⅰ類）。晩期と推定する山東・寿光出土銅器（6-Jc5）は、同時代の三脚鍋に似るが浅目であり、三国時代から盛行する初出現になる（以下、爐Ⅱ類A）。

燈 豆燈のⅠ類は、後漢早期の安徽・定遠出土陶器（6-Ad3）のように、脚が太く、皿は小さくなる（以下、Ⅰ類B）。Ⅱ類の系譜をひくものは、晩期の内蒙古出土陶器（6-Is8）に残る。中期には、Ⅱ類の豆燈と下盤を一体に作ったもの（以下、Ⅲ類）が湖南・大庸出土陶器（6-Fb7）などにある。他方、後漢に入ると、Ⅱ類の脚部が高くなったものが登場する。晩期の内蒙古出土陶器（6-Ka6）など。杯口縁が外反し、脚部が裾で大きく開くのが特徴（以下、Ⅳ類A）。盞燈は、晩期の洛陽出土鉄器（6-Ja9）である。口径約7cmで、外底に柱状突起がある。盞燈台は不明だが、Ⅱ類か次述するⅣ類になろう。Ⅳ類は、晩期の四川・綿陽出土陶器（6-Lc3）。脚は柱状で高くなる。



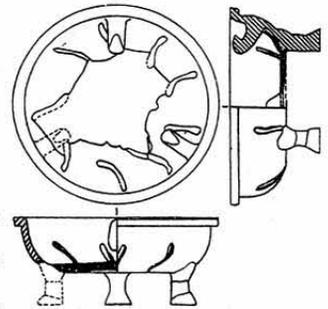
1 江蘇・邗江出土陶爐
（後漢67年 文献339）



2 湖南・資興出土陶爐
（後漢中期 文献227）



3 河南・洛陽出土鉄爐
（後漢晩期 文献267）



4 内蒙古出土陶爐
（後漢晩期 文献30）

第18図 後漢の爐

1・4 1:8

2・3 1:6

3 三国時代から隋代における変遷

i 三国時代～五胡十六国時代・東晋

a 供膳具・水器（付図4）

飲器 高足杯Ⅰ類は三国時代とする河南・洛陽出土玉器（文献47）がある。北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土ガラス製品（4-X₂）は脚部の破片で詳細不明。馮素沸墓からは角杯状のガラス製品（4-X₉）も出土。注器とするが角杯の一種であろう。

把手付杯Ⅰ類Bは、西晋の287年の浙江・常山出土陶器（文献110）に残るが、稀な例。以後はすたれる。把手付杯Ⅲは、前涼（301～376年）とみる新疆出土木製品（4-S_{c1}）、西晋273年の湖北・老河口出土陶器（文献184）にあるが、類例は乏しい。

新器形は、北燕415年の馮素沸墓出土ガラス器（4-X₁）。丸底風の文が高い杯で、口縁がわずかに反る（以下、筒状杯Ⅱ類）。類例は東晋322年頃の南京・象山M7出土ガラス器（文献314）。これに高足をつけたものが、北魏5世紀後半に入ると登場するようになる。

耳杯は、漢代と異なって、口縁が長軸方向で反るようになる（以下、Ⅲ類）。三国時代晩期の江蘇・南京出土銅器（4-O_{b1}）、西晋晩期の河南・洛陽出土陶器（文献447）、東晋早期の南京出土銅器や瓷器（4-U_{c1}）、東晋367年の南京・象山M8出土瓷器（4-V_{d1}）、東晋中・晩期の江蘇・江寧出土瓷器（文献189）などである。三国時代末の南京出土陶耳杯は、陶盤上に2個置かれ、その1個に陶勺（散蓮華）が入っていた（文献325）。だが、耳杯が舟形に反ることは、盤兼用から、飲酒専用になったことを示そう。

曲長杯は、新疆の壁画（第8図1）で見ると、五胡十六国時代の4世紀（前秦・後涼）に出現しているが、出土品は知られていないようである。壁画では両手でもっており、かなり大きいことがわかる。

杯・碗・鉢 杯は、後漢には類例の少なかった浅目の平底杯Ⅲ類が盛行する。ほとんどが瓷器で、代表例をあげる。三国時代249年の安徽・朱然墓例（4-N_{b4}）、西晋288年の安徽・和県例（4-P_{b1}）、294年の江蘇・句容例（4-Q₂）、299年の浙江・奉化例（文献204）、東晋322年頃の南京・象山M7墓例（文献314）、前燕4世紀前半頃の遼寧・朝陽釉陶例（4-T_{b2}）などである。東晋335年頃の湖南・長沙例（文献206）や前燕4世紀前半頃の朝陽出土例（4-T_{b3}）は、体部が直立気味となり、高台がつく（以下、高台付杯Ⅲ類）。東晋早期の南京・富貴山出土銀器（4-U_{c3}）、357年の南京・呂家山出土瓷器（4-V_{b4}）、東晋代の江蘇・揚州出土銅器（4-V_{f5}）、北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土鍍金銅器（4-X₅）もほぼ同巧。馮素沸例は、後述するように、鍍金銅製提梁壺と一組で、温めた酒を杯で飲んだと考えている。平底杯Ⅲ類から高台付杯Ⅲ類への変化は、4世紀前半頃といえよう。

東晋357年の南京・呂家山出土瓷器（4-V_{b3}）は、体部が丸味をもつ高めの新器形であるが、高さが口径の半分に達しない（以下、高台付杯Ⅳ類A）。東晋晩期の江蘇・鎮江出土瓷器（4-W_{a4}）もほぼ同巧。南北朝に盛行することになる。

碗のうち、高台付碗はⅠ・Ⅱ類の系統が存続する。Ⅰ類は、北燕415年の遼寧・馮素沸墓出

土ガラス器（4-X7）などで、後漢晩期のⅠ類Bに比して浅目となる（以下、Ⅰ類C）。Ⅱ類は、三国時代末頃の南京出土銅器（4-O_{b3}）で、後漢後期のⅡ類Dとほぼ同巧。三国時代末頃の他の南京出土銅器（4-O_{b4}）は口縁が外折する。洗とみているが、他に洗とすべきものが伴出しており、碗Ⅱ類の変種とみる（以下、Ⅱ類E）。東晋早期の広州出土銅器（4-U_{d6}）も同巧。ただし、以後にはつづかない。西晋294年の江蘇・句容出土瓷器（4-Q₃）、東晋初の江西・南昌出土瓷器（4-S_{a5}）、335年頃の湖南・長沙出土瓷器（4-U_{a5}）、350年の南京・温嶠墓出土瓷器（文献463）、357年の南京・呂家山出土瓷器（4-V_{b6}）は、高台付杯Ⅲ類大きくしたもの（以下、高台付碗Ⅲ類）。一方、東晋晩期には、体部が内弯気味で、深目の高台付碗が出現する。既述した杯Ⅳ類と対応するものである（以下、高台付碗Ⅳ類A）。東晋晩期の江蘇・鎮江出土瓷器（4-W_{a8}）で、南北朝から盛行する。銅器は東晋340年代の南京・興之夫婦墓出土品（4-U_{b4}）。これには外被せの蓋が伴う。

丸底碗は、浅目のⅡ類の系統が東晋晩期頃の南京・富貴山出土瓷器（4-W_{b6}）にある程度。平底碗は、杯Ⅲ類とほぼ同形だが、杯Ⅲ類が口径10cm前後で、これより大きく口径15cm前後のものが各所で伴出していることから碗とする（以下、Ⅲ類）。いずれも瓷器で、代表例をあげる。三国時代238年頃の江西・南昌例（4-N_{a5}）、261年の湖北・鄂州例（文献180）、297年の江蘇・揚州例（文献230）、298年の江蘇・衢県例（文献86）、東晋初の江西・南昌出土例（4-S_{a4}）、東晋早期の南京・富貴山例（文献188）、357年の南京例（文献443）など。以後は高台付碗Ⅲ類に主流が移ることになる。三国時代初の江西・南昌出土銅器（文献108）や西晋晩期と推定する南京出土銅器（文献282）は、平底碗Ⅱ類のようだが、長い銅勺（散蓮華）が入っており、羹あるいは五穀を食したと推定できる。前涼（301～376年）とみる新疆出土木製品（文献441）は平底碗Ⅲ類であり、これには鼓形の木製器台が伴出。

鉢のうち高台付鉢は、後漢晩期に登場するⅡ類Dの系統が、三国時代末の南京出土銅器（4-O_{b5}）、東晋早期頃の江西・南昌出土銅器（4-S_{a6}）にあり、口縁での外反が強めになる（以下、Ⅱ類E）。東晋4世紀前半の江蘇・宜興出土銅器（4-S_{b7}）は口縁が外折する（以下、Ⅱ類F）。蓋を伴う。銅鏡など入れていたが、本来は鉢であったと推測する。平底鉢の主流になるのは、碗Ⅲ類を大きくしたようなもので、丸味をもった体部がほぼ直に立ち上がるのが特徴である（以下、Ⅲ類）。ほとんどが瓷器である。三国時代238年頃の江西・南昌例（4-N_{a6}）、西晋297年の江蘇・揚州例（文献230）、298年の浙江・衢県例（文献86）、東晋早期の南京・富貴山例（4-U_{c7}）などがある。西晋294年の江蘇・句容例（4-Q₄）は高台付となる（以下、高台付鉢Ⅲ類）。

西晋晩期には、平底で、体部がやや内弯した小型品が出現する（以下、Ⅳ類）。いずれも瓷器だが、体部に醬斑を施すものがあり、ガラス器の模倣と推測する。西晋316年の広州出土例（文献62）が初現で、東晋初頃の江西・南昌例（4-S_{a8}）、東晋早期の南京・富貴山例（4-U_{c10}）、東晋晩期の江蘇・揚州例（4-W_{b11}）などがある。

丸底鉢の好例はないが、球胴で大口のガラス器がある。東晋早期の南京・富貴山例（4-U_{c8}）と北燕415年の遼寧・馮素沸墓例（4-X₁₀）。南京例は口縁が外反するもの。罐と報告しているが、口径8.5cm、高さ7.8cmと小型であり、特殊な丸底鉢（以下、Ⅳ類A）として扱う。同巧品は、他の南京の東晋早期墓（文献317・454）からも出土している。馮素沸墓例は鉢と報

告。口径9.5cm、高さ8.7cm。口縁が肥厚し、わずかに外反する（以下、Ⅳ類B）。

鉄鉢形・盃 鉄鉢形は後漢中期に登場したⅠ類がつづく。西晋288年の安徽・和県出土銅器（4-Pb5）、294年の江蘇・句容出土瓷器（文献90）、東晋335年頃の湖南・長沙出土瓷器（4-Ua9）、後燕395年の遼寧・朝陽出土陶器（文献523）などである。いずれも蓋は伴わないようである。

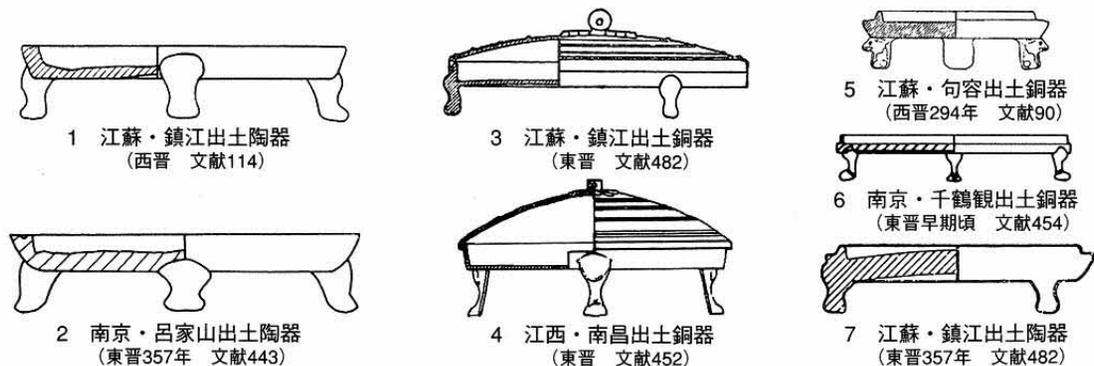
盃は、後漢早期に登場したⅡ類が存続する。西晋299年の江蘇・揚州出土瓷器（文献230）、東晋353年の浙江・黄岩出土瓷器（文献213）などである。265年の南京・幕府山出土陶器（文献479）や西晋285年の南京出土瓷器（文献154）は高台がつく。前者は蓋が伴い、後者はミニチュアながら、なかには瓷勺（散蓮華）が入っていた。

魁 三国時代の例は知らない。五胡十六国時代や東晋には、後漢晩期に登場するⅡ類Bがつづき、Ⅱ類Aも登場する。銅器でみると、Ⅱ類Aは前燕4世紀前半の遼寧・朝陽例（4-Tb9）、後燕395年の遼寧・朝陽例（文献523）、北燕415年の遼寧・馮素沸墓例（文献316）、Ⅱ類Bは前燕324年の遼寧・錦州例（文献414）である。東晋350年の南京・温嶠墓出土瓷器（4-Va7）や東晋晩期の江蘇・鎮江出土陶器（4-Wa12）はⅡ類Bで、後者には中に陶勺（散蓮華）が入っていた。羹あるいは粥を食したことを推測させる。

盤・托・有脚盤（硯） 漢代のような大盤はなく、中盤や小盤が主となる。中盤のⅡ類は三国時代晩期の江蘇・南京出土銅器（文献461）が最終例。Ⅴ類Aは後漢から盛行し、三国時代以降も主流を占める。代表例をあげると、三国時代晩期の江蘇・南京出土銅器（4-Ob2）、西晋297年の江蘇・揚州出土陶器（文献230）、東晋350年の南京・温嶠墓出土瓷器（文献463）、東晋晩期頃の江蘇・揚州出土瓷器（4-Wc3）などがある。三国時代晩期の南京出土中盤Ⅴ類Aは、銅耳杯2個を置いた承盤だが、盤の内底に突帯はない。

小盤のⅠ類B種は、257年頃の甘肅・嘉谷関出土銅器（4-Nc1）が最終例。Ⅳ類は三国時代の甘肅・酒泉出土銅器（4-Nd2）が最終例。Ⅴ類は三国時代249年の安徽・朱然墓出土瓷器（4-Nb2）、西晋305年の江蘇・南京出土瓷器（文献462）など。Ⅵ類Aは、東晋初の広東・和平出土瓷器（文献195）、350年の南京・温嶠墓出土瓷器（文献463）。Ⅴ・Ⅵ類とも南北朝につづく。

托と判明するのは、北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土鍍金銅器（4-X5）で、鍍金銅製の高台付杯Ⅲ類が組む。小盤Ⅴ類の内底に低い突線をめぐらせて銅杯高台の承けとしている（以下、托Ⅰ類）。この種の托は、東晋早期の南京・司家山出土瓷小盤Ⅴ類（4-Uc2）、東晋367年の



第19図 西・東晋の有脚盤 1:6

南京・呂家山出土陶小盤V類(4-Vb₂)にある。

前者では盜耳杯1個(4-Uc₁)が実際にのっており、後者では伴出した高台付の盜杯Ⅲ類かⅣ類Aをのせた可能性がある。托の承けが高くなるのは、南北朝からである。

脚盤は、すでに戦国期にあり、漢代では爐や温酒樽の下盤としても用いられた。東晋の江蘇・鎮江出土銅器(第19図3)や江西・南昌出土銅器(第19図4)は、蓋を伴い、下盤ではない。前者は硯、後者は三足器とする。同巧品で古いのは298年の浙江・衢県出土銅器(文献86)。陶器では、西晋例(第19図1)や東晋357年例(第19図2)があり、ともに硯とする。底が平坦であるのが特徴(以下、Ⅰ類A)。西晋294年の江蘇・句容出土瓷器(第19図5)は口縁に蓋受けの段をつける(以下、Ⅰ類B)。西・東晋には例が多く、東晋早期頃の南京・仙鶴觀出土銅器(第19図6)や晩期頃の江蘇・江寧出土瓷器(文献189)もほぼ同巧。一方、東晋357年の江蘇・鎮江出土瓷器(第19図7)は底が中高となる(以下、Ⅱ類B)。Ⅱ類Bは大方が認めるように硯であろうが、Ⅰ類は、硯と断定するに若干の問題もある。というのは、韓国でⅠ類B系統を食膳具と考えているからである。

銅・洗 銅は浅銅と深銅が存続するが、環耳をもつ例はなくなる。浅銅Ⅰ類は三国時代294年の安徽・朱然墓出土陶器(4-Nb₇)、西晋305年の南京出土陶器(4-Rb₆)などである。深銅は前漢と大差ないⅠ類が、西晋302年頃の河南・洛陽出土陶器(文献211)や北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土銅器(文献316)にある。馮素沸墓例は、釜・甑と一組で、いずれも明器である。漢代では釜・甑・盆が組であったが、この時代には盆が消失し、銅がその機能も果たしたことになる。

洗は、深洗Ⅰ類Aが残るとともに、深洗Ⅰ類BやⅡ類と、浅洗Ⅱ類とが一組として存続する。ともに西晋初頃までは環耳が残るが、以後は消失する。底に双魚文や吉祥句を飾る例も多い。深洗Ⅰ類Aは三国時代294年の安徽・朱然墓出土瓷器(4-Nb₈)、深洗Ⅰ類Bは三国時代晩期の湖北・宜昌出土銅器(4-Ob₇)、Ⅱ類は三国時代晩期の湖北・宜昌出土銅器(4-Oc₉)などである。東晋335年頃の湖南・長沙出土瓷器(4-Ua₁₂)は、Ⅰ類Bに似るが、外縁の外折が弱い(以下、Ⅰ類C)。浅洗Ⅱ類は、銅器の例が多く、上述した三国時代245年の浙江・南陵例(文献117)、三国時代晩期の南京例(4-Ob₆)や湖北・宜昌例(4-Oc₈)、西晋273年の湖北・老河口例(4-Pa₇)、298年の浙江・衢県例(文献86)、東晋早期頃の江西・南昌例(4-Sa₁₀)や南京・富貴山例(4-Uc₁₁)、北燕415年の遼寧・馮素沸例(文献316)などがある。

他に三国時代に入ると、菓子などをいれた果盒と呼んでいる方形や円形の盤状の器が登場してくる。三国時代238年頃の江西・高榮墓出土方形漆器(文献100)、249年の安徽・朱然墓出土円形漆器(文献356)が古い例で、以後、次第に陶・瓷器の出土例が増加する。

b 貯蔵具・注器(付図5)

扁壺・瓶 扁壺は後漢の良好資料がないが、西晋295年の江蘇・呉県出土瓷器(文献475)やこれと同巧の南京出土瓷器(5-Pc₁)は、肩が張って高い高台がつく新器形(以下、Ⅳ類)。297年の江蘇・宜興出土瓷器(文献212)や東晋335年頃の湖南・長沙出土瓷器(5-Ua₁)や350年の南京・温嶠墓出土瓷器(5-Va₁)は方形を呈する新器形(以下、Ⅴ類)。Ⅴ類は中国

南半部の地域色か。以後にはつづかない。

瓶は、前漢晩期以来の長口瓶Ⅰ類が、三国時代初の江西・南昌出土銅器（5-Oa1）や西晋晩期の河南・洛陽出土陶器（5-Rc1）に残るが、以後はすたれる。南北朝以降は反口瓶が主流になる。

壺・細頸壺・提梁壺 細頸壺は、盤口のⅢ類が三国時代238年頃の江西・高栄墓出土瓷器（5-Na1）に残る。やや胴長で肩が張る（以下、Ⅲ類B）前燕4世紀前半の遼寧・朝陽出土陶器（5-Tc1）は、口縁が外反する細頸壺Ⅰ類だが、口縁が肥厚して玉縁状になるのが特徴（以下、Ⅰ類D）。Ⅰ類Dは北魏に存続する。

球胴壺は、前漢の伝統をひくⅡ類Bが、西晋代とみる甘肅・敦煌出土銅器（5-Of3）にあるが、稀な例。三国時代からは、口縁端が立ち上がったいわゆる盤口の球胴壺が出現する（以下、Ⅲ類）。いずれも瓷器で、代表例をあげると、三国時代249年の安徽・朱然墓例（5-Nb2）、三国時代晩期の南京・長崗例（5-Ob2）、西晋288年の安徽・和県例（5-Pb2）、294年の安徽・句容例（5-Q2）、東晋早期の南京・富貴山例（5-Uc2）、東晋晩期の江蘇・鎮江例（5-Wa2）など。まだ口縁の立ち上がりは弱い（以下、Ⅲ類A）。南北朝以降も残る。

長胴壺は、漢代の伝統をひくⅡ類Aが、前燕324年の遼寧・錦州出土陶器（5-Ta2）や同じ頃の遼寧・朝陽出土陶器（文献431）にある。三国時代に入ると、盤口のもものが登場してくる。ほとんどは瓷器であり、代表例をあげる。西晋298年の浙江・衢県例（文献86）、東晋早期の南京・富貴山例（5-Uc3）、372年頃の南京・象山例（5-Vd2）。いずれもやや肩が張るが、胴部の丈がそれ程高くないのが特徴（以下、Ⅲ類A）。南北朝にもつづく。一方、東晋407・416年の南京・司家山例（文献444）、東晋晩期の江蘇・鎮江例（5-Wa3）は、胴部が長くなる（以下、Ⅲ類B）。これも南北朝につづく。

提梁壺は、例が極めて少なく、北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土鍍金銅器（5-X1）ぐらいである。球胴の丸底で、口縁が大きく開く新器形である。鍍金銅杯・托と一組で、酒を温めたとみている。

唾壺 後漢晩期に出現した定型的な唾壺Ⅰ類は、三国時代238年頃の江西・南昌高栄墓出土銀器（文献100）、三国時代晩期の南京出土瓷器（5-Ob4）、西晋288年の安徽・和県出土瓷器（5-Pb4）まで残る。西晋294年の江蘇・句容出土瓷器（5-Q4）、299年の浙江・奉化出土瓷器（文献204）は、頸が長めとなるが、まだ口縁端の立ち上がり（盤口）がそれ程高くない（以下、Ⅱ類A）。東晋323年の江蘇・宜興出土瓷器（5-Sb3）は、頸が長目で、しかも口縁端の立ち上がりも高くなる（以下、Ⅱ類B）。以後は、Ⅱ類Bが主となる。Ⅱ類Bの銅器は東晋晩期頃の江蘇・江寧例（5-Ve4）。瓷器は多く、東晋366年の浙江・奉化例（文献204）、東晋早期の南京・富貴山例（5-Uc4）、350年の南京・温嶠例（文献463）、367年の南京・象山例（文献442）、や江蘇・南京例（5-Wb4）などがある。南京・富貴山例には、中央に小孔を穿った漏斗状の落とし蓋が伴う。

罐・瓮 罐は短胴罐Ⅱ・Ⅲ類、長胴罐Ⅱ類などが存続する。すべて瓷器か陶器。短胴罐のうち、肩の張るⅠ類は三国時代晩期頃の南京・長崗例（文献461）や西晋288年の安徽・和県例（文献115）で、以後も残る。球胴のⅡ類は、バラエティがあるが、三国時代249年の安徽・朱然墓例（5-Nb5）、三国時代晩期頃の南京・長崗例（文献461）、西晋293年の湖北・老河口例（5-

P a5)、前燕4世紀前半の遼寧・朝陽例(文献431)などだが、南北朝にはすたれる。下肥れのⅢ類は、三国時代261年の湖北・鄂州例(文献180)や五胡十六国時代末～北魏初の洛陽出土例(文献179)だが、以後は途絶える。他に、三国時代には、鉄鉢形Ⅰ類Aに似て、口縁が強く内弯するが、浅目で短頸のものが出現する。三国時代末頃の南京出土例(5-O d3)で、極めて短い直口の口縁がつき、口縁近くに環状把手をつけるのが特徴(以下、Ⅳ類A)。蓋や高台のつく例が三国時代末にはある(文献108・325)。西晋294年の江蘇・句容例(文献90)、西晋の4世紀初頃と推測する江蘇・宜興例(文献212)は丈がやや高くなる(以下、Ⅳ類B)。302年の安徽出土銅器(5-R a3)や東晋350年の南京・温嶠出土瓷器(5-V a3)は短頸だが、環状把手がない(以下、Ⅳ類C)。Ⅳ類も南北朝にはほぼすたれてしまう。

長胴罐もすべて瓷器か陶器。最大径が胴中位にあるⅡ類は、三国時代249年の安徽・朱然墓例(文献356)、東晋335年頃の湖南・長沙例(文献206)、前燕4世紀前半の遼寧・朝陽例(文献431)、東晋353年の浙江・黄岩例(文献213)、五胡十六国時代末～北魏初の洛陽出土例(文献179)などである。

瓮もすべて瓷器か陶器で、バラエティがある。代表例は、西晋288年の安徽・和県例(5-P a6)、294年の江蘇・句容例(5-Q 5)、東晋335年頃の湖南・長沙例(5-U a6)、東晋晩期の江蘇・鎮江例(文献482)、五胡十六国時代末～北魏初の洛陽例(文献179)など。

大口罐も、瓷器か陶器で、三国時代から東晋までである。

鏝壺・水注 鏝壺は、Ⅳ類が三国時代249年の安徽・朱然墓出土銅器(5-N b3)、東晋晩期と推定する湖北・漢陽出土銅器(5-V c5)がある程度である。後者は西晋以前とするが、有柄注壺Ⅰ類Aを伴出し、東晋晩期に比定する。水注の好例はない。おそらく注壺に主流が移ったのであろう。

有柄壺・有柄注壺・注壺 中国では、一般に盤口壺の肩に鶏形の注口をつけたものを、天鶏壺あるいは鶏首壺と呼んでいるが、鶏形でないものを含むことから注壺と呼ぶ。肩と口縁を結ぶ、大きな把手をもつのが通例(以下、有柄)。瓶などに注口や把手をつけたものも一括する。ほとんどは瓷器である。これらのうちで、最も古いのは、把手のない注壺。三国時代晩期頃の南京例で、直口の短頸罐に短い注口をつける(以下、Ⅰ類)。注口は、うち1例が鶏形(5-O b5)だが、他が筒状。ともに初現例である。東晋305年の南京例(文献462)、335年頃の湖南・長沙例(文献206)、東晋早期の南京・富貴山例(5-U c5)は、盤口の短胴壺Ⅲ類に短い鶏形注口をつけたもの(以下、Ⅲ類)で、いわゆる鶏首壺系注壺の最終例となる。有柄注壺のうち、前燕4世紀前半の遼寧・朝陽出土陶器(5-T c4)は、長胴壺Ⅱ類Aの口縁端を片口としたもの(以下、Ⅱ類)の初現例だが、類例は少ない。

有柄注壺はほとんどが瓷器。東晋367年の南京・象山例(5-V d6)が、盤口の短胴壺にやや長目の鶏形注口と把手をつけたもの(以下、Ⅲ類A)の初現例になる。類例は、5世紀初の南京・司家山例(文献444)、東晋晩期の江蘇・江寧例(文献189)や江蘇・鎮江例(5-W a6)。東晋晩期の他の江蘇・鎮江例(5-W a7)は肩の張る初出例(以下、Ⅲ類B)。前凉4世紀前半頃の新疆出土陶器(5-S c5)は、短胴壺に片口と把手をつけた、有柄注壺の初現例。球胴で丈が低い(以下、Ⅳ類A)。この手の有柄注壺は、南北朝から中国本土に及ぶことになる。他に、東晋晩期の江蘇・鎮江出土瓷器(5-W a5)のように、直口壺を片口とした有柄注壺も

ある（以下、Ⅳ類B）。

虎子 虎子は、体部を虎形とし、上に大きな把手をつけた典型例が西晋275年の南京出土瓷器（文献479）にある（以下、Ⅱ類）。東晋初の広東・和平出土瓷器（文献195）、早期の南京・富貴山出土瓷器（第20図5）も同巧。南京・富貴山では虎の体毛を表現する銅器（第20図4）も出土。似た銅器は北燕415年の遼寧・馮素沸墓（文献316）でも出土。後漢に登場する半球状の虎子（第20図1）は、三国時代初の江西・南昌出土瓷器にある（文献100）。上に把手がつくのは新要素である（以下、Ⅰ類B）。西晋306年の福建・松政出土瓷器（文献526）や東晋中・晩期の江蘇・鎮江出土瓷器（第20図2・3）もほぼ同巧。

他に、特殊なものとして、後漢に登場した二重口縁罐が三国時代238年頃の江西・高栄墓出土瓷器（5-Na4）、前漢代から続く倉は三国時代晩期の南京出土瓷器（文献461）、西晋299年の江蘇・揚州出土瓷器（文献230）に残り、以後も細々とつづく。

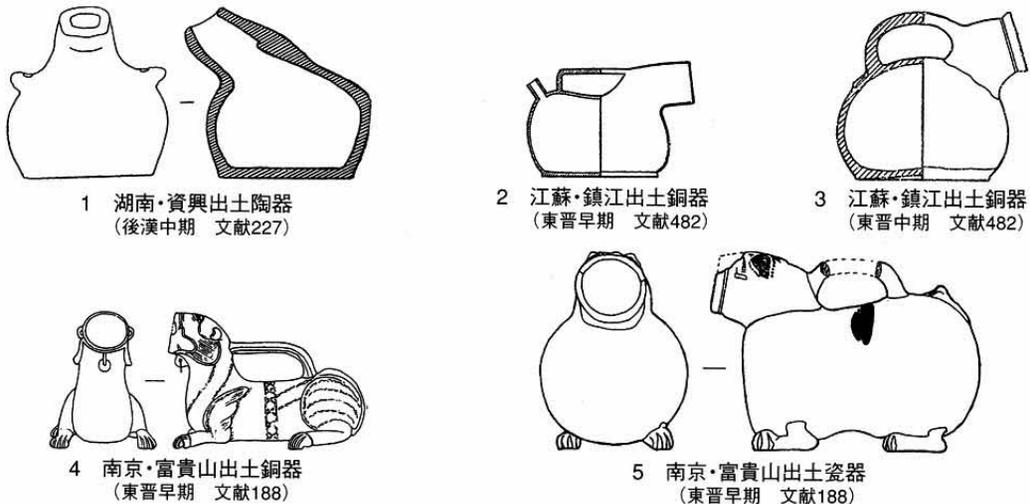
c 煮沸具（付図6）

鍋・三脚鍋・釜 鍋は浅い半球状のⅠ類Dと、口縁下でくびれる深目のⅡ類B・Cがつづく。Ⅰ類Dは、西晋273年の湖北・老河口出土銅器（6-Pa1）。以後は唐代まで出土例がない。Ⅱ類Bは三国時代249年の安徽・朱然墓出土瓷器（6-Nb1）、三国時代晩期の南京・長崗出土陶器（6-Ob2）、東晋初の広東・和平出土銅器（文献195）、Ⅱ類Cは三国時代晩期の湖北・宜昌出土銅器（6-Occ4）。Ⅱ類B・Cは中国南半部の特色で、南北朝にもつづく。

三脚鍋は、後漢晩期に登場したⅡ類が、三国時代の甘肅・酒泉出土銅器（6-Nd3）に残る。三脚鍋の最終例。他の類例があるが、爐である可能性が高い。

釜は、Ⅲ類のみが、三国時代晩期の湖北・宜昌出土銅器（6-Occ3）に残るが、以後は途絶えてしまう。

釜・三脚釜・甑 釜・甑は、副葬品が少なく、しかも明器が主となるため、実態は明瞭ではない。三国時代の甘肅・酒泉出土銅器（6-Nd2）や西晋晩期頃の河南・洛陽出土銅器（6-Rc1）は、球胴釜Ⅱ類B。ともに甑はⅡ類Cのようである。典型的な長胴釜Ⅱ類Bの例は知らないが、南北朝にも存続している。無頸に近いⅢ類は、西晋288年の安徽・和県出土陶器（文献



第20図 後漢～東晋の虎子 1 : 8

3 三国時代から隋代における変遷

115)、北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土銅器(文献316)もほぼ同巧で、これには口縁が外折してのびる銅甌(以下、Ⅲ類)を伴う。馮素沸墓出土銅器(6-X1)や前燕初3世紀後半の遼寧・北票出土銅器(6-Td1)は、やや浅目の長胴釜Ⅲ類に提梁を伴う。中国北辺部の地域色を示す。

三脚釜は前燕324年の遼寧・錦州出土銅器(6-Ta3)。最終例で、明器。伴出した甌はⅢ類。東晋早期頃の南京・仙鶴觀出土銀器(文献454)は、有蓋鼎Ⅱ類のミニチュア。復古品として、水滴などに利用されたのかもしれない。

鍍 中国北辺部の地域色を示すもの。前燕4世紀前半の遼寧出土銅器(6-Tb2)は、前漢中期頃のⅡ類より、身が深くなったもの(以下、Ⅳ類)。底に煤が付着。北魏早期の内蒙古出土銅器(文献490)もほぼ同巧。北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土銅器(6-X2)も同巧で、ともに提梁がある。馮素沸墓出土銅器では、後漢晩期からのⅠ類Bも出土している(文献316)。Ⅳ類は以後もつづく。

温酒樽 西晋297年の江蘇・周処墓出土陶器(文献212)が唯一例である。陶勺(散蓮華)を伴う。以後は途絶する。

鍬斗 後漢に出現するⅠ類Aは、三国時代249年の安徽・朱然墓出土陶器(6-Nb4)が最終例。三国時代晩期頃の南京・長崗出土銅器(6-Ob5)、3世紀末頃と考える浙江・安吉出土銅器(文献413)や南京出土銅器(6-Pc2)は、体部がⅠ類Aだが、把手は曲折する龍頭となる(以下、Ⅰ類B)。西晋295年の江蘇・呉県出土銅器(文献475)は、把手が曲折する龍頭だが、体部は口縁が外折する鍋Ⅰ類であるのが特徴(以下、Ⅱ類)で、以後の主流となる。Ⅱ類の類例は、いずれも銅器で、西晋308年の南京例(文献72)、前燕4世紀前半の遼寧・朝陽例(6-Tb4)、東晋早期の南京・富貴山例(6-Ua3)などである。北燕415年の遼寧・馮素沸墓例(文献316)や北魏初の山西・大同出土例(文献329)は、口縁が二段になる新器形(以下、Ⅲ類)。ともに口縁と把手の間に補強材を加えたもので、中国北辺部の地域色か(以下、Ⅲ類A)。前燕初とする遼寧・北票出土例(6-Td5)も同巧で、4世紀後半~5世紀初になろう。遼寧・朝陽例は底に煤が付着する。大同例は銅勺を伴い、三国時代末頃の南京出土瓷器(文献325)は中に瓷勺が入っていたことから、羹などを煮たり温めたりしたことが知れる。

d 雑器(付図6)

熨斗 いずれも銅器。前漢晩期からつづくⅡ類Aは、三国時代249年の安徽・朱然墓例(6-Nb6)、三国時代早期の安徽・南陵例(文献117)。西晋293年の湖北・老河口例(文献184)、東晋早期の江西・南昌例(6-Sa7)や南京・富貴山例(6-Uc6)、北燕415年の遼寧・馮素沸墓例(文献316)はⅡ類B。後漢中期に登場するⅢ類は、三国時代晩期の南京・長崗例(6-Ob7)、西晋288年の安徽・和県例(6-Pb4)。

爐 この時期の円爐は、後漢晩期に登場したⅡ類Aが盛行する。鍋Ⅱ類とは、浅いことから区別できる。環耳のあるものとないものがある。銅器が多く、体部に多数の細突線をめぐらすのが特徴。三国時代238年頃の广西・高榮墓例(文献100)、西晋249年の安徽・朱然墓例(6-Nb5)、288年の安徽・和県例(6-Pb3)、東晋初頃の江西・南昌例(6-Sa6)につづく。鉄器は3世紀末頃と推測する南京例(文献63)や東晋335年頃の湖南・長沙例(6-Ua5)のよ

うに、体部は素面である（以下、Ⅱ類B）。前者にはなかに炭が残っていた。ほとんどが鏝斗を伴出している。実際に、三国時代末頃の江西・南昌出土瓷器（文献108）や4世紀初頃の江蘇・宜興出土瓷器（文献212）では、爐Ⅱ類のなかに、勺入りの鏝斗を入れており、これらが一組で用いられたことを示している。

燈 豆燈は、Ⅰ類Bが西晋早期の北京出土陶器（文献527）や晩期の洛陽出土陶器（6-Pd7）に残り、Ⅲ類Aが東晋350年の南京・温嶠墓出土瓷器（文献463）に残る。

盞燈は、Ⅰ類の系譜をひく銅器（6-Oes）が西晋早期末頃の敦煌から出土。環状把手は1個である（以下、Ⅰ類B）。同巧の銅器（6-Ub7）は、東晋341・348年の南京・興之夫婦墓から出土。把手は折りたためるようになっている。ともに燈蓋とする。Ⅰ類は以後の例を知らないが、連枝燈は北魏524年（文献76）にも存続する。Ⅱ類は西晋晩期の洛陽・谷水出土陶器（6-Pd5・Pd6）まで残る。ここでは燈蓋6個に対して、中空柱の燈台は2個。他に台座に穴をあけたものが一個出土。中空柱をもつものを、空心盤と呼んでいるが、中空柱に蓋の突起が入ること、両者が近接して出土していることから一組とみた。

なお、蠟燭用の針をもつⅠ類の確実な例は、西晋代の江蘇・徐州出土鉄器（文献528）や五胡十六国時代末～北魏初の洛陽出土鉄器（文献179）であり、遅くとも隋代には蠟燭を燈台の中空柱に差し込むⅡ類に主流が移ったと推定される。ただし、蠟燭用Ⅰ類は、北宋代以降に新たな展開をみせる。

ii. 南北朝時代・隋

a 供膳具・水器（付図7）

飲器 高足杯は新しい器形が各種登場する。Ⅱ～Ⅴ類に分類する。Ⅱ・Ⅲ類は北魏5世紀後半頃の山西・大同出土鍍金銅器（7-Cb1・Cb2・Cb3）。前二者（7-Cb1）は杯身が細目で、体部が大きく反るのが特徴（以下、Ⅱ類）。脚はまだ低いが、底部との境に段があるのも特徴。後者二者（7-Cb1・Cb3）は、杯身がやや浅目で、丸味をもった体部が口縁下でくびれたのち外反するのが特徴（以下、Ⅲ類）。うち1点（7-Cb2）は蠟付けした脚が脱落しているが、他の1点の脚は高目で中程に太目の突帯をもつのが特徴。器面を飾る人物像や文様から、東ローマ帝国あたりで製作されたと推測できる。類例は少ない。Ⅳ類は杯身がやや深目な半球状のもの。南齊5世紀末頃と推測する福建・福州出土瓷器（文献279）は、体部がほぼ直、脚はやや低目で、中程に突帯もない（以下、Ⅳ類A）。北魏504年の大同出土銀器（文献346）は、破砕しているが、Ⅳ類Aの可能性が高い。隋代の河南・安陽出土瓷器（文献224）は、杯身が内弯し、脚は高目で中程に太目の突帯をもつ（以下、Ⅳ類B）。杯身のほぼ全体に多数の小乳を貼り付けているのは、ガラス器の模倣と推測する。Ⅴ類は杯身がやや浅目で、丸味をもった体部が口縁端でわずかに外反するもの。初現は、5世紀後半頃の大同出土鍍金銅器（文献42）にある。その系譜をひくのは、隋592年の陝西・西安出土ガラス器（文献2）や597年の山西・太原出土瓷器（7-Sa1）、隋代の湖南・長沙出土銅器（文献215）。いずれも脚は高目だが、中程に突帯はない（以下、Ⅴ類A）。隋頃の江西・壮族自治区出土銅器（7-V1）は杯の底が平らで、地域色を示す（以下、Ⅴ類D）。隋608年の西安・李静訓墓出土金器（7-Sc1）は、脚

は高く、脚の中程と杯身の口縁寄りに各1本の細い突線をめぐらすのが特徴（以下、V類B）。李静訓墓出土銀器は、脚の中程と、脚と杯身の境に太目の突帯をめぐらすのが特徴（以下、V類C）。V類CかⅢ類が唐代に盛行する高足杯Ⅶ類の祖型と推測する。なお、隋584年の山東・徐敏行基壁画（第10図1）では、主人が高足杯らしきものを片手にもつ。

高足杯には、皿状の杯身に低目の高足がついたものも登場する（以下、盤状高足杯）。高台は小さく、盤とするには不安定であり、杯とみる見解に従う。北魏529年の甘肅・長家川出土銀器（文献322）は、杯身が浅い半球状であるのが特徴。脚は八字状で脚端が折れる。東魏544年の河北・李希宗出土銀器（7-Kd6）は、杯身の体部に流水文、底に蓮華文を打ち出しているのが特徴。

曲長杯は、確実な例がないが、北魏5世紀後半頃の大同出土鍍金銅器（7-Cb5）が小さくて低目の高台がつくもの。高さは4.5cm、長径23.8cm、短径14.5cmと大きい。盤（花形長盤）の可能性もあるが、隋代の壁画（第10図2・3）や既述した4世紀の壁画（第8図1）でみるとかなり大きく、一応杯とみておく。

把手付杯は良好な出土例がないが、劉宋536年の南京・蕭象墓出土陶器（7-Jc1）はⅡ類C。片口がつくようで、小形の注器になるが、この器形が中国南半では残ったと推測される。特異なのは壺型の器に1個の把手をつけた青海・上孫家寨出土鍍金銀器（7-Hd4）。口径7cm、高さ15.8cm。西域のクルド人の絵画資料（文献421）をみると、飲器としていたことがわかる。直口で平底なのが特徴（以下、把手付壺形杯Ⅰ類）。時代は、青海省例の後漢晩期～晋代としているが、伴出した唾壺から6世紀中頃に比定すべきと考える。北周566年・584年の河北・崔昂出土銅器（文献320）は、口縁が外反する平底小形品（以下、把手付壺形杯Ⅱ類）である。類例は少ない。

角杯の出土例は知らないが、北齊のソグド人墓壁画（文献390）をみると、角杯は少なくとも一部では存続していたことが知れる。

耳杯は三国時代晩期に登場したⅢ類が存続する。北魏485年頃の寧夏・固原出土銀器（7-Cc4）や504年の山西・大同出土銀器（文献346）。南朝後期の南京・西善橋墓壁画（第9図5）では、竹林の七賢が耳杯Ⅲ類で酒を飲んでいる。類例は極めて少なく、限られた場での使用になったと推測できる。

杯・碗・鉢 杯は、平底のⅢ類が劉宋426年の福建・政和出土瓷器（7-Bc1）、北魏528年の洛陽元邵墓出土陶器（文献78）や梁527年頃の湖南・邵陽出土瓷器（文献453）などにあるが、例は極めて少ない。燈盞かもしれない。北魏481年の河北・定県石函出土銅器（7- Ca6）や南齊496年の江西・青江山出土銅器（7- Db3）は、Ⅲ類に似るが、体部が直立気味。口径10cmほどで、前者は器表に唐草文を飾る丸底（以下、丸底杯Ⅳ類）、後者は器表に多数の沈線をめぐらす平底（以下、平底杯Ⅳ類）。低い高台の付くⅢ類は、南齊496・497年の江西出土瓷器（7- Db1・Ea1）、南齊～梁とみる四川出土瓷器（7- Gb1）、北魏508年の河南・偃師出土陶器（7- Hc1）、北魏516年の河南・偃師出土陶器（文献147）、521年の河北・封氏墓出土ガラス器（文献51）、北周の陝西・咸陽出土ガラス器（文献31）や隋代の湖北・武漢出土瓷器（7- Ua1）にある。咸陽例は器表に切子を飾る。

主流となるのは、東晋に登場した丈の高い高台付杯Ⅳ類Aと、高さが口径の半分かそれをや

や超える高台付杯Ⅳ類Bで、共伴する場合も多い。ともに例が多く代表的なものをあげる。Ⅳ類Aは銅器が、南齊の福建・閩侯例（文献68）などにある。陶・瓷器だと、劉宋435年の広東・新興出土瓷器（7-A b₁・A b₁₂）、462年の福建・政和出土瓷器（7-B b₂）、南齊496年の江西・青江山出土瓷器（7-E c₃）、北魏508年の大同・元淑墓出土滑石製品（7-H b₂）、524年の洛陽出土瓷器（文献391）など。金属器では、梁548年の江蘇・鎮江出土銅器（文献127）、隋608年の西安・李靜訓墓出土銀器（文献5）がⅣ類B。河南・洛陽の白馬寺近くで出土した北魏の黒釉陶は、杯Ⅳ類Bで、大小の黄釉斑文を各2列めぐらすことから、ガラス器の倣製とみている（文献25）。他にⅣ類Bは、南齊493年の山東・臨淄瓷器（文献121）、南齊の広西・恭城出土瓷器（7-G a₂）、北魏516年の宣武帝景陵出土釉陶（文献166）、524年の洛陽出土陶器（7-I c₁）、梁532年頃の南京出土陶器（文献346）、536年の南京・蕭象墓出土陶器（7-J c₃）、553年の河北・元良墓出土瓷器（文献182）、隋597年の太原・斛律徽墓出土瓷器（文献399）などがある。劉宋430年の江西・贛県出土銅器（7-A c₄）は鉢とするが、口径約8cmの小型品。口縁に段がつくのは中国では例がない。日本や韓国の例からすると、蓋杯の身か蓋、撮みを欠いたとすれば高台付杯Ⅳ類AかBの蓋。後考をまつ。

一方、6世紀中頃になると、高さが口径に近い例も出現する（以下、Ⅳ類C）。古いのは、553年の河北・元良墓出土瓷器（文献182）で、北齊567年の太原・庫狄業墓出土陶器（7-M c₁）、北周569年の寧夏・李賢墓出土ガラス器（7-N a₂）、576年の咸陽・王德衡出土瓷器（7-O a₁）、隋590年の河南・安陽出土瓷器（文献224）、595年の山西・梅澗夫婦墓出土瓷器（7-R b₁）、607年の安徽・亳県出土瓷器（文献91）、608年の西安・李靜訓出土玉器やガラス器（文献5）など。李賢墓例は器表に小円板を飾る。劉宋462年の福建・政和出土銅器（7-B b₃）は、高さが口径の半分程だが、体部がやや内弯気味で直に開くのが特色（以下、Ⅴ類A）。初出例である。類例は、南齊493年の山東・臨淄出土瓷器（7-D a₂）など。北魏516年の宣武帝景陵出土瓷器（7-I a₂）、東魏544年の山東・賈思伯墓出土瓷器（文献514）、北齊後期の山西・太原出土陶器（7-M b₂）は口縁で外反する（以下、Ⅵ類A）。南朝晩期頃と推定する貴州・平坝出土銅器（7-P a₂）は、体部下半に稜があるようである（以下、稜杯Ⅰ類）。稜が下腰にあり、高台も小さく高目なのが特徴。これには宝珠形撮みの笠形蓋と托Ⅲ類が伴う。Ⅴ・Ⅵ類ともに類例はそれ程多くなく、稜杯は貴州例以外知らない。

碗のうち高台付碗は、東晋に登場した浅目のⅠ類Cとやや深目のⅣ類Aが存続する。Ⅰ類Cは劉宋～南齊の福建・政和出土瓷器（7-B c₇）で、以後はすたれる。Ⅳ類Aは盛行。瓷器や陶器で、金属器の例は知らない。代表例をあげると、劉宋435年の広東・新興出土瓷器（7-A a₅）、462年の福建・政和例（文献358）、南齊493年の山東・臨淄出土瓷器（7-D a₄）、497年の江西例（7-E a₇）、南齊とみる福建出土瓷器（7-E c₆）や江西・恭城例（7-G a₆）、北魏516年の宣武帝景陵例（文献166）、524年の洛陽・孟津例（7-I c₆）、東魏537年の河北・高雅夫婦墓例（7-K a₈）、北齊547年の河北・磁県例（文献94）、565年の河北・呉橋例（文献351）、562年の山西・庫狄廻洛墓例（7-M b₄）、北齊後期の山西・太原例（文献384）、隋582年陝西・李和墓出土陶器（文献306）など。南齊の福建例は托Ⅱ類上に乗っていた。6世紀の河北・封氏一族墓出土瓷器（文献51）は托か下盤を伴う。北齊562年の山西・庫狄廻洛墓例（7-M b₅）、隋595年山西・汾陽例（7-R b₄）は体部が立って深目となる（以下、Ⅳ類B）。

高台付碗の新器形は、体部が外傾し、口縁でわずかに外反する深目のもの（以下、Ⅵ類）と、輪花形のもの（以下、花碗）とがある。Ⅵ類の初出は劉宋441年の福建・福州出土瓷器で、宝珠形撮をもつ笠形の蓋が伴う（文献481）。劉宋～南齊の福建・政和出土瓷器（7-Bc8）、南齊493年の山東・臨淄出土瓷器（7-Da5）、南齊の湖南・長沙出土陶器（7-Eb8）、隋586年の安徽・合肥出土瓷器（7-Qb5）もほぼ同巧。概して浅目であるのが特徴（以下、Ⅵ類A）。政和例はこの時期としては珍しく擬高台でない。花碗は、南朝晩期～隋とみる広東・遂溪出土銀器（7-Pb3）。高台の小さいのが特徴（以下、花碗Ⅰ類）。それぞれ、唐代に盛行する稜碗や花碗の先行例である。遂溪例は、口縁内面に刻んだ文字から、ササン朝ペルシャ産と知れる。

丸底碗は、深目のⅠ類が北魏524年の洛陽出土陶器（文献391）、北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓出土銅器（文献320）にある。口縁でわずかに反る深目のもの（以下、Ⅲ類）が北魏前半期の山西・大同出土銀器（文献398）にある。高足杯Ⅲ類の杯部と類似し、人物文様も共通する点がある。東ローマ帝国あたりの産であろう。初出例。浅目のⅡ類は隋610年の広東・韶関出土陶器（7-Ta4）だが、稀な例。南北朝からはⅡ類より浅いもの（以下、Ⅳ類）や、体部が外傾して盤に近くなったもの（以下、Ⅴ類）が登場する。Ⅳ類の初現は隋582年の河北・景県出土銅器（7-Qa2）。Ⅴ類は北周の金属器で、明器のため小さい。小盤Ⅵ類Aに似るが、これより深いので碗とした（以下、Ⅴ類A）。569年の寧夏・李賢墓出土銀器（7-Oa3）、576年の咸陽・王德衡墓出土銅器（文献23）、578年の咸陽・若于雲墓出土銀器（文献23）などで、北齊・北周に限られる。隋608年の西安・李静訓出土銀器（文献5）、610年の広東・韶関出土陶器（文献67）、隋代の広東・封開出土銅器（7-Tc5）は、体部がやや立ち気味となる（以下、Ⅴ類B）。隋代の広西・壮族自治区出土銅器（7-V5）も同巧。封開例はなかに銅匕（匙）が入っていた。隋代の湖南・長沙出土銅器（文献215）も同巧。

平底碗は、三国時代からのⅢ類が北齊550年の河北・茹茹公主墓出土陶器（文献348）、南齊末～梁初の四川・綿陽出土陶器（7-Ga5）や北魏516年の宣武帝景陵出土陶器（7-Ib5）に残る。隋代の江西・壮族自治区出土瓷器（7-V4）は体部が内弯気味に立ち上がった小さな平底（以下、Ⅴ類）。

鉢は、西晋代からの平底鉢Ⅲ類の系統が、南齊末～梁初の四川・綿陽出土陶器（7-Gb7）、北魏516年の宣武帝景陵出土陶器（7-Ia7）、北周576年の咸陽・王德衡出土銅製明器（7-Oa4）、丸底鉢Ⅰ類が隋608年の西安・李静訓出土銀器（文献5）に残る。高台付鉢は、Ⅱ類Dの系譜をひく劉宋435年の広東・新興出土瓷器（7-Aa6）や北魏508年の大同・元淑出土陶器（7-Hb5）がある。後にはつづかない。劉宋462年の福建・政和出土瓷器（7-Bb9）、南齊末～梁初の四川・綿陽出土陶器（文献176）、隋の浙江・衢県出土瓷器（7-Ue3）は、高台付碗Ⅳ類Aを大きくしたもの（以下、Ⅳ類）。高台付鉢の新器形は、610年の寧夏・史射勿墓出土瓷器（7-Ta6）。体部が丸味をもって立ち上がったのち外反する深目のもの（以下、Ⅴ類）。

鉢でも特殊な丸底鉢Ⅳ類Aは、北魏前半期の山西・大同出土ガラス器（文献398）に残る。この器表には切り子を飾る。同じくⅣ類Bは南朝晩期～隋代の広東・遂溪出土鍍金器（7-Pb1）につづく。口径・高さとも8cmで、器表に唐草文などを飾る。伴出した花碗Ⅰ類からみて、これもササン朝ペルシャや西域のものと同推測される。

鉄鉢形・盃 鉄鉢形は、後漢中期に出現したⅠ類が存続する。北魏481年の河北・定県石函出

土ガラス器（7-Ca7）。南齊の江西・恭城出土瓷器（7-Ga8）、隋595年の安陽・張君墓出土瓷器（文献57）は深目となる（以下、Ⅱ類）。隋代の甘肅・莫高窟第276窟の僧が手の上に乗せるのは、鉄鉢形もⅡ類の小型品かあるいは丸底碗か（第10図7）。

盃は、南北朝になると深目となる（以下、Ⅲ類）。南齊497年の江西出土瓷器（文献112）、同じ頃の福建・閩侯出土瓷器（7-Ec9）。北魏521年の河北・封氏墓出土黒瓷器（文献51）は丈が高いだけでなく口縁の内弯が強くなる（以下、Ⅳ類A）。類例は、隋586年の陝西・西安出土瓷器（7-Qc6）、608年の西安・李静訓出土瓷器（文献5）など。蓋を伴うことが多い。北周570年の太原・婁叡墓出土瓷器（7-Mb5）、隋代の湖北・武漢出土瓷器（文献107）や湖南・長沙出土陶器（7-Ub5）は丈がより高くなったもの（以下、Ⅴ類A）。

舟 楕円形の器で、環状把手をもつⅠ類のミニチュア銀器が隋608年の西安・李静訓墓から出土（文献5）。他の例は知らない。

魁 魁は、後漢晩期からつづくⅡ類A・Bの銅器が北魏でも5世紀前半と推定する遼寧・錦州（7-Cd8・Cd9）から出土。梁536年の南京・蕭象墓出土陶器（7-Jc9）はⅡ類A。以後は一時、魁はすたれたようである。

盤・有脚盤（硯）・眷・托 大盤は多くないが、平板なⅤ類Aが主であり、円案の可能性が高い。大部分が瓷器か陶器だが、東魏544年の河北・李希宗例（文献93）は口径48cmの銅器で、上に銀製盤状高足杯、金鏝斗Ⅳ類A各1点と高台付の瓷杯Ⅳ類B5点をのせていた。陶・瓷器の大盤Ⅴ類Aは、北齊の567年の山西・庫狄業墓（7-Mc10）や同年の山西・韓裔墓（文献321）、隋615年の西安・劉世恭墓（文献210）から出土。北齊553年の河北・元良墓出土瓷器（7-Ma11）や隋603年の河南・安陽出土瓷器（文献224）は高台を伴う初出例（以下、大盤Ⅴ類B）。5世紀前半頃とみる甘肅・靖遠出土銀器（7-Ad10）は、Ⅵ類Aに高台をつけたⅥ類Bの大盤。新種の大盤だが、中華にまでは及んでいないようである。

中盤はⅤ類AとⅥ類Aが存続する。いずれも瓷器か陶器。代表例をみると、Ⅴ類Aは南齊493年の山東・臨淄出土瓷器（7-Da7）。杯や碗が出土しており、その下盤であった可能性がある。Ⅳ類Aは劉宋か南齊とみる福建・政和出土瓷器（7-Bc6）や南齊代とみる江西・恭城出土瓷器（7-Ga4・Ga9）。内面に蓮華文を飾っており、食器であろう。

小盤もⅤ類AとⅥ類Aが存続する。いずれも瓷器か陶器。代表例をみると、Ⅴ類Aは劉宋455年の湖北・武漢出土瓷器（7-Ba4）や462年の福建・政和出土瓷器（7-Bb5）、梁532年頃の南京出土陶器（7-Ja7）など。政和例は中央部が窪み、托として用いられたと推定できる。Ⅵ類Aは南齊497年の江西出土例（7-Ea5）、梁536年の南京・蕭良墓出土瓷器（文献382）、北齊567年の太原・庫狄業墓出土瓷器（7-Mc3）、隋代の広西・壮族自治区出土瓷器（7-V3）など。南北朝に登場する新器形は、Ⅵ類Aに高台がつくⅥ類B。北魏504年頃山西・大同出土鍍金銀器（7-Ha3）が標式。内面の人物像からササン朝ペルシャ壺と推測している。Ⅵ類Bは瓷器が多いが、それらは金属器の影響を受けて出現した可能性が高い。代表例をあげる。初現は劉宋441年頃の広東・曲江出土瓷器（7-Ab3）、梁502年の浙江・瑞安出土瓷器（文献61）、北魏516年の宣武帝景陵出土瓷器（7-Ia4）など。

有脚盤で底が中高のⅡ類Bは、南北朝に入ると陶器や瓷器の例が多く、硯とみるのが通例。三脚のほか五脚もある。北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓出土銅器（文献320）は、口縁が

直立するもの（以下、Ⅱ類A）。いずれも明器。硯かは疑問。北周578年の陝西・独孤藏墓及び若于雲墓出土陶器（文献23）は陸・海部を区別し、墨壺もつくる（以下、Ⅲ類）。明らかに硯である。隋代には流滴状の脚を多数つけた硯や圈台に透かしを施した硯（文献215）が登場することになる。

畚は、大盤と混同しているが、口縁端を切り欠いて蓋のかかりとしたもの。古い例は、劉宋441年の福建・福州出土瓷器（文献481）。蓋の有無は不明だが、なかに5個の杯を入れており、五盅盒と呼んでいる。類例は、北魏516年頃の宣武帝景陵出土陶器（7-I a12）、北齊550年の河北・茹茹公主墓出土陶器（7-N b7）など。

托は、南北朝からは承けの高くなったものが主流を占める。^{註7)}小盤Ⅵ類Bの内面に比較的低い承けをつけたもの（以下、Ⅱ類A）が多い。Ⅱ類Aの古い例は、南齊497年の江西出土瓷器（7-E a2・E a4）や南齊とみる福建・閩侯出土瓷器（7-E c6）。同巧品は、北魏508年の大同・元淑墓出土玉器（7-H b2）。北魏516年の宣武帝景陵出土瓷器（7-I a3）や梁532年頃の南京出土陶器（7-J a4）は承けが托口縁よりやや高くなる初出例（以下、Ⅱ類B）。以上のいくつかには高台付杯Ⅳ類Aなどがのっていた。南朝晩期と推定する貴州・平坝出土銅器（7-p a2）は、口縁が水平に外接する托で、高台もやや高目となる（以下、Ⅲ類）。これには稜杯がのっていた。

なお、盤と杯とを一体につくったものを托と報告している場合があるが、燈の可能性が高いことから除外した。

銅・洗 銅は前漢以来それ程変化しない深銅Ⅰ類が隋608年の西安・李静訓出土銅器（文献5）にある。陶器には深銅Ⅰ類（7-I a10）と浅銅Ⅰ類が若干ある。

洗は、6世紀になると、浅洗Ⅱ類の系譜をひくが、体部外傾気味のものが登場してくる。北魏522・524・532年の洛陽出土陶器（7-I b11、文献78・322・391・415）。同巧の銅器は、日本の奈良国立博物館品（文献50）にあり、いずれも高台はまだ低目である（以下、Ⅲ類A）。奈良国立博物館品には銅水瓶を伴ったらしい。洛陽諸例も陶製の反口瓶Ⅴ類（8-I b1・I c3）、日本でいう王子形水瓶が出土しており、一組であった可能性がある。北齊562年や北周576年の銅器（7-M b9・O a6）、北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓出土銅器（文献320）、521～589年の河北・封氏一族墓出土銅器（文献51）、隋595年の安陽・張君墓出土瓷器（文献57）はⅢ類Aの系譜をひくが、やや深目で高い高台がつく（以下、Ⅲ類B）。これらの諸例も伴出した銅製の反口瓶Ⅴ類（8-M b1・O a1）と一組になろう。明器もある。

深洗は、Ⅰ類Cが劉宋435年頃の広東・新興出土銅器（7-A a7）に残る。他に北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓出土銅器（文献320）や南朝の貴州・平坝出土銅器（7-P a5）がある。後者も6世紀後半頃になろう。三脚がつくのが特色（以下、Ⅲ類）。爐と似るが、底が平らで、後者には双魚文を飾ることから洗とみる。深洗は南北朝からはすたれ、隋・唐代には途絶する。深洗Ⅲ類は浅洗Ⅲ類と伴出した例はなく、それぞれが単独に用いられたと推測する。

盒・高足香盒・豆 盒は円筒形のもの（以下、Ⅲ類A）が北齊562年の山西・庫狄廻洛墓出土銅器（7-M b7）にある。陶器や瓷器が6世紀初～隋代まで存続する。扁平なのが主で、化粧用白粉などを入れた粉盒とみる人が多い。丈の高い例（M-I c9）もある。他に鼓形をした盒（以下、Ⅳ類）が隋610年の西安・姬威墓出土瓷器（文献293）にある。同類は595年の河南・張

君墓出土瓷器（文献57）にもある。果盒は方形のものが劉宋424年の山東出土陶器（文献87）、円形のものが梁536年の南京出土瓷器（文献382）まで残る。

高足香盒と呼ぶのは、やや小型の高足杯に蓋を伴うものである。北周の絵画資料（第9図4）でみると、柄香爐を持つ王侯の前後に、これを捧げもつ僧らがいることによる。隋代の莫高窟第278窟壁画（文献44）にも僧が手の上にのせる。出土品は北齊562年の山西・庫狄廻洛墓出土銅器（7-Mb8）や565年の河北・呉橋出土銅器（文献351）。前者は総高10.8cm、口径5.6cm、後者は総高9cm、口径5cm。蓋は山形状で撮みが宝珠形、脚が太いのが特徴である（以下、Ⅱ類）。なお柄香爐は、521～589年頃の河北・封氏一族墓出土銅器（文献51）が初出である。

豆は口径15cm前後の小形豆と、口径30cm前後かそれ以上の大型豆とがある。瓷器か陶器。盤の体部がほぼ直に立ち上がるⅠ類と、内弯気味に立ち上がるⅡ類がある。小形豆Ⅰ類は、南齊493年の山東・臨淄例（7- Da6）、北齊553年の河北・元良墓例（7- Ma6）、573年の山東・崔博墓例（文献228）など。盤は浅いのが特徴（以下、Ⅰ類A）。隋607年の安徽・亳県例（文献91）や隋代の湖南・長沙例（7- Ta7）は、盤は深目が特徴（以下、Ⅰ類B）。小形豆Ⅱ類は隋605～618年の湖北・武漢例（7- Ua4）。隋代の河北・邢窯からは小形豆Ⅰ類BとⅡ類（文献367）が出土。Ⅰ類とⅡ類では用いられ方に幾分の差異があったのか大型豆はⅠ類のみ。Ⅰ類Aは589年の河南・宋君墓例（文献79）、603年の河南・安陽例（文献224）、Ⅰ類Bは隋595年の山西・梅渚夫婦墓例（7- Rb7）など。宋君墓例は瓷杯Ⅳ類Bを8個のせた器台だが、隋584年の山東・徐敏行墓壁画（第10図1）では、椅座する女主人の前に、果物をのせた大型豆を置いている。

b 貯蔵具・注器（付図8）

扁壺・瓶 扁壺は北齊573年の河南・范粹墓出土瓷器（文献308）。前漢晩期に登場するⅡ類に似て下肥れだが丈が高い（以下、Ⅵ類）。隋代の河北・邢窯出土瓷器（8- Uc4）は、西晋代のⅣ類に似るが、肩の張りは弱くなる（以下、Ⅴ類）。唐代になると、中国北辺部のみの出土となる。

瓶は反口瓶が主流を占める。劉宋450年の江西出土瓷器（8- Ac1）や劉宋～南齊の福建・政和出土瓷器（8- Bc1）は、後漢中期のⅠ類の系譜をひこうが、球胴で、口縁端が水平にのびる点が異なる（以下、Ⅱ類）。北魏529年の甘肅・張家川出土銅器（文献322）は前漢中期のⅡ類の系譜をひくが、口縁が広がり端部で水平にのびる。瓷器や陶器は例が多く、古いものは北魏5世紀代の山西・大同例（文献398）や南齊499年の湖南・長沙例（8- Eb1）で、北齊565年の河北・呉橋例（文献351）あたりまで存続する。まだ肩の張りが強くなく、丈もやや低い（以下、Ⅲ類A）。北魏415年の河北・定県石函出土銀器（文献74）は、舍利容器で小型だが、Ⅲ類Aの初現例になろう。北魏522年の洛陽出土陶器（8- Ib2）や北齊550年の河北・茹茹公主墓出土陶器（文献348）は、肩が張り、丈も高くなる初現例（以下、Ⅲ類B）。562年の山西・庫狄廻洛墓出土鍍金銅器（8- Mb3）は口縁を欠くが、反口瓶Ⅲ類Bと推測する。北齊後期の山西・太原出土陶器（文献384）、北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓出土ミニチュア銅器（文献320）もほぼ同巧。521～589年頃の河北・封氏一族墓出土ミニチュア銅器（文献51）は、肩が強く張るが短胴で、日本でいう蕉形水瓶にあたる。頸は細長くて口縁端が水平にのび、高

い八字形高台がつくのも特徴（以下、Ⅳ類）。北朝に比定している河北・邢窯出土瓷器（8-Oe1）や隋代の河北・邢窯出土瓷器（8-Uc3）もⅣ類。北魏6世紀初の河南・龍門石窟の古陽洞では菩薩がⅣ類らしきものを手のしている（文献46）。

反口瓶は、日本で王子形水瓶と呼んでいる、長卵形の胴部に細長い頸をもつ新器形が6世紀に登場する。古いのは、北魏522年の洛陽出土陶器（8-Ib1）で、胴部が下肥れでないのが特徴である（以下、Ⅴ類A）。銅器は北齊562年の山西・庫狄廻洛墓例（8-Mb1）や北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓例（文献320）で、前者には宝珠形撮みの笠形合わせ蓋を伴う。蓋の内面には脱落を防いだり、なかの香水を散水するためにも用いられたらしい2枚の長い板がつく。瓷器や陶器の例があり、隋の河北・邢窯出土瓷器（8-Uc1）につづく。下肥れのもの（以下、Ⅴ類B）もほぼ併存する。Ⅴ類Bの銅器は、北魏528年の洛陽・元邵墓例（文献78）、東魏544年の河北・李希宗墓例（文献93）、北周576年の咸陽・王德衡墓例（8-Oa1）、521～589年の河北・封氏墓例（文献51）。王德衡墓例は笠形の栓がつき、元邵墓例や封氏墓例は頸部に突線をタガ状にめぐらす。瓷器や陶器もあり、古いものは北魏524年の洛陽・孟津墓出土陶器（8-Ic3）。

以上のⅤ類は、既述したように浅洗Ⅲ類と伴出し、一組で用いられた可能性が高い。敦煌の莫高窟第276窟の隋代の壁画（第10図6）をみると、菩薩が手にもつ瓶は、笠形蓋を伴う反口瓶Ⅴ類Bのようであり、薬水の入っていたことが知れる。ただし、北齊の山東・臨朐出土画像石（第9図6）には、反口瓶Ⅴ類Aらしきものに花を挿し込んでおり、花瓶としても用いられたことが知れる。北周579年の西安・安伽墓壁画（第9図6）でもⅤ類らしきものに花を挿している。

直口瓶の系譜をひくものは、北齊562年の庫狄廻洛墓出土鍍金銅器（8-Mb2）。口縁がやや外反気味であるのは西晋までの例と異なり、しかも片口状になっている点は特異。注器かもしれないが、日本の藤井有鄰館所蔵銅器（文献50）は口縁に片口と、有孔の双耳をもち、唐代の双耳の例からも、投壺の可能性が高いと考える。

盤口瓶は、ゆるやかに外反した口縁が端部で直に立ち上がるもので、これも新器形。肩が張り、底にむかって急にすぼまるもの（以下、Ⅰ類）と、すぼまりが弱いもの（以下、Ⅱ類）とがある。Ⅰ類は、初現が東魏542年の山東・房悦墓出土瓷器（文献474）で、隋597年の太原・斛律徹墓出土陶器（8-Sa2）につづく。Ⅱ類Aは、初現が東魏544年の河北・李希宗墓出土鍍金銀器（文献93）で、隋592年の西安出土陶器（8-Ra2）につづく。李希宗例は、宝珠形撮みの、内被せの笠形の蓋が伴う。小型品。片口をもつ金製鏃斗Ⅳ類A、銀製盤状高足杯などとともに、円案上に置かれていたもので、中に酒の入っていた可能性を示す。盤口瓶は、細々ながら晩唐や北宋にも残る。

壺・細頸壺・斝 細頸壺は、口縁の外反するⅠ類Aが北魏5世紀代の山西・大同出土陶器（文献398）に残る。北齊565年の河北・呉橋出土銅器（文献351）はⅡ類でも頸の短いもの（以下、Ⅱ類C）。似たものは、隋605年の河北・定県出土銀器（文献411）にある。盤口のⅢ類は、劉宋447年の浙江・黄岩出土瓷器（文献213）や南齊～梁の浙江・瑞安出土瓷器（8-Gc2）で、胴は長目だが、口縁端の立ち上がり弱い（以下、Ⅲ類C）。隋586年の安徽・合肥出土瓷器（8-Qb1）、615年の西安・白鹿原出土瓷器（文献210）は、胴長で、口縁端の立ち上がりもより強くなる（以下、Ⅲ類D）。Ⅲ類は以後途絶える。

細頸壺の新器形は、胴が下肥れになる、いわゆる玉壺春式。初現は、四川・綿陽出土瓷器（8-Ae2）。盤口であるが、まだ頸が太目なのが特徴（以下、Ⅳ類A）。年代は東晋早期とみるが、伴出した有柄注壺はⅢ類B、托はⅡ類Aであり、5世紀後半になろう。ほぼ同形は南齊の広西・恭城出土瓷器（8-Ga1）や北齊562年の太原・庫狄廻洛墓出土釉陶（文献221）。後者はガラス器の模倣とされ、宝珠形撮みの、内被せの笠形蓋が伴う。521～589年頃の河北・封氏一族墓出土銅器（文献51）もほぼ同巧。隋595年の河北・崔大園出土陶器（8-Rc1）は頸が細くなる（以下、Ⅳ類B）。610年の西安・姬威墓出土陶器（8-Tb1）や隋代の河北・邢窯出土瓷器（8-Uc2）もほぼ同巧。

球胴壺は、古調のⅡ類Bが北魏486年頃の寧夏・固原出土銅製明器（8-Cc2）に唯一残るが、以後は途絶える。盤口のⅢ類も残る。南齊～梁の浙江・瑞安出土瓷器（8-Gc3）は、東晋代に比して、口縁の立ち上がりが高くなる（以下、Ⅲ類B）。北齊570年の太原・婁叡墓出土瓷器（文献347）では、口縁の立ち上がりがさらに強くなる（以下、Ⅲ類C）。Ⅲ類は極めて少ない。唐代には球胴壺はすたれる。

長胴壺は、あまり変化しないⅡ類Aが北魏485年頃の寧夏・固原出土陶器（文献20）や同じ頃の山西・大同出土陶器（文献398）、528年の洛陽出土陶器（文献78）、北齊547年の河北・堯趙夫婦墓出土瓷器（8-La5）、隋591年の安陽出土陶器（文献224）などにある。盤口のⅢ類Aは劉宋455年の湖北・武漢出土瓷器（8-Ba2）、南齊の福建出土瓷器（8-Ec2）、北周576年の咸陽・王德衡墓出土瓷器（8-Oa2）などにある。とくに胴長のⅢ類Bは、南齊の江西・恭城出土瓷器（8-Ga4）、北周576年の陝西・独孤蔵墓出土瓷器（8-Ob2）につづく。隋代の湖南・長沙出土瓷器（文献215）は胴だけでなく、頸も長くなる（以下、Ⅲ類C）。Ⅲ類Cは初唐に残る。

釜は、下肥れⅡ類系統のものが、唯一北魏486年頃の寧夏・固原出土銅製明器（8-Cc3）にあるが、以後は途絶える。

唾壺 東晋代に登場したⅡ類Bが6世紀前半まで残る。銅器は北魏6世紀前半と推定する洛陽出土例（8-Jb3）などで、口縁を下に折り曲げた漏斗状の落とし蓋を伴う。瓷器や陶器は多く、劉宋435年の広東・新興出土例（8-Aa3）以降、梁536年の南京・蕭象墓出土例（文献382）に及ぶ。北周576年の咸陽・王德衡墓出土銅器（8-Oa3）や隋代の湖北・武漢出土瓷器（8-Ua5）もⅡ類B。梁502年の浙江・瑞安出土瓷器（8-Gd5）は頸の長い例（以下、Ⅱ類C）。6世紀中頃になると盤口の立ち上がりが強くなり、頸も長目となる（以下、Ⅲ類）。梁548年の江蘇・鎮江出土銅器（文献127）、北齊567年の山西・庫狄業墓出土銅器（8-Mb4）、北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓出土銅器（文献320）。瓷器では北周578年の陝西・独孤蔵例（8-Ob3）から、隋586年の西安例（8-Qc2）や595年の山西・梅渚夫婦墓例（8-Rb3）に及ぶ。落とし蓋に宝珠形撮みをつけるのが通例となる。

罐・瓮・壺 すべて瓷器か陶器である。罐は短胴罐Ⅰ類が、北魏5世紀の山西・大同例（文献398）、南齊～梁の浙江・瑞安出土例（8-Gc6）にあるが、次第にすたれる。瑞安例は肩に蓮弁をめぐらす初現例でもある。6世紀後半に入ると、やや長目の球胴で、肩に4個の環状把手をもつものが登場する。北周565・583年の陝西・王士良墓出土瓷器（8-Od4）や隋607年の安徽・亳阜出土瓷器（文献91）などで、直口になる（以下、Ⅴ類A）。北周578年の陝西・独孤

蔵墓例（文献23）や隋代の湖南・長沙例（文献215）は口縁が盤口のもの（以下、V類B）。

長胴罐は、最大径が胴中位あたりにあるⅡ類が南斉の福建・閩侯例（文献99）、隋597年の太原・斛律徹墓例（文献399）などにある。6世紀に入ると、肩に4個の環状把手をつけた長卵形のものが登場する。初現は、東魏538年の山東・崔混王墓例（8-Kb5）。頸は短い直口で、内被せの笠形蓋が伴う（以下、V類A）。同類は隋590年の河南・安陽例（8-Sb3）、615年の西安・劉世恭墓例（文献210）、隋代の河北・邗窰出土瓷器（8-Uc7）など。隋605～618年の湖北・武漢出土瓷器（文献107）は盤口（以下、V類B）。

瓮は劉宋435年の広東・新興例（文献383）、南斉493年の山東・臨淄例（8-De5）、北斉553年の太原・賀拔昌墓例（文献472）、隋595年の河北・崔大園墓例（文献198）や610年の西安・姬威墓例（文献293）など。

大口罐は南斉の江西・恭城例（文献98）、梁502年の浙江・瑞安例（文献61）などがある。南北朝晩期～隋の広東・遂溪からは大口の陶器（S-pb3）が出土。これには盤状の蓋（盤V類）が伴う。珍しい例である。

壘は北魏481年の河北・定県出土ガラス器（8-Ca1）。寺院の、おそらく塔基壇中の石函内から出土したものである。球胴に小さな口をもつもの（以下、Ⅱ類）。瓶と呼んでいるが、そぐわないので壘とした。北魏529年の甘肅・張家川出土陶器（文献322）、北斉547年の河北・堯趙夫婦墓出土釉陶（8-La4）や隋608年の西安・李静訓墓出土ガラス器（文献5）は、肩の張った長胴に小さな口をもつ（以下、Ⅲ類A）。前者二者は、両肩下に環状把手をもつ。隋592年の西安出土陶器（文献2）は肩の張りが弱い（以下、Ⅲ類B）。隋608年の西安・李静訓墓出土ガラス器（文献5）は、口縁が袋状の特異なもので、体部が下肥れ（以下、Ⅳ類）。

鏝壺 鏝壺は、例が少なく、北周576年の咸陽・王德衡墓出土銅器（8-Oa6）、隋608年の西安・李静訓墓出土銅器（文献5）がある程度。ともに明器。王德衡墓例は曲折する柄が高く、先端を龍頭形につくる（以下、V類）。類例は610年の湖南・道氏墓出土瓷器（文献337）。李静訓墓例は前漢代のⅠ類の復古品とも思われるものだが、把手が中実で長く、しかも蝶番で折りたたむよう工夫したもの、先端も宝珠形にする（以下、Ⅵ類）。

有柄壺・有柄注壺 有柄壺は、盤口の壺や瓶に長い環状把手をつけたもの。いずれも瓷器か陶器。初現は北魏508年の大同・元淑墓例（文献375）のようで、胴長だがまだ太目（以下、Ⅲ類B）。516年の洛陽・宣武帝景陵例（文献166）は胴が細長くなる（以下、Ⅲ類C）。把手の上端は龍頭につくる。東魏537年の河北・高雅夫婦墓例（8-Ka4）や北斉547年の河北・堯趙夫婦墓例（8-La6）などもほぼ同巧。隋595年の山西・梅澗夫婦墓例（8-Rb4）は体部が長卵形（以下、Ⅲ類D）。隋608年の西安・李静訓墓出土瓷器には有柄壺Ⅲ類Bを2個連結したのも出土している（文献5）。双胴だが、口頸は1個（以下、双柄壺Ⅰ類）。

有柄注壺は盤口のⅢ類が盛行する。いずれも瓷器か陶器、東晋晩期に登場したⅢ類Bは、劉宋435年の広東・新興例（8-Aa4）や447年の浙江・黄岩例（8-Af4）に残る。後者は把手の上端を龍頭につくる。南斉493年の山東・臨淄例（8-Ia4）は胴長となる（以下、Ⅲ類C）。同巧品は北魏516年の河南・宣武帝景陵例（8-Ia6）、北斉567年の太原・庫狄業墓例（文献471）、北斉570年の太原・婁叡墓例（文献347）、隋605～618年の湖北・武漢例（8-Ua6）などがある。

片口をもつ有柄注壺は北周567年の寧夏・李賢夫婦墓出土鍍金銀器（8-Na5）。胴は下肥れだが瘦身で、脚は高く中程に太い突帯をめぐらすのが特徴（以下、IV類C）。ワイン用だろう。器表を飾る人物像などからササン朝ペルシャ産とみている。IV類は唐代に入ると盛行する。

以上の他に特殊なものとして、二重口縁罐が、南齊頃の江西・恭城出土瓷器（文献98）、倉が北魏532年の洛陽・孟津出土陶器（文献415）、北齊553年の山西・賀拔昌墓出土陶器（文献472）、隋610年の西安・姬威墓出土陶器（文献293）や615年の西安・劉世恭墓出土陶器（文献210）に残る。

c 煮沸具（付図8）

鍋 鍋は、口縁下がくびれるII類Bが南朝中・晩期の江西出土瓷器（文献165）、これに環状把手をつけたII類Cが南朝中・晩期の貴州・平坝出土銅器（8-Pa4）、そして口縁端に方形把手をつけたIII類Bが南齊～梁間の四川・綿陽出土銅器（8-Gb7）にある。いずれも中国南半部での地域色を示す。III類は唐代になると新たな展開をみせる。

釜・甑・鍑 釜・甑は若干の明器がある程度で、実態が不明。北魏486年頃の寧夏・固原出土銅器（8-Cc5）も明器で、銅竈に釜・甑を置く。釜は球胴釜II類のようで、甑はII類D。北周576年の咸陽・王德衡墓出土銅製明器（8-Oa4）は球胴釜II類B。甑は底に大孔1個を穿ったもの（以下、V類）。529年の甘肅・張家川出土銅器（文献322）も明器で、ほぼ同巧。

鍑は中国北辺部の地域色。前・北燕からのIV類は、北魏5世紀末とみる山西・大同出土銅器（8-Ce4）や北魏晩期とみる内蒙古出土金属器（文献490）に残る。北齊567年の太原・庫狄業墓出土銅器（8-Mc7）や北周569年の寧夏・李賢夫婦墓出土銅器（8-Oa5）は、後漢代のIII類の系譜をひくが、提梁のもあり、高台もやや大きくなる（以下、V類）。北周576年の咸陽・王德衡墓出土銅器（文献23）は、高台にかえて三脚を付す特異例。鍑は、隋代の例は知らないが、唐代の提梁罐につながるようである。

鍬斗 鍬斗は銅器が多い。西晋代からのII類は、北魏5世紀前半頃の遼寧・錦州例（文献139）、北燕からのIII類Aは北魏485年頃とみる寧夏・固原例（8-Cc6）に残る。北周578・582年の武帝孝陵例（8-Occ5）は、以前の例と異なって、把手の基部を口縁に接してつけたもの（以下、III類B）。鍬斗の主流となるのは、口縁に片口を、把手と直角につけたもので、口縁が二段、把手は中実の長いもので、基部近くで曲折、頭部を宝珠形につくるのが基本（以下、IV類A）。初現は、劉宋431年の江西・大余出土例（文献135）のようである。図示できるのは南齊～梁間の四川・綿陽例（8-Gb8）や南朝中・晩期頃の貴州平坝出土器（8-Pa5）だが、隋608年の西安・李静訓墓例（文献5）まで各時代の銅器がある。なお、北魏486年頃の寧夏・固原出土銅器（8-Cc7）は、把手の基部と口縁の間に補強材をいれたもの（以下、IV類B）。II類Bと共通し、中国北半部の地域色を示す。

片口をもつ鍬斗IV類の盛行は、鍬斗II・III類と鍬壺の衰退と表裏をなし、鍋と注器の機能を兼ね備えた工夫と考えられよう。

d 雑器（付図8）

熨斗 熨斗はいずれも銅器である。北魏479年銘の銅器（文献41）は、蝶番で透かし彫りのあ

る蓋をつけ、しかも把手を差し込んで固定するスタンドが伴う初出例である。把手からすると、古式のⅠ類のようである。だが、類例に乏しい。北周569年の寧夏・李賢夫婦墓例（8-Na7）や565・583年の西安・王士良夫婦墓例（8-Od6）は、把手の頭を宝珠形につくるのが特徴（以下、Ⅳ類）。

爐 北周576年の咸陽・王德衡墓出土銅製明器（8-Oa7）は、Ⅱ類Aに近いが平底である。五脚で、五個の環耳がつくのも新しい特徴である（以下、Ⅲ類A）。隋595年の安陽・張君墓出土瓷器（文献57）も、この系統をひくが、三脚で三環耳である（以下、Ⅲ類B）。他方、南北朝に入ると、口径が10～20cmと比較的小型で、深目のものが登場する。碗状を呈するもの（以下、Ⅳ類A）、体部がほぼ直立するもの（以下、Ⅳ類B）、鼎を模したもの（以下、Ⅴ類）などがある。多くは瓷器。下盤を伴うのが基本で、爐と下盤を共造りにしたものもある。Ⅳ類Aの初出は、劉宋435年の広東・新興例（8-Aa5・Aa6）で、幾分か変化しながら隋代の湖南・長沙例（8-Ub8）に及ぶ。Ⅳ類Bは梁～南斉の福建・政和例（8-Bc7）や南斉の広西・恭城例（8-Ca9）。Ⅴ類は、隋608年の西安・李静訓出土銀器（文献5）だが、瓷器は北齊550年の河北・茹茹公主墓例（文献348）が古く、隋595年の河南・張君墓例（文献57）もある。Ⅲ類Aは日本の正倉院の白石製火舎につながる。Ⅳ・Ⅴ類も薫爐として用いられた可能性がある。

燈 豆燈はⅠ類の系統が、5世紀前半の遼寧・錦州出土銅器（8-Cd8）にあるが、脚下半を雁足につくる点は漢の復古か（以下、Ⅰ類C）。Ⅰ類は以後途絶える。Ⅲ類Aの系譜をひくものが、北魏524年の洛陽・孟津出土陶器（8-Ic8）にある。油皿は深く杯状になる。脚が細く、下盤も平板である（以下、Ⅲ類B）。東魏537年の河北・高雅夫婦墓出土銅器（8-Ka6）はⅢ類Bの脚を低くしたもの（以下、Ⅲ類C）。劉宋～南斉の福建・政和出土瓷器（8-Bc8）も脚が低く、杯状となる。南朝ではこの種の瓷燈が多い。北齊570年の山西・婁叡墓出土瓷器（8-Nb8）は、高足杯と下盤とを共造りにしたようなもの（以下、Ⅲ類D）。北魏516年の河南・偃師出土瓷器（文献147）は、蓋燈Ⅳ類と共通し、この蓋と台とも共造りにしたようである（以下、Ⅳ類）。隋代の湖南・長沙出土瓷器（8-Ub9）はⅣ類を低くし、脚中央に太い突帯をめぐらした新形式（以下、Ⅴ類A）。Ⅴ類は唐代に盛行する。

蓋燈は、低目の新器形が登場する。北齊562年の山西・庫狄廻洛墓出土銅器（8-Mb3）。高台の高い燈台に、体部が丸味をもつやや深目の蓋燈をおく（以下、Ⅲ類A）。出土時には銅瓶を燈蓋上においていた。隋595年の山西・梅渚夫婦墓出土瓷器（8-Rb5）は、燈台の中空柱が高くなったもの（以下、Ⅲ類B）。伴出した他の1例は、丈の特に高いもので、中空柱に蠟燭を差し込んだと推定されている蓋（以下、蠟燭燈Ⅱ）と、燈台とを別造りにしたもの。586年の西安出土瓷器（8-Qc6）もほぼ同巧。蠟燭を立てている瓷器は、隋595年の河南・張盛墓（文献57）から出土している。燈台の中空柱が高いⅣ類の系譜をひくものは、燈蓋が半球状の杯形になる（以下、Ⅳ類）。古いのは北魏522年の洛陽出土瓷器（8-Ib7）で、528年の洛陽・元邵墓出土瓷器（文献78）もほぼ同巧。北齊570年の山西・婁叡墓出土瓷器（文献347）は蓮弁などを飾るもの。北齊567年の山西・庫狄業墓出土瓷器（文献471）も高いものだが、燈蓋は体部が外傾して反る新器形（以下、Ⅴ類）。

なお、隋586年の安徽・合肥墓出土瓷器（文献89）は、杯Ⅳ類Aだが、壁龕に置き、単独で燈蓋として使用していたことが明かである。

4 唐代から五代・十国時代における変遷

i 初・盛唐

a 供膳具・水器（付図9）

飲器 高足杯は新器形が登場する。8世紀中頃に埋納された西安・何家村（長安城興化坊）埋藏坑出土鍍金銀・銀器、同じ頃の西安・沙坡村（長安城春明門付近）出土鍍金銀・銀器が代表例である。北魏5世紀後半に出現したⅡ類の系譜をひき、杯は細身だが丸底で、脚も高くなるもの（以下、Ⅵ類）と、口縁が外反して伸びる皿状の身に、高足がつくもの（以下、Ⅶ類）とがある。

新器形のⅥ類は、何家村例（9-T₁）や沙坡村例（9-U_{a1}）で、脚に太目の突帯、杯の口縁下に細い突帯をもつⅥ類の典型例である。（以下、Ⅵ類C）。741年の河南・慶山寺塔地宮出土鍍金銀器（9-S_{a1}）もほぼ同巧。何家村・沙坡村例は、狩獵文を飾り、7世紀後半とする見解がある（文献16・488）。日本の奈良・興福寺出土例からみて、Ⅵ類Cはすでに720年頃に存在したことは確かであり、7世紀後半に遡る可能性は十分にある。金属器以外だと、初唐頃の広東・英徳出土釉陶（9-A_{a1}）や、早期の湖南・長沙出土陶器（9-D_{b1}）が古い例である。前者は脚や杯部に突帯がなく（以下、Ⅵ類A）、後者は脚に太い突帯があるが、口縁下に突帯がない（以下、Ⅵ類B）。Ⅵ類Bは、則天武后期、すなわち7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土三彩（9-L_{b1}）まで残る。Ⅵ類は8世紀後半以後の確かな例がない。630年の陝西・李寿壁画墓（第11図1）の女性が手にするのはⅥ類であろうが、A～C種のいずれかは確定できない。他に米国・フリーア美術館蔵銀器（9-W_{d1}）は、Ⅵ類Cに似るが、口縁端を花卉状につくる（以下、Ⅵ類D）。中国での確実な出土例はないが、中・晩唐に盛行する高足杯Ⅷ・Ⅸ類の祖型になる可能性があるので敢えて取り上げた。Ⅵ類Dの年代は、脚の中程に太い突帯があり、狩獵文も飾ることから、8世紀中頃までに納まると考えている（文献488）。

新器形のⅦ類の一つは、初唐とみる安徽・郎溪出土銀器（9-N_{c1}）で、杯の腰に稜がある（以下、Ⅶ類B）。後述の何家村出土の把手付杯Ⅶ類Bに似ており、初唐でも新しく7世紀末頃になるのではと推測する。8世紀中頃の西安・沙坡村出土鍍金銀器は、杯を輪花状につくる。脚・杯ともに突帯がない浅目のⅦ類C（9-U_{a3}・U_{a4}）と、脚に太い突帯をもつ深目のⅦ類D（9-U_{a5}）である。ほぼ同時期の西安・韓森寨出土鍍金銀器（9-V_{a2}）は、杯の腰に稜があるⅦ類E。日本の奈良・興福寺出土品から見て、Ⅶ類Eは720年頃に存在したことが確かである。金属器以外では、初唐の河北・邢窯出土瓷器（9-D_{c2}）がある。Ⅶ類Cに似るが、杯身は輪花ではなく、円形（以下、Ⅶ類A）。同類は、中唐とみる河北・邢窯出土瓷器（11-E_{e1}）にあるが、これを除くと、8世紀後半以降の確実な例はない。Ⅵ・Ⅶ類はササン朝ペルシャなどからの影響と見ている（文献95・488・501）。

高足杯は他に、杯部が内弯気味のⅣ類Bの系譜をひくものが667年の陝西・段伯陽出土瓷器（文献298）、杯部が口縁でわずかに外反する浅目のⅤ類Cが、初唐の河北・邢窯出土瓷器（文献367）にあるが、ともに以後にはつづかない。前者は、蓮弁や円・方文を半浮彫にしており、

ガラス器の模倣と推測する（以下、Ⅳ類C）。

把手付杯も新器形になる。697年の西安・姚无陂墓出土銀器（9-La2）は、体部が反り、下腰に稜がつく細身のもの（以下、Ⅵ類A）。8世紀中頃に埋納された西安・何家村出土金器（9-T2）や沙坡村出土銀器（文献302）もほぼ同巧。他の沙坡村出土銀器（9-Ua2）は浅目で口縁が開くもの（以下、Ⅵ類B）。Ⅵ類は、中唐とみる河北・邢窯出土瓷器（11-Ee2）にⅥ類Aがあるのを除くと、8世紀後半以降の確実な例がない。8世紀中頃の何家村出土金器（9-T3）は八稜形であるのが特徴（以下、Ⅶ類A）。各面に中国官人風の人物像などを半立体的にあらわす。7世紀の伝世品とする見解もある（文献16・501）。後述する高台付杯Ⅶ類の存在から、8世紀初に存在したことはほぼ確かといえる。唐草文を線表現する西安・韓森寨出土鍍金銀器（9-Va1）は8世紀中頃。何家村出土銀器（9-T4）は、やや浅目で八花形につくる（以下、Ⅶ類B）。以後の、Ⅶ類の確実な例はない。Ⅶ類はササン朝ペルシャなどからの影響とみている（文献95・501）。

金属器以外の新器形は、684年の湖北・李徽墓出土三彩（9-Ja2）や、7世紀末～8世紀中頃とみる西安出土交胎陶器（文献2）。前者は杯が筒状だが、口縁で反るもの（以下、Ⅳ類）、後者は腰が丸味をもち、口縁で反る杯に把手をつけたもの（以下、Ⅴ類）。741年の河南・慶山寺塔地宮の壁画（第12図4）には、僧がⅤ類らしきものを手に持っている。Ⅳ・Ⅴ類ともに以後にはつづかない。

把手付壺形杯は、遼寧・李家營子出土銀器である（9-Ha1）。壺形だが、口縁が外反するものである（以下、Ⅲ類）。年代は、決め手に欠けるが、618～683年に比定する人もいる（文献16）。類品は8世紀中頃以前とみる西安・興化坊出土銀器（文献499）にもある。西域のソグド人壁画（文献421）も同類で、把手をつかんで飲もうとする様子がうかがえる。中唐ではすたれる。

楕円長杯は、上述の遼寧・李家營子から出土した銀器（文献95）がある。以後の例はない。曲長杯は、格好の出土例はないが、中唐では盛行しており、初・盛唐にも用いられた可能性はある。日本・白鶴美術館蔵鍍金銀器（9-Hb2）は、唐7世紀後半に比定している。典型的な八曲長杯（以下、Ⅱ類A）であり、日本の正倉院例とも類似する。角杯は684年の湖北・李徽墓出土三彩（9-Ja1）がある。630年の陝西・李壽墓壁画（第11図2）では右手に角杯、左手に提梁罐をもつ。8世紀中頃に埋納された西安・何家村出土例は瑪瑙製角杯である（文献310）。ただし、以後の例はない。耳杯は、8世紀中頃に埋納された西安・何家村出土銀器（文献16）がある。口縁が反るものである（以下、Ⅳ類）。耳杯は極めて稀で、以後の出土は知らない。

杯・碗・鉢 杯は、金属製品が少ないが、708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（9-Nb2）はその一つ。高台付杯Ⅳ類のうちでも、高さが口径を超える究極の一品である（以下、Ⅳ類D）。同墓では浅い高台付杯Ⅲ類の鉛製明器（9-Nb3）も出土している。高台付杯Ⅲ類は、初唐の湖南・長沙出土瓷器（9-Db4）、7世紀末～8世紀初の河南・鞏県出土三彩（文献435）、やや高目の高台付杯Ⅳ類Bは初唐初頃の広東・英徳出土釉陶（文献64）、高さが口径に近くなったⅣ類Cは則天武后7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土例（9-Lb3）まで残る。7世紀中頃の湖南・長沙出土瓷器（9-Db3）、652・654年の四川・冉仁才墓例（9-Ea1）や上述

の鞏義出土の他の例（文献235）は、Ⅳ類Dに似て、口縁が外反するもの（以下、Ⅳ類E）。741年の河南・慶山寺塔地宮出土瓷器（9-Sa2）は、口縁が外反するが、丈が低い（以下、Ⅳ類F）。既述したように、7世紀後半～8世紀前半の壁画（第11図8、文献56・385）をみると、盤上に杯Ⅲ類やⅣ類らしきものをのせて運んでおり、飲器と推測できる。体部がやや内湾気味に開く高台付杯Ⅴ類は、638年の湖北・楊氏墓出土瓷器（9-Ca5）にあるが、浅目である（以下、Ⅴ類B）。666年の寧夏・史鉄棒墓出土陶器（9-Fb2）や724年の西安・于隱一族墓出土陶器（文献424）のように、さらに浅いもの（以下、Ⅴ類C）もある。後者は燈蓋としている。741年の広東・張九齡墓出土釉陶（9-Rc6上）は高台付碗Ⅵ類Cの小型品（以下、高台付杯Ⅵ類C）。708年の陝西・韋洵墓出土銀器（文献259）は、既述した把手付杯Ⅵ類Aの把手のないもの（以下、Ⅶ類）。763年の湖南・鄭府君墓では、体部が直線的に開く浅目の高台付の瓷器（9-Wb2）も出土している（以下、Ⅷ類）。この系統は中唐につづく。718年の河南・李珣墓出土滑石器（9-Pb1）や733年の西安・韋美美墓出土三彩（9-Qb2）は、後述する稜碗Ⅲ類と同形だが、小型なので杯とした（以下、稜杯Ⅲ類）。

他に、新器形としては、668年の西安・李爽墓出土ガラス花形杯（文献291）、669・670年の寧夏・訶耽夫婦墓ガラス花形杯（9-Ga1）がある。浅目の六花形で平底（以下、花形杯Ⅰ類）。684年の湖北・李徽墓出土三彩（9-Ja3）は方形の花形杯（以下、花形杯Ⅱ類）。西安西郊出土鍍金銀器（9-Fc3）は高台付の八花形。韓偉編年第一期（618年～683年）。碗と呼んでいるが、小形であり、杯に含める（以下、花形杯Ⅲ類）。

平底杯はⅢ類が684年の湖北・李徽墓出土陶器（9-Ja4）、丸底杯はⅣ類が697年西安・姚无陂墓出土銅器（9-La5）や741年の河南・慶山寺塔地宮出土鍍金銀器（9-Sa5）に残る。丸・平底杯の新器形は、体部が丸みをもって立上ったのち外反するもの（以下、Ⅶ類A）。丸底では8世紀中頃の西安・何家村銀器（文献16）、平底では7世紀～8世紀中頃の西安出土銅器（9-Mb6）や江蘇・鎮江出土銅器（9-We3）がある。陶・瓷器だと、体部の外傾が強い（以下、Ⅶ類B）。丸底は731年の河南・鄭夫人墓例（9-Qa3）、平底は741年の広東・張九齡墓例（9-Rc3）。

碗のうち、丸底碗はやや深目のⅣ類が前期の湖南・長沙出土銅器（文献296）、浅目のⅤ類Bが625年の浙江・衢州出土銅器（9-Bb5）に残る。長沙例は器表に多数の沈線、衢州例は口縁近くに2本の沈線をめぐらせる。長沙例は、口径16.7～18.5cm、高さ7.5～8.5cmの3点があり、入子になっていた可能性があり、銅匙も伴出。新器形は、8世紀中頃の西安・何家村出土銀器（文献16）で、口縁が丸味をもって立ち上がったのちわずかに外反（以下、Ⅶ類）。体部に三葉文を飾る特殊品。韓偉（文献16）は、第一期（618～683年）に比定（以下、韓偉編年と略す）。

平底碗は、口縁がわずかに外反する浅目のものが登場する。741年の河南・慶山寺塔地宮出土瓷器（9-Sa6）などである。瓷器のⅤ類が、620年の洛陽・裴氏墓から出土している（9-Ba4）。

高台付碗は、体部が丸味をもってほぼ直に立ち上がるⅣ類が初唐に残るが、以後はすたれる。いずれも瓷器で、638年の湖北・楊氏墓例（9-Ca7）がほぼ最終資料。新器形は8世紀中頃の西安・何家村出土銀器（9-T8）で、浅い平底碗に高台をつけたもの（以下、Ⅰ類D）。口縁内唇が肥厚するのも特徴。韓偉編年では第一期（618～683年）。体部が外傾して口縁で外反

するⅥ類は、初唐の湖南・長沙出土瓷器（9-D b8）や661年の広東・許夫人墓出土瓷器（9-E c6）で、浅目だが、外傾が強くなる。（以下、Ⅵ類B）696年の西安・温思暎墓出土瓷器（9-K b5）は、さらに浅目になる（以下、Ⅵ類B）。741年の広東・張九齡墓出土釉陶（9-R c6中）もほぼ同巧。

高台付碗の新しい金属器の一群は、8世紀中頃に埋納された西安・何家村出土品。Ⅵ類に近いが体部が立ち気味で、口縁の反りも強い（以下、Ⅶ類）。A～Cの3種がある。Ⅶ類Aは金器（9-T9）と鍍金銀器（9-T11）で、体部が外傾気味で、反りも弱い。後者には新式である外被せの輪状撮みの笠形蓋が伴う。Ⅵ類Bは鍍金銀器（9-T10）で、体部が立ち、口縁の外反も強い。小型であり、杯とすべきか。Ⅵ類Cは鍍金銀器（9-T12）で、Ⅵ類Bより深く、輪状撮みの笠形蓋が伴う。これらのうち、Ⅵ類Aの金器（9-T9）とⅥ類Bの鍍金銀器（9-T10）は、体部に蓮弁などを表し、韓偉編年では第一期（618～683年）。ただし、瓷器でみると、741年の河南・慶山寺塔地宮出土瓷器（9-S a7）はⅦ類A、750年の河南・鄭瑋墓出土瓷器（9-V4・V5）はⅦ類Bで、何家村例はいずれも8世紀中頃とみていいであろう。Ⅶ類の典型例は以後にない。瓷器では、口縁端まで直線的に開くもの（以下、Ⅷ類）がある。750年の河南・鄭瑋墓例（文献9）、756年の河南・竇承家墓例（9-W b4）などのように8世紀中頃に多い。

高台付碗の他の新器形は、体部の腰に稜がある稜碗と花形の花碗。後者は少量の金属器が南北朝晩期頃には登場しているが、一時的で、出土例が多くなるのは7世紀後半～8世紀初あたりからである。稜碗の金属器は、732年の西安出土鍍金銅器（文献24）と8世紀中頃の西安・沙坡村出土銀器（9-U a7）。732年の西安例は、円形で口縁の反りが強い（以下、稜碗Ⅲ類）。類例は741年の広東・張九齡墓出土滑石器（9-R c5）。沙坡村例は口縁が強く反り、しかも花形でもある（以下、稜碗Ⅳ類）。円形の稜碗で古いのは7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土瓷器で2種がある。1例（9-M a7）は口縁の反りがやや弱いもの（以下、稜碗Ⅱ類）、他の1例（9-M a8）はⅡ類の丈を高くしたもの（以下、稜碗Ⅰ類）。706年の陝西・永泰公主墓出土三彩（文献300）はⅡ類のようである。718年の西安出土瓷器（文献31）や738年の河南・王仁波墓出土瓷器（9-R b4）はⅢ類に似るが浅目のもの（以下、稜碗Ⅴ類）。以後は、中唐と見る河北・邢窯出土瓷器（11-E e6）に稜碗Ⅲ類がある程度。

花碗は、南北朝晩期～隋のⅠ類Aの系譜をひくものが、8世紀中頃の西安・沙坡村出土銀器（9-U a6）にある。花卉が口縁に及んでいない点や脚がほぼ直である点が異なる（以下、花碗Ⅱ類）。年代は韓偉編年第一期（618～683年）である。伝洛陽出土銀器（文献263）はⅠ類からⅡ類への過渡的要素をもち、7世紀に比定している。他に、丈が高い高台付花碗（以下、花碗Ⅲ類）が盛唐の河南・伊川出土三彩（文献126）にある。外面全体を粟粒文で飾るのも特徴。

鉢は、古式の平底鉢Ⅲ類の系統が666年の寧夏・史鉄棒墓出土陶器（9-F b7）、隋代に登場した高台付Ⅳ類が初唐の河北・邢窯出土瓷器（文献367）に残る。主流は高台を省略した銅器（以下、平底鉢Ⅴ類B）。709年の河南・李延禎墓例（文献116）や同年の河南・李嗣本墓例（9-P a5）、733年の西安・韋美美墓例（9-Q b5）、738年の李景由墓例（9-R a7）などである。古いのは早期の安徽・繁昌出土瓷器（文献205）で、やや浅目である（以下、Ⅴ類A）。中唐にもつづく。

鉢の新器形は、体部が外傾したのち外反する深目の高台付。664年の陝西・鄭仁泰墓出土瓷器（9-Fa4）は花卉らしきものを表現（以下、Ⅵ類A）、675年の恭陵哀皇后墓出土瓷器（9-Ia4）は体部に段をつけるもの（以下、Ⅵ類B）。741年の広東・張九齡墓出土釉陶（9-Rc6下）は、高台付碗Ⅵ類Cを大きくしたもの（以下、Ⅵ類C）。641年の江西・興安出土銅器（9-Cc9）、709年の河南・李禎延出土銅器（9-Ob3）や同年の河南・李嗣本墓出土銅器（9-Pa4）は、丸底風の浅いもの。浅洗Ⅳ類に似るがやや小型で、口縁が直であることから浅い鉢とした（以下、Ⅶ類）。

飲器らしい特殊な小型の丸底鉢Ⅳ類Bは、初唐頃の広東・英徳出土釉陶器（9-Aa2）に残るが、以後は途絶える。

鉄鉢形・盃 鉄鉢形は、金属器の好例がないが、黒釉陶器が参考となる。7世紀末～8世紀初の西安出土例（文献2）や741年の河南・慶山寺塔地宮出土例（9-Sa9）は底がやや尖り気味（以下、Ⅲ類）。765年の洛陽・神会墓出土例（9-Wc6）は尖底なのが特徴（以下、Ⅳ類）。

盃は6世紀以来のⅣ類Aが盛行する。高台の付くものはないようである。673年の遼寧・左才夫婦墓出土銅器（9-Gc5）が典型だが、瓷器では655年の寧夏自治区・史道洛墓例（9-Eb8）や689年の山西・崔孛墓例（9-Jb6）などのように深目で蓋を伴うもの、678年の寧夏・史道洛墓出土例（9-Ib5）のように平底のものなどバラエティに富む。河南・鄭州出土三彩（9-Vd6）はⅣ類Aの系譜をひくが、底が尖り気味となる（以下、Ⅳ類B）。盛唐とするが、鉄鉢形との比較から、8世紀中頃になろう。隋代に登場する特に深目のⅤ類Aは、初唐の湖南・長沙出土瓷器（9-Db10）。708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（9-Nb6）は内弯が強いもの（以下、Ⅴ類B）。Ⅴ類は以後途絶える。

魁 魁は738年の河南・李景由墓出土銀器（9-Ra8）。把手はほぼ水平で、把頭を二又につくる（以下、Ⅲ類）。ほぼ同巧の金器（9-T14）が8世紀中頃の西安・何家村から出土。三脚がつく（以下、Ⅳ類）。鍋と考えている。食べ物をいれた魁を、直接火で温めることもしたと理解する。Ⅳ類の瓷器は、733年の西安・韋美美墓例（9-Qb6）などにあるが、8世紀後半からはすたれる。

盤・托・眷 大盤は、Ⅴ類A（円案）の出土例が見当たらなくなる。671年頃の福建・泉州出土瓷器（文献118）、7世紀末～8世紀初頭の河南・鞏義出土三彩（9-Ma9）は、Ⅵ類だが、高台がつき、盤もやや深目となる（以下、Ⅵ類C）。上に小盤と杯、あるいは7個の杯をのせている。706年の陝西・懿徳太子墓壁画（第11図11）では、女人が大きな盤に果物か菓子らしきものを盛っており、大盤が食器であったことも示す。以後の例はない。

大盤の新器形は、三脚を伴うもので、脚下端が勾状に反り上がるのが特徴。744年の遼寧・韓貞墓出土銅器（文献82）が初現のようである。口縁が外折し、やや深目なのが特徴（以下、三脚円盤）。同墓ではほぼ同巧の中盤も出土。金属器以外でみると、728年の河南・鞏義出土三彩（文献275）が古い。この上には高台付の白瓷杯Ⅳ類Aらしきものを9個のせており、器台としても使用されたことがわかる。報告では飲茶器とみている。天宝年間（742～755年）の西安・韓森寨（慶徳宮）出土鍍金銀器（文献16・294・501）や西安・八府庄（大明宮東苑付近）出土鍍金銀器（9-Ub8）は、浅い花形で、口縁が外折して水平にのびるのが特徴（以下、三脚花盤）。このうち韓森寨例は八花形で、花卉端が尖る稜花形（以下、三脚花盤Ⅲ類A）。内底

に鳳凰に似た鸞鳥を飾る。河北・寛城出土鍍金銀器（9-Vb7）もほぼ同巧だが、六稜花形で、内底に日本の正倉院例と似た大角鹿を飾る。年代も前二者と近いと推測する。八府庄例は、六花形で、花卉端が円形（以下、三脚花盤Ⅱ類B）。以後は三脚を伴わない花盤が主となる。なお、630年の陝西・李寿墓壁画（第11図4）や706年の陝西・懿德太子墓壁画（第11図9）には、女人が比較的大きな花盤らしきものを両手に奉げ持っている。

中盤はV類Aが初唐頃の広東・英徳出土釉陶（9-Aa3）に残る。666年の寧夏・史鉄棒出土鉛器（文献29）や669・670年の寧夏・河耽夫婦墓出土鉛器（9-Ga2）は、明器だが、V類のおそらく中盤と推測される。山西・祖仁墓出土三彩（文献60）は、横長で、両端を花形につくる特殊品（以下、花形長盤Ⅰ類）。初唐とするが、伴出した瓶から、7世紀末～8世紀初と推測する。三脚円盤は、上述した744年の遼寧・韓貞墓出土銅器（文献82）がある。745年の西安・宋氏墓（文献54）では三脚円盤と三脚花盤の鉛製明器を伴出。741年の河南・慶山寺塔地宮出土三彩（9-Sa10）もほぼ同巧の三脚円盤。三脚盤は以後の例がなさそうである。

小盤は、古式のⅥ類Aが、661年の広東・許夫人墓出土瓷器（9-Ec3）や741年の広東・張九齡墓出土陶器（9-Rc2）に残る。高台付のⅥ類Bの系統をひくのは、遼寧・敖漢旗出土鍍金銀器（9-Ha3）だが、高台はやや高く八字状になる（以下、Ⅵ類C）。内底に虎らしき動物を飾る。ササン朝ペルシャの影響をうけたもので、年代は618～683年に比定している（文献16など）。652・654年の四川・冉仁才墓出土瓷器（9-Ea4）はそのⅥ類Cを模したものであろう。新器形は、体部が丸味をもって立ち上がる738年の河南・王仁波墓出土瓷器（9-Rb1）である（以下、Ⅶ類A）。盛唐早期とみる河南・鄭州出土瓷器（9-Occ2）、7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土瓷器（9-Lb4）や708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（9-Nb4）や750年の河南・鄭瑋夫婦墓出土銅器（9-Vc5）は口縁のやや外反する（以下、Ⅶ類B）741年の河南・慶山寺地宮出土三彩（9-Sa3・Sa4）は体部が開き気味（以下、Ⅶ類C）。金属製品の新器形は、脚がない平底の花形の盤（以下、花盤）。664年の陝西・鄭仁泰墓出土銅器（文献312）や寧夏・史鉄棒出土銅製明器（9-Fb5）が初出のようである。ともに口縁は直立するのが特徴で、前者は六稜花形（以下、花盤Ⅰ類A）、後者は六花形（以下、花盤Ⅰ類B）。後者と同類は708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（9-Nb5）。Ⅰ類の鉛製明器は742年頃の西安出土例（文献272）にもある。8世紀中頃に埋納された西安・何家村では八花形銀器（9-T5・T6）や桃形銀器などがあり、内底に鳳凰や熊などを飾る。体部が外傾したのち、口縁で短く外折するのが特徴（以下、花盤Ⅲ類）。三脚円盤は7世紀末～8世紀初の西安出土交胎釉陶（文献2）がある。

托は好例がない。7世紀後半～8世紀前半の壁画（第11図8、文献56・385）をみると、杯Ⅳ類らしきものを下盤にのせて運ぶ様子がうかがえる。中盤V類Aや小盤Ⅵ類Aなどがそれにあたるのかもしれない。

眷らしきものは、630年の陝西・李寿墓壁画や668年の西安・李爽墓壁画（第11図4）にある。7・8世紀とみる杯Ⅳ類Dをいれた滑石製品（文献48）があるが、類例は乏しい。

洗・銅 洗と呼んでいるものは、いずれも浅洗で、多くは銅器。北魏5世紀のⅡ類の系譜をひくが、口縁は外反程度のものもある。古いのは673年の遼寧・左才夫婦墓出土銅器（9-Gc7）、

7世紀末～8世紀初の河南・鞏県出土三彩（9-Lb10）で、口縁の外反は強くない（以下、IV類A）。主流は、694年の河南・李守一墓出土銅器（9-Jc7）、718年の河南・李珣墓出土銅器（9-Pb6）、733年の西安・韋美美墓出土銅器（9-Qb7）や738年の河南・李景由墓出土銅器（9-Pa4・Ra10）、744年の遼寧・韓貞墓出土銅器（9-Sc16）や盛唐とする河南・偃師出土銅器（文献181）などで、口縁がやや上向きに外折する（以下、IV類B）。731年の河南・鄭夫人墓出土銅器（9-Qa8）、8世紀中頃の西安・何家村出土金器（文献16・310）は、体部が外傾したのち外反する（以下、IV類D）。708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（9-Nb8）はIV類Bに大きな高台をつけたもの（以下、IV類C）。これらのうちIV類Dは以後もつづく。なお、開元～天宝年間（713～755）とみる敦煌・莫高窟第130窟の壁画（第12図2・3）に、反口瓶V類をのせたIV類らしきものがあり、IV類が瓶とセットで、洗として用いられたことを推測させる。同じ頃の莫高窟壁画の剃髮図（文献14）では瓶IV類かV類と、形状は異なるが高台付洗らしきものが傍らに置かれている。ただし、出土例では、瓶と洗とが伴出した確実な例がなく、礼器としての意識は薄れたのではないかと考える。

銅は陶器か瓷器。浅銅はI類の系統が619年の遼寧・朝陽出土陶器（文献432）、深銅I類の系統が675年の恭陵哀皇后墓出土瓷器（9-Ia7）、684年の湖北・李徽墓出土陶器（文献365）などにある。以後はほとんど副葬しなくなるようで、実態が明らかではない。

匱 匱は後漢以降に途絶えていた。唐に復活するが、漢代のような礼器ではなく、酒や水を一時的に取って注ぐ、いわゆる日本の片口の機能を果たすと推測する。初・盛唐では8世紀中頃の西安・何家村出土鍍金銀器（9-T15）が唯一のようである。碗Ⅶ類Cに注口をつけたもの（以下、碗形匱）。中唐にもつづく。

盒・高足香盒・豆 盒は銀器（一部は鍍金）が多く、バラエティに富む。円筒形のⅢ類Aは741年の河南・慶山寺塔地宮出土例（9-Sa8）や8世紀中頃の西安・何家村出土例（9-T13）に残る。後者の一部には薬用の琥珀・珊瑚・金屑などを入れていた。前者では香爐と推定する爐が出土しており、盒は香盒であった可能性がある。Ⅲ類Aに似るが、上下面が盛り上がるⅢ類Bは718年の西安出土例（文献31）から731年の河南・鄭夫人墓出土例（9-Qa4）や8世紀中頃の西安・何家村例（文献16）、貝形のV類はⅢ類と共伴する例が多く、718年の西安出土例（文献31）から738年の河南・李景由墓例（文献132）、花形のⅥ類Aは同じく李景由墓例（文献132）で、それぞれ中唐にもつづく。

高足香盒は765年の洛陽・僧神会墓出土銅器（9-Wc5）と同巧の江西・瑞昌唐墓出土鍍金銅器（文献395）。撮みが相輪状になる、日本のいわゆる塔鉢（以下、高足香盒Ⅲ類）。ともに類似した柄香爐（10-Wc3）が出土しており、これとセットになる。710～712年の四川・広元千仏崖彫像（第12図1）では、官人が柄香爐と高足香盒をもつ。柄香爐の出土例は、唐では初唐の河南・長沙墓出土銅器（文献296）が古い例。高足香盒は、以後の確実な例はない。

豆は口径が15cm前後の小形豆か明器と、口径20cmを越える大形豆とがある。後者は675年の河南・哀皇后墓出土瓷器（9-Ia6）で口縁が外反（以下、Ⅲ類）。前者は体部がほぼ直に立ち上がるI類が664年の陝西・鄭仁泰墓出土鍍金銅器（文献312）にある。I・II類の鍍金銅製明器が666年の寧夏・史鉄棒墓（9-Fb9）や669・670年の訶耽夫婦墓（9-Ga6）、I類の鉛製明器が708年の河南・李文寂夫婦墓（9-Nb7）から出土。豆は以後の出土を知らない。

b 貯蔵具・注器（付図10）

鶏冠壺・瓶 扁壺は中唐の例があるが、北辺部を除くとほとんどすたれてしまう。8世紀中頃の西安・何家村出土銀器（10-T1）は、皮囊（水袋）を起源とした、一般に鶏冠壺と呼ばれているもの。盛唐の西安出土瓷器（文献170）もあるが、これも北辺部が主で、遼代（916～1125）に盛行する。

瓶は反口瓶が主流である。出土金属器の例は少ない。その一つは741年の河南・慶山寺塔地宮出土鍍銀器（10-Sa1）。下肥れの反口瓶V類（いわゆる王子形水瓶）Bの系譜をひくが、下肥れの度合いが強く、脚もやや高く八字状になるのが特徴である（以下、V類C）。瓷器で見ると、初唐の河北・琉璃河出土三彩（10-Dd1）や山西・祖仁墓出土陶器（文献60）、675年の恭陵哀皇后墓出土瓷器（文献273）は古式のV類A。前二者も初唐でも7世紀末近くで、祖仁墓は次述するように8世紀初にかかる可能性がある。肩が張った短胴のIV類（いわゆる蕉形水瓶）はいずれも三彩や瓷器など。684年の湖北・李徽墓出土三彩（10-Ja1）は、隋代のIV類とほぼ同巧。643年の遼寧・朝陽出土瓷器（10-Da1）や630年の陝西・李寿墓壁画（第11図3）で女人が捧げ持つのはIV類に近い。7世紀末～8世紀初の陝西・鞏県出土三彩（10-Kc1）は球胴に近く、脚もさらに高い（以下、VI類A）。上述した祖仁墓の三彩（文献60）や江蘇・揚州出土三彩（文献318）は頸・脚がより長くなる（以下、VI類B）。741年の河南・慶山寺塔地宮出土彩絵陶（10-Sa2）はVI類Aの系譜をひくのであろうが、下肥れ気味である（以下、VI類C）。

直口瓶の系統は718年の西安出土釉陶（文献328）がある。頸の両側に円筒をつけたもので、五代の絵画資料（文献14）からみて投壺である。741年の河南・慶山寺塔地宮出土ガラス器（10-Sa1）は特殊で、舎利用か（以下、II類）。

浄瓶は新種で、肩にも口を設けたもの。古いのは738年の河南・王仁波墓出土釉陶（文献274）で、反口瓶V類Aに口を付けたもの（以下、I類）。脚はやや高めで、八字状。陶器のため蓋を共造にしている。765年の洛陽・僧神会墓出土銅器（10-Wc1）は銅下半が直線的となり、脚も低い（以下、II類）。蓋は別造りで、撮みは円筒形。日本・韓国では撮みが多面体の古式例があるが、中国では明かではない。

壺・細頸壺 細頸壺はいわゆる玉壺春式のIV類Bが657年の陝西・張士貴夫婦墓出土瓷器（文献96）や7世紀末頃の河北・琉璃河出土釉陶（10-Dc2）などにつづく。新器形は球胴で、頸の長い反口のもの（以下、V類）。671年頃の福建・泉州出土瓷器（10-Gb1）、708年の西安出土陶器（10-Oa1）など。

球胴壺は、756年の河南・竇承家墓出土陶器（文献9）のように反口・長頸のもの（以下、IV類）があるが、稀な例。長胴壺は瓷器や陶器は多いが、金属器はない。代表例をあげる。古くからあまり変化しないII類Aが620年の洛陽・裴氏墓出土瓷器（文献97）、7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土瓷器（文献235）など。後者には内被せの笠形蓋が伴う。7世紀末～8世紀初の西安出土彩絵陶器（10-Mb1）は、II類だが、相輪状の撮みをもった蓋と鼓形器台を伴う（以下、II類B）。塔式罐と一般に呼ばれるもので、以後盛行する。738年の河南・李景由出土陶器（10-Ra1）、750年の河南・鄭琇夫婦墓出土陶器（10-Vc1）などである。盤口のIII類

は、胴が特に長いⅢ類Bが625年の浙江・衢州出土瓷器（10-B b₁）や694年の江蘇・伍松超墓出土陶器（10-K a₂）、頸が長いⅢ類Cが638年の湖北・楊氏墓出土瓷器（10-C a₁）、641年の広西・興安出土瓷器（文献529）に残る。Ⅲ類は中国南半部での地域色かもしれない。

唾壺 金属器は708年の陝西・韋洵墓出土銀器（文献259）。同巧品は655年の寧夏・史道洛墓出土瓷器（10-E b₃）、7世紀末～8世紀初の河南・鞏県出土瓷器（10-L b₃）や三彩（10-M a₃）で、隋代より盤口上端の開きがやや大きくなる（以下、Ⅳ類）。742年の西安出土瓷器（10-S b₁）は口縁は開くが、頸の細い変種（以下、Ⅴ類）。

罐・提梁罐・瓮・壘 短胴罐で金属器は、孟に似る短頸のⅣ類がある。早期の湖南・長沙出土銅器（10-C b₃）で、扁平で丸底なのが特徴（以下、Ⅳ類E）。極めて稀な例で、以後には続かない。球胴のⅡ類系統が671年頃の福建・泉州出土瓷器（文献118）や738年の河南・王仁波墓出土瓷器（文献274）などにある。四耳付きのⅤ類Aは664年の陝西・鄭仁泰墓出土釉陶（文献312）や7世紀末～8世紀初の江蘇・徐州出土瓷器（10-L c₄）が最終例。

長胴罐は、最大径が胴中位あたりにあるⅡ類が、643年の遼寧・朝陽出土陶器（文献432）や7世紀末近くの河北・琉璃河出土陶器（文献448）にある程度だが、四耳付きのⅤ類は初唐の河南・鞏義出土瓷器（10-A c₃）、673年の遼寧・左才夫婦墓出土瓷器（文献478）、684年の湖北・李徽墓出土陶器（文献365）などがある。

瓮の金属器は、738年の河南・李景由墓出土銅器（10-R a₃）。外被せの宝珠形撮み笠形蓋を伴う。同類は8世紀中頃の西安・沙坡村出土銀器（文献302）で、撮みの座金は花形。同じ頃の西安・何家村出土銀器（文献16・310）は同類と思われるが、小形品で薬石を入れていたようである。金属器以外だと、641年の遼寧・朝陽出土陶器（10-D a₃）、684年の湖北・李徽墓出土陶器（文献365）、709年の河南・李延禎墓出土陶器（10-O b₃）、756年の河南・竇承家墓出土瓷器（文献9）などがある。

提梁罐は、肩の張った銀器が8世紀中頃の西安・何家村から出土（文献16）。同巧品は732年の西安出土銅器（文献24）。何家村では球胴に近くなった銀器（10-T₂・T₃）も出土。うち1点は外被せの輪状撮み付き笠形蓋が伴う。ともに高台がある。731年の河南・鄭夫人墓出土銅器（10-Q a₃）は平底。同巧の銅器は福建・浦常からも出土（10-P d₂）。前者は鍍と呼んでおり、火にかけた可能性もある。既述した北周の鍍Ⅴ類とも類似しており、その伝統が残ったのかも知れない。630年の陝西・李寿墓壁画（第11図2）では、女人が提梁罐をさげ、もう一方の手に角杯をもっており、罐に酒の入っていた可能性も示す。他に円筒状の提梁罐が741年の河南・慶山寺塔地宮出土銅器（10-S a₄）にある。

壘は金属器がない。肩の張ったⅢ類Aが667年の陝西・段伯陽墓出土瓷器（文献298）、肩の張りが弱いⅢ類Bが689年の山西・崔孛墓出土陶器（文献364）、718年の河南・李珣墓出土陶器（10-W d₂）、袋状口縁のⅣ類が673年の遼寧・左才夫婦墓出土瓷器（10-G c₂）にある。

鍍壺・三脚罐 鍍壺は673年の遼寧・左才夫婦墓出土銅製明器（10-G c₃）が唯一例。前漢代Ⅰ類の復古品のような古調を示すが、北周のⅤ類に似て、注口が立ち上がらず、ほぼ水平な点が新味（以下、Ⅵ類）。以後は途絶する。

三脚罐は、短胴罐に三脚をつけたもの。718年の西安出土鍍金銀器（文献31）が初出のようである。頸がやや長目で、球胴（以下、Ⅰ類）。総高5.3cmの超小型品。類似した小型品は8世

紀中頃の西安・何家村出土銀器（文献16・310）にあり、薬石用と推定している。ともに宝珠形撮みの笠形蓋を伴う。744年の遼寧・韓貞墓出土三彩（文献82）は、総高約18cm。球胴だが、短頸（以下、Ⅱ類A）。Ⅰ類は前漢の鍬尊と類似し、温めることにも用いたと推測する。Ⅱ類も同様であろう。中唐にもつづく。

有柄壺・有柄注壺・注壺・水注 有柄壺は金属器がない。盤口の壺Ⅲ類に長い環状把手1個をつけた瓷器が668年の西安・李爽墓から出土（文献291）。最終例である。新器形は双柄だが単胴（以下、双柄壺Ⅱ類）で、7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土三彩（10-Ma2）、706年の河南・宋祐墓出土三彩（10-Na1）、738年の河南・王仁波墓出土瓷器（10-Pb2）などがある。類例は、中・晩唐にはないようだが、北宋にはある。

有柄注壺は金属器がある。口縁を片口にしたⅣ類の銀器が内蒙古（文献437）と遼寧・敖漢旗（10-Ha2）から出土。北周のⅣ類Aに比して、ともに球胴に近い点異なる（以下、Ⅳ類D）。内蒙古例は7世紀後半と推定しており、遼寧例も近いと考える。708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（10-Nb2）もほぼ同巧。7世紀末～8世紀初と推定する河北・蔚県出土土釉陶（10-Mc4）は肩が張る（以下、Ⅳ類E）。蓋は鳳凰形である。類例は706年の陝西・永泰公主墓壁画（第11図7）で女人が手にするが、器形はⅣ類Cに近い。741年の河南・慶山寺塔地宮出土銅器（10-Sa5）は、下肥れが強い（以下、Ⅳ類F）。胴下半に飾る人面からインドあたりからの招来品とみている。

反口・長頸の長胴壺の肩に注口をつけた有柄注壺Ⅴ・Ⅵ類は、確実には8世紀に入った出土例が出てくる。706年の河南・宋祐墓出土銅器（10-Na2）は注口が短い^{註9)}が、なで肩で、胴もやや短目（以下、Ⅴ類A）。761年の河北・史忠明墓出土瓷器（10-Wb2）も注口は短い、胴長で肩が張る（以下、Ⅵ類A）。

注壺は、長胴壺の口縁を片口にしたⅣ類の瓷器が、668年の西安・李爽墓（文献291）から出土している程度。

水注としたのは、短胴罐に注口をつけた三彩（文献24）。これも類例は少ない。

以上の他に特殊なものとして、二重口縁罐が684年の湖北・李徽出土瓷器（文献365）に残るが、以後は途絶える。

c 煮沸具（付図10）

鍋・提梁鍋・三脚鍋 鍋は口縁下がくびれるⅡ類が684年の湖北・李徽墓出土鉄器（10-Ja4）に残る。口縁が長く、胴も長手になって、日本でいう釜に近いものとなる（以下、Ⅱ類D）。738年の河南・李景由墓出土銀器2点は、小型であり、碗とする。だが、西晋までの鍋Ⅰ類と形が類似することから鍋とみる。1点（10-Ra4）は深目のⅠ類Dに近いが、他の1点（文献132）は体部が外傾する浅目のもの（以下、Ⅰ類E）。釜とともに類例が少なく、実態は不明。

提梁鍋は新器種。731年の河南・鄭夫人墓出土銅器（10-Qa4）は、深目の半球状で、外に梁をつけるもの（以下、Ⅰ類）。8世紀中頃の西安・何家村出土銀器のは、口縁が外反する浅目の鍋である。うち1点（10-T4）は、口縁の外反が弱いもの（以下、Ⅲ類）。他の1点（10-T5）は口縁が二段になるもの（以下、Ⅳ類）。ともに薬石を調合（練丹）するためのものと推定している。

三脚鍋は、三国時代までであったⅠ類の系譜をひき、口縁がわずかに外反するものが8世紀中頃の西安・沙坡村出土銀器（文献302）にあるようだが、詳細不明。主体になるのは、口縁の内側に環状ないし方形の耳をつけるものだが、三国時代までであった三脚鍋Ⅰ類と異なって、口縁は強く外反し、脚も長い（以下、Ⅲ類A）。744年の遼寧・韓府君夫婦墓出土鉄器（10-S c3）や、ほぼ同じ頃と推定する河南・鄭州出土鉄器（10-V d4）。瓷器だと初唐の湖南・長沙墓出土明器（10-Db4）がある。同墓からは口縁か二段になった瓷器（文献101）も出土（以下、Ⅳ類A）。また、それに注口をつけた瓷器（10-Db5）も出土している（以下、Ⅳ類B）。

釜・甑 出土例は、706年の陝西・永泰公主墓出土釉陶（文献300）ぐらいである。釜は鐔付の球胴Ⅱ類Bで、甑をはめ込む。甑は、筒状Ⅲ類の陶器が684年の湖北・李徽夫婦墓（10-J a3）から、底に大孔1個を穿ったⅤ類の瓷器が652・654年の四川・冉仁才墓（文献223）から出土。墓への副葬例が少なく、実態はつかめない。

鏝斗 鏝斗は、古いⅡ類の系統をひく、630年の洛陽・裴氏墓出土鉄器（10-B c4・B c5）がある。深目で把手が龍頭でないのは鉄器のためか。注口付のⅥ類Aも673年の遼寧・左才夫婦墓出土銅器（10-G c4）や、8世紀中頃の西安・何家村出土銀器（文献310）にある。後者は菓を温めるものと推定。唐代に入ってから新式は、Ⅱ類の系譜をひくが、把手の対面に板状の尾翼をつけたもの。尾翼には環をつけたものがある。把手と環に梁をつけ吊ったのであろうか。7世紀末頃と推定する河北・琉璃河出土鉄器（10-D d5）や7世紀末～8世紀中頃の江蘇・鎮江出土銅器（10-We4）は注口のないもの（以下、Ⅴ類A）。738年の河南・李景由出土銅器（10-R a5）は注口のあるもの（以下、Ⅴ類B）。後者の類例は福建・浦城出土銅器（文献131）。744年の遼寧・韓府君夫婦墓出土鉄器（10-S c2）は、口縁がほぼ直なもの（以下、Ⅵ類）。鏝斗は、以後は途絶える。

d 雑器（付図10）

熨斗 708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（10-N b4）があり、把手の頭を宝珠形につくるⅢ類。墓への副葬例が少ないため、実態は明らかでない。

爐 三脚付の爐Ⅳ類Aは初唐の湖南・長沙出土瓷器（10-Db6）や671年頃の福建・泉州出土瓷器（10-G b6）などがあり、Ⅳ類Bは641年の広西・興安出土瓷器（文献529）などがある。8世紀初と推定する河南・鄭州出土瓷器（10-P a7）も三脚付だが、器は盤状であり、爐の下盤になろう。

爐の新器形は、北周に登場したⅢ類Aの系譜をひき、これに蓋を加えたもの。741年の河南・慶山寺塔地宮出土鍍銀器（10-S a6）は、天井部が盛り上がった、ハート形透しの蓋を伴う（以下、Ⅲ類C）。胴部は無文で、六脚なものも特色。8世紀中頃の西安・何家村出土銀器（10-T 6）は三葉文透しの蓋と、身及び中間材の三段構成（以下、Ⅲ類D）。胴部は沈線をめぐらせ、口縁は中間材をうけるために直に立ち上げている。五脚。これは薫爐とする。

燈 盛行するのは隋代に出現した豆形Ⅴ類。高足盤（豆）とも呼んでいるが、後述する874年頃の法門寺出土例からみて燈である。ただし、これがいわゆる金山寺形香爐の祖型になると考える。金属器はない。689年の山西・崔孛墓出土瓷器（10-J b5）が古い例。体部は浅目で口縁が外折し、脚部は中程に太い突帯をもつが、丸底風のもの（以下、Ⅵ類B）。盛唐早期とす

る河南・鄭州出土三彩（10-Oc5）も同類。709年の河南・李嗣本墓出土三彩（10-Pa6）は、脚が八字状で、突帯もない（以下、V類C）。738年の河南・王仁波墓出土瓷器（10-Rb6）も同類。中唐にもつづく。671年頃の福建・泉州出土瓷器（10-Gb5）は豆燈Ⅲ類の系譜をひくが、油皿が浅い（以下、Ⅲ類E）。708年の陝西・永泰公主墓出土瓷器（文献300）も同類だが、皿の脚が特に長く、しかも多数の突帯をめぐらす（以下、Ⅲ類F）。初唐の広東・曲江出土陶器（10-Ab4）は燈台の脚が特に長くなった新器形（以下、Ⅳ類）。蓋と台を別造りにした蓋燈の好例は知らない。

他に蠟燭燈Ⅱが、706年の河南・宋祐墓出土銅器（10-Na3）にある。初唐の河南・長沙出土瓷器（10-Db7）や7世紀末～8世紀初の河南・鞏県出土三彩（10-Lb5）も同類。706年の陝西・永泰公主墓壁画（文献300）や同年の懿徳太子墓壁画（第11図9・11）には、蠟燭をさした盤状のものを捧げもつ女人の姿がある。

なお、杯や碗の一部が燈として用いられていることは、既に触れた通りである。ほぼ同形だが、763年の湖南・鄭府君墓出土瓷器（10-Wb5）は、内耳1個をもち、蓋燈とみている（以下、蓋燈Ⅵ類）。

ii 中・晩唐～五代・十国時代

a 食膳具・水器（付図11）

飲器 高足杯は、Ⅶ類Aの系統が中唐とみる河南・邢窯出土瓷器（11-Ee1）に残るが、稀な例。中・晩唐では杯部が縦長の花形になる（以下、Ⅷ・Ⅸ類）。Ⅶ類は口縁が外反するもの、Ⅸ類は口縁がほぼ直なもので、ともに脚は太く低目である。Ⅶ類は江蘇・丹徒出土銀器の2点（文献342）。1点は、腰に稜があるもの（以下、Ⅶ類A）、他の1点は杯部に遶がなくやや浅目のもの（以下、Ⅶ類B）。丹徒出土品の年代は、原報告（文献342）では盛唐晩期としたが、韓偉（文献16）は第四期（821～907年）とした。Ⅶ類Aは稜碗や高足杯Ⅵ類Dの影響がうかがえ、古調であるが、類例が少なく断定できない。後述する他の伴出品からみて、大きくは9世紀後半としておく。

Ⅸ類は、銀器の例が多い。850年頃の陝西・背陰村出土例（文献307）や901年の江蘇・水丘墓出土例（文献16）などだが、以後の確実な例はない。

他に、901年の江蘇・水丘墓出土銀器（11-Nc5）は杯身が半球状のもの。高足杯とするが、口縁外端には蓋受けの段があり、香爐か盒の可能性が強い。晩期の江蘇・鎮江出土瓷器（11-Oa1）は豆とする。口径10.4cm、高さ10.8cmであり、高足杯かもしれない。V類としては、杯が浅目で開き気味（以下、V類D）。V類Dは北宋にも続くが、例は少ない。

角杯はなく、把手付杯も中唐とみる河南・邢窯出土瓷器（11-Ee2）にⅥ類Aの系統が唯一ある程度だが、曲長杯は盛行する。典型的な曲長杯Ⅱ類Aは、850年頃の陝西・背陰村出土銀器で、小さな高台がつく（文献307）。Ⅰ類に類似した鍍金銀器は晩期の浙江・長興出土例（文献343）。900年の浙江・錢寛墓出土瓷器（11-Nb1）は高い脚がつく（以下、Ⅱ類B）。同類の銀器は877年銘の伝西安・北邙山出土例（文献500）や江蘇・鎮江唐墓出土例（文献489）などがある。824年の河南・齊国太夫人墓出土金器（11- Da2）は、四花形の楕円杯で、大きい高

台がつく（以下、花形長杯）。これには、後述するように、花形長盤Ⅱ類Aが托として用いられた可能性がある。花形長杯の出土例は多く、840・842年の河南・崔防夫婦墓出土銀器（11-G₁）や瓷器（11-G₂）、845年の河南・李存墓出土玉器（11-I₂）、850年頃の西安出土銀器（11-K_{b1}）、晩唐の福建廈門出土銀器（11-Ob₂）などだが、10世紀以降はすたれるようである。

杯・碗・鉢 杯は、高台付Ⅲ類の系譜をひく玉器（11-Da₁）が824年の河南・齊国太夫人墓から出土。大差ないものは、五代923年の河北・王処直墓出土瓷器（11-Qc₂）や十国962年の南京・李璟陵出土瓷器（11-Sc₂）などにある。中唐の広東・英徳出土釉陶（11-Ed₃）や五代923年の河北・王処直墓出土瓷器（11-Qc₁）は高台付杯Ⅳ類A。中・晩期の西安・青龍寺出土瓷器（11-Fa₁）はⅣ類B。847年の河南・穆崧墓出土瓷器（11-Ja₁）は、8世紀中頃のⅣ類Fより口縁が反る（以下、高台付杯Ⅳ類G）。五代955～960年の洛陽出土瓷器（11-Sb₁）は、体部がやや内弯気味で、口縁が外折する（以下、Ⅳ類H）。856年の河北・劉府君墓出土瓷器（11-La₁）は高台付杯Ⅴ類C。口縁が外反する浅目の高台付杯Ⅵ類Cは、900年の浙江・銭寛墓出土瓷器（11-Nb₂）や、五代909年の洛陽・高繼蟾墓出土銀器（11-Qa₃）で、南北朝後半のものより浅目となる（以下、Ⅵ類B）。8世紀中頃に登場したⅧ類は、778年の河南・鄭洵夫婦墓出土瓷器（11-Aa₁）につづく。丸底杯は晩唐～五代の江蘇・無錫出土銅器（11-Pe₄）。浅目で、体部が外傾する（以上、Ⅴ類）。

他に、花形杯が9世紀末頃と推測できる浙江・淳安窖藏銀器（文献530）にある。平底だが、Ⅱ類よりやや深目（以下、花形杯Ⅲ類A）。十国939年の浙江・康陵出土瓷器（11-Ra₁）は、輪花状で、高台はやや高目（以下、花形杯Ⅲ類B）。

碗のうち、平底碗は深目のⅠ類系統が、9世紀とみる浙江・淳安窖藏銀器（文献530）にある。体部に籠目文のある特異なもの。同巧品は、877年と推測できる伝西安・北邨山出土銀器（文献500）。平底碗で、体部が外傾するのは842・843年の河南・李郁夫婦墓出土瓷器（11-Ha₄）や晩期の浙江・長興出土銀器（文献343）。ともに浅目である（以下、Ⅷ類）。丸・平底碗の例はきわめて少ない。

高台付碗は、8世紀中頃に登場したⅠ類Dの系統が、824年の河南・齊国太夫人墓出土銀器（11-Da₄）に残る。Ⅰ類Dに比して体部がやや開く（以下、Ⅰ類E）。内面に綬帯文を施す点は特異。814年の河南・鄭紹方墓出土瓷器（文献132）もほぼ同巧。881・882年の河南・李杼墓出土瓷器（11-Na₄）や五代後期の洛陽出土瓷器（11-Sb₄）は高台がやや小さくなる（以下、Ⅰ類F）。Ⅵ類Bは850年頃の陝西・背陰村出土鍍金銀器（11-Ka₃）。体部に蓮弁などを飾る。外底に「宣徽酒坊字字号」の刻銘がある。飲酒用か。この系統の瓷器は多く、778年の河南・鄭洵墓例（11-Aa₂）、847年の河南・穆崧墓例（11-Ja₄）、晩唐の広東・和平出土瓷器（文献195）までそれ程大きくは変わらない。8世紀中頃に登場したⅦ類の典型は以後にはつづかないが、797年の河南・鄭州出土瓷器（11-Bc₃）は口縁が外接し、Ⅶ類の変化と推測する（以下、Ⅶ類C）。類例は十国943～946年の南京・李昇陵出土瓷器（11-Rb₅）など。瓷器では体部が直に開くⅧ類が、中唐晩期の西安・青龍寺遺跡（11-Fa₃）、五代末頃の河南・鞏義（文献235）などから出土。北宋にもつづく。

高台付の稜碗はⅢ類の系統が中唐とみる河南・邢窯出土瓷器（11-Ee₆）にあるが、稀な例

で、以後すたれる。高台付の花碗は、850年頃の陝西・背陰村出土鍍金銀器（文献307）がある。詳細は不明だが、口縁が反り、体部が外傾するようである。これと同類と推測されるのは、晩期の福建・厦門出土鍍金銀器（11-O b3）。高台を欠失するが、浅目のもの（以下、高台付花碗Ⅳ類A）。瓷器の例は多い。829年の河南・韋河墓出土瓷器（11-D c5）は花碗Ⅳ類A。874年の陝西・法門寺出土瓷器（文献19・21・370）は、やや深目で、底がすぼまる。この点は、9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器（11-O a4）や、五代909年の洛陽・高繼蟾墓出土瓷器（11-Q a5・Q a6）が似ている（以下、高台付花碗Ⅳ類B）。北宋にもつづく。

鉢は8世紀前半に盛行した平底鉢Ⅴ類が残る。840・842年の河南・崔防夫婦墓出土銅器（11-G 5）で、丈がやや高くなる（以下、Ⅴ類C）。十国918年の四川・王建墓出土銀器（文献1）も同巧。以後は途絶えるようである。中唐早期の河南・鄭州出土瓷器（11-B d4）は、体部が丸味をもってほぼ直に立ち上がる深目の高台付（以下、Ⅴ類A）。842・843年の河南・李郁夫婦墓出土瓷器（11-H a6）も同類だが、やや小型で、口縁がわずかに外反（以下、Ⅴ類B）。以後の確実な例はない。

鉢の新器形は、上述したⅤ類Bの系譜をひく、9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土鍍金銀器（11-M a3）。花形鉢で、体部がほぼ直に立ち上がったのち口縁で外反する（以下、花形鉢Ⅰ類A）。高台も八字状で高いのが特徴。丹徒では蓮の葉を伏せたような銀製の蓮葉蓋（11-M 2）が出土しており、口径からみて組み合うのは花形鉢しかない。五代923年の河北・王処直墓壁画（第12図11）には、山形の蓋をした大型の花形鉢を運ぶ女人が描かれている。なお、630年の陝西・李寿墓壁画（第11図5）にも蓮葉蓋らしきものを被せた円形鉢を捧げもつ様子がうかがえる。五代の浙江・東清出土瓷器（11-S d7）は花形鉢を小さく、深くしたもの（以下、花形鉢Ⅰ類B）。五代932年の福建・王審知夫婦墓出土瓷器（11-Q d7）は、体部がほぼ直立する深目のもの（以下、花形鉢Ⅱ類A）。十国939年の浙江・康陵出土瓷器（11-R a6）はやや浅目（以下、花形鉢Ⅱ類B）。花形鉢Ⅱ類Aは、北宋に盛行し、五代の絵画資料（文献14）から有柄注壺Ⅷ類を温める器であったことがわかる。王審知夫婦墓からも、注壺の破片が出土している。

鉄鉢形・盃 鉄鉢形は、尖底のⅣ類が中唐の河北・石家庄出土黒釉陶（11-E a7）にある。874年の陝西・法門寺出土金器（文献19・21・370）は口径9.4cmの小型品だが、形はⅣ類に似る。ただし小さな平底（以下、Ⅴ類）。五代・十国時代の例は知らない。

盃は、Ⅳ・Ⅴ類の系譜をひくものに残り、胴が下肥れ（以下、Ⅵ類）も登場する。金属器はない。Ⅴ類BとⅥ類は820年の江蘇・□府君墓出土瓷器（11-C d6・C d7）。Ⅵ類は846年の江蘇・張夫人墓出土瓷器（11-H b7）が最終のようだが、Ⅴ類Bは9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器（11-Q a5）、十国939年の浙江・康陵出土瓷器（11-R a7）まで残る。盃は北宋にはすたれるようである。

托・盤 托は、窪んだ内底と口縁と境に突帯をめぐらす新器形（以下、Ⅳ類）が登場する。金属器はないが、840・842年の河南・崔防夫婦墓出土瓷器（11-G 3）や847年の河南・穆崧墓出土瓷器（11-J a1）など。後者には高台付杯Ⅳ類Gがのる。874年の陝西・法門寺出土ガラス器（文献19・21・370）も同類で、ガラス製の高台付杯あるいは碗が組み合う。このガラス器を飲茶器とする見解もある（文献247・373）。法門寺では茶を保管していた金属製の箱や抹茶にするための茶碾が出土しており、上述のガラス器や高台付瓷碗Ⅳ類Gが飲茶用であった可能

性はある。茶碾と思われるものは、中唐の河北・石家庄出土石器（文献120）や842・843年の河南・李郁墓出土瓷器（文献181）があり、8、9世紀には飲茶の風習がかなり広まっていたことを示す。十国939年の浙江・康陵出土瓷器（11-Ra2）は高台・承け台とも高い新形式（以下、V類）。

花形托も新器形。後述する824年の河南・齊国太夫人墓出土鍍金銀器（11-Da3）は、菱花の花形長盤Ⅱ類Aだが、底中央を楕円形に窪ませて擬高台としており、このくぼみが花形長杯の承けになった可能性もある。花形托の主流は、内底を深く窪ませ、口縁との境に突帯をめぐらせた高台付のもの。銀器が多い。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土例（文献342）は、高台が高い（以下、花形托Ⅰ類A）。これらは高足杯Ⅷ類A・Bと組む可能性がある。850年頃の陝西・背陰村出土例（11-Ka4）や860年の西安出土例（11-Lc3）は、丹徒出土例と似るが、高台が低い（以下、花形托Ⅰ類B）。後者には「茶庫（中略）拓子」の刻名があり、飲茶用の托であったことが知れる。伴出した杯・碗は不明だが、托の承け台は径約8cmで、杯ではなく、碗が飲茶器であったことにある。花形托Ⅰ類Bの瓷器は856年の河南・劉府君墓出土例（11-La1）がある。これには高台付杯V類Cをのせていた。五代955～960年の洛陽出土瓷器（11-Sb3）は、花形托でも口縁に切り込みをいれただけの退化型式で、杯・碗受けの突帯を窪んだ内底と口縁の境でなく、底隅につくる新器形（以下、花形托Ⅱ類）。これには高台付杯Ⅳ類Hが組み合う。北宋では花形托Ⅱ類が展開する。

なお、五代923年の河北・王処直墓壁画（第12図11）には、花形托上に杯か碗をのせて運ぶ様が描かれている。

盤のうち、大盤は三脚花盤Ⅱ類Bの系譜をひくが三脚のない796年頃の遼寧・喀喇沁旗出土銀器（11-Bb5・Bb8）、798～802年の西安・坑底村出土金花銀器（文献16）がある。花卉と花卉の境が明瞭でなくなる。また内底に虎や獅子などを飾るが小さく、周囲に牡丹文などを配するようになる（以下、花盤Ⅱ類C）。大盤では以後の例がない。

中盤の新器形は、788年頃の西安・西北工業大学窖藏出土鍍金銀器（11-Ba2）。丸底の浅い器で、外縁が外反する（以下、Ⅷ類）。極めて稀な例。850年頃の陝西・背陰村出土鍍金銀器（11-Ka5）や866年頃の陝西・藍田出土鍍金銀器（文献16）は、口縁が直立する（以下、Ⅸ類）。口径は前者が23.6cm、後者は25.8cmと大きい。原報告では、これに組み合うみがないため盤としたが、韓偉（文献16）は蓋とみる。決め手がなく、両方の可能性をもたせておく。

主流は花形である。881・882年の河南・李杼夫婦墓出土鍍金銀器（11-Na7）は、大きな平底で、体部が直に立ったのち外反する新器形（以下、花盤V類）であり、伴出した唯一の銀器である唾壺の下盤の可能性が強い。824年の河南・齊国太夫人墓出土銀器（11-Da3）は、四花形の長盤（以下、花形長盤Ⅱ類A）。850年頃の陝西・背陰村出土銀器（文献307）はⅡ類Aでも平底。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器（文献342）も同類だが、高い高台がつく（以下、花形長盤Ⅱ類B）。他の丹徒出土銀器（11-M2）は、菱花形の長盤で、高目の高台がつく（以下、花形長盤Ⅲ類A）。877年頃と推測される伝西安・北邙山出土銀器（文献500）は高台がさらに高く、端も外反（以下、花形長盤Ⅲ類B）。900年の浙江・錢寛墓出土瓷器（11-Nb3）もⅢ類B。したがって、丹徒出土花形長盤Ⅱ類B・Ⅲ類Aは850年から877年の間になろう。^{註10}Ⅲ類は以後の例を知らない。

小盤は788年頃の西安・西北工業大学窖蔵出土銀器 (11-Ba1) がⅦ類C。五代早期の浙江・吳随□墓出土銅器 (文献323) もこの系統のようである。前者の内底には、対葉文で囲ったなかに双魚を飾る。874年の陝西・法門寺出土品には、口縁が外折するイスラム産の高台付ガラス盤 (文献19・21・370) が出土している。十国939年の浙江・康陵出土瓷器 (11-Ra3) はその系譜をひくものか (以下、Ⅶ類)。小形の花盤は銀器が多い。850年頃の陝西・背陰村出土鍍金銀器 (11-Ka2) は、体部が直線的に開いたのちわずかに反るもので、高台がつく。花卉と花卉の境がはっきりしない。高台も低目 (以下、花盤Ⅳ類A)。高台のつかない銀器も伴出。874年の陝西・法門寺出土銀器 (文献19・21・370) も同巧だが、ここでは底に螺旋状の台をつけた特殊品も出土。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器 (文献342) は花盤Ⅳ類でも高台が高い (以下、Ⅳ類B)。前蜀918年の王建墓出土金銀胎漆 (文献1) も同類。

他に、874年頃の陝西・法門寺出土品 (文献19・21・370) には、花盤Ⅱ類A系統のものに支脚をつけ、蓮葉を伏せた形の蓋 (以下、蓮葉蓋) を伴う鍍金銀器がある。咸通九年 (868) 銘。通高27.9cm、盤径16.1cmで、飲茶に用いる塩をいれた塩台とみている。五代早期の浙江・吳随□墓出土銀器 (文献323) は、花盤Ⅱ類Cの系譜をひく。伝世品か。稀な例で、以後は途絶える。845年の河南・李存墓出土玉器 (11-I3) のように、長方形の花盤 (以下、花形方盤Ⅰ類) や十国939年の浙江・康陵出土瓷器 (11-Ra4) のような正方形の花盤 (以下、花形方盤Ⅱ類) もある。ともに北宋にはつづかないようである。

洗・銅・匜 銅は、浅銅のⅠ類の系統が900年の浙江・錢寛墓出土瓷器 (文献335) や五代909年の河南・高繼蟾墓出土瓷器 (11-Qa8) に残る程度。北宋の壁画には厨房の床に銅らしきものが描かれており、この時期にも実際に用いられたことがわかるが、墓への副葬は稀で、実態は不明。

洗は、8世紀中頃に出現した浅洗Ⅳ類Dが788年頃の西安・西北工業大学窖蔵出土鍍金銀器 (11-Ba7)、847年の河南・穆崧墓出土銅器 (11-Ja7) や850年の陝西・何溢墓出土銅器 (11-Jb6) や五代早期の浙江・吳随□墓出土瓷器 (文献323) につづく。他の西北工業大学窖蔵出土鍍金銀器 (11-Ba6) も類似するが、平底 (以下、Ⅳ類E)。866年頃の陝西・藍田出土鍍金銀器 (11-Mb6) も平底だが、四花形。体部が外傾したのち反る (以下、花形洗Ⅰ類)。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器 (11-Ma7) も平底の花形洗。六花形で、体部が立ち気味 (以下、花形洗Ⅱ類)。これらは北宋にはつづかないようである。

なお、784年頃の陝西・法門寺出土鍍金銀器 (文献19・21・370) は、口縁が外反する四花形の大形品である。径約46cm、高さ14.5cm。高台と両環耳がつく。盆と呼んでいるが、洗かもしれない。後考をまつ。

匜は、8世紀中頃に登場した碗形匜が845年の河南・李存墓出土銅器 (11-I5)、858年の河南・李帰厚墓出土銅器 (11-Lb4) にあり、北宋にもつづく。901年の江蘇・水丘墓出土銀器 (11-Nc6) は碗形匜でも花形。

盒・豆 豆の良好例はない。盒は初・盛唐と同様に鍍金銀器が多く、バラエティに富む。円筒形のⅢ類Aは十国939年の浙江・康陵出土瓷器 (11-Ra8) に残る。Ⅲ類Bの系統も少なく、9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土鍍金銀器 (文献342) や十国933年の江蘇・新海連出土瓷器 (文献286) は高台付となる (以下、Ⅲ類C)。以下では銀器 (ほとんどは鍍金) のみを取り

上げる。貝形のV類は778年の河南・鄭洵夫婦墓出土例（文献181）が最終例のようである。新器形は814年の河南・鄭紹方墓出土例（文献132）や858年の河南・李帰厚墓出土例（文献9）のように隅丸方形のもの（以下、Ⅶ類A）、847年の河南・穆崧墓出土例（文献9）のように楕円形のもの（以下、Ⅶ類B）。ともに以後にはつづかない。8世紀中頃に登場した花形のⅣ類は、866年頃の陝西・藍田出土例（文献16）があり、五代早期の浙江・呉随口墓出土例（文献323）をへて、北宋の典型的な菊花形の盒につづく。

この時期の新しい特色は、花形などの盒に高台がつく点である。花形の系統（以下、Ⅵ類B）は、中唐の西安出土例（11-Ec8）、842・843年の河南・李郁夫婦墓出土例（11-Ha8）などで、北宋にもつづく。四菱花形（以下、Ⅷ類）や蝶形（以下、Ⅸ類）は上述の丹徒出土例（11-Ma4・Ma5）が初出か。

b 貯蔵具・注器（付図12）

扁壺・鶏冠壺・瓶 扁壺は824年の河南・齊国太夫人墓出土銅器（文献492）がある。破碎しているため不明な点があるが、隋代にもみられたⅥ類の系統のようである。796年頃の内蒙古・喀喇漢旗出土銅器（12-Bb1）は双魚形の特異なもの（以下、Ⅶ類）。北方の遼では鶏冠壺もつづくが、中華にはみられない。

瓶は、有柄注壺が主流を占めるためか、出土例が少なく、金属製品もごく僅かである。反口瓶の系統は、下肥れのV類Cが中唐とする西安出土陶器（文献24）にあるが、頸部がやや太い。球胴のⅥ類の系統は877年頃と推測できる伝西安・北邙山出土金器（文献500）にある。脚は高いが、太いのが特徴（以下、Ⅵ類D）。肩に草花を飾るのは時代的特徴である。874年の陝西・法門寺出土鍍金銀函の刻画（第12図8）には、女の人が台付きの下盤にのせた肩の張ったⅣ類系統の瓶を捧げもっている。この瓶には花を挿している。中唐あるいは晩唐とみる敦煌・莫高窟の蔵経洞壁画（第12図6）では、座した僧の背後の樹に、肩の張った瓶Ⅳ類らしきものを袋状のものに入れて吊げている。頭陀袋も吊げたおり、僧の持物で、瓶は水筒として用いられたことが知れる。

直口瓶の系統では、口縁下に有孔双耳をもつ投壺が五代の絵画資料（文献14）に残る。直口瓶は新器形が登場する。頸はとくに細長く、やや肩の張った体部を八稜形につくるのが特徴（以下、直口瓶Ⅲ類）。871年の西安出土釉陶（文献298）や874年の陝西・法門寺出土秘色瓷器（文献19・21・370）。他の類例は知らない。五代923年の河北・王処直墓壁画（文献423）には、女の人が肩の張った直口瓶を手にするが、胴の面取りはない。なお、盤口瓶Ⅱ類Aは、846・879年の陝西・白敬宗夫婦墓出土陶器（12-Mc1）に残る。唐末～五代の内蒙古出土瓷器（12-Pd1）は、肩の張りが強い（以下、Ⅱ類B）。この系統は北宋にも残る。

浄瓶は、中唐の河北・石家庄出土銅器（文献120）がある。765年の僧・神会墓出土Ⅱ類とはほぼ同巧。この系統は北宋にもつづく。晩唐頃の敦煌・莫高窟の蔵経洞出土紙画高僧図（第12図7）には、座禅する僧の傍らに浄瓶らしきものを置いている。

壺・細頸壺 細頸壺は、短頸のⅡ類Cの系譜をひくものが、858年の河南・李帰厚墓出土瓷器（12-Lb4）にある。小型品。体部を花形につくるのが特徴（以下、花形小壺）。いわゆる玉壺春式のⅣ類は、陝西・法門寺出土ガラス器（文献19・21・370）があるが、これは5世紀に遡

るらしいことは既に触れた。Ⅳ類の出土例を知らないが、北宋では新たな展開をみる。他に、肩が張って口縁が外反する大型品（以下、Ⅵ類）が中唐前期の江蘇・趙氏墓出土土陶（12-Ca1）、9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土陶器（12-Oa2）十国941・952年の浙江・呉越王墓出土瓷器（12-Sa1）にある。

短・長胴壺類は出土例が少なく、金属器も稀。877年頃と推定する伝西安・北邙山出土鍍金銀器（文献500）は、球胴で、高い高台をつける。頸は太いが長目で、口縁を波状にするのが特異（以下、球胴壺Ⅵ類）。他に類例を知らない。塔形の長胴壺Ⅱ類Bは多く、778年の河南・鄭洵夫婦墓出土陶器（12-Aa2）、836・854年の山西・高徽夫婦墓出土陶器（12-Kc1）、晩唐の陝西・隴県出土陶器（12-Occ1）などがあるが、五代以降は途絶える。

唾壺 唾壺は、盤口ではなく、口縁が直線的に開くようになる（以下、Ⅴ類）。814年の河南・鄭紹方墓出土瓷器（12-Cc2）、845年の河南・李存墓出土瓷器（12-I1）、858年の河南・李帰厚墓出土瓷器（12-Lb1）、9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器（12-Oa3）、9世紀末頃の西安・新筑出土鍍金銀器（12-Md3）は、いずれも体部が下肥れと古調（以下、Ⅴ類A）。901年の江蘇・水丘墓出土銀器（文献16）、五代932年の福建・王審知夫婦墓出土瓷器（12-Qd1）、十国939年の浙江・康陵出土瓷器（12-Ra1）はいずれも球胴となる（以下、Ⅴ類B）。北宋の出土例は知らない。

罐・瓮・壘 罐は、金属器がなく、陶器や瓷器などである。短胴罐は、出土例が少なく、肩が張るⅠ類の系統が中・晩期の山西・大同出土三彩（文献457）や晩期の広東・和平出土瓷器（12-Pa4）、球胴Ⅱ類の系統が十国909年の河南・高継蟾墓出土瓷器（12-Qa4・Qa5）にある程度。むしろ後述する三脚罐が主となる。長胴罐は、最大径が胴中位あたりのⅡ類が778年の河南・鄭洵夫婦墓出土瓷器（12-Aa4）、9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器（12-Oa6）にある。十国939年の浙江・康陵出土瓷器（12-Ra3）は体部を花形につくり、北宋への過渡となる。

瓮は自名の金属器がある。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器（文献342）。肩が張る長胴で、外被せの宝珠形撮み付き蓋が伴う。金属器以外の例は多く、代表例をあげると、778年の河南・鄭洵墓出土陶器（12-Aa3）、845年の河南・李存墓出土瓷器（12-I4）、晩唐の福建・厦門出土瓷器（12-Obs）、五代～北宋初の河南・鞏義出土陶器（12-T4）などがある。

壘は、肩張りが弱いⅢ類Bが784年の洛陽墓出土陶器（12-Ac1）にあるが、頸は細くなる（以下、Ⅲ類C）。袋状口縁のⅣ類は881・882年の河南・李杼夫婦墓出土瓷器（12-Na2）に残る。ともに北宋にもつづく。

注壺・有柄注壺・水注 注壺は、口縁を片口にしたⅣ類が、中・晩唐の山西・大同出土陶器（12-Efi）に残る。中国北半部の地域色か。836・854年の山西・高徽夫婦墓出土陶器（12-Kc2）は反口瓶Ⅴ類を片口にしたもの（以下、Ⅴ類）。ともに北宋にはつづかない。盤口の壺に注口をつけたものは874年頃の陝西・法門寺出土鍍金銀器（文献19・21・370）。球胴で、有節の高い脚をもち、口縁近くまでの曲がった注口をもつ（以下、Ⅶ類）。胴部に三鈎金剛杵を飾っており闍伽瓶と呼んでいる。日本でいう浄明寺形水瓶の源流になる。

有柄注壺は、出土例が多く、バラエティに富む。口縁を片口にしたⅣ類は、晩唐～五代の河北・臨城出土瓷器（11-Pb3）で稀な例。胴は下肥れのⅣ類F。784年の洛陽墓出土銅鏡（第

12図5)には球胴のⅣ類Dらしきものが表されている。

なで肩で短胴気味の有柄注壺Ⅴ類は、9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器(12-Oa4)にあるが、球胴になる(以下、Ⅴ類B)。十国941・952年の浙江・文穆王墓出土瓷器(12-Sa2)は、球胴で、注口が長い(以下、Ⅴ類C)。例は少ない。

長胴で肩の張った長胴壺に注口をつけたⅥ類は、中唐前期の陝西・青龍寺遺跡出土釉陶(12-Cb3)、840・842年の河南・崔防夫婦墓出土瓷器(12-G3)、856年の河南・劉府君墓出土瓷器(12-La2)などがⅥ類A。元和三年(808)銘のあるⅥ類Aの瓷器(文献311)には、「茶社瓶」の墨書もあり、この手の有柄注壺が茶用であったことが知れる。韓偉編年第四期(821～907年)の陝西・咸陽出土金器(12-Le3)、は頸が太く直立気味(以下、Ⅵ類B)。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器(文献342)はⅥ類Bと、注口が口縁近くまで長い、しかも前方に曲がったⅥ類C(12-Ma5)とがある。後者とはほぼ同巧なのは、877年頃の伝西安・北邨山出土鍍金銀器(文献500)、901年の江蘇・水丘墓出土銀器(文献16)で、Ⅵ類Aの咸陽例の蓋と似るが、天井部を半球状に大きく盛り上げた蓋が伴う。咸通十三年(872)銘の西安出土銅器(文献16)も同類で、これには「宣徽酒坊」の刻名があり、酒器の可能性を示す。Ⅵ類Bの系統は、晩唐の湖南・長沙窯出土瓷器(12-Pc2)や五代909年の河南・高繼蟾出土鉛器(12-Qa2)に残る。Ⅵ類Cは北宋に続く。826年の江蘇・殷府君墓出土瓷器(12-Db1)や847年の河南・穆崧墓出土瓷器(12-Ja2)は、胴が下肥れで、やや短胴(以下、Ⅶ類A)。殷府君墓出土の他の瓷器(12-Db2)や9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器(12-Oa5)は、下肥れだが長胴(以下、Ⅶ類B)。前者は胴部を花形につくる。

五代に入ると新しい有柄注壺になる。五代後期の洛陽出土瓷器(12-Sb3)や、十国939年の浙江・康陵出土瓷器(12-Ra2)で、扁球胴で、長く曲がった注口を付ける(以下、Ⅷ類A)。五代909年の陝西・高繼蟾墓出土瓷器(12-Qa3)は、注口が短い、口縁近くに水平につけたもの(以下、Ⅷ類B)。Ⅷ類は北宋に盛行する。また、Ⅷ類Aは、既述したように北宋の壁画(文献14)をみると花形鉢Ⅱ類内に置いており、Ⅷ類のなかの液体を保温したと推測できる。Ⅷ類を置いた机上には、杯あるいは碗と托の2組以外には菓子を盛った盤だけで、酒でなく飲茶とみるのが妥当と考える。

水注は、短胴壺に注口をつけたものが中唐頃の西安出土三彩(文献257)にある。

三脚罐・三脚壺 三脚罐は、中唐とする河北・邢窯出土瓷器(12-Ee4)がⅡ類A。814年の河南・鄭紹方墓出土瓷器(12-Cc5)や、中唐の江蘇・揚州出土三彩(12-Eb5)は肩がやや張り、丈も低目(以下、Ⅱ類B)。総高9.5cm。850年頃の陝西・背陰村出土鍍金銀器(12-Ka3)は総高5.3cmの小型品だが、肩が張り、しかも長胴化する(以下、Ⅲ類)。836・854年の山西・高徵夫婦墓出土瓷器(12-Kc4)は、胴部の脚と脚の間を縦方向に窪ませた花形(以下、Ⅳ類)。総高8cm。これをうけたのが901年の江蘇・水丘墓出土鍍金銀器(12-Nc10)で、胴部には脚から上方に鱗状の突起をつける(以下、Ⅴ類)。総高14.4cm。9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器(12-Oa9)もⅤ類。総高4.5cm。五代以降はすたれるようである。小型の高徵夫婦例は粉盒とみている。

三脚壺は9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器(12-Ma6)。頸が長い点は前漢の鏃尊に似るが、小型品である。

c 煮沸具 (付図12)

鍋・三脚鍋・提梁鍋・有柄鍋 鍋は、口縁が外反する浅い半球状のⅠ類Eが、9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器(文献342)にある程度。

三脚鍋は、内耳をもつⅢ類Aが多く、797年の河南・劉府君夫婦墓出土鉄器(12-Bc3)、845年の河南・李存墓出土鉄器(12-Ja6)、晩期の広東・和平出土鉄器(12-Pa5・Pa6)、868年の河北・張氏墓出土陶器(12-Ld6)などがある。840・842年の河南・崔防夫婦墓出土鉄器(12-G7)は同類ながらも環耳がない(以下、Ⅲ類B)。Ⅲ類Aの系統は北宋にもつづく。

提梁鍋は824年の河南・齊国太夫人墓出土銀器(12-Da4・Da5)、ともに8世紀中頃のⅠ類やⅢ類と大差ない。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器(文献342)もほぼ同巧のⅢ類。十国918年の四川・王建墓出土銅器(12-Qb6)は浅い(以下、Ⅳ類)。

有柄鍋は、盛唐まで存続した鏝斗の三脚を省略したもの。長い把手と、これと直角位置に注口をつける。824年の河南・齊国太夫人墓出土銀器(12-Da3)や840・842年の河南李存墓出土鉄器(12-G5)。北宋にもつづく。

釜 漢代からあまり変化しない鉄釜系統の長胴釜Ⅲ類が784年の河南・洛陽墓出土陶器(12-Ac5)にある程度。五代～北宋も、釜・甑などは墓に副葬しないようで、実態はつかめない。

d 雑器 (付図12)

熨斗 778年の河南・鄭洵墓出土小型銅器(12-Aa6)や784年の河南・洛陽墓出土銅器(文献283)。ともに皿部の口縁と柄の基部との間に横広の補強板をつくり出す(以下、Ⅳ類)。わずかな明器をのぞくと隋代以降の熨斗はなく、Ⅳ類が初唐あるいは隋にまで遡る可能性はある。

爐 中唐の河北・邢窯出土瓷器(12-Ee6)はⅣ類B。778年の河南・鄭洵墓出土銅器(12-Aa7)や864年の河北・張氏墓出土陶器(12-Ld7)はⅣ類Aの系譜をひく。前者は高い三脚、後者は低目の五脚。ともに小さく、薫爐として使用された可能性が高い。この系統は北宋にもつづく。874年の陝西・法門寺出土鍍金銅器(文献19・21・370)のうち1点はⅢ類(薫爐)の系譜をひくが、蓋は火焰状の透かし(以下、Ⅲ類E)、他の鍍金銀器は口縁が折れる外被せ蓋を伴う(以下、Ⅲ類F)。ともに五脚で五環耳。

爐の新器形は9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器(12-Ma7)で、口縁が二段に折れ下がる爐皿と、これを受ける大きな透かしが入った台、天井が高く盛り上がった宝珠形撮みの蓋からなる(以下、Ⅴ類)。蓋には唐草文風の透かしがあり、薫爐である。同類は874年頃の陝西・法門寺地宮出土銀器(文献19・21・370)にある。風爐とするが、同巧品(文献370)は法門寺地宮中室中央にも据えており、薫爐とすべきである。十国918年の四川・王建墓出土鍍金銅器(12-Qb7)や933年の江蘇・新海連出土鉄器(文献286)もこれを継承する。

燈 豆燈はⅤ類Cが778年の河南・鄭洵墓出土瓷器(12-Aa8)にある。晩唐や五代・十国時代の例は知らないが、この系統は北宋に入って新たな展開をみる。盞燈Ⅵ類も中唐後期～五代の湖南・長沙窯出土瓷器(12-Fc8)にあるが、以後は不明。

蠟燭燈Ⅱは、中唐後期～五代の湖南・長沙窯出土瓷器(12-Fc8・Pc7)や、十国918年の四川・王建墓出土釉陶(12-Qb8)にある。バラエティがある。

5 小結 – 古代中国における食生活等の変遷とその画期 –

戦国晩期 戦国晩期は、殷周銅器の終末を告げる一方で、漢代以降に展開するいわば日常的な銅器の母胎を形成した一大画期であった。供膳具では簋・敦あるいは有蓋豆、注器では酒用の盃などが終わる。煮沸具の鬲・鬶は中期でもやや遅れた時期には消失した。把手付杯Ⅰ類、食べ物などを盛った深銅Ⅰ類、煮沸具の釜はやや早く戦国中期頃に登場しているが、戦国晩期には新たに碗や高台付鉢、瓶、盃に替わる釜壺、鍋類、鑊付きの釜それに蠟燭用と推定される針付きの豆燈や薫爐などが登場してくる。碗・鉢・瓶などの出土例が極めて少なく、銅器でないものも含む点は、先駆的状況といえる。

なお、箸（箸）、又（フォーク）、匕（匙）、長手の勺（杓子）は戦国早期には出現しており、短い勺（散蓮華）も秦代には登場している。箸は食べ物を挟みとるもの、匕は五穀を食すもの、短い勺は羹・粥用とみる説が有力である。

前漢・新代 前漢・新代は、それでもなお残っていた殷周銅器の伝統が消失し、日常的な銅器類が次第に定着した時期である。このなかでの画期は、以下にみるように後漢晩期にある。古制を伝えるものでは、碗の祖型とされる簋が前漢早期、楕円形の鉢である舟は前漢中期、貯蔵具の甌は前122年頃、長胴壺Ⅰ類は前漢晩期、煮沸具の鑊は前漢晩期頃、無蓋鼎は前122年頃、水器の鑑や浴銅、浴用の可能性が高い超大型の大盤Ⅲ類も前122～113年までに終わる。高足杯Ⅰ類、有蓋鼎、鈇、提梁壺・筒などは、前漢晩期には激減する。「沃盥の礼」に用いた匜は新代に途絶え、大盤Ⅰ類A・Bも前漢晩期には数が極めて少なくなる。大盤Ⅱ・Ⅳ類も前漢代までに終る。扁壺は形をかえながら細々と以後も残るが、俵形壺は前漢中期までにすたれる。

新しい器種・器形は以下の如くである。飲器は、中国南半部で把手付杯Ⅰ類が盛行するが、新たに前漢晩期から把手付杯Ⅱ類が加わる。出土例は多くなく、新器種の高台付杯Ⅰ・Ⅱ類がこれを補ったと推測する。新代に登場する高台付杯Ⅱ類は、前漢晩期に登場する「酒鑑」の小型品。両者が一組とすると、高台付杯Ⅱ類は飲酒用、酒鑑は酒を壺などから一時的にうけたもので、高台付杯Ⅱ類の出現も前漢晩期と推測する。碗のうち、新代に登場する浅目の丸底碗Ⅱ類は、後の事例によると勺（散蓮華）を伴出し、羹・粥用の可能性がある。穀類を食す容器は古くは簋であったが、前漢晩期から類例を増す高台付碗Ⅰ・Ⅱ類以外にそれにあたる容器は見当たらない。出土例は少なく、個々人の銘々器にまでなっていたとは言い難い。耳杯は、形を変えながらも前漢以降も存続し、後漢には鶏骨が残る例もあることから、飲器だけでなく、小盤としても利用されたとわかる。小・中盤はまだ数が極めて少ない。前漢代の特徴は、大盤Ⅰ類A・Bの多さである。既述した沃盥の礼器以外に、爐の下盤などにも利用されているが、食べ物を盛る器としても用いられたと推測する。中盤Ⅴ類は杯・碗を承ける下盤であり、そうした風習が前漢晩期までには生まれていたことが知れる。前漢晩期に登場する魁は、絵画資料から、把手をつかんで箸・箸でなかの食べ物を食べたもの。主人に食べさせる様だが、自分で食べることもあったであろう。後漢から盛行する。既に触れたように、陶製の蓋付き大口罐には「飯」の墨書があることから、新代にはおひつがあり、以後も存続したこと、漢代の中盤Ⅰ

類Bで、口径27cm程のものは、墨書から一時的にせよ飯を盛ったことも知れる。なお、前漢には箸、七、長・短両種の勺の出土例が増加し、食べ物を持つための、U字状にまげた筴や肉を刺すための大型の叉も加わる。

瓶は、戦国晩期からの蒜頭瓶が前122年頃まで残るが、前漢中期には反口瓶Ⅰ類、晩期から直口瓶が登場する。直口瓶には矢柄らしきものが残るものがあり、矢を投げて遊ぶ風流の一端が知れる。また、反口瓶は後の事柄から、花瓶として用いられた可能性もある。ただし、そうした用途だけではない。これも後の事例だが、洗の上に反口瓶をのせた例がある。洗は前漢晩期頃に登場する。浅洗Ⅰ・Ⅱ類と深洗Ⅰ・Ⅱ類が一組で、浅洗は手足を洗った水をうけ、その汚水を深洗に入れて棄てたと推測できる。前漢晩期の湖南・長沙出土例からすると、浅洗に注ぐ水の容器は球胴壺だが、洗の出現と期を一にして直口瓶や細頸壺Ⅲ類が出現していることは注目してよい。これは、匱と大盤Ⅰ類A・Bや超大型の丸・平底鉢を用いた「沃盥の礼」に替わって、官人の加冠や婚礼「士冠礼」「士婚礼」などに用いられた礼器の具体像を示すものといえる。

煮沸具では、釜・甑は出土例が増加し、普及したことが知れる。釜では鏝付きのⅡ類が主流である。長胴釜Ⅱ類と球胴釜Ⅱ類を伴出する例があることからすると、蒸す物による使い分けがあったとも推測される。そして、釜甑で蒸した食物を盛ったり、調理・炊事にも用いた盆が新登場し、銅も浅銅と深銅と備えるようになる。中国南半部では釜・鍋兼用の釜なども盛行する。釜とともに鍋Ⅰ～Ⅲ類や片手鍋も前漢から多くなる。これは鼎の衰退と表裏一体で、竈の完備によって、必ずしも三脚が必要でなくなったことによる。温・注酒器の盃の伝統をひく鏝壺は三脚器として残る。前漢初からは、新たに鏝尊と「温酒樽」が登場する。前者は羹類、後者は酒を温めるもの。既述のように、絵画資料では宴席に共用器1対として描かれており、接待などに特別に用いられたと推測する。

油・蠟燭用の燈、香を焚く薫爐も前漢では出土例が著しく増加し、バラエティに富む。新しくはアイロンの熨斗も前漢晩期に出現し、以後に定着する。

後漢 後漢は、前漢晩期に登場した新器形・器種が定着した時期で、鉄鉢形や唾壺などが新登場するが、後漢代での小画期はない。飲器は、中国南半部では把手付杯Ⅰ類が存続する。高足杯Ⅰもわずかに残り、新たに丸底の把手付杯Ⅲ類が登場するが、出土例は少ない。高台付杯Ⅱ類が主で、それを平底杯Ⅲ類が補ったのであろう。耳杯はⅡ類に変化するが、飲器として、また小盤としても機能した。碗は浅目の平底碗Ⅱ類が登場し、後の事例から、羹や粥用の食器として用いられたらしい。高台付碗はⅠ・Ⅱ類が変化しながら存在し、出土例もやや増加する。飯器と推定する。中・小盤は、杯や碗おそらく主に杯の下盤となったⅤ類が盛行する。Ⅵ類は浅い半球状の盤で、その数がやや増加することは、取り皿として意識されてきたことを示そう。後漢晩期の絵画資料では、主人の前に置かれた盤には食べ物がのり、箸がそえられており、様子が知れる。大盤はⅠ類Bが後漢で終わる。新登場のⅤ類は、食器類をのせた円案（お盆）である。円案は前漢にあるが、円案は後漢に入って登場するようである。豆は後漢ですたれる。盒はⅠ類が前漢晩期頃までに、Ⅱ類も後漢晩期までには終焉を告げる。後者には果実の核などが残る。化粧用の盒とは性格を異にし、食べ物をいれる容器としての盒の終焉と推測する。後漢晩期に新しく登場する鉄鉢形は、以後長く存続する。その用途については、仏教的色彩を考

えるのが通例で、隋代の絵画資料でも僧が小型の鉄鉢形らしきものを手にする。底が丸底風であることからすると鍋的であるが、食物を盛ったり、ときに飯器として多様な機能を果たしたものと推測される。これに似て内弯の度合いが強い盃は、後漢に出土例が増え、水盃と呼ばれることが多い。三国時代のミニチュア例では勺（散蓮華）を伴ったものがあるが、実際にどのように使われたのかは明かでない。今後の課題としておく。

前漢晩期頃から盛行した直口瓶は、後漢では出土例が少ないが、反口の細頸壺Ⅰ類Cや盤口のⅢ類Aがある。洗は、深洗Ⅰ・Ⅱ類と、これとセットになる浅洗Ⅰ・Ⅱ類が備わってくる。手足を洗う礼器はなお存続したと判断できる。

壺類は、前漢代にはバラエティがあったが、後漢にはシンプルとなる。長胴壺はⅡ類だけがあり、以後も存続する。短胴壺は下肥れのⅡ類やこれに提梁をつけたものが主に中国南部に残る程度で、それも後漢晩期にはほぼ終わり。儀器（明器）化する。後漢晩期に登場した壺もⅠ類も後漢晩期で終焉する。貯蔵用の壺は、三国時代には新しいもの（盤口のⅢ類）にかわってしまう。

煮沸具は、鍋Ⅰ～Ⅲ類、鋳付きの球・長胴釜Ⅱ類、それに鉄製の長胴釜Ⅲ類が盛行する。把手付鍋は後漢晩期、鼎の遺制である特異な三脚鍋、それに三脚釜もほぼ後漢晩期までに終わる。釜・甑とセットであった盆は後漢早期には消失し、銅がその機能を兼ねるようになる。後漢に新登場するのは、三脚・把手付の鍋である鏝斗。以降は鍋の代表的な位置を占める。宴会用の鏝壺・温酒樽は後漢晩期ではほぼ終わる。

雑器としては、後漢中期から、定型的な唾壺Ⅰ類や虎子が出現・普及し、生活様式に一つの画期を示す。

三国時代～東晋 三国時代は漢代の遺制が途絶えた時期で、新しくは短胴罐Ⅳ類や爐Ⅱ類が出現した程度で、過渡期といえる。西晋や東晋では、以下のように、杯・碗・鉢・壺類などが一新され、西方からの新しい波及の予徴がある。漢代に比して銅器の出土数は激しく減少する。古墳へ副葬されなくなったり、明器となったりしたため、陶器や瓷器などで補って復元せざるを得ない。

飲器は、高足杯Ⅰ類や把手付杯Ⅰ・Ⅱ類が三国時代にわずかにある程度。耳杯は舟状に両端が反るⅢ類にかわる。きわめて出土例は少なく、儀式的なものになったと推測する。舟状であるのは、飲器専用で、小盤を兼用することはなくなったことを示す。陶・瓷器では、杯・碗・鉢は相似た器形で寸法の異なる平底で浅目のⅢ類が三国時代から東晋初頃まで展開する。西晋末～東晋初に高台付で浅目の杯・碗Ⅲ類に変わる。平底杯Ⅲ類は新代に出現しており、これをもとに碗・鉢とのセットが完成され、飲食用の主体になったと推測される。鉢はそれ程変化がないが、西晋末～東晋初には高台付の浅目の杯・碗Ⅲ類に変わり、さらに東晋晩期には高台付の高目の杯・碗Ⅳ類Aが登場し、南北朝の先駆となる。高台付杯Ⅲ類には銅器（北燕415年の馮素沸墓例）があり、これには托Ⅰ類が伴う。専用托の始まりである。馮素沸墓では、この時代ではごく稀な小型提梁壺が出土し、これで酒を温めて高台付杯Ⅲ類で飲んだと推定している。銅器には古調が残り、口縁が外反する高台付碗Ⅱ類は三国時代には終わる。平底碗Ⅱ類らしき銅器は三国時代にあり、銅勺（散蓮華）を伴出。高台付鉢Ⅱ類は東晋にも細々と存続する。特異な小型の丸底鉢Ⅳ類Aはガラス器で、これを模した可能性がある瓷器の小平底の鉢Ⅳ類は、

西・東晋代の限定品である。後者は蓋を伴い、食器かもしれない。魁も存続する。三国時代からは、菓子などを盛り分ける果盒が登場し、食卓が華やかとなった。この時期の特徴は大盤が見当たらず、小盤Ⅴ・Ⅵ類Aの出土例が増加する点である。Ⅴ類は主に下盤、Ⅵ類Aは主に取り皿としての役割が固定されてきたと推測する。中盤では有脚盤Ⅰ類が西・東晋に限って存続する。硯・爐とする見方があるが、底が平坦でやや深目のものがあったり、蓋を伴うものもあり、盤の可能性が高い（Ⅰ類A）。これが韓半島の百済などで盛行する三足器の祖型になったのであろう。

瓶や細頸壺の出土例は少ない。洗は深洗が三国時代頃までですたれるが、浅洗Ⅱ類は銅器がかなり出土している。南北朝後半には浅洗の新器形と瓶とが共伴しており、礼器の伝統はつづいたと推測する。壺は瓷器だが、球胴・長胴とも盤口のⅢ類が西晋に出現して盛行する。銅器は確認できていない。盃に似て短頸の短胴罐Ⅳ類も三国時代～東晋に盛行する。水や酒をいれた容器かもしれない。

温・注酒器である鑊壺は三国以降にも極わずかに残るが、それも小型・儀器化する。かわって注壺や有柄注壺が登場し、以後盛行する。後の事例からみても、これらに酒用が含まれていたとみて誤りはない。大きく二系統がある。肩に筒状の注口をつける注壺Ⅲ類と、片口にする注壺Ⅳ類がともに西晋晩期頃に限って存在する。これらに把手をつけた有柄注壺Ⅲ類A・BとⅣ類A・Bは東晋に入って出現し、以後にも展開する。いずれも三脚はつかない。架（五徳）や温水をいれる容器も見当たらないことから、酒は温めなくなったのかもしれない。これらのうちⅣ類は数はまだ少ないものの、新疆・遼寧から出土しており、西方からの新しい影響を示す。後に触れるように、ワイン用と推測できる。

鍋・釜・甑は、墓への副葬することがほとんどなくなり、実態はほとんど不明。唯一、鑊斗は形をⅡ・Ⅲ類に変化させながらも存続する。鑊斗に注口をつけたⅣ類も三国時代から登場し、煮沸具の代表のようになる。中国北半部では伝統的が鍍Ⅱ・Ⅳ類が存続し、北朝にも残る。三国時代から登場する、内爐を伴わない円爐Ⅱ類A・Bは、主に鑊斗とセットになる。瓷器では鑊斗を円爐Ⅱ類上においたものがあり、爐に炭火をいれ、鑊斗を温めたこと知れる。

アイロンの熨斗は、Ⅱ・Ⅲ類が盛行。燈は古式の豆燈Ⅰ類BやⅣ類、蓋燈Ⅰ類BやⅡ類が残り、蠟燭用Ⅰ類も東晋晩期頃まで存続する。唾壺はⅡ類A・Bが盛行、虎子も虎型のⅡ類が盛行し、それぞれ生活に定着したことを示す。

南北朝時代～隋 南北朝時代前半の5世紀代は、西方から高足杯Ⅱ・Ⅲ類や曲長杯、大盤Ⅳ類Bなどが及ぶとともに、高台付杯Ⅳ類と碗Ⅳ類及び托のセット、反口瓶Ⅱ・Ⅲ類など登場してくる。西方からの器物は鍍金銅器を主とするが、出土例は多くなく、中国縁辺部や北朝域に限られる。南北朝後半の6世紀前半は、これらが発展・定着し、加えて以下のように新しい器種・器形が生まれた画期、隋代は唐代への過渡期といえる。隋代かその直前頃には、新器形の稜杯・花碗が中国縁辺部で登場し、他は細頸壺Ⅳ類と豆燈Ⅴ類Aが出現した程度である。飲器では、高足杯Ⅱ～Ⅴ類が南北朝前半の5世紀後半にも出現して、一部は隋代に継承される。ほぼ同じ頃に、曲長杯、盤状高足杯、把手付壺形杯、片口の有柄注壺Ⅳ類Cも登場する。銀器もあるが多くは鍍金銅器で、ササン朝ペルシャの影響とみている。有柄注壺Ⅳ類と高足杯は、既述した北周の絵画資料から組み合い、ワイン用と推定される。他の飲器もワイン用の可能性が

ある。

高台付杯Ⅳ類は、5世紀末頃にⅣ類B、6世紀中頃にⅣ類Cと順次高いものが登場するが、低目のⅣ類AそしてⅣ類Bも以後に存続し、一基の墓で2・3種伴出する場合も少なくない。これと対をなす高台付碗Ⅳ類は大きな変化がない。高台付碗Ⅳ類が飯用、高台付杯Ⅳ類が飲用とみてよいであろう。高台付杯には体部が外傾するⅤ・Ⅵ類もこの時代に存続する。杯の多様さからみると、酒ばかりでなく、飲茶などにも用いられた可能性があるが、決め手はない。高台付杯Ⅳ類Aらしきものを5個入れた瓷器の畚が劉宋441年の福州墓から出土。畚の初出例で、以後、例が多くなる。これを茶用とみる人もいるが、速断できない。高台付碗には、口縁が外反するⅥ類もある。蓋付の初出例でもある。羹あるいは粥用と推定する浅目の丸底碗Ⅳ・Ⅴ類、平底碗Ⅳ・Ⅴ類もあるが、前者の隋代の例では匕（匙）を伴った例もあり、飯用にも使用されたと推測される。鉢は、古い平底Ⅲ類や高台付Ⅱが残るが、新たに高台付Ⅳ・Ⅴ類が登場する。魁はⅡ類A・Bが6世紀中頃まで存続する。水をいれたと推測する盃は南北朝後期から深目のⅢ類になるが、扁平な短胴罐Ⅳ類はあまり変化せずに存続する。鉄鉢形は隋代に深目のⅡ類に変わる。

大盤は、新疆ではⅥ類Bの銀器があるが、中華には及ばない。他は、円案のⅤ類が存続する程度で、高台付のⅤ類Bが南北朝後期に出現する。中盤も好例はない。小盤は銘々皿のⅥ類が存続。高台を伴うⅥ類Bは5世紀後半頃からである。ササン朝ペルシャ産の北魏504年の大同出土鍍金銀器にうかがわれたように、西方からの影響があったのであろう。托は、承けが高いⅡ・Ⅲ類が、主に杯用として展開する。

豆は、南北朝前半期から隋代にかけて、Ⅰ・Ⅱ類が再び登場する。大型のⅠ・Ⅱ類は、隋代からで、杯・碗をのせた例が目立つ。盒も再登場する。円筒形のⅢ類Aや鼓形のⅣ類がある。前者は化粧用の粉盒であろうが、後者は水器かもしれない。高足香盒は南北朝後期から登場する。この時期には柄香爐も出土している。墓の被葬者は僧ではない。唐代の壁画資料からみても、官人が柄香爐を持つ例はあり、参詣や儀式などで使用した嚙矢と推測する。

漢代以来の鈇や球胴壺Ⅱ類が486年頃の北魏墓から唯一出土しているが明器であり、以後は途絶する。三国時代に登場した盤口の球・長胴壺Ⅲ類は形を変えながら存続するが、球胴壺Ⅲ類と盤口の細頸壺Ⅲ類は隋代頃に終わる。新種は、いわゆる玉壺春式の細頸壺Ⅳ類で、5世紀後半に出現し、唐代につづく。壺はガラス器かその模倣品で、Ⅲ類が6世紀前半から、袋状口縁のⅣ類が隋代に出現して、これも唐代につづく。短・長胴罐では直口で肩に四耳をもつⅤ類が南北朝後期に登場し、唐代に引き継がれる。

瓶は、反口瓶Ⅱ・Ⅲ類Aが5世紀代、Ⅲ類Bの系譜をひくいわゆる蕉形水瓶のⅣ類が6世紀後半、いわゆる王子形水瓶のⅤ類A・Bが6世紀前半に登場、盤口瓶Ⅰ・Ⅱ類も6世紀前半に登場し、盛期となる。6世紀前半には浅洗Ⅲ類A、6世紀後半には浅洗Ⅲ類Bがあり、上記の反口瓶Ⅳ・Ⅴ類も同じ墓から出土していることからセットであり、手を洗う礼器といえる。このことは唐代の絵画資料からも裏付けられる。なお、三脚付の深洗Ⅲ類が6世紀後半にあるが、浅洗と組み合うものではない。特殊例である。

鍋や釜・甑は若干の明器（鏝付き球胴釜Ⅱ類）がある程度で実態は不明。鏝斗はⅢ・Ⅳ類が存続、北朝・隋では特有の鍍が形を変えながらも存続（Ⅳ・Ⅴ類）する。

唾壺は、南北朝前半はⅡ類だが、6世紀中頃からは口縁が広がるⅢ類に変わる。ともに落とし蓋を伴うようになるのは新しい要素の一つである。

熨斗は新種のⅣ類が6世紀中頃に登場する。爐は鏝斗と組むⅡ類が見当たらなくなる。爐の新器形は5世紀前半から登場する三脚鍋様のⅣ類A・B、鼎様のⅤ類で、ともに下盤を伴う。小型であり、香用の薫爐と推測する。Ⅴ類は隋代ですたれる。正倉院の火舎につながる環耳付の爐Ⅲ類Aは、6世紀後半が初現で、唐代につながる。これも香用の薫爐である。燈は豆燭・盞燈ともに丈の長いⅢ・Ⅳ類が南北朝後期に登場する。脚に太い突帯をもつ豆燈Ⅴ類Aは隋代にはじまり、蠟燭を中空柱に差し込む蠟燭燈Ⅱ類も確実には隋代にはじまり、ともに唐で展開する。

初・盛唐 この時代は、南北朝時代の後半に登場した器種・器形と隋代頃の新器形が展開する一方で、ササン朝ペルシャなど西方からの新しい影響が再度及んだ時期である。西方からの影響は、南北朝前半の5世紀代より強く、容器の形状は大きく変化する。その代表は、花形の高足杯、杯・碗・鉢、盤などで、7世紀代は鍍金銅器が主、8世紀に入ると銀器や鍍金銀器が主となる。波及の時期は、高足杯の一部は初唐でも古くなる可能性があるが、他は7世紀後半前後と8世紀中頃に登場してくる。貯蔵具や煮沸具なども7世紀後半前後と8世紀中頃が画期である。ただし、後でも触れるように、8世紀後半の良好例がないため、中唐への変遷は今ひとつ明瞭にできない。今後期待せざるをえない。

飲器では、高足杯Ⅵ・Ⅶ類、把手付杯Ⅳ～Ⅶ類が新しく登場する。高足杯Ⅵ・Ⅶ類Aは初唐でも古く、7世紀後半～8世紀初にⅥ類B・CとⅦ類B、8世紀中頃にⅥ類DとⅦ類D・Eに変化するようである。把手付杯Ⅳ・Ⅴ類とその祖型と推測されるⅥ類A、それにⅦ類Aは7世紀後半～8世紀初、Ⅵ・Ⅶ類Bは8世紀中頃。7世紀後半には、把手付壺形杯Ⅲ類、楕円長杯、曲長杯もあり、前二者は8世紀中頃までだが、後二者は中・晩唐に展開する。耳杯は8世紀中頃に新式のⅣ類があるが、極めて稀で、以後は途絶えたようである。

杯・碗では、南北朝後期や隋代からの高台付杯Ⅳ～Ⅵ類、丸底碗Ⅱ・Ⅳ類、平底碗Ⅴ類、高台付碗Ⅳ・Ⅵ類が形を変えながら存続する。新器形の一群は花形の杯・碗や稜碗。花形杯Ⅰ～Ⅲ類、花碗Ⅰ・Ⅱ類が7世紀後半頃、花碗Ⅲ類が盛唐、稜杯Ⅲ類は8世紀前半。稜碗は深目のⅡ～Ⅳ類Aが7世紀末～8世紀前半で、8世紀中頃には浅目のⅤ類が登場する。通常のものでは、口縁が強く外反する高台付碗Ⅶ類は、輪状撮みの蓋が伴う初出例でもあるが、時期が8世紀中頃前後に限られる。体部が直線的に開く高台付碗・杯Ⅷ類は瓷器のみだが8世紀中頃から、口縁が外反する丸・平底杯Ⅶ類や丸・平底碗Ⅶ類がおそらく7世紀末頃から登場してくる。鉢は7世紀中頃のやや早くに新式の高台付Ⅵ類が出現。平底鉢はⅤ類Aが初唐でも古く、Ⅴ類Bが8世紀初に出現し、中唐にも引き継がれる。鉄鉢形は8世紀初には底がやや尖り気味のⅢ類、8世紀中頃には尖底のⅣ類に変化。盂は南北朝後期のⅣ類が存続するが、これに似た短胴罐Ⅳ類は初唐でも早い時期に終わる。魁は、新式のⅢ・Ⅳ類が8世紀に出現するが、中唐では途絶える。

托では良好な例がない。盤では古式の中盤Ⅴ類や小盤Ⅵ類Aが7世紀後半～8世紀初頃まで残る。唐代の絵画資料からすると、これらが托にも用いられた可能性がある。大盤Ⅵ類Cは多数の杯をのせる器台として用いられる。盤の新器形は花形で、大・中盤は三脚付花盤Ⅱ類A・

Bが8世紀中頃、中盤の長方形花盤Ⅰ類が7世紀後半～8世紀初頃、小盤は花盤Ⅰ類が7世紀後半頃、Ⅲ類が8世紀中頃と盛行する。大・小盤では円形のⅥ類C、小・中盤ではⅦ類が8世紀初頃から盛行するが、三脚付盤は盛唐で終わってしまうようである。円形の小盤Ⅵ類Cは、7世紀中頃に登場し、銀器では内底に虎らしきを飾ることからササン朝ペルシャ産とみている。

豆は7世紀代に若干の資料があるが、以後は再び目立たなくなる。盒は薬石などをいれた円筒形のⅢ類Aが残るが、化粧用の粉盒は8世紀に入ると、貝形Ⅴ類、花形Ⅵ類などと多様になる。高足香盒は、8世紀中頃には蓋に相輪状の撮みがつくⅢ類、いわゆる塔鏡に変わる。

壺類は、いずれも瓷器か陶器で、長胴Ⅱ類A、Ⅲ類B・Cが7世紀代に残る程度だが、Ⅱ類の系統は8世紀初から、蓋に相輪状の撮みをもつ蓋と器台がセットになった、いわゆる塔式罐と呼んでいるⅡ類Bが盛行し、以後にもつづく。細頸壺は玉壺春式のⅣ類Bと反口のⅤ類、壘は隋からのⅣ類やⅡ類A・B、罐も南北朝後期・隋からの球胴罐Ⅳ類Aや長胴罐Ⅴ類Aなどが存続する。瓮には珍しくも銅器が数点あり、晩唐の銅器に「酒瓮」とあることから、特に酒貯蔵用と意識されたことが窺える。

瓶は、いわゆる蕉形水瓶形のⅣ類が7世紀末頃まで、王子形水瓶形のⅤ類Cが8世紀中頃まで残る。新器形は球胴・長脚のⅥ類で、7世紀後半～8世紀初に登場。浄瓶も新器種で、8世紀前半がⅠ類、8世紀中頃にⅡ類に変化する。浄瓶は、僧侶の携帯品とするのが一般で、Ⅱ類も僧・神会の持物だが、Ⅰ類を出土した墓の被葬者・王仁波は俗人である。ただし、王仁波は仙境を好んだ節があり、その折りの携帯品かもしれない。瓶Ⅴ類は、既述したように開元・天宝年間(713～755)の敦煌・莫高窟の絵画資料(第12図2・3)では、浅洗Ⅳ類らしきものの上において捧げ持つ参詣団があり、手を洗ったりあるいは剃髪に用いる儀式具であったことが知れる。浅洗は7世紀後半頃から登場し、形を変えながらも中・晩唐につづく。墓の出土例をみると、瓶Ⅳ・Ⅴ類と伴出した確実な例はなく、礼器としての意識は薄れて、洗は手や顔を洗う器、瓶は水をいれたり、時に花瓶としてそれぞれ単独に用いられたのではないかと推測する。

有柄注壺は、口縁に片口をつけたⅣ類が形を変えながら盛行する。ワイン用であろう。柄がないⅣ類も出土数は少ないがある。新器形は頸が長い反口の長胴壺に注口と把手をつけた有柄注壺Ⅴ類AとⅥ類Aで、前者は8世紀初から、後者は8世紀中頃から登場する。特に後者は、中・晩唐の主流を占め、茶用を含むことも明かである。他に短胴罐に注口をつけた水注、有柄壺Ⅱ類、双柄壺Ⅰ・Ⅱ類があり、以後も細々とつづく。碗形匱は8世紀中頃に登場するが、前漢の礼器の復古ではなく、実用的な酒や水の注器、日本でいう片口とみるべきであろう。

釜・甑は副葬品がほとんどなく、鐔付きの球胴釜Ⅱ類が存在していたことを知る程度である。鍬壺は、復古的なⅠ類系統の明器が7世紀にあるが、以後は途絶える。鍬斗は古式のⅡ・Ⅳ類が残るが、前者は明器、後者も小型で薬用。実用具としては新式のⅤ類A・Bが8世紀前半に登場するが、以後は廃れる。この時代は、新式の提梁鍋Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類、三脚鍋Ⅲ・Ⅳ類が盛行する。多くは内耳をもち、以後にもつづく。提梁罐は初・盛唐に限ってみられるが、その一部は中国北半部に特徴的な鍍を継承した可能性がある。初唐の壁画では、提梁罐を左手、角杯を右手に持った例があり、提梁罐が温酒器であったことを物語る。8世紀前半には三脚罐も登場する。小型品の一部は薬石の容器らしいが、前漢代の鍬尊に似たものもあり、宴会などで食物を温める器として用いられたとも考えられる。

鬲斗は明器として古式のⅢ類がある程度だが、実用具は存在したはずである。唾壺は、盤口だが、口縁端が大きく開くⅣ類にかわる。爐は、古式のⅣ類A・Bのほか正倉院の火舎ともつながるⅢ類C・Dがあり、以後にもつづく。燈は、南北朝後半の豆燈Ⅱ類、隋代の豆燈Ⅴ類と蠟燭用Ⅱ類が形を変えながら存続する。蓋燈は、Ⅲ類がなく、8世紀中頃には1個の内耳をもつⅥ類が登場し、以後にもつづく。

中・晩唐～五代・十国時代 既に触れたように、8世紀後半の良好な資料が少ないため、盛唐の諸器種・器形がいつまで残るのかは判然としない。中唐でも9世紀前半の諸資料は盛唐とは大きく異なり、8世紀後半が画期になると予測できる。中唐と晩唐の境は、通説に従い835年としたが、容器類で見ると850年頃が画期といえる。金属器は、中・晩唐では鍍金銀器が主となる。五代・十国時代は、晩唐から北宋への過渡期であり、茶用と推測する有柄注壺Ⅷ類とその温器である花形鉢Ⅱ類など北宋で展開する容器の出現があった。

飲器では、高足杯が遅くとも9世紀中頃に花形のⅧ・Ⅸ類にかわるが、例は少ない。把手付杯や角杯は出土例がなく、曲長杯が主となる。典型的な長曲杯は10世紀初まであり、楕円長杯を花形にした花形長杯は多く、9世紀前半から9世紀中頃まではあるが、ともに五代・十国時代にはつづかない。高足杯Ⅷ類A・Bや花形長杯にも、後述するように托が伴うことは新要素である。

杯は、古式のⅣ類Aが五代まで残り、他のⅣ類やⅥ類も形を変えながら存続し、以後にもつづく。花形杯は晩唐末から五代・十国時代に深目のⅢ類があるが、その上限は不明。瓷器に限られるが、体部が直線的に開く高台付杯・碗Ⅷ類は8世紀後半からあり、北宋にもつづく。碗では、盛唐に登場した丸・平底碗Ⅶ類が、遅くとも9世紀中頃からは体部が強く外傾するⅧ類に変わる。高台付碗は、8世紀中頃に登場した浅目のⅠ類Dの系譜をひくⅠ類E・Fと、口縁が強く外反・外折するⅧ類Cが9世紀前半から五代・十国時代まで存続する。口縁が外反するⅥ類も五代・十国時代につづくが、Ⅵ類Bの銀器は「宣徵酒坊」の刻銘があり、飲酒器らしい。高台付の花碗は、盛唐に比して体部の外傾するⅣ類が9世紀後半頃にあり、北宋につづくが、これも上限は不明。

鉢は初・盛唐に登場した平底鉢Ⅴ類が五代・十国時代まで形を変えながら残るが、以後はすたれる。瓷器に限られるが、古式の平底鉢Ⅲ類系統に高台をつけたⅤ類が中・晩唐にある。鉢の新器形は9世紀後半に登場する花形鉢Ⅰ類で、蓮葉形の蓋を伴う。五代・十国時代に登場する花形鉢Ⅱ類は茶用と推測する有柄注壺Ⅷ類の温器で、北宋に主流となる。鉄鉢形は尖底のⅣ類が中唐、Ⅴ類が9世紀後半にあるが、以後はすたれた可能性がある。盃は9世紀前半にⅥ・Ⅷ類に変わるが、これも北宋には途絶えてしまう。

托は、底を窪ませた特有なⅢ類が9世紀前半末頃、ほぼ同巧ながら花形にした花形托Ⅰ類が9世紀後半に出現し、後者は五代・十国時代のⅡ類をへて、北宋にも存続する。花形托Ⅰ類には「茶庫（中略）拓子」の刻銘があり、寸法から杯でなく碗を飲茶器として用いたことが知れる。寸法の小さい托Ⅲ類や花形托は高台付杯Ⅳ類やⅧ類をのせたことも出土例からはわかるが、これで何を飲んだかは、なお断定できない。専用托の盛行によって、中・小盤を托とすることはなくなったと考える。

茶道具は、後述する有柄注壺Ⅵ類が「茶杜瓶」で、茶をひいた碾は830年頃からあり、茶を

納めた箱は874年にある。「茶托」の存在と合わせて、9世紀前半には飲茶の風が盛行していたことが容器から画定できる。飲茶はすでに後漢末には始まっているが、唐代までの間にどのように普及したかは、なお今後追求すべき大きな課題といえる。

盤は、大盤では盛唐の三脚付花盤Ⅱ類A・Bと異なって、三脚がつかず、文様も異なる花盤Ⅱ類Cが8世紀後半にあり、盛唐からの変遷が知れる。この系統は9世紀までつづかない。中盤では、四花形の花形長盤Ⅱ類Aが9世紀前半からあり、9世紀後半～10世紀初には菱花形の花形長盤Ⅲ類も加わるが、五代・十国時代には途絶える。小盤では、古式の花形盤Ⅱ類A・Cが晩唐や五代・十国時代に一部残るが、8世紀後半に花形盤Ⅳ類、9世紀中頃には花形方盤が登場する。前者は北宋につづくが、後者は五代・十国時代ではすたれるようである。円形の中・小盤Ⅶ類は9世紀前半にはすたれるが、9世紀後半にはイスラムからのガラス器が流入したことなどが注目される。粉盒は、盛唐からの伝統が残るが、9世紀中頃から隅丸方形や楕円形のⅦ類、9世紀後半には蝶形のⅧ類が登場する。花形は9世紀中頃から台付きのⅥ類Bが新登場するが、台のないⅥ類Aも存続し、やがて北宋を代表する菊花形の香盒につながるようになる。

壺類は、球胴壺の新種であるⅥ類の金器が9世紀後半にあり、長胴壺のⅡ類Bが中・晩唐にも盛行するが、五代・十国時代にはすたれたことを示し得る程度である。瓶は、古式の反口瓶Ⅴ・Ⅵ類が中・晩唐まで残るようだが、以後はすたれる。盤口瓶は晩唐にあり、北宋にも細々と残る。新種は体部に面取りを施して八面体とした直口瓶Ⅲ類が、9世紀後半から五代・十国時代までである。壺はⅢ・Ⅳ類がそれぞれ8世紀後半と9世紀後半にあり、北宋にもつづく。罐はあまり変化しない長胴罐Ⅱ類や瓮が存続。洗は、盛唐からのⅣ類が9世紀中頃まで、まもなく花形洗Ⅰ・Ⅱ類に変わるようである。

片口の注壺と有柄注壺Ⅳ類は中唐にあるが、前者は9世紀中頃、後者は晩唐～五代ですたれる。盛唐に登場した有柄注壺Ⅴ・Ⅵ類は五代・十国時代までである。主流はⅥ類で、9世紀中頃に注口が短いⅥ類Aから注口の長いⅣ類Cにかわり、後者が北宋につづく。808年のⅥ類Aには「茶杜瓶」、872年のⅥ類Cには「宣徽酒坊」の刻名がある。Ⅵ類は茶用であり、酒用でもあったことになる。新器形は晩唐874年頃の法門寺出土有柄注壺Ⅶ類、五代・十国時代の有柄注壺Ⅷ類。前者は密教系法具で、いわゆる浄妙寺形水瓶の原型になる。後者は、既に触れたように茶用と推定できるもので、北宋で盛行する。

釜・甑は、副葬品がなく、実態をつかめない。鍬斗は脚を省略した有柄鍋にかわる。有柄鍋は824年が初出で、北宋にもつづくが、上限は不明。盛唐に登場した提梁鍋Ⅲ類が9世紀前半や後半、三脚鍋Ⅲ類は8世紀末～9世紀後半の資料があり、ともに北宋にもつづく。三脚罐もⅡ～Ⅳ類が9世紀初～10世紀初にあり、相似た三脚壺も9世紀後半にあるが、以後は途絶えてしまう。

熨斗は8世紀後半～新代のⅣ類が登場する。以後もつづいたはずだが、出土例はないようである。唾壺は9世紀初に、それまでの盤口から漏斗状のⅤ類にかわり、五代・十国時代には存続するが、北宋の確実な出土例はなく、その後の状況は明かでない。爐はいずれも薫爐で、古式のⅣ類が形を変えながら北宋にもつづく。Ⅲ類も9世紀後半にあるが、この時期には風爐とも呼ぶ大型の爐（薫爐）Ⅴ類が登場し、北宋にもつづく。燈では豆燈Ⅴ類が8世紀後半にある。

晩唐や五代・十国時代の資料は不明だが、北宋では多様に展開し、いわゆる金山寺形香爐になると推測する。蠟燭燈Ⅱ類も五代・十国時代までは存続する。蓋燈はⅥ類が晩唐～五代にあるが、以後は出土資料がない。杯や碗が蓋燈として転用されたのであろう。

註

- 1) 王振鐸（文献301）も同じ。ただし、円筒形かは断言できない。
- 2) 桑山正進（文献43）によれば、扁壺は楹、埴は俵形のようなものである。
- 3) 銅蓋の編年は、陳文領博（文献261）が詳しい。
- 4) 簋尊の器形で、口縁端に方形把手をつけた陶製品は、前漢前期の広州漢墓（文献4）、新代の山西・朔県（文献363）から出土している。
- 5) 現在のような柱状の蠟燭でなく、餅状の塊をもちいたとする見方（文献43参照）があるが、後述するように、隋・唐代には柱状蠟燭があり、それが漢代に遡る可能性もある。
- 6) 鍍の編年は文献200などにある。
- 7) 托Ⅰ類は南北朝中・晩期（文献188）まで残る。
- 8) 同類の陝西・法門寺塔地宮出土ガラス器（文献370）は5世紀とみている。
- 9) 河北・邢窯出土瓷器（文献367）には、隋代とみる有柄注壺Ⅳ類があるが、他に古い例はない。後考をまつ。
- 10) 西安市城建局の花形長盤（文献16）は、詳細不明ながら758～774年という。

引用・参考文献

- 1 中国科学院考古研究所編輯 1964『前蜀王建墓發掘報告』（『中国田野考古報告集』考古学專刊 丁種第15号）
- 2 中国社会科学院研究所 1966『西安郊区隋唐墓』（『中国田野考古報告集』考古学專刊 丁種第18号）
- 3 中国社会科学院考古研究所 河北省文物管理处 1980『滿城漢墓發掘報告』（『中国田野考古報告集』考古学專刊 丁種第20号）
- 4 広州市文物管理委員会 広州市博物館 1981『広州漢墓』（『中国田野考古報告集』考古学專刊 丁種第21号）
- 5 中国社会科学院考古研究所編著 1980『唐長安城郊隋唐墓』（『中国田野考古報告集』考古学專刊 丁種第22号）
- 6 河北省博物館 中国社会科学院考古研究所 1989『曾侯乙墓』（『中国田野考古報告集』考古学專刊 丁種第37号）
- 7 中国社会科学院考古研究所編著 1994『陝東周秦漢墓』（『中国田野考古報告集』考古学專刊 丁種第42号）
- 8 広州市文物管理委員会 中国社会科学院考古研究所 広東省博物館 1991『西漢南越王墓』（『中国田野考古報告集』考古学專刊 丁種第43号）
- 9 中国社会科学院考古研究所 2001『偃師杏園唐墓』（『中国田野考古報告集』考古学專刊 丁種第64号）
- 10 曾昭燏 蔣賓庚 黎忠義 1956『沂南古画像石墓發掘報告』
- 11 南京博物院 1957『南唐二陵』
- 12 王子雲 1957『中国古代石刻画選集』
- 13 内蒙古自治区博物館文物工作隊 1978『和林格爾漢墓壁画』
- 14 沈從文 1981『中国古代服飾研究』
- 15 李發林 1982『山東漢画像石研究』
- 16 鎮江市博物館 陝西省博物館 1985『唐代金銀器』
- 17 甘肅省文物隊 甘肅省博物館 嘉峪関市文物管理所 1985『嘉峪関壁画墓發掘報告』
- 18 黃明欄 1987『洛陽北魏世俗石刻線画集』
- 19 法門寺考古隊 石興邦 韓偉 1988『法門寺地宮珍宝』
- 20 寧夏固原博物館 1988『固原北魏墓漆棺画』
- 21 張廷皓 1990『法門寺』
- 22 湖北省荆沙鐵路考古隊 1991『包山楚墓』
- 23 陝西省考古研究所 員安志編著 1992『中国北周珍貴文物』
- 24 陝西省考古研究所 西安市文物管理处 1993『陝西新出土文物集萃』
- 25 中国社会科学院考古研究所 1993『考古精華』中国社会科学院考古研究所建所四十年記念
- 26 青海省文物考古研究所 1993『上孫家寨漢晋墓』
- 27 甘肅省文物考古研究所 1994『敦煌祁家湾—西晋十六国墓葬發掘報告一』
- 28 河北省文物研究所 1995『罌墓—戰国中山国国王之墓—』
- 29 寧夏回族自治区固原博物館 羅豐 1996『固原南郊隋唐墓地』
- 30 内蒙古文物考古研究所 魏堅 編著 1998『内蒙古中南部漢代墓葬』
- 31 陝西省考古研究所編 1998『陝西新出土文物選粹』
- 32 甘肅省文物考古研究所 1998『敦煌仏爺廟湾西晋画像碑墓』
- 33 原州聯合考古隊 1999『唐 史道洛墓』
- 34 河北省文物研究所編 2000『河北古代墓葬壁画』
- 35 山西考古研究所 2000『唐代薛徹墓發掘簡報』
- 36 韓偉 2001『磨硯書稿』（『韓偉考古文集』）
- 38 原田淑人 1937『漢六朝の服飾』（東洋文庫）
- 39 奥村 伊九良 1937『瓜茄』 4
- 40 水野精一 長広敏雄 1943『龍門石窟の研究』（東方文化研究所）
- 41 樋口隆康 1967『中国の銅器』（中央公論美術出版）
- 42 朝日新聞社 1973『文化大革命中の中国出土文物』
- 43 林巳奈夫 1976『漢代の文物』（京都大学人文科学研究所）
- 44 敦煌文物研究所編 1981『中国石窟 敦煌莫高窟』第2卷（平凡社）

- 45 土居淑子 1986『古代中国の画像石』（同朋舎出版）
- 46 龍門文物保管所 北京大学考古系編 1987『中国石窟 龍門石窟』第1卷（平凡社）
- 47 盧兆蔭 1993『中国玉器全集』4（河北美術出版社）
- 48 百橋明穂 中野徹 1997『世界美術大全集 東洋編』第4卷（小学館）
- 49 曾布川寛 谷豊信 1998『世界美術大全集 東洋編』第2卷（小学館）
- 50 和泉市久保惣記念美術館 1999『中国の響銅』
-
- 51 張季 1957「河北景県封氏墓群調査記」『考古通訊』1957-3
- 52 黄河水庫考古工作隊 1957「一九五六年河南陝県劉家渠漢唐墓葬發掘簡報」『考古通訊』1957-4
- 53 曾凡 1957「福州西門外六朝墓清理簡報」『考古通訊』1957-5
- 54 張正嶺 1957「西安韓森寨唐墓清理記」『考古通訊』1957-5
- 55 貴州省博物館 1959「貴州平坝県医尹関六朝墓」『考古』1959-1
- 56 山西省文物管理委員会 1959「太原南郊金勝村唐墓」『考古』1959-9
- 57 考古研究所安陽發掘隊 1959「安陽隋張盛墓發掘記」『考古』1959-10
- 58 馬得志 1959「唐代長安城平康坊出土的鑲金茶托子」『考古』1959-12
- 59 江西省文物管理委員会 1960「江西清江隋墓發掘簡報」『考古』1960-1
- 60 山西省文物管理委員会 1960「太原南郊金勝村三號唐墓」『考古』1960-1
- 61 浙江省文物管理委員会 1960「浙江瑞安桐溪與芦蒲古墓清理」『考古』1960-10
- 62 広州市文物管理委員会 1961「広州沙河鎮獅子崗晋墓」『考古』1961-5
- 63 金琦 1963「南京甘家巷和童家山六朝墓」『考古』1963-6
- 64 徐恒彬 1963「広東英徳浚洸鎮南朝隋唐墓發掘」『考古』1963-9
- 65 周世栄 1964「湖南零陵李家園發現新莽墓」『考古』1964-9
- 66 湖北省博物館 1965「武漢地区四座南朝紀年墓」『考古』1965-4
- 67 広東省文物管理委員会 1965「広東韶關六朝隋唐墓葬清理簡報」『考古』1965-5
- 68 福建省文物管理委員会 1965「福建閩候閩口橋頭山發現古墓」『考古』1965-8
- 69 河南省文化局文物工作隊 1966「河南新安古路溝漢墓」『考古』1966-3
- 70 湖南省博物館 1966「長沙湯家嶺西漢墓清理報告」『考古』1966-4
- 71 湖北省博物館 1966「湖北漢陽蔡甸一號墓清理」『考古』1966-4
- 72 南京市文物保管委員会 1966「南京邁皋橋西晉墓清理」『考古』1966-4
- 73 湖南省博物館 1966「湖南長沙近郊隋唐墓清理」『考古』1966-4
- 74 河北省文化局文物工作隊 1966「河北定県出土北魏石函」『考古』1966-5
- 75 広西壮族自治区文物考古写作小組 1972「広西合浦西漢木椁墓」『考古』1972-5
- 76 河北省博物館 文物管理处 1972「河北曲陽發現北魏墓」『考古』1972-5
- 77 南京博物院 1973「江蘇溧陽果園東晋墓」『考古』1973-4
- 78 洛陽博物館 1973「洛陽北魏元邵墓」『考古』1973-4
- 79 安陽県文教局 1973「河南安陽隋墓清理簡記」『考古』1973-4
- 80 貴州省博物館考古組 1973「貴州平坝馬場東晋南朝墓發掘簡報」『考古』1973-6
- 81 王仁波 1973「唐懿徳太子墓壁画題材的分析」『考古』1973-6
- 82 朝陽地区博物館 1973「遼寧朝陽唐韓貞墓」『考古』1973-6
- 83 江西省博物館 1974「江西瑞昌馬頭西晋墓」『考古』1974-1
- 84 徐州博物館 1974「江蘇徐州奎山西漢墓」『考古』1974-2
- 85 鞏県文化館 1974「河南鞏県發現一批漢代銅器」『考古』1974-2
- 86 衢県文化館 1974「浙江衢県街路村西晋墓」『考古』1974-6
- 87 山東省博物館 蒼山県文化館 1975「山東蒼山元嘉元年画像石墓」『考古』1975-2
- 88 浙江省文物管理委員会 1975「杭州、臨安五代墓中的天文圖和秘色瓷」『考古』1975-3
- 89 安徽省展覽、博物館 1976「合肥西郊隋墓」『考古』1976-2
- 90 南波 1976「江蘇句容西晋元康四年墓」『考古』1976-6
- 91 亳県博物館 1977「安徽亳県隋墓」『考古』1977-1
- 92 南京博物院 1977「江蘇宜興晋墓的第二次發掘」『考古』1977-2
- 93 石家地区革委会文化局文物發掘組 1977「河北贊皇東魏李希宗墓」『考古』1977-6
- 94 磁県文化館 1977「河北磁県東陳村東魏墓」『考古』1977-6

- 95 敖漢旗文化館 1978「敖漢旗李家營子出土的金銀器」『考古』1978-2
- 96 陝西省文管會 昭陵文管所 1978「陝西禮泉唐張士貴墓」『考古』1978-3
- 97 曾億丹 1978「洛陽發現鄭開明二年墓」『考古』1978-3
- 98 廣西壯族自治區文物工作隊 1979「廣西恭城新街長茶地南朝墓」『考古』1979-2
- 99 福建省博物館 1980「福建閩侯南嶼南朝墓」『考古』1980-1
- 100 江西省歷史博物館 1980「江西南昌市東吳高榮墓的發掘」『考古』1980-3
- 101 湖南省博物館 1980「湖南長沙咸嘉湖唐墓發掘簡報」『考古』1980-6
- 102 北京市文物工作隊 1980「北京市發現的幾座唐墓」『考古』1980-6
- 103 益陽縣文化館 1981「湖南益陽縣赫山廟唐墓」『考古』1981-4
- 104 鄂城縣博物館 1982「湖北鄂城四座吳墓發掘報告」『考古』1982-3
- 105 魏正瑾 易家勝 1983「南京出土六朝青瓷分期探討」『考古』1983-4
- 106 廣東省博物館 1983「廣東曲江南華寺古墓發掘簡報」『考古』1983-7
- 107 武漢市文物管理處 1983「武漢市東湖岳家嘴隋墓發掘簡報」『考古』1983-9
- 108 唐昌朴 1983「江西南昌東吳墓清理簡記」『考古』1983-10
- 109 壽光縣博物館 1984「紀國故城附近出土一批漢代銅器」『考古』1984-1
- 110 金華地區文管會 1984「浙江常山縣何家西晉紀年墓」『考古』1984-2
- 111 廣西壯族自治區文物工作隊 1984「廣西壯族自治區欽州隋唐墓」『考古』1984-3
- 112 贛州市博物館 1984「江西贛縣南齊墓」『考古』1984-4
- 113 福建省博物館 1984「福建莆田唐墓」『考古』1984-4
- 114 鎮江博物館 1984「鎮江東吳西晉墓」『考古』1984-6
- 115 安徽省文物工作隊 和縣文物組 1984「安徽和縣西晉紀年墓」『考古』1984-9
- 116 中國社會科學院考古研究所河南第二工作隊 1984「河南偃師杏園村的兩座唐墓」『考古』1984-10
- 117 安徽省文物工作隊 1984「安徽南陵縣麻橋東吳墓」『考古』1984-11
- 118 黃炳元 1984「泉州河市公社發現唐墓」『考古』1984-12
- 119 鎮江市博物館 1985「江蘇鎮江唐墓」『考古』1985-2
- 120 石家莊地區文物研究所 1985「河北晉縣唐墓」『考古』1985-2
- 121 淄博市博物館 臨淄區文管所 1985「臨淄北朝崔氏墓地第二次清理簡報」『考古』1985-3
- 122 中國社會科學院考古研究所漢長安城工作隊 1985「漢長安城發現西漢窖藏銅器」『考古』1985-5
- 123 安徽省文物考古研究所 1985「安徽定遠谷堆王九座漢墓的發掘」『考古』1985-5
- 124 宜昌地區博物館 1985「1978年宜昌前坪漢墓發掘簡報」『考古』1985-5
- 125 衢州市文物館 1985「浙江衢州市隋唐墓清理簡報」『考古』1985-5
- 126 伊川縣文化館 1985「河南伊川發現一座唐墓」『考古』1985-5
- 127 劉興 1985「江蘇梁太清二年窖藏銅器」『考古』1985-6
- 128 諸城縣博物館 1985「山東省諸城縣西晉墓清理簡報」『考古』1985-12
- 129 重慶市博物館 1986「重慶市臨江支路西漢墓」『考古』1986-3
- 130 遂溪縣博物館 1986「廣東遂溪縣發現南朝窖藏金銀器」『考古』1986-3
- 131 趙洪章 1986「浦城出土唐代銅鏹斗」『考古』1986-4
- 132 中國社會科學院考古研究所河南第二工作隊 1986「河南偃師杏園村的六座紀年唐墓」『考古』1986-5
- 133 宋百川 龍鳳君 1986「山東地區北朝晚期和隋唐時期盜窰遺址的分布與分期」『考古』1986-12
- 134 廣西壯族自治區博物館 全州縣文物管理所 1987「廣西全州縣發現紀年唐墓」『考古』1987-3
- 135 張小平 1987「江西大余清理一座南朝宋紀年墓」『考古』1987-4
- 136 蔚縣博物館 1987「河北蔚縣榆澗唐墓」『考古』1987-9
- 137 江西省文物工作隊 南昌市博物館 1989「南昌市京家山漢墓」『考古』1989-8
- 138 林忠干 林存琪 陳子文 1990「福建六朝隋唐墓葬的分期問題」『考古』1990-2
- 139 劉謙 1990「錦州北魏墓清理簡報」『考古』1990-5
- 140 中國社會科學院考古研究所 河北省文物研究所 鄴城考古工作隊 1990「河北磁縣灣漳北朝墓」『考古』1990-7
- 141 揚州博物館 1990「揚州近年發現唐墓」『考古』1990-9
- 142 零陵地區文物工作隊 1990「湖南永州市鶴子山西漢“劉疆”墓」『考古』1990-11
- 143 南京市博物館 1990「江蘇南京卡子門外六朝早期墓」『考古』1990-11
- 144 綿陽博物館 1990「四川綿陽西山六朝崖墓」『考古』1990-11

- 145 吳煒 1991「江蘇儀征胥浦發現唐墓」『考古』1991-2
- 146 滄州市文物保護管理所 滄縣文化館 1991「河北滄縣前宮村唐墓」『考古』1991-5
- 147 中国社会科学院考古研究所河南二隊 1991「河南偃師縣杏園村的四座北魏墓」『考古』1991-9
- 148 周日璉 1991「四川蘆山出土的巴蜀文化器物」『考古』1991-10
- 149 衡陽市文物工作隊 1991「湖南衡陽荊田村發現東漢墓」『考古』1991-10
- 150 信陽地區文管會 光山縣文管會 1991「河南光山縣黃大山戰國墓清理簡報」『考古』1991-11
- 151 天水市博物館 1992「天水市發現隋唐屏風石棺床墓」『考古』1992-1
- 152 宋永祥 1992「安徽郎溪唐宋墓」『考古』1992-4
- 153 衡陽市文物工作隊 1992「湖南南岳萬福村東漢墓」『考古』1992-5
- 154 南京市博物館 1992「江蘇南京鄧府山吳墓和柳塘村西晉墓」『考古』1992-8
- 155 張家口地區文官所 陽原原文官所 1992「河北陽原金家庄唐墓」『考古』1992-8
- 156 溫州市文物處 1992「浙江樂清縣發現五代土坑墓」『考古』1992-8
- 157 偃師商域市博物館 1992「河南偃師寇店發現東漢銅器窖藏」『考古』1992-9
- 158 風台縣文物管理所 1992「安徽省風台縣發現一座西晉墓」『考古』1992-11
- 159 朱土生 1993「浙江龍游縣東華山漢墓」『考古』1993-4
- 160 陳衍麟 1994「安徽繁昌發現三國吳將嚴圭銅洗」『考古』1994-2
- 161 濟寧市博物館 1994「山東濟寧發現一座東漢墓」『考古』1994-2
- 162 石家莊市文物保管所 獲鹿縣文物保管所 1994「河北獲鹿高庄出土西漢常山國文物」『考古』1994-4
- 163 汪景輝 楊立新 劉平生 1994「安徽南陵清理一座唐墓」『考古』1994-4
- 164 紹興縣文管所 1994「浙江紹興里木棚晉、唐墓」『考古』1994-6
- 165 賴斯清 1994「江西贛縣白鷺南朝墓」『考古』1994-7
- 166 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊 洛陽古墓博物館 1994「北魏宣武帝景陵發掘報告」『考古』1994-9
- 167 煙台文物管理委員會 1994「山東榮城梁南庄漢墓發掘簡報」『考古』1994-12
- 168 湖南省文物考古研究所 湘西自治州文物工作隊 大庸市文物管理所 1994「湖南大庸東漢磚室墓」『考古』1994-12
- 169 安徽省六安縣文物管理所 1995「安徽省六安縣城西窯廠2號楚墓」『考古』1995-2
- 170 楊晶 1995「略論鷄冠壺」『考古』1995-7
- 171 荊州博物館 1995「湖北荊沙市瓦墳園西漢墓發掘簡報」『考古』1995-11
- 172 賴斯清 1996「江西贛縣南朝宋墓的清理」『考古』1996-1
- 173 廣州市文物管理委員會 1996「廣州市下塘獅帶崗晉墓發掘簡報」『考古』1996-1
- 174 襄樊市博物館 1996「湖北襄樊市峴山漢墓清理簡報」『考古』1996-5
- 175 三門峽市文物工作隊 1996「河南三門峽市火電廠西漢墓」『考古』1996-6
- 176 何志國 唐光孝 1996「四川綿陽市園芸鄉發現南朝墓」『考古』1996-8
- 177 俸艷 1996「廣西慕城縣黃峰大灣地南朝墓」『考古』1996-8
- 178 贛州地區博物館 南康縣博物館 1996「江西南康縣荒唐東漢墓」『考古』1996-9
- 179 程永建 趙振華 1996「河南洛陽市發現東晉窖藏」『考古』1996-9
- 180 湖北省文物考古研究所 鄂州市博物館 1996「湖北鄂州市塘角頭六朝墓」『考古』1996-11
- 181 中国社会科学院考古研究所河南第二隊 1996「河南偃師市杏園村唐墓的發掘」『考古』1996-12
- 182 磁縣文物保管所 1997「河北磁縣北齊元良墓」『考古』1997-3
- 183 徐州市博物館 1997「江蘇徐州市花馬庄唐墓」『考古』1997-3
- 184 老河口市博物館 1998「湖北老河口市李樓西晉紀年墓」『考古』1998-2
- 185 廣西文物工作隊 合浦縣博物館 1998「廣西合浦縣母猪嶺東漢墓」『考古』1998-5
- 186 齊東方 張靜 1998「薩珊式金屬多曲長杯在中國的流傳與演變」『考古』1998-6
- 187 南京市博物館 南京市雨花台区文管會 1998「江蘇南京市板橋鎮楊家山西晉雙室墓」『考古』1998-8
- 188 南京市博物館 南京市玄武區文化局 1998「江蘇南京市富貴山六朝墓地發掘簡報」『考古』1998-8
- 189 南京市博物館 江寧縣文管會 1998「江蘇江寧縣下坊村東晉墓的清理」『考古』1998-8
- 190 廣西壯族自治區文物工作隊 鐘山縣博物館 1998「廣西鐘山縣張屋東漢墓」『考古』1998-11
- 191 銀雀山考古發掘隊 1999「山東臨沂市銀雀山的七座西漢墓」『考古』1999-5
- 192 祝恒富 王毅 1999「湖北鄖西縣老觀廟漢墓的清理」『考古』1999-7
- 193 成都市文物考古工作隊 2000「四川成都市石人壩小區漢墓清理簡報」『考古』2000-1

- 194 揚州博物館 2000「江蘇邗江縣姚庄102号漢墓」『考古』2000-4
- 195 廣東省文物考古研究所 和平縣博物館 2000「廣東和平縣晉至五代墓葬的清理」『考古』2000-6
- 196 湖北省文物考古研究所 2000「湖北荊州市施家地楚墓發掘簡報」『考古』2000-8
- 197 李龍章 2002「西漢南越王墓“越式大鉄鼎”考辨」『考古』2001-1
- 198 河北省文物研究所 平山縣博物館 2001「河北平山縣西岳村隋唐崔氏墓」『考古』2001-2
- 199 湖南省文物考古研究所 永州市芝山区文物管理所 2001「湖南永州市鷓子嶺二号西漢墓」『考古』2001-4
- 200 姚蔚玲 2001「寧夏固原縣出土的銅鏡」『考古』2001-11
- 201 盧德佩 2002「湖北宜昌縣土城青銅器窖藏坑」『考古』2002-5
- 202 鄭東 2002「福建廈門市下忠唐墓的清理」『考古』2002-9
- 203 何志国 胥沢蓉 2003「四川綿陽市發現一座王莽時期磚室墓」『考古』2003-1
- 204 傅亦民 2003「浙江奉化市晉紀年墓的清理」『考古』2003-2
- 205 汪發志 2003「安徽繁昌縣閘口村發現一座唐墓」『考古』2003-2
- 206 長沙市文物考古研究所 2003「長沙市新港晉墓的清理」『考古』2003-5
- 207 廣州市文物考古研究所 2003「廣州市橫枝崗西漢墓的清理」『考古』2003-5
- 208 長沙市文物考古研究所 2003「湖南望城縣長沙窯1999年發掘簡報」『考古』2003-5
- 209 陳夢家 1956「壽縣蔡侯墓銅器」『考古學報』1956-2
- 210 俞偉超 1956「西安白鹿原墓葬發掘報告」『考古學報』1956-3
- 211 河南省文化局文物工作隊第二隊 1957「洛陽晉墓的發掘」『考古學報』1957-1
- 212 羅宗真 1957「江蘇宜興晉墓發掘報告」『考古學報』1957-4
- 213 浙江省文物管理委員會 1958「黃岩秀嶺水庫古墓清理報告」『考古學報』1958-1
- 214 河南省文化局文物工作隊 1959「一九五五年洛陽澗西區北朝及隋唐墓葬發掘報告」『考古學報』1959-2
- 215 湖南省博物館 1959「長沙兩晉南朝隋墓發掘報告」『考古學報』1959-3
- 216 河南省文化局文物工作隊 1964「河南襄城茨溝漢畫象石墓」『考古學報』1964-1
- 217 河南省文化局文物工作隊 1964「洛陽西漢壁畫墓發掘報告」『考古學報』1964-2
- 218 湖北省博物館 1976「宜昌前坪戰國兩漢墓」『考古學報』1976-2
- 219 湖北省博物館 1976「光化五座墳西漢墓」『考古學報』1976-2
- 220 廣西壯族自治區文物工作隊 1978「平樂銀山嶺漢墓」『考古學報』1978-4
- 221 王克林 1979「北齊庫狄迴洛墓」『考古學報』1979-3
- 222 長沙市文化局文物組 1980「唐代長沙銅官窯址調查」『考古學報』1980-1
- 223 四川省博物館 1980「四川萬縣唐墓」『考古學報』1980-4
- 224 中國社會科學院考古研究所安陽工作隊 1981「安陽隋墓發掘報告」『考古學報』1981-3
- 225 周世榮 1982「長沙唐墓出土瓷器研究」『考古學報』1982-4
- 226 山東省荷澤地區漢墓發掘小組 1983「巨野紅土山西漢墓」『考古學報』1983-4
- 227 湖南省博物館 1984「湖南資興東漢墓」『考古學報』1984-1
- 228 山東省文物考古研究所 1984「臨淄北朝崔氏墓」『考古學報』1984-2
- 229 淮陰市博物館 1988「淮陰高庄戰國墓」『考古學報』1988-2
- 230 胥浦六朝墓發掘隊 1988「揚州胥浦六朝墓」『考古學報』1988-2
- 231 徐殿魁 1989「洛陽地區隋唐墓的分期」『考古學報』1989-3
- 232 權奎山 1992「中國南方隋唐墓的分区分期」『考古學報』1992-2
- 233 南京博物館 1992「儀征張集團山西漢墓」『考古學報』1992-4
- 234 湖南省博物館 湖南省文物考古研究所 1995「湖南資興西漢墓」『考古學報』1995-4
- 235 河南省文物考古研究所 鞏義市文物保管所 1996「鞏義市北窯灣漢晉唐五代墓葬」『考古學報』1996-3
- 236 重慶市文化局 湖南省文物考古研究所 巫山縣文物管理所 1999「重慶巫山麥沱漢墓群發掘報告」『考古學報』1999-2
- 237 湖北京九鐵路考古隊 黃岡市博物館 1999「湖北蕪春楓樹林東漢墓」『考古學報』1999-2
- 238 湖北省文物考古研究所 襄樊市博物館 1999「湖北襄樊鄭家山戰國秦漢墓」『考古學報』1999-3
- 239 黃岡市博物館 黃州區博物館 2000「湖北黃岡兩座中型楚墓」『考古學報』2000-2
- 240 羅豐 2000「北周李賢墓出土的中亞風格鍍金銀瓶—以巴克特里亞金屬製品為中心」『考古學報』2000-3
- 241 湖北省江陵縣文物局 荊州地區博物館 2000「江陵岳山秦漢墓」『考古學報』2000-4
- 242 四川大學歷史文化學院考古學系 重慶市文化局 雲陽縣文物管理所 2002「重慶雲陽李家壩東周墓地

- 1997年發掘報告『考古學報』2002-1
- 243 洛陽市文物工作隊 2002「洛陽解放路戰國陪葬坑發掘報告」『考古學報』2002-3
- 244 蔣廷瑜 2002「漢代鑿刻花紋銅器研究」『考古學報』2002-3
- 245 李知宴 1981「西安地區隋唐墓葬出土陶器的初步研究」『考古與文物』1981-1
- 246 盧建國 1981「銅川市陳爐出土唐代銀器」『考古與文物』1981-1
- 247 法門寺考古隊 1988「扶風法門寺唐代地官發掘簡報」『考古與文物』1988-2
- 248 杜葆仁 張世英 1988「陝西耀縣柳溝唐墓」『考古與文物』1988-3
- 249 呼林貴 任喜來 1988「陝西韓城小金盆村唐代白氏家族墓清理記」『考古與文物』1988-4
- 250 陳顯雙 朱世鴻 1989「四川開縣紅花村崖墓清理簡報」『考古與文物』1989-1
- 251 韓偉 1989「美國華盛頓佛利爾美術館收藏的唐代金銀器」『考古與文物』1989-3
- 252 王長啓 高曼 尚民傑 茹新華 1989「介紹西安市藏珍貴文物」『考古與文物』1989-5
- 253 漢中市博物館 何新成 1989「陝西漢中市鋪鎮磚廠漢墓清理簡報」『考古與文物』1989-6
- 254 韓保全 程林泉 1991「西安北郊棗園漢墓發掘簡報」『考古與文物』1991-4
- 255 西安市文物管理處 1991「西安西郊熱電廠基建工地隋唐墓葬清理簡報」『考古與文物』1991-4
- 256 李軍輝 1991「西安東郊黃河機器製造廠唐五代墓發掘簡報」『考古與文物』1991-6
- 257 徐進 1992「西安東郊黃河機械廠唐墓清理簡報」『考古與文物』1992-1
- 258 呼林貴 侯寧彬 李恭 1992「西安東郊唐韋美墓發掘記」『考古與文物』1992-5
- 259 員安志 1993「陝西長安南里王村與咸陽飛機場出土大量隋唐珍貴文物」『考古與文物』1993-6
- 260 陝西省考古研究所 1994「陝西長安隋宋忻夫夫婦合葬墓清理簡報」『考古與文物』1994-1
- 261 陳文領博 1994「銅鞮研究」『考古與文物』1994-1
- 262 王維坤 1996「試論日本正倉院珍藏的鍍金鹿紋三足銀盤」『考古與文物』1996-5
- 263 林梅村 1997「固原粟特墓所出中古波斯文印章及其相關問題」『考古與文物』1997-1
- 264 陝西省考古研究所 咸陽市考古研究所 1997「北周武帝考陵發掘簡報」『考古與文物』1997-2
- 265 洛陽市文物工作隊 1997「洛陽李屯東漢元嘉二年墓發掘簡報」『考古與文物』1997-2
- 266 西安市文物保護考古研究所 翟春玲 王長啓 1997「青龍寺遺址出土“盈”字款珍貴白瓷器」『考古與文物』1997-6
- 267 洛陽市文物工作隊 1999「洛陽發掘的四座東漢玉衣墓」『考古與文物』1999-1
- 268 陝西省考古研究所寶中鐵路考古隊 1999「陝西隴縣店子村漢唐墓葬」『考古與文物』1999-4
- 269 楊効俊 (陝西歷史博物館) 2000「東魏、北齊墓葬的考古學研究」『考古與文物』2000-5
- 270 陝西省考古研究所 2001「西安南郊三爻村漢唐墓葬清理發掘簡報」『考古與文物』2001-3
- 271 周原博物館 2001「陝西扶風縣官務漢墓清理發掘簡報」『考古與文物』2001-5
- 272 陝西省考古研究所 2002「西安西郊陝棉十廠唐壁畫墓清理簡報」『考古與文物』2002-1
- 273 郭洪濤 2002「唐恭陵袁皇后墓部分出土文物」『考古與文物』2002-4
- 274 王文強 霍保成 1988「鶴壁市發現一座唐代墓葬」『中原文物』1988-2
- 275 席彥昭 1996「唐三彩 雲鶴寶相花三足盤」『中原文物』1996-1
- 276 鄭州市文物考古研究所 1997「鄭州市南關外漢代空心画像磚墓」『中原文物』1997-3
- 277 張增午 傅曉東 2003「河南北朝瓷器芻議」『中原文物』2003-2
- 278 李文信 1955「遼陽發現的三座壁畫古墓」『文物參考資料』1955-5
- 279 林釗 1955「福建省四年來發現的文物簡介」『文物參考資料』1955-11
- 280 湖南省文物管理委員會 1956「長沙北郊絲茅冲清理的唐代磚室墓」『文物參考資料』1956-2
- 281 江蘇省文物管理委員會 1956「南京南郊郎家山第4號六朝墓清理簡報」『文物參考資料』1956-4
- 282 屠思華 李鑑昭 1956「南京梅家山六朝墓清理記略」『文物參考資料』1956-4
- 283 河南省文化局文物工作隊第二隊 1956「洛陽16區76號唐墓清理簡報」『文物參考資料』1956-5
- 284 陝西省文物管理委員會 1956「西安王家坡村第90號唐墓清理簡報」『文物參考資料』1956-8
- 285 單慶麟 1957「茂陵古仙座」『文物參考資料』1957-3
- 286 江蘇省文物管理委員會 1957「五代—吳大和五年墓清理記」『文物參考資料』1957-3
- 287 李問渠 1957「彌足珍貴的天寶遺物—西安市郊發現楊國忠進貢銀錠」『文物參考資料』1957-4
- 288 海博物館 徐家珍 1957「關於“七和鼎、鬲的關係」『文物參考資料』1957-5
- 289 湖南省文物管理委員會 1957「長沙爛泥冲齊代磚室墓清理簡報」『文物參考資料』1957-12

- 290 宋伯胤 1958「卜仁墓中的隋代青瓷器」『文物參考資料』1958-8
- 291 陝西省文物管理委員會 1959「西安羊頭鎮唐李爽墓的發掘」『文物』1959-3
- 292 馮先銘 1959「略談魏晉至五代瓷器的裝飾特徵」『文物』1959-6
- 293 陝西省文物管理委員會 1959「西安郭家灘隋姬威墓清理簡報」『文物』1959-8
- 294 閻磊 1959「西安出土的唐代金銀器」『文物』1959-8
- 295 文道又 1959「略談長沙近郊的唐代墓葬」『文物』1959-8
- 296 湖南省博物館 1960「長沙赤峰山2号唐墓簡介」『文物』1960-3
- 297 馮先銘 1960「瓷器淺說(續)」『文物』1960-4
- 298 陝西省文物管理委員會 1960「介紹幾件陝西出土的唐代青瓷器」『文物』1960-4
- 299 廣東省文物管理委員會 華南師範學院歷史系 1961「唐代張九齡墓發掘簡報」『文物』1961-6
- 300 陝西省文物管理委員會 1964「唐永泰公主墓發掘簡報」『文物』1964-1
- 301 王振鐸 1964「論漢代飲食器中的卮和魁」『文物』1964-4
- 302 西安市文物管理委員會 1964「西安市東南郊沙坡村出土一批唐代銀器」『文物』1964-6
- 303 南京市文物保管委員會 1965「南京板橋鎮石閣湖晉墓清理簡報」『文物』1965-6
- 304 南京市文物保管委員會 1965「南京人台山東晉興之夫婦墓發掘報告」『文物』1965-6
- 305 馮先銘 1965「新中国陶瓷考古的主要收穫」『文物』1965-9
- 306 陝西省文物管理委員會 1966「陝西省三原縣雙盛村隋李和墓清理簡報」『文物』1966-1
- 307 陝西省博物館 1966「陝西省耀縣柳林背陰村出土一批唐代銀器」『文物』1966-1
- 308 河南省博物館 1972「河南安陽北齊範粹墓發掘簡報」『文物』1972-1
- 309 文物編輯委員會 1972「無產階級文化大革命期間出土文物展覽簡介」『文物』1972-1
- 310 陝西省博物館 文管會革委會寫作小組 1972「西安南郊何家村發現唐代窖藏文物」『文物』1972-1
- 311 李知宴 1972「唐代盜窯概況與唐盜的分期」『文物』1972-3
- 312 陝西省博物館唐墓發掘組 禮泉縣文教局唐墓發掘組 1972「唐鄭仁泰墓發掘簡報」『文物』1972-7
- 313 安金槐 王與剛 1972「密縣打虎亭漢代画像石墓和壁画墓」『文物』1972-10
- 314 南京市博物館 1972「南京象山5号、6号、7号墓清理簡報」『文物』1972-11
- 315 嘉峪關市文物清理小組 1972「嘉峪關漢画像磚墓」『文物』1972-12
- 316 黎瑤渤 1973「遼寧北票縣西官營子北燕馮素弗墓」『文物』1973-3
- 317 南京大學歷史系考古組 1973「南京大學北園東晉墓」『文物』1973-4
- 318 揚州市博物館 1973「揚州發現兩座唐墓」『文物』1973-5
- 319 常博 1973「常州市出土唐三彩瓶」『文物』1973-5
- 320 河北省博物館 文物管理所 1973「河北平山北齊崔昂墓調查報告」『文物』1973-11
- 321 陶正剛 1975「山西祁縣白圭北齊韓裔墓」『文物』1975-4
- 322 秦明智 任步雲 1975「甘肅張家川發現“大趙神平二年”墓」『文物』1975-6
- 323 浙江省文物管理委員會 1975「浙江臨安板橋的五代墓」『文物』1975-8
- 324 金維諾 衛 1975「唐代西州墓中的絹畫」『文物』1975-10
- 325 南波 1976「南京西崗西晉墓」『文物』1976-3
- 326 河南省博物館 安陽地區文化局 1977「河南安陽隋代盜窯址的試掘」『文物』1977-2
- 327 智雁 1977「隋代瓷器的發展」『文物』1977-2
- 328 昭陵文物管理所 1977「唐越王李貞墓發掘簡報」『文物』1977-10
- 329 宿白 1977「盛樂、平城一帶的拓跋鮮卑—北魏遺跡—鮮卑遺跡輯錄之二」『文物』1977-11
- 330 臨沂金雀山漢墓發掘組 1977「山東臨沂金雀山九号漢墓發掘簡報」『文物』1977-11
- 331 劉家驥 劉炳森 1977「金雀山西漢帛畫臨摹后感」『文物』1977-11
- 332 馬世長 1978「關於敦煌藏經洞的幾個問題」『文物』1978-12
- 333 李知宴 1979「三国、兩晉、南北朝製瓷業的成就」『文物』1979-2
- 334 河北省文管處 1979「河北景縣北魏高氏墓發掘簡報」『文物』1979-3
- 335 浙江省博物館 杭州市文官會 1979「浙江臨安晚唐錢寬墓出土天文圖及“官”字款白瓷」『文物』1979-12
- 336 洛陽博物館 1980「洛陽東漢光和二年王當墓發掘簡報」『文物』1980-6
- 337 熊伝新 1981「湖南湘陰縣隋大業六年墓」『文物』1981-4
- 338 山東省博物館 孟振亜 1981「山東嘉祠英山一号隋墓壁畫的揭取」『文物』1981-4
- 339 南京博物院 1981「江蘇邗江甘泉二号漢墓」『文物』1981-11

- 340 南京博物院 1981「南京堯化門南朝梁墓發掘簡報」『文物』1981-12
- 341 四川省博物館 青川縣文化館 1982「青川縣出土秦更修田律木牘—四川青川縣戰國墓發掘簡報」『文物』1982-1
- 342 丹徒縣文教局 鎮江博物館 1982「江蘇丹徒丁卯橋出土唐代銀器窖藏」『文物』1982-11
- 343 長興博物館 夏星南 1982「浙江長興縣發現一批唐代銀器」『文物』1982-11
- 344 無錫市博物館 1983「無錫市環城河古井清理」『文物』1983-5
- 345 河北省文物研究所 1983「蠡縣漢墓發掘記要」『文物』1983-6
- 346 大同市博物館 馬玉基 1983「大同市小站村花圪塔台北魏墓清理簡報」『文物』1983-8
- 347 山西省考古研究所 太原市文物管理委員會 1983「太原市北齊婁叡墓發掘簡報」『文物』1983-10
- 348 磁縣文化館 1984「河北磁縣東魏茹茹公主墓發掘簡報」『文物』1984-4
- 349 遼寧省博物館文物隊 朝陽地區博物館文物隊 朝陽縣文化館 1984「朝陽袁台子東晉壁畫墓」『文物』1984-6
- 350 夏超雄 1984「考堂山石祠画像、年代及主人試探」『文物』1984-8
- 351 河北省滄州地區文化館 1984「河北省吳橋四座北朝墓葬」『文物』1984-9
- 352 孝感地區博物館 安陸縣博物館 1985「安陸王子山唐吳王妃楊氏墓」『文物』1985-2
- 353 李陳奇 1985「蒜頭壺考略」『文物』1985-4
- 354 山東省益都縣博物館 夏名採 1985「益都北齊石室墓線刻画像」『文物』1985-10
- 355 寧夏回族自治区博物館 寧夏周原博物館 1985「寧夏固原北周李賢夫婦墓發掘簡報」『文物』1985-11
- 356 安徽省文物考古研究所 馬鞍山市文化局 1986「安徽馬鞍山東吳朱然墓發掘簡報」『文物』1986-3
- 357 楊泓 1986「三國考古的新發現—讀朱然墓簡報剖記」『文物』1986-3
- 358 福建省博物館 政和縣文化館 1986「福建政和縣松源、新口南朝墓」『文物』1986-5
- 359 黃綱正 1986「長沙出土的戰國虎子及有關問題」『文物』1986-9
- 360 梁旭達 覃聖敏 1987「廣西浦北縣出土的青銅器」『文物』1987-1
- 361 山西省博物館 喬淑芝 1987「“蒲反田官”器考」『文物』1987-4
- 362 吳焯 1987「北周李賢墓出土鎏金銀壺考」『文物』1987-5
- 363 平朔考古隊 1987「山西朔縣秦漢墓發掘簡報」『文物』1987-6
- 364 長治市博物館 王進先 1987「山西長治市北郊唐崔孳墓」『文物』1987-8
- 365 湖北省博物館 鄖縣博物館 1987「湖北鄖縣唐李徽、閻婉墓發掘簡報」『文物』1987-8
- 366 鄖坊市博物館 五蓮縣圖書館 1987「山東五蓮張家仲崗漢墓」『文物』1987-9
- 367 內丘縣文物保管所 1987「河北省內丘縣邢窯調查簡報」『文物』1987-9
- 368 四川省博物館 王有鵬 1987「四川綿竹縣船棺墓」『文物』1987-10
- 369 楊文成 1998「四川寶興出土巴蜀符號印等文物」『文物』1988-10
- 370 陝西省法門寺考古隊 1988「扶風法門寺塔唐代地宮發掘簡報」『文物』1988-10
- 373 孫機 ほか 1988「法門寺塔地宮出土文物筆談」『文物』1988-10
- 374 韓偉 1988「從飲茶風尚看法門寺等地出土的唐代金銀茶具」『文物』1988-10
- 375 大同市博物館 1989「大同東郊北魏元淑墓」『文物』1989-8
- 376 孫機 1989「固原北魏漆棺画研究」『文物』1989-9
- 377 甘肅省博物館 初師賓 1990「甘肅靖遠新出東羅馬鎏金銀盤略考」『文物』1990-5
- 378 李振奇 史雲征 李蘭珂 1990「河北臨城七座唐墓」『文物』1990-5
- 379 廣元市文物管理所 中國社會科學院宗教所佛教室 1990「廣元千佛崖石窟調查記」『文物』1990-6
- 380 廣東省博物館 茂名市博物館 電白縣博物館 1990「廣東電白唐代許夫人墓」『文物』1990-7
- 381 安丘縣博物館 1990「山東安丘發現一處銅器窖藏」『文物』1990-8
- 382 南京博物院 1990「梁朝桂陽王蕭象墓」『文物』1990-8
- 383 古運泉 1990「廣東新興縣南朝墓」『文物』1990-8
- 384 山西省考古研究所 太原市文物管理委員會 1990「太原南郊北齊壁畫墓」『文物』1990-12
- 385 山西省考古研究所 太原市文物管理委員會 1990「太原金勝村337號唐代壁畫墓」『文物』1990-12
- 386 桑堅信 1991「淳安朱塔唐代窖藏銀器芻議」『文物』1991-2
- 387 綿陽博物館 何志國 1991「四川綿陽何家山2號東漢崖墓清理簡報」『文物』1991-3
- 388 周口地區文物工作隊 淮陽縣博物館 1991「河南淮陽北關一號漢墓發掘簡報」『文物』1991-4
- 389 福建省博物館 福州市文物管理委員會 1991「唐末五代閩王王審知夫婦墓清理簡報」『文物』1991-5
- 390 孫機 1991「論西安何家村出土的瑪瑙獸首杯」『文物』1991-6

- 391 洛陽市文物工作隊 1991「洛陽孟津晉墓、北魏墓發掘簡報」『文物』1991-8
- 392 北京市文物研究所 1991「北京豐台唐史思明墓」『文物』1991-9
- 393 揚州博物館 邗江縣圖書館 1991「江蘇邗江縣楊壽鄉寶女墩新莽墓」『文物』1991-10
- 394 李啓良 1991「陝西安康一里坡戰國墓清理簡報」『文物』1992-1
- 395 張翊華 1993「析江西瑞昌發現的唐代佛具」『文物』1992-3
- 396 洛陽市文物工作隊 1992「洛陽唐神会和和尚身塔塔基清理」『文物』1992-3
- 397 陝西省考古研究所漢陵考古隊 1992「漢景帝陽陵南區從葬坑發掘第一號簡報」『文物』1992-4
- 398 山西省考古研究所大同市博物館 1992「大同南郊北魏墓群發掘簡報」『文物』1992-8
- 399 山西省考古研究所太原市文物管理委員會 1992「太原隋斛律徹墓清理簡報」『文物』1992-10
- 400 寧夏文物考古研究所寧夏固原博物館 1992「寧夏固原隋史射勿墓發掘簡報」『文物』1992-10
- 401 山西省博物館汾陽縣博物館 1992「山西汾陽北閼隋梅淵墓清理簡報」『文物』1992-10
- 402 洛陽市第二文物工作隊 1992「洛陽市朱村東漢壁畫墓發掘簡報」『文物』1992-12
- 403 洛陽市第二文物工作隊 1992「洛陽偃師縣新莽壁畫墓清理簡報」『文物』1992-12
- 404 六安縣文物管理所 褚金華 1993「安徽省六安縣城北楚墓」『文物』1993-1
- 405 陝西省考古研究所漢陵考古隊 1994「漢景帝陽陵南區從葬坑發掘第二號簡報」『文物』1994-6
- 406 洛陽市第二文物工作隊 1994「洛陽郵電局372號西漢墓」『文物』1994-7
- 407 洛陽市第二文物工作隊 1994「洛陽北邙45號空心磚漢墓」『文物』1994-7
- 408 山西省考古研究所運城地區文化局夏縣文化局博物館 1994「山西夏縣王村東漢壁畫墓」『文物』1994-8
- 409 孫國平 李智 1994「遼寧北票倉糧窖鮮卑墓」『文物』1994-11
- 410 璞石 1994「遼寧朝陽袁台子北燕墓」『文物』1994-11
- 411 趙永平 王蘭慶 陳銀鳳 1995「河北省正定縣出土隋代舍利石函」『文物』1995-3
- 412 鄭州市文物工作隊 1995「鄭州地區發現的幾座唐墓」『文物』1995-5
- 413 安吉縣博物館 程亦勝 1995「浙江安吉天子崗漢晉墓」『文物』1995-6
- 414 辛發 魯寶林 吳鵬 1995「錦州前燕李讒墓清理簡報」『文物』1995-6
- 415 洛陽市文物工作隊 1995「洛陽孟津北陳村北魏壁畫墓」『文物』1995-8
- 416 洛陽市文物工作隊 1995「洛陽發現一座后周墓」『文物』1995-8
- 417 洛陽市文物工作隊 1995「洛陽后梁高繼蟾墓發掘簡報」『文物』1995-8
- 418 洛陽市第二文物工作隊 1995「洛陽五女塚新莽墓發掘簡報」『文物』1995-11
- 419 齊東方 1996「西安沙坡村出土的粟特鹿紋銀碗考」『文物』1996-2
- 420 山西省考古研究所等 1996「山西離石再次發現東漢画像石墓」『文物』1996-4
- 421 孫機 1996「唐李壽石椁線刻《侍女圖》、《樂舞圖》散記(上)」『文物』1996-5
- 422 甘肅省文物考古研究所 1996「甘肅酒泉西溝村魏晉墓發掘報告」『文物』1996-7
- 423 河北省文物研究所保定市文物管理處曲陽縣文物管理所 1996「河北曲陽五代壁畫墓發掘簡報」『文物』1996-9
- 424 西安市文物管理委員會 1997「西安唐金鄉縣主墓清理簡報」『文物』1997-1
- 425 內蒙古文物考古研究所烏蘭察布博物館清水河縣文物管理所 1997「內蒙古清水河縣山跳峯墓地」『文物』1997-1
- 426 徐州博物館 1997「徐州韓山西漢墓」『文物』1997-2
- 427 內蒙古博物館 1997「內蒙古呼和浩特市郊格爾圖漢墓」『文物』1997-4
- 428 寧蔭棠 牛祺安 1997「山東章丘市東平陵故城出土漢代銅器」『文物』1997-4
- 429 淄博市博物館 1997「山東臨淄商王村一號戰國墓發掘簡報」『文物』1997-6
- 430 洛陽市第二文物工作隊 1997「洛陽谷水晉墓(FM5)發掘簡報」『文物』1997-9
- 431 朝陽市博物館朝陽縣文物管理所 1997「遼寧朝陽田草溝晉墓」『文物』1997-11
- 432 遼寧省文物考古研究所朝陽市博物館 1998「遼寧朝陽北朝及唐代墓葬」『文物』1998-3
- 433 獅子山楚王陵考古發掘隊 1998「徐州獅子山西漢楚王陵發掘簡報」『文物』1998-8
- 434 楊文成 1998「四川寶興出土巴蜀符号印等文物」『文物』1998-10
- 435 鄭州市文物考古研究所鞏義市文物保護管理處 1998「河南省鞏義市孝西村唐墓發掘簡報」『文物』1998-11
- 436 王珍仁 孫慧珍 1999「晉代青瓷酒具一著杯」『文物』1999-2
- 437 孫機 1999「建國以來西方古器物在我国的發現與研究」『文物』1999-10

- 438 河南省文物考古研究所 1999「河南省濟南市桐花溝漢墓發掘簡報」『文物』1999-12
- 439 徐州博物館 1999「徐州東甸子西漢墓」『文物』1999-12
- 440 鄭州市文物考古研究所 1999「鄭州西郊唐墓發掘簡報」『文物』1999-12
- 441 新疆文物考古研究所 2000「新疆民豐縣尼雅遺址95MNI號墓地M8發掘簡報」『文物』2000-1
- 442 南京市博物館 2000「南京象山8號、9號、10號墓發掘簡報」『文物』2000-7
- 443 南京市博物館 2000「南京呂家山東晉李氏家族墓」『文物』2000-7
- 444 南京市博物館 雨花區文化局 2000「南京司家山東晉、南朝謝氏家族墓」『文物』2000-7
- 445 成都市文物考古研究所 龍泉驛區文物管理所 2000「成都龍泉驛區北干道木椁墓群發掘簡報」『文物』2000-8
- 446 微山縣文物管理所 2000「山東微山縣西漢画像石墓」『文物』2000-10
- 447 洛陽市第二文物工作隊 2000「洛陽春都路西晉墓發掘簡報」『文物』2000-10
- 448 北京市文物研究所 北京大學考古文博院 中國社會科學院考古研究所 1997「1997年琉璃河遺址墓葬發掘簡報」『文物』2000-11
- 449 韓偉 2001「北周安伽墓甬道屏石榻之相關問題淺見」『文物』2001-1
- 450 山西省考古研究所 太原市考古研究所 太原市晉源區文物旅游局 2001「太原隋代虞弘墓清理簡報」『文物』2001-1
- 452 江西省文物考古研究所 南昌市博物館 2001「南昌火車站東晉墓葬群發掘簡報」『文物』2001-2
- 453 邵陽市文物局 2001「湖南邵陽南朝紀年磚室墓」『文物』2001-2
- 454 南京市博物館 2001「江蘇南京仙鶴觀東晉墓」『文物』2001-3
- 455 雲南省文物考古研究所 昆明市博物館 官渡區博物館 2001「雲南昆明羊甫頭墓地發掘簡報」『文物』2001-4
- 456 王銀田 劉俊喜 2001「大同智家堡北魏墓石椁壁畫」『文物』2001-7
- 457 大同市考古研究所 2001「大同市南關唐墓」『文物』2001-7
- 458 湖北省文物考古研究所 隨州市文物局 2001「隨州市孔家坡墓地M8發掘簡報」『文物』2001-9
- 460 成都市文物考古研究所 2000「成都西郊石人小區戰國土坑墓發掘簡報」『文物』2002-4
- 461 南京市博物館 2002「南京長崗村五號墓發掘簡報」『文物』2002-7
- 462 南京市博物館 2002「南京殷巷西晉紀年墓」『文物』2002-7
- 463 南京市博物館 2002「南京北郊東晉溫嶠墓」『文物』2002-7
- 464 南京市博物館 江寧區博物館 2002「南京隱龍山南朝墓」『文物』2002-7
- 465 洛陽市第二文物工作隊 2002「洛陽谷水晉墓（FM38）發掘簡報」『文物』2002-9
- 466 宮德傑 2002「山東臨朐北朝画像石墓」『文物』2002-9
- 467 洛陽市第二文物工作隊 2002「洛陽紗廠西路北魏HM555發掘簡報」『文物』2002-9
- 468 西安市文物保護考古所 2002「西安東郊唐溫綽、溫思暕墓發掘簡報」『文物』2002-12
- 469 西安市文物保護考古所 2002「唐姚無波墓發掘簡報」『文物』2002-12
- 470 湖北省文物考古研究所 懷化市文物處 沅陵縣博物館 2003「沅陵虎溪山一號漢墓發掘簡報」『文物』2003-1
- 471 太原市文物考古研究所 2003「北齊庫狄業墓」『文物』2003-3
- 472 太原市文物考古研究所 2003「太原北齊賀拔昌墓」『文物』2003-3
- 473 廣東省文物管理委員會 1977「廣東封開縣江口漢墓及封川隋墓發掘簡報」『文物資料叢刊』1
- 474 山東省博物館文物組 1978「山東高唐東魏房悅墓清理紀要」『文物資料叢刊』2
- 475 吳縣文物管理委員會 張志新 1980「江蘇吳縣獅子山西晉墓清理簡報」『文物資料叢刊』3
- 476 廣西壯族自治區文物工作隊 1981「廣西合浦縣堂排漢墓發掘簡報」『文物資料叢刊』4
- 477 湖北省博物館 1981「雲夢大墳頭一號漢墓」『文物資料叢刊』4 1981-4
- 478 遼寧省博物館文物隊 1982「遼寧朝陽唐左才墓」『文物資料叢刊』6
- 479 南京市博物館 1983「南京郊縣四座吳墓發掘簡報」『文物資料叢刊』8
- 480 清江縣博物館 佘冬根 1983「江西清江山前南朝墓」『文物資料叢刊』8
- 481 林公務 1983「福州北門外“元嘉”墓」『文物資料叢刊』8
- 482 鎮江博物館 劉建國 1983「鎮江東晉墓」『文物資料叢刊』8
- 483 姚仲源 1981「浙江漢、六朝古墓概述」『中國考古學會第三次會論文集』

- 484 臨潼縣博物館 1985「臨潼唐慶山寺舍利塔基精室清理記」『文博』1985-5
- 485 顧志界 1986「鄂尔多斯式銅(鉄)釜的形態分析」『北方文物』8 1986
- 486 盧兆蔭 1986「試論唐代的金花銀盤」『中国考古学研究』(『夏鼎先生考古五十周年記念論文』)
- 487 內蒙古文物考古研究所 1994「紫賚諾爾古墳群1986年清理發掘報告」『內蒙古文物考古文集』第一輯
- 488 齊東方 1994「唐代銀高足杯研究」『考古学研究(二)』(北京大學出版社) 1994
- 489 王書敏 1995「鎮江城市考古出土六朝瓷器散論—兼談 生活用盜喪葬用盜」『南方文物』1995-4
- 490 尚曉波 1996「大凌河流域鮮卑文化双耳鏤孔圈足釜及相關問題考」『遼海文物學刊』1996-1
- 491 周亞利 1996「朝陽三燕、北魏遺存中反映出的漢文化因素」『遼海文物學刊』1996-1
- 492 嚴輝 楊海欽 1996「伊川鴉嶺唐齊國太夫人墓」『洛陽考古發掘與研究』
- 493 李虹 梁曉景 1996「洛陽孫旗屯秦國墓葬」『洛陽考古發掘與研究』
- 494 蔡運章 梁曉景 張長森 1996「洛陽西工131号戰國墓」『洛陽考古發掘與研究』
- 495 史家珍 王文浩 1996「洛陽市道北鍛造廠戰國墓清理簡報」『洛陽考古發掘與研究』
- 496 忻州地區文物管理處 1998「唐秀容縣令高徵墓發掘簡報」『文物季刊』1998-4
- 497 藤田國雄 1956「遼陽發見の三壁画古墓」『MUSEUM』59号
- 498 梅原末治 1956「中国古代の金銀器」『MUSEUM』60号
- 499 桑山正進 1979「唐代金銀器始源」『MUSEUM』337号
- 500 後藤守一 1930「大英博物館所藏の唐代金・銀器」『考古雜誌』20-3
- 501 桑山正進 1977「一九五六年来出土の唐代金銀器とその編年」『史林』60-6
- 502 B.T.マルシャーク 穴沢味光 1989「北周李賢夫妻墓とその銀製水瓶について」『古代文化』41-6
(追加)
- 503 廣西壯族自治區博物館 1988『廣西・貴州羅泊湾漢墓』
- 504 葛家瑾 1959「南京栖霞及其附近漢墓清理報告」『考古』1959-1
- 505 安徽省文物工作隊ほか 1978「岐阜陽双古堆西漢汝陰侯墓發掘簡報」『文物』1978-8
- 506 湖南文物考古研究所 慈利縣文物保滬管理所 1995「湖南慈利縣石板村戰國墓」『考古學報』1995-2
- 507 貴州省博物館 1989「貴州務大坪出土的青銅器」『文物』1989-11
- 508 洛陽市文物工作隊 2001「洛陽市針績廠東周墓(C1M5269)的清理」『文物』2001-12
- 509 張劍 1999「洛陽秦墓的探討」『考古與文物』1999-5
- 510 武健 1996「山東濟寧市發見漢代銅器」『考古』1996-3
- 511 貴州省博物館 1966「貴州赫章縣漢墓發掘簡報」『考古』1966-1
- 512 中国科学院考古研究所洛陽發掘隊 1963「洛陽西郊漢墓發掘報告」『考古學報』1963-2
- 513 湖北省文物考古研究所ほか 1998「湖北房縣松嘴戰國兩漢墓地第三、四次發掘報告」『考古學報』1998-2
- 514 寿光縣博物館 1992「山東寿光北魏賈思伯墓」『文物』1992-8
- 515 杭州市文物考古所 臨安市文物館 2000「浙江臨安五代吳越國安康陵發掘簡報」『文物』2000-1
- 516 原韶山灌區文物工作隊 1978「湖南湘鄉漢墓」『文物資料叢刊』2
- 517 雲南省文物工作隊 1962「雲南昭通桂家院了東漢墓發掘」『考古』1962-8
- 518 廣東省博物館 1981「廣東德慶大遼山發見東漢文物」『考古』1981-4
- 519 洛陽市第二文物工作隊 1987「洛陽市南昌路東漢墓發掘簡報」『中原文物』1987-3
- 520 廣東省博物館 1981「廣東佛山市郊瀾石東漢墓清理簡報」『文物資料叢刊』4
- 521 郝良真 1995「邯鄲出土的“蜀西工”造酒樽」『文物』1995-10
- 522 淄博市博物館 1986「山東淄博張庄東漢画像石墓」『考古』1986-8
- 523 陳大為 李宇峰 1982「遼寧朝陽後燕雀遼墓的發見」『考古』1982-3
- 524 諸城縣博物館 1981「山東諸城漢墓画像石」『文物』1981-10
- 525 崔東泉 1992「從出土文物看漢代体育」『文物』1992-2
- 526 盧茂村 1975「福建松政縣發見西晉墓」『文物』1975-4
- 527 北京市文物工作隊 1983「北京市順義縣大營村西晉墓葬發掘簡報」『文物』1983-10
- 528 徐州博物館 2003「江蘇徐州大廟晉漢画像石墓」『文物』2003-4
- 529 李珍ほか 1996「廣西興安縣紅衛村發見紀年唐墓」『考古』1996-8
- 530 浙江博物館 1984「浙江淳安縣朱塔發見唐代容藏銀器」『考古』1984-11
- 531 江西省博物館 1976「南昌東郊西漢墓」『考古學報』1976-2

2004年3月24日 印刷

2004年3月31日 発行

奈良文化財研究所史料 第68冊
古代東アジアの金属製容器 I
(中国編)

著作権 独立行政法人 文化財研究所
所有者 奈良文化財研究所

発行者 奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町 2 - 9 - 1
FAX 0742-30-6750 (文化財情報課)
<http://www.nabunken.go.jp>

印刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町 3 丁目 464 番地

ISBN 4-902010-20-8

前漢早期

前漢中期

前漢晚期

新代

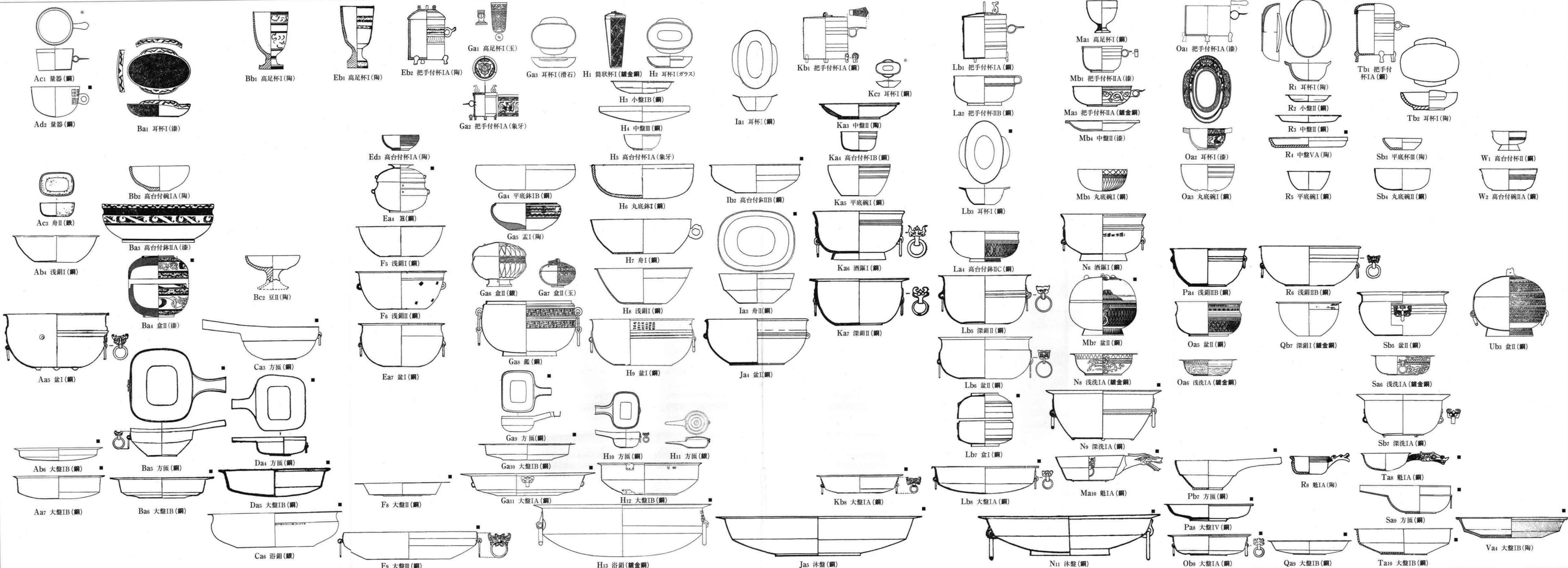
Aa (前漢初) 陝西陝縣 文獻7 Ba (前217~167) 湖北雲夢 文獻477 Bb (前漢早) 江蘇徐州 文獻426 Ea (前漢前) 湖北宜昌 文獻218 Ga (前122頃) 廣州南越王墓 文獻8 H (M1 前113) (M2 前118~104) 河北滿城 文獻3 Ia (前97~87頃) 山東劉勝墓 文獻226 Ka (前漢中) 湖南資興 文獻234 La (前漢中) 湖南劉張墓 文獻142 Ma (前漢晚) 廣西合浦 文獻75-476 Oa (前漢晚) 湖南永川 文獻199 Qa (前漢晚) 山西朔縣 文獻363 Sa (新) 江蘇邗江 文獻194 Ub (前漢末~新) 陝西長安城 文獻122

Ab (前漢早) 河南洛陽 文獻407 Bb (前漢早) 江蘇徐州 文獻426 Bc (前162) 湖南吳陽墓 文獻470 Eb (前漢前) 江蘇儀征 文獻233 Ib (前漢中) 陝西陝縣 文獻7 Kb (前漢中) 廣東廣州 文獻4 Mb (前118~) 湖北光化 文獻219 Ob (前漢晚) 湖北荊沙 文獻171 Qb (前漢晚) 陝西西安 文獻270 Sb (新) 四川巫山 文獻236 Va (新) 山西朔縣 文獻363

Ac (前140) 陝西景帝陵 文獻397-405 Ca (前175~154) 江蘇楚王墓 文獻433 Ed (前漢前) 湖南資興 文獻234 F (前漢前) 廣東廣州 文獻000 Ja (前86~49) 山西朔縣 文獻363 Kc (前漢中) 湖北貝冢 文獻192 N (前漢晚) 湖南張瑞君墓 文獻70 Pa (前漢晚) 內蒙古77冢 文獻427 R (前漢晚) 內蒙古 文獻30 Ta (新) 江蘇邗江 文獻393 W (新) 湖南零陵 文獻65

Ad (前130~124頃) 山西太原 文獻361 Da (前漢早) 湖北襄樊 文獻174

飲器
供膳具
小・中盤
杯
碗
鉢・舟・酒鐏
盆・銅
洗
水
匜・魁
大盤・沐盤・浴銅



前漢早期

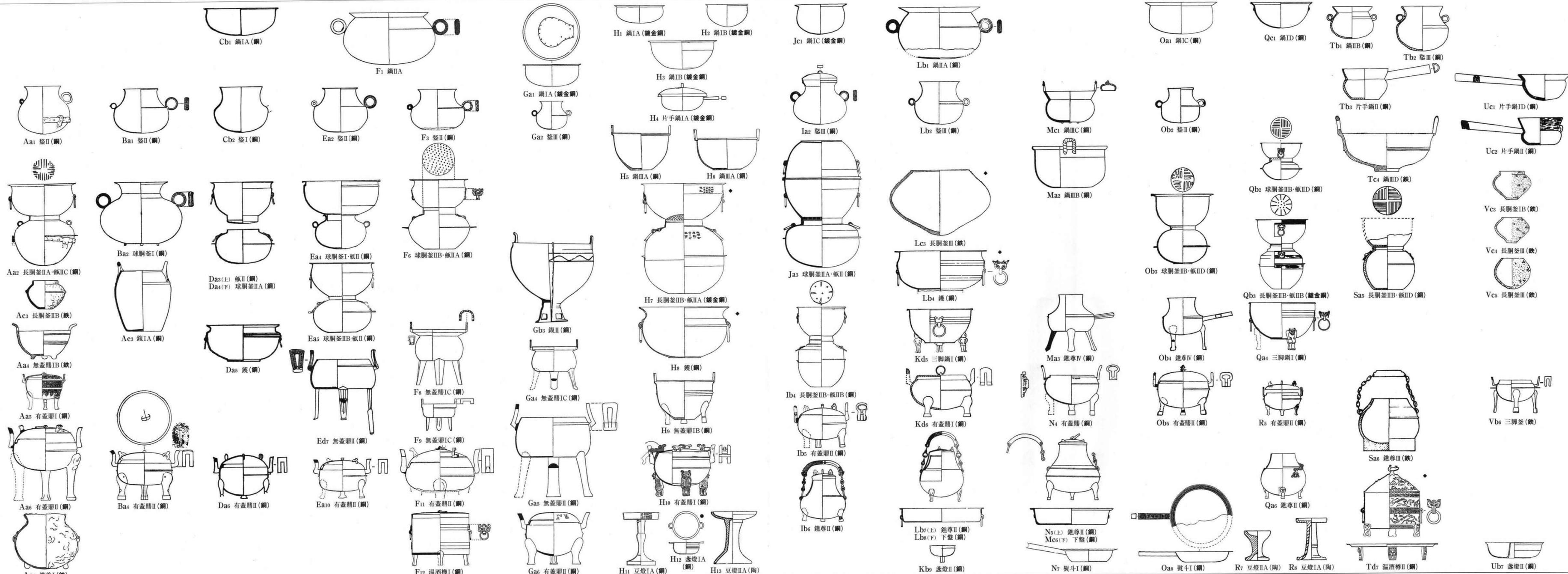
前漢中期

前漢晚期

新代

Aa (前漢初) 陝西峽縣 文獻7 Ae (秦漢之交) 寧夏固原 文獻200 Cb (前漢早) 湖北襄陽 文獻238 Ea (前漢前) 湖北宜昌 文獻218 Ga (前122頃) 廣州南越王墓 文獻8 H (M1 前113) 河北滿城 文獻3 Ia (前97~87頃) 山東劉勝 文獻226 Kb (前漢中) 廣東廣州 文獻4 Ma (前漢晚) 廣西合浦 文獻75-476 Oa (前漢晚) 湖南永川 文獻199 Qa (前漢晚) 山西朔州 文獻363 Sa (新) 江蘇邗江 文獻194 Ub (前漢末~新) 陝西長安城 文獻122
 Ac (前140) 陝西景帝陵 文獻397-405 Ba (前217~167) 湖北雲夢 文獻477 Da (前漢早) 湖北襄陽 文獻174 Ed (前漢前) 湖南資興 文獻234 Gb (前漢中) 內蒙古 文獻487 Ib (前漢中) 陝西陝縣 文獻7 Kd (前漢中) 山東榮成 文獻167 Mc (前漢晚) 四川成都 文獻193 Ob (前漢晚) 湖北荊沙 文獻171 Qb (前漢晚) 陝西西安 文獻270 Tb (新) 四川綿陽 文獻203 Tc (新) 浙江龍游 文獻159 Vb (新) 山東安丘 文獻381
 F (前漢前) 廣東廣州 文獻4 Jc (武帝頃) 山東臨沂 文獻191 Lc (前漢中・晚) 浙江龍游 文獻159 N (前漢晚) 湖南張家山 文獻70 R (前漢晚) 內蒙古 文獻30 Qc (前漢晚) 陝西扶風 文獻271 Td (新) 江西南昌 文獻137 Vc (新) 陝西西安 文獻254

鍋
 釜
 煮
 釜・甑
 鏡
 鏡
 鼎
 錘尊・温酒樽
 雜
 器
 熨斗・燈



| | 後漢早期 | | | | 後漢中期 | | | | 後漢晚期 | | | | 三国時代 | | | | 西晋 | | 五胡十六国時代・東晋 | | | | | |
|----------------|---------------------|-----------------------|-----------------------|---------------------------|----------------------|-------------------------|-----------------------------|---------------------|----------------------|---------------------|----------------------|----------------------|--------------------------|---------------------|----------------------|--|----|--|------------|--|--|--|--|--|
| | Aa (後漢早) 湖南資興 文献227 | Ba (40~75) 湖北蕪春 文献237 | Cb (後漢前) 広東広州 文献4 | Dc (後漢早~中) 青海上孫家寨 文献26 | Ga (106頃) 山東章丘 文献428 | Hc (147~188) 山西夏县 文献408 | Ka (後漢後) 広東広州 文献4 | La (後漢晚) 広西浦北 文献360 | Na (238頃) 江西高安 文献100 | Ob (三國末) 江蘇南京 文献461 | Pa (273?) 湖北老河口 文献95 | Sa (東晋早) 江西南昌 文献452 | Ua (335頃) 湖南長沙 文献206 | Va (350) 江蘇温嶠 文献463 | Wa (東晋晚) 江蘇鎮江 文献482 | | | | | | | | | |
| | Ab (後漢前) 内蒙古 文献30 | Bb (67?) 江蘇邗江 文献339 | Cc (後漢前) 浙江龍游 文献159 | Fa (後漢中) 湖南資興 文献227 | Gb (132) 河南襄城 文献216 | Ia (152) 河南洛陽 文献265 | Kb (後漢後) 江西南康 文献178 | Lb (後漢晚) 湖南資興 文献227 | Nb (249) 安徽朱然墓 文献356 | Oc (三國末) 湖北宜昌 文献201 | Pb (288) 安徽和县 文献115 | Sb (323) 江蘇宜興 文献92 | Ub (341-348) 江蘇興之墓 文献304 | Vb (357) 江蘇南京 文献443 | Wb (東晋末頃) 江蘇南京 文献188 | | | | | | | | | |
| | | Ca (後漢前) 広西平樂 文献220 | Da (後漢早~中) 湖南衡陽 文献149 | Fb (後漢中) 湖南大庸 文献168 | Gc (後漢中) 河南新安 文献69 | Ja (後漢晚) 河南洛陽 文献267 | Kc (後漢) 広西鍾山 文献190 | Lc (後漢晚) 四川綿陽 文献387 | Nc (257?) 甘肅嘉峪関 文献17 | Od (三國末) 江蘇南京 文献143 | Q (294) 江蘇句容 文献90 | Sc (4C前半) 新疆民豊 文献441 | Tb (4C前半) 遼寧朝陽 文献349 | Vc (東晋早) 江蘇南京 文献188 | Wc (東晋末頃) 江蘇揚州 文献230 | | | | | | | | | |
| | | | Db (後漢早~中) 広西合浦 文献185 | Fc (後漢中) 湖南宜昌 文献124 | Ha (後漢中) 河北藁城 文献345 | Jc (後漢晚) 山東寿光 文献109 | Kd (179) 河南洛陽 文献336 | Mb (後漢晚) 河南鞏県 文献85 | Nd (三國) 甘肅酒泉 文献422 | | | | Ud (東晋早) 広東広州 文献173 | Vd (367) 江蘇南京 文献442 | Wd (東晋末頃) 江蘇揚州 文献230 | | | | | | | | | |
| 飲器 | Aa1 把手付杯IC(陶) | Ba1 把手付杯III(銅) | Fa1 把手付杯IB(陶) | Gb1 耳杯II(陶) | Ia1 耳杯II(陶) | Kc1 把手付杯IB(銅) | La1 耳杯II(銅) | Na1 小盤IB(銅) | Ob1 耳杯III(銅) | Sc1 把手付杯III(木) | Uc1 耳杯III(瓷) | Vd1 耳杯III(陶) | X1 筒状杯II(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Ab2 耳杯II(陶) | | Fb2 耳杯II(滑石) | | | Ka2 把手付杯IB(陶) | Lc1 小盤II(陶) | Nc1 小盤IV(銅) | | | Uc2 托I(瓷) | Vb2 托I(陶) | X2 高足杯脚(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa2 把手付杯II(陶) | | | Gb2 中盤IB(陶) | Ja2 中盤IV(陶) | | Lc2 小盤II(陶) | Nd2 小盤IV(銅) | Ob2 中盤VA(銅) | | | | | Wc3 中盤VA(陶) | | | | | | | | | | |
| | Ab3 中盤VA(陶) | | Db1 平底杯III・中盤VA(陶) | Fb3 小盤VA(陶) | | Ja3 中盤IB(陶) | Kb3 中盤IB(銅) | Lb3 中盤IB(銅) | Nb3 小盤VA(瓷) | | | | | | | | | | | | | | | |
| | Aa4 小盤VA(陶) | Ba2-3 高台付杯II(銅) | Db2 平底杯II(陶) | Fa4 平底杯I(陶) Fb5 高台付杯II(陶) | Ja4 高台付碗IB(銅) | Ka4 高台付杯II(銅) | Lb4 平底杯III(陶) Lb5 高台付杯II(銅) | Nb4 平底杯III(瓷) | Pb1 平底杯III(瓷) | Tb2 平底杯III(瓷) | Uc3 高台付杯III(銀) | Vb3 高台付杯IV(瓷) | Wa4 高台付杯IV(瓷) | | | | | | | | | | | |
| | Ab4 中盤VA(陶) | | | | Ja5 高台付鉢II(陶) | Kb5 高台付碗II(銅) | La6 高台付碗IB(銅) | Nb5 平底碗III(瓷) | Q2 平底杯III(瓷) | Tb3 高台付杯III(瓷) | Ub4 高台付碗IV(銅) | Vb4 高台付杯III(瓷) | X5 高台付杯III・托I(鍍金銅) | | | | | | | | | | | |
| | Aa5 平底碗II(銅) | Ca4 平底碗II(銅) | Cb3 丸底碗I(銅) | Fb6 丸底碗I(鉄) | Ka6 高台付鉢I(銅) | Lb6 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Na6 平底鉢III(瓷) | Od3 高台付碗II(銅) | Q3 高台付碗III(瓷) | Sa4 平底碗III(瓷) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb5 高台付杯III(銅) | Wb6 丸底碗II(瓷) | | | | | | | | | | |
| | Ab5 高台付碗III(陶) | Bc5 高台付碗IB(陶) | Cb4 高台付碗II(銅) | Fa7 高台付碗II(陶) | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La8 高台付鉢III(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Ob3 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa5 高台付碗III(瓷) | Ub6 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | |
| | Ab6 高台付碗III(陶) | | | | Hc5 高台付鉢II(陶) | Ka8 酒鉢II(銅) | La9 浅鉢II(銅) | Ob5 高台付鉢III(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Uc7 平底鉢III(瓷) | Uc8 丸底鉢IV(ガラス) | Was 高台付碗IV(瓷) | | | | | | | | | | |
| | Aa7 高台付鉢II(陶) | | Cc5 高台付鉢III(銅) | Fc5 盆II(銅) | Ka8 酒鉢II(銅) | Lc8 酒鉢II(銅) | Mb10 深鉢II(銅) | Ob6 浅洗II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Uc8 丸底鉢IV(ガラス) | Uc9 鉄鉢形I(瓷) | X9 角杯(ガラス) | | | | | | | | | | |
| Aa8 酒鉢II(銅) | Ba6 酒鉢II(銅) | Cc6 酒鉢II(銅) | Ha4 鉄鉢形I(陶) | Ka8 酒鉢II(銅) | La9 浅鉢II(銅) | Mb11 深洗II(銅) | Ob7 深洗IB(銅) | Ob5 高台付鉢III(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa7 高台付鉢III(銅) | Uc9 鉄鉢形I(瓷) | Uc10 平底鉢IV(瓷) | X10 丸底鉢IV(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| 鉢・豆 | Ab7 高台付鉢III(陶) | | | Gb3 豆II(陶) | Ja5 高台付鉢III(陶) | Ka6 高台付鉢I(銅) | La6 高台付碗IB(銅) | Ob3 高台付碗II(銅) | Q3 高台付碗III(瓷) | Sa5 高台付碗III(瓷) | Ub4 高台付碗IV(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa7 高台付鉢III(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa8 酒鉢II(銅) | Ba6 酒鉢II(銅) | Cc6 酒鉢II(銅) | Gb3 豆II(陶) | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Ab7 高台付鉢III(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa7 高台付鉢III(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa8 酒鉢II(銅) | Ba6 酒鉢II(銅) | Cc6 酒鉢II(銅) | Gb3 豆II(陶) | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Ab7 高台付鉢III(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa7 高台付鉢III(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa8 酒鉢II(銅) | Ba6 酒鉢II(銅) | Cc6 酒鉢II(銅) | Gb3 豆II(陶) | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Ab7 高台付鉢III(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| Aa7 高台付鉢III(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | | |
| 鉢・酒鉢 | Aa9 盃II(陶) | | | Ha4 鉄鉢形I(陶) | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa9 盃II(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa9 盃II(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa9 盃II(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa9 盃II(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa9 盃II(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa9 盃II(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa9 盃II(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa9 盃II(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa9 盃II(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| Aa9 盃II(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | | |
| 鉄鉢形・盃 | Aa10 盃IA(陶) | | | Ha4 鉄鉢形I(陶) | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa10 盃IA(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa10 盃IA(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa10 盃IA(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa10 盃IA(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa10 盃IA(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa10 盃IA(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa10 盃IA(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa10 盃IA(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| | Aa10 盃IA(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | |
| Aa10 盃IA(陶) | | | | Ja7 高台付鉢III(陶) | Ka7 高台付鉢II(銅) | La7 高台付鉢II(銅) | Ob4 高台付碗II(銅) | Q4 高台付鉢III(瓷) | Sa6 高台付鉢III(銅) | Ub5 高台付碗III(銅) | Vb6 高台付碗III(瓷) | X7 高台付碗IC(ガラス) | | | | | | | | | | | | |
| 水銅器 | Aa11 浅洗IB(銅) | Ba7 浅洗IA(銅) | Da7 浅洗IB(銅) | Fb10 盃IB(陶) | Ja8 盃IA(陶) | Kb10 深洗IA(銅) | Lb11 深洗II(銅) | Nb7 深鉢I(陶) | Ob7 深洗IB(銅) | Rb6 浅鉢I(陶) | Sa8 平底鉢IV(瓷) | Tb9 盃IIA(銅) | Uc11 浅洗II(銅) | Va7 盃IIB(瓷) | Wa12 盃IIB(瓷) | | | | | | | | | |
| | Aa11 浅洗IB(銅) | Ba7 浅洗IA(銅) | Da7 浅洗IB(銅) | Fb10 盃IB(陶) | Ja8 盃IA(陶) | Kb10 深洗IA(銅) | Lb11 深洗II(銅) | Nb7 深鉢I(陶) | Ob7 深洗IB(銅) | Rb6 浅鉢I(陶) | Sa8 平底鉢IV(瓷) | Tb9 盃IIA(銅) | Uc11 浅洗II(銅) | Va7 盃IIB(瓷) | Wa12 盃IIB(瓷) | | | | | | | | | |
| | Aa11 浅洗IB(銅) | Ba7 浅洗IA(銅) | Da7 浅洗IB(銅) | Fb10 盃IB(陶) | Ja8 盃IA(陶) | Kb10 深洗IA(銅) | Lb11 深洗II(銅) | Nb7 深鉢I(陶) | Ob7 深洗IB(銅) | Rb6 浅鉢I(陶) | Sa8 平底鉢IV(瓷) | Tb9 盃IIA(銅) | Uc11 浅洗II(銅) | Va7 盃IIB(瓷) | Wa12 盃IIB(瓷) | | | | | | | | | |
| | Aa11 浅洗IB(銅) | Ba7 浅洗IA(銅) | Da7 浅洗IB(銅) | Fb10 盃IB(陶) | Ja8 盃IA(陶) | Kb10 深洗IA(銅) | Lb11 深洗II(銅) | Nb7 深鉢I(陶) | Ob7 深洗IB(銅) | Rb6 浅鉢I(陶) | Sa8 平底鉢IV(瓷) | Tb9 盃IIA(銅) | Uc11 浅洗II(銅) | Va7 盃IIB(瓷) | Wa12 盃IIB(瓷) | | | | | | | | | |
| | Aa11 浅洗IB(銅) | Ba7 浅洗IA(銅) | Da7 浅洗IB(銅) | Fb10 盃IB(陶) | Ja8 盃IA(陶) | Kb10 深洗IA(銅) | Lb11 深洗II(銅) | Nb7 深鉢I(陶) | Ob7 深洗IB(銅) | Rb6 浅鉢I(陶) | Sa8 平底鉢IV(瓷) | Tb9 盃IIA(銅) | Uc11 浅洗II(銅) | Va7 盃IIB(瓷) | Wa12 盃IIB(瓷) | | | | | | | | | |
| | Aa11 浅洗IB(銅) | Ba7 浅洗IA(銅) | Da7 浅洗IB(銅) | Fb10 盃IB(陶) | Ja8 盃IA(陶) | Kb10 深洗IA(銅) | Lb11 深洗II(銅) | Nb7 深鉢I(陶) | Ob7 深洗IB(銅) | Rb6 浅鉢I(陶) | Sa8 平底鉢IV(瓷) | Tb9 盃IIA(銅) | Uc11 浅洗II(銅) | Va7 盃IIB(瓷) | Wa12 盃IIB(瓷) | | | | | | | | | |
| | Aa11 浅洗IB(銅) | Ba7 浅洗IA(銅) | Da7 浅洗IB(銅) | Fb10 盃IB(陶) | Ja8 盃IA(陶) | Kb10 深洗IA(銅) | Lb11 深洗II(銅) | Nb7 深鉢I(陶) | Ob7 深洗IB(銅) | Rb6 浅鉢I(陶) | Sa8 | | | | | | | | | | | | | |

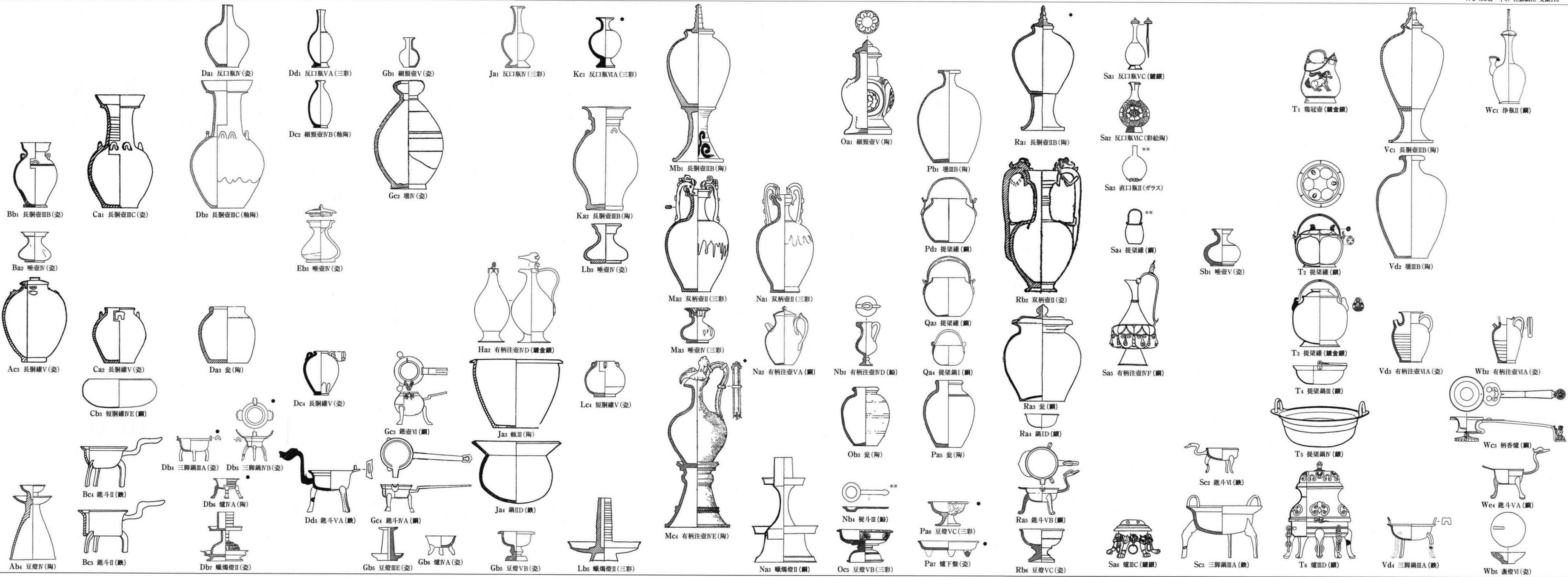
| | 後漢早期 | | | | 後漢中期 | | | | 後漢晚期 | | | | 三国時代 | | 西晋 | | 五胡十六国時代・東晋 | | | | | | | | | | | | | |
|------------|---|--|--|--|---|--|--|--|--|--|--|--|---|--|--|--|--|--|---|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | Aa (後漢早) 湖南資興 文献227 Ba (40~75) 湖北蕪春 文献237 Da (後漢早~中) 湖南衡陽 文献149 Fa (後漢中) 湖南資興 文献227 | | | | Ec (後漢中) 湖南南岳 文献153 Ia (152) 河南洛陽 文献265 Ja (後漢晚) 河南洛陽 文献267 Ka (後漢後) 廣東広州 文献4 | | | | La (後漢晚) 広西浦北 文献360 Mb (後漢晚) 河南鞏県 文献85 Oa (三國初) 江西南昌 文献108 Of (西晋早期末) 甘肅敦煌 文献32 Q (294) 江蘇句容 文献90 Sc (4C前半) 新疆民豊 文献441 Uc (東晋早) 江蘇南京 文献188 Vd (367) 江蘇南京 文献442 | | | | Na (238頃) 江西高安 文献100 Ob (三國末) 江蘇南京 文献461 Pa (273?) 湖北老河口 文献95 Ra (302) 安徽青陽 文献158 Ta (324) 遼寧錦州 文献414 Va (350) 江蘇温嶠 文献463 Wa (東晋晚) 江蘇鎮江 文献482 | | Nb (249) 安徽朱然墓 文献356 Od (三國末) 江蘇南京 文献143 Pc (六朝初) 江蘇南京 文献63 Sb (323) 江蘇宜興 文献92 Tc (4C前半) 遼寧朝陽 文献431 Vb (357) 江蘇南京 文献443 Wb (東晋末頃) 江蘇南京 文献188 | | Ua (335頃) 湖南長沙 文献206 Vc (4C中頃) 湖北漢陽 文献71 X (415) 遼寧馮素沸墓 文献316 | | Xc (350頃) 遼寧朝陽 文献431 Vc (4C中頃) 湖北漢陽 文献71 X (415) 遼寧馮素沸墓 文献316 | | | | | | | | | | | |
| | Ab (後漢前) 内蒙古 文献30 Bb (67カ) 江蘇江江 文献339 Db (後漢早~中) 広西合浦 文献185 Fb (後漢中) 湖南大庸 文献168 Ea (105) 湖南南岳 文献153 | | | | Gc (後漢中) 湖南新安 文献69 Hb (後漢中・晩) 山西朔県 文献363 | | | | Id (147~188) 山東済寧 文献161 Jb (175) 山西離石 文献420 Kb (後漢後) 江西南康 文献178 | | | | Lc (後漢晚) 四川綿陽 文献387 Ma (後漢晚) 四川開県 文献250 | | Mb (後漢晚) 河南鞏県 文献85 Na (238頃) 江西高安 文献100 Nb (249) 安徽朱然墓 文献356 | | Oa (三國初) 江西南昌 文献108 Ob (三國末) 江蘇南京 文献461 Pa (273?) 湖北老河口 文献95 Ra (302) 安徽青陽 文献158 Ta (324) 遼寧錦州 文献414 Va (350) 江蘇温嶠 文献463 Wa (東晋晚) 江蘇鎮江 文献482 | | Ua (335頃) 湖南長沙 文献206 Vc (4C中頃) 湖北漢陽 文献71 X (415) 遼寧馮素沸墓 文献316 | | | | | | | | | | | |
| 瓶・壺・細頸壺・扁壺 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 貯蔵具壺 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 唾壺 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 鍾壺 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 注壺・水注 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 罐・瓮 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| | 後漢早期 | | | 後漢中期 | | | 後漢晚期 | | | 三国時代 | | 西晋 | | 五胡十六国時代・東晋 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|---|--|--|---|--|--|--|--|--|--|--|---------------|--|------------------|--|---|--|--------------|--|--|--|--|--|--|---------------------|--|--|--|--|--|--|--|---|--|---|--|---|--|
| | Aa (後漢早) 湖南資興 文献227 Ac (後漢初) 遼寧出土 文献490 Ad (後漢早) 安徽定遠 文献123 | | | Ba (40~75) 湖北蕪春 文献237 Bb (67?) 江蘇邗江 文献339 Bc (後漢前) 湖北宜昌 文献218 | | | Cc (後漢前) 浙江龍游 文献159 Db (後漢早~中) 廣西合浦 文献185 Eb (133) 湖南資興 文献227 Ec (後漢中) 湖南南岳 文献153 | | | Fa (後漢中) 湖南資興 文献227 Fb (後漢中) 湖南大庸 文献168 Fc (後漢中) 湖南宜昌 文献124 Ib (後漢中~晚) 陝西漢中 文献253 | | | Ga (106頃) 山東章丘 文献428 Gb (132) 河南襄城 文献216 Gc (後漢中) 河南新安 文献69 Ic (後漢中~晚) 陝西漢中 文献253 | | | Ic (後漢後) 內蒙古 文献30 Ja (後漢晚) 河南洛陽 文献267 Jc (後漢晚) 山東寿光出土 文献109 | | | Ka (後漢後) 廣東廣州 文献4 Kb (後漢後) 江西南康 文献178 | | | La (後漢晚) 廣西浦北 文献360 Lc (後漢晚) 四川綿陽 文献387 | | | Ma (後漢晚) 四川開縣 文献250 | | Mb (後漢晚) 河南鞏縣 文献85 Mc (後漢晚) 河南偃師 文献157 Md (後漢晚) 廣西合浦 文献185 | | Nb (249) 安徽朱然墓 文献356 Nd (257?) 甘肅酒泉 文献422 | | Ob (三国末) 江蘇南京 文献461 Oc (三国末) 湖北宜昌 文献201 Oe (西晋早) 甘肅敦煌 文献27 Pa (273?) 湖北老河口 文献95 | | Pb (288) 安徽和縣 文献115 Pc (六朝初) 江蘇南京 文献63 Pd (西晋晚) 河南洛陽 文献430 Rc (西晋中~晚) 河南洛陽 文献447 | | Ta (324) 遼寧錦州 文献414 Tb (4C前半) 遼寧朝陽 文献349 Td (4C後半頃) 遼寧北票 文献409 Sa (東晋早) 江西南昌 文献452 | | Ua (335頃) 湖南長沙 文献206 Ub (341~348) 江蘇興之墓 文献304 Uc (東晋早) 江蘇南京 文献188 X (415) 遼寧馮素沸墓 文献316 | |
| 鍋 | Ba1 鍋III(銅) Ba2 鍋III(銅) Ec1 鍋III(陶) | | | Fa1 鍋III(陶) Fa2 鍋III(陶) | | | Ja1 鍋ID(銅) | | | Ka1 鍋III(銅) Ma1 鍋III(銅) | | Mb1 鍋IE(銅) | | Pa1 鍋ID(銅) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 釜 | Bc3 釜III(銅) | | | Fc3 釜III(銅) | | | Kb2 釜II(陶) | | | La1 釜II(銅) | | Nb1 釜II(瓷) | | Ob2 釜II(陶) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 煮鍋 | Eb2 鍋II(銅) | | | Gaz 球胴釜II(銅) | | | Ja2 球胴釜II・飯II(銅) | | | Kb3 釜II・飯II(銅) | | Mb2 飯II(銅) | | Oc3 釜III(銅) | | Td1 提梁長胴釜(銅) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 釜・飯 | Ba4 長胴II・飯II(銅) | | | Fb4 釜II(鐵) | | | Jc3 球胴釜II・飯II(銅) | | | Ka3 釜II・飯II(銅) | | Mb3 長胴釜III(銅) | | Nd2 球胴釜II・飯II(銅) | | Tb2 釜IV(銅) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 鏡 | Aa1 鏡III(鐵) | | | Fb5 釜II・飯IV(陶) | | | Ja3 長胴釜II(銅) | | | Lc2 長胴釜II・飯II(銅) | | Ma3 釜II(銅) | | Oc4 釜II(銅) | | Rc1 球胴釜II・飯II(銅) | | X2 釜IV(銅) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 鼎・三脚鍋 | Bb5 三脚釜(陶) | | | Gb4 三脚釜II(陶) | | | Jc4 三脚釜(銅) | | | Ka4 有蓋鼎II(銅) | | Mb4 鏡IB(銅) | | Nd3 三脚鍋(銅) | | Ta3 三脚釜・飯III(銅) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 錐斗 | Ba6 有蓋鼎II(銅) | | | Fc6 有蓋鼎(陶) | | | Ja4 三脚鍋II(陶) | | | Kb4 有蓋鼎II(銅) | | Nb4 錐斗IA(陶) | | Ob5 錐斗E(銅) | | Pc2 錐斗IB(銅) | | Tb4 錐斗II(銅) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 錐尊 | Cc3 錐斗IA(鐵) | | | Gb5 三脚釜II(陶) | | | Jc5 爐IIA(銅) | | | Ka5 溫酒樽II(銅) | | Nb5 爐IIA(銅) | | Ob6 爐II(銅) | | Pb3 爐IIA(銅) | | Td5 錐斗III(銅) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 爐 | Aa2 錐尊III(陶) | | | Ja5 釜II・飯IV(陶) | | | Kc5 爐IIA(銅) | | | Lc3 釜IV(陶) | | Md5 溫酒樽I(銅) | | Ob7 錐斗I(銅) | | Pb4 錐斗III(銅) | | Ua3 錐斗II(銅) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 熨斗 | Ba7 錐尊III(銅) | | | Kb6 有蓋鼎II(銅) | | | Ja6 熨斗III(銅) | | | Ka6 豆燈IVA(陶) | | Me6 熨斗II(銅) | | Ob8 錐斗II(銅) | | Pb5 熨斗III(銅) | | Ua5 爐II(鐵) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 器 | Bb8 熨斗IIA(銅) | | | Kc6 有蓋鼎II(銅) | | | Ja7 熨斗IV(鐵) | | | Lc4 釜IV(陶) | | Me7 熨斗II(銅) | | Ob9 錐斗II(銅) | | Pb6 釜II(陶) | | Uc4 爐II(銅) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 燈 | Ad3 豆燈IB(陶) | | | Kc7 有蓋鼎II(銅) | | | Ja8 豆燈II(鐵) | | | Lc5 釜IV(陶) | | | | Ob10 釜II(陶) | | Pd5 釜II(陶) | | Uc5 熨斗II(銅) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | Fb7 豆燈IIA(陶) | | | Kc8 豆燈II(陶) | | | Ja9 釜II(鐵) | | | | | | | Ob11 釜II(陶) | | Pd6 釜II(陶) | | Ubr 釜II(銅) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| 劉宋・五胡十六国時代 | | | 劉宋・南齊・北魏 | | | 梁・北魏 | | | 梁・東魏 | | 南朝晚期・北齊・北周 | | | 隋 | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------|----------------------|------------------------------|----------------------|---------------------|----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|------------------------|----------------------|-----------------------|----------------------|-----------------------|-------------------------|-----------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|--------------|--------------|-------------|--------------|
| Aa (435) 広東新興 文献383 | Ad (5前半) 甘肅靖遠 文献377 | Ca (481) 河北定興石函 文献74 | Da (493) 山東臨淄 文献121 | Ea (497) 広西韓城 文献112 | Ga (南齊) 広西恭城 文献98 | Ha (504) 山西大同 文献346 | Ia (516) 河南宜武帝陵 文献166 | Ja (532) 江蘇南京 文献340 | Ma (553) 河北元良墓 文献182 | Na (569) 寧夏李賢墓 文献355 | Pa (南朝中・晩) 貴州平坝 文献80 | Qa (582) 河北景縣 文献334 | Sa (597) 山西解州微嘉 文献399 | Ua (605~618) 湖北武漢 文献107 | V (隋末頃) 広西壮族自治区 文献111 | | | | | | | | | | | | | |
| Ab (441カ) 広東曲江 文献106 | Ba (455) 湖北武漢 文献66 | Cb (5C後半) 山西大同 文献309-375-421 | Db (496) 江西青江山 文献480 | Eb (499) 湖南長沙 文献289 | Gb (南齊~梁) 四川綿陽 文献176 | Hb (508) 山西元淑墓 文献375 | Ib (522) 河南洛陽 文献467 | Jc (536) 江蘇南良墓 文献382 | Mb (562) 山西庫狄暉洛墓 文献221 | Nb (570) 山西婁叡墓 文献347 | Pb (南朝晩~隋) 広東蓬溪 文献130 | Qb (586) 安徽合肥 文献89 | Sc (608) 陝西李静嘉墓 文献5 | Ta (610) 広東韶關 文献67 | Ub (隋) 湖南長沙 文献215 | | | | | | | | | | | | | |
| Ac (430) 江西贛縣 文献172 | Bc (劉宋~齊) 福建政和 文献358 | Cc (486頃) 寧夏固原 文献20 | Cd (後漢中) 遼寧錦州 文献139 | Ec (南齊) 福建閩侯 文献99 | | Hc (508) 河南偃師 文献147 | Ic (524) 河南洛陽 文献391 | Ka (537) 河北高雅墓 文献334 | Mc (567) 山西庫狄業墓 文献471 | Oa (576) 陝西王德衡 文献23 | | Qc (586) 陝西西安 文献2 | Ta (610) 広東韶關 文献67 | Ud (615) 陝西劉世基墓 文献210 | Vc (隋) 広東封開 文献473 | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | Hd (6C中頃) 青海上孫家墓 文献26 | | Kd (544) 河北李希宗墓 文献437 | Md (北齊後) 山西太原 文献384 | | | Rb (595) 山西梅洞墓 文献401 | Tc (隋) 広東封開 文献473 | Ue (隋) 浙江龍州 文献125 | | | | | | | | | | | | | | |
| 飲器 | Bc1 平底杯Ⅲ(瓷) | Cb1 高足杯Ⅱ(鍍金銅) | Cb2 高足杯Ⅲ(鍍金銅) | Cb3 高足杯Ⅳ(鍍金銅) | Db1 高台付杯Ⅲ(瓷) | Ea1 高台付杯Ⅲ(瓷) | Gb1 高台付杯Ⅲ(瓷) | Hc1 高台付杯Ⅲ(陶) | Jc1 把手付杯(注器)ⅡC(陶) | Pb1 丸底鉢ⅣA(鍍金) | Sa1 高足杯ⅤA(瓷) | Sc2 高足杯ⅤB(金) | Ua1 高台付杯Ⅲ(瓷) | V1 高足杯ⅤD(銅) | | | | | | | | | | | | | | |
| 托小・中盤 | Ab1 高台付杯ⅣA(瓷) | Bb2 高台付杯ⅣA(瓷) | Bb3 高台付杯ⅤA(銅) | Cc4 耳杯Ⅲ(鍍) | Da2 高台付杯ⅤA(瓷) | Ea2 托ⅡA(瓷) | Ga2 高台付杯ⅤB(瓷) | Ic1 高台付杯ⅤB(陶) | Ja2 高台付杯Ⅲ(瓷) | Kd6 盤狀高足杯(鍍) | Mc1 高台付杯ⅤC(瓷) | Oa1 高台付杯ⅤC(瓷) | Rb1 高台付杯ⅤC(瓷) | Sa3 高台付杯ⅤC(陶) | Ua2 高台付杯ⅤC(瓷) | V2 高台付杯ⅤC(瓷) | | | | | | | | | | | | |
| 供膳具 | Aa2 高台付杯ⅣA(瓷) | Ba4 小盤ⅤA(瓷) | Bb5 小盤ⅤA(瓷) | Cc5 曲長杯(鍍金銅) | Ca6 丸底杯Ⅵ(銅) | Db3 平底杯Ⅳ(銅) | Da4 高台付碗ⅣA(瓷) | Ec5 高台付碗ⅣA・托ⅡA(瓷) | Ea4 托ⅡA(瓷) | Ea5 小盤ⅤA(瓷) | Gb3 小盤ⅤB(瓷) | Ga4 中盤ⅤA(瓷) | Gb5 平底碗Ⅲ(瓷) | Ga5 高台付碗ⅣA(瓷) | Hd4 把手付壺形杯Ⅰ(鍍) | Ia5 平底碗Ⅲ(陶) | Ic6 高台付碗ⅣA(陶) | Ka8 高台付碗ⅣA(瓷) | Mb4 高台付碗ⅣA(陶) | Mb5 高台付碗ⅤB(瓷) | Oa3 丸底碗ⅤA(鍍) | Qa2 丸底碗Ⅳ(銅) | Ta1 丸底碗Ⅱ(陶) | Tc5 丸底碗ⅤB(銅) | V3 小盤ⅤA(瓷) | V4 平底碗Ⅴ(瓷) | V5 丸底碗ⅤB(銅) | V6 高台付碗ⅣA(瓷) |
| 杯・碗 | Ab3 小盤ⅤB(瓷) | Bc5 中盤ⅤA(瓷) | Ca4 杯の蓋(銅) | Cb6 中盤ⅤA(瓷) | Db4 小盤ⅤA(瓷) | Da5 高台付碗ⅣA(瓷) | Ec6 高台付碗ⅣA・托ⅡA(瓷) | Ea7 高台付碗ⅣA(瓷) | Ea6 高台付碗ⅣA(瓷) | Gb7 平底鉢Ⅲ(陶) | Ga6 高台付鉢Ⅲ(陶) | Hb2 高台付碗ⅣA・托ⅡA(滑石) | Ia4 小盤ⅤB(瓷) | Ia7 平底鉢Ⅲ(陶) | Ic7 平底鉢Ⅲ(陶) | Ja4 托ⅡB(陶) | Ja5 小盤ⅤB(瓷) | Ja7 小盤ⅤA(陶) | Mc3 小盤ⅤA(瓷) | Oa4 平底鉢Ⅲ(銅) | Qa3 高台付碗ⅣA(陶) | Rb4 高台付碗ⅤB(瓷) | Qb5 高台付碗ⅣA(瓷) | Pb3 花碗Ⅰ(鍍) | Ta6 高台付鉢Ⅴ(瓷) | Ue3 高台付鉢Ⅳ(瓷) | | |
| 鉢 | Ac1 杯の蓋(銅) | Ca5 丸底杯Ⅵ(銅) | Db5 平底杯Ⅳ(銅) | Da6 高台付鉢Ⅲ(陶) | Da7 中盤ⅤA(瓷) | Ec7 高台付碗ⅣA(瓷) | Ea8 高台付碗ⅣA(瓷) | Ea9 高台付碗ⅣA(瓷) | Ea10 果盒(瓷) | Ga7 鐵鉢形Ⅱ(瓷) | Ga8 鐵鉢形Ⅱ(瓷) | Hb3 高台付碗ⅣA(瓷) | Ia6 高台付碗ⅣA(陶) | Ia9 深鉢Ⅰ(陶) | Ib11 淺洗ⅢA(陶) | Ia12 畚(陶) | Ma11 大盤ⅤB(瓷) | Mb7 盒ⅢA(鍍金銅) | Mb8 高足香盒(鍍金銅) | Mb9 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mc10 大盤ⅤA(陶) | Nb5 盂ⅤA(瓷) | Pb4 盒ⅢA(鍍) | Qc6 盂Ⅳ(瓷) | Ta7 小形豆ⅠB(瓷) | Ua4 小形豆Ⅱ(瓷) | Ub5 盂ⅤA(陶) | Ub6 盒ⅢA(陶) |
| 鐵鉢形・盂・豆・盒 | Aa5 高台付碗ⅣA(瓷) | Bc7 高台付碗ⅠC(瓷) | Bc8 高台付碗ⅤA(瓷) | Bb9 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ca7 鐵鉢形(ガラス) | Da8 小形豆ⅠA(瓷) | Ec8 盂Ⅳ(瓷) | Ea10 果盒(瓷) | Ga9 鐵鉢形Ⅱ(瓷) | Ga10 深鉢Ⅰ(陶) | Ib11 淺洗ⅢA(陶) | Ia12 畚(陶) | Ma11 大盤ⅤB(瓷) | Mb7 盒ⅢA(鍍金銅) | Mb8 高足香盒(鍍金銅) | Mb9 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mc10 大盤ⅤA(陶) | Nb7 畚(瓷) | Pb4 盒ⅢA(鍍) | Qc6 盂Ⅳ(瓷) | Ta7 小形豆ⅠB(瓷) | Ua4 小形豆Ⅱ(瓷) | Ub5 盂ⅤA(陶) | Ub6 盒ⅢA(陶) | Ta6 高台付鉢Ⅴ(瓷) | Ue3 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ua5 盂ⅤA(陶) | Ub6 盒ⅢA(陶) |
| 鉢 | Aa6 高台付鉢ⅢD(瓷) | Bc9 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Bb10 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Bb11 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ca8 鐵鉢形(ガラス) | Da9 小形豆ⅠA(瓷) | Ec9 盂Ⅳ(瓷) | Ea11 果盒(瓷) | Ga11 鐵鉢形Ⅱ(瓷) | Ga12 深鉢Ⅰ(陶) | Ib12 淺洗ⅢA(陶) | Ia13 畚(陶) | Ma12 大盤ⅤB(瓷) | Mb10 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mb11 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mc11 大盤ⅤA(陶) | Nb8 畚(瓷) | Pb5 盒ⅢA(鍍) | Qc7 盂Ⅳ(瓷) | Ta8 小形豆ⅠB(瓷) | Ua6 小形豆Ⅱ(瓷) | Ub7 盂ⅤA(陶) | Ub8 盒ⅢA(陶) | Ta7 高台付鉢Ⅴ(瓷) | Ue4 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ua6 盂ⅤA(陶) | Ub7 盒ⅢA(陶) | |
| 鐵鉢形・盂・豆・盒 | Aa7 深洗ⅠC(銅) | Bc10 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Bb12 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Bb13 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ca9 鐵鉢形(ガラス) | Da10 小形豆ⅠA(瓷) | Ec10 盂Ⅳ(瓷) | Ea12 果盒(瓷) | Ga12 鐵鉢形Ⅱ(瓷) | Ga13 深鉢Ⅰ(陶) | Ib13 淺洗ⅢA(陶) | Ia14 畚(陶) | Ma13 大盤ⅤB(瓷) | Mb12 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mb13 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mc12 大盤ⅤA(陶) | Nb9 畚(瓷) | Pb6 盒ⅢA(鍍) | Qc8 盂Ⅳ(瓷) | Ta9 小形豆ⅠB(瓷) | Ua7 小形豆Ⅱ(瓷) | Ub8 盂ⅤA(陶) | Ub9 盒ⅢA(陶) | Ta8 高台付鉢Ⅴ(瓷) | Ue5 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ua7 盂ⅤA(陶) | Ub8 盒ⅢA(陶) | |
| 水 | Aa8 深洗ⅠC(銅) | Bc11 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Bb14 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Bb15 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ca10 鐵鉢形(ガラス) | Da11 小形豆ⅠA(瓷) | Ec11 盂Ⅳ(瓷) | Ea13 果盒(瓷) | Ga13 鐵鉢形Ⅱ(瓷) | Ga14 深鉢Ⅰ(陶) | Ib14 淺洗ⅢA(陶) | Ia15 畚(陶) | Ma14 大盤ⅤB(瓷) | Mb14 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mb15 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mc13 大盤ⅤA(陶) | Nb10 畚(瓷) | Pb7 盒ⅢA(鍍) | Qc9 盂Ⅳ(瓷) | Ta10 小形豆ⅠB(瓷) | Ua8 小形豆Ⅱ(瓷) | Ub9 盂ⅤA(陶) | Ub10 盒ⅢA(陶) | Ta9 高台付鉢Ⅴ(瓷) | Ue6 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ua8 盂ⅤA(陶) | Ub9 盒ⅢA(陶) | |
| 銅洗 | Aa9 深洗ⅠC(銅) | Bc12 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Bb16 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Bb17 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ca11 鐵鉢形(ガラス) | Da12 小形豆ⅠA(瓷) | Ec12 盂Ⅳ(瓷) | Ea14 果盒(瓷) | Ga14 鐵鉢形Ⅱ(瓷) | Ga15 深鉢Ⅰ(陶) | Ib15 淺洗ⅢA(陶) | Ia16 畚(陶) | Ma15 大盤ⅤB(瓷) | Mb16 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mb17 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mc14 大盤ⅤA(陶) | Nb11 畚(瓷) | Pb8 盒ⅢA(鍍) | Qc10 盂Ⅳ(瓷) | Ta11 小形豆ⅠB(瓷) | Ua9 小形豆Ⅱ(瓷) | Ub10 盂ⅤA(陶) | Ub11 盒ⅢA(陶) | Ta10 高台付鉢Ⅴ(瓷) | Ue7 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ua9 盂ⅤA(陶) | Ub10 盒ⅢA(陶) | |
| 中・大盤・畚 | Aa10 大盤ⅤB(鍍金銅) | Bc13 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Bb18 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Bb19 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ca12 鐵鉢形(ガラス) | Da13 小形豆ⅠA(瓷) | Ec13 盂Ⅳ(瓷) | Ea15 果盒(瓷) | Ga15 鐵鉢形Ⅱ(瓷) | Ga16 深鉢Ⅰ(陶) | Ib16 淺洗ⅢA(陶) | Ia17 畚(陶) | Ma16 大盤ⅤB(瓷) | Mb18 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mb19 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mc15 大盤ⅤA(陶) | Nb12 畚(瓷) | Pb9 盒ⅢA(鍍) | Qc11 盂Ⅳ(瓷) | Ta12 小形豆ⅠB(瓷) | Ua10 小形豆Ⅱ(瓷) | Ub11 盂ⅤA(陶) | Ub12 盒ⅢA(陶) | Ta11 高台付鉢Ⅴ(瓷) | Ue8 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ua10 盂ⅤA(陶) | Ub11 盒ⅢA(陶) | |
| 大盤・畚 | Aa11 大盤ⅤB(鍍金銅) | Bc14 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Bb20 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Bb21 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ca13 鐵鉢形(ガラス) | Da14 小形豆ⅠA(瓷) | Ec14 盂Ⅳ(瓷) | Ea16 果盒(瓷) | Ga16 鐵鉢形Ⅱ(瓷) | Ga17 深鉢Ⅰ(陶) | Ib17 淺洗ⅢA(陶) | Ia18 畚(陶) | Ma17 大盤ⅤB(瓷) | Mb20 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mb21 淺洗ⅢB(鍍金銅) | Mc16 大盤ⅤA(陶) | Nb13 畚(瓷) | Pb10 盒ⅢA(鍍) | Qc12 盂Ⅳ(瓷) | Ta13 小形豆ⅠB(瓷) | Ua11 小形豆Ⅱ(瓷) | Ub12 盂ⅤA(陶) | Ub13 盒ⅢA(陶) | Ta12 高台付鉢Ⅴ(瓷) | Ue9 高台付鉢Ⅳ(瓷) | Ua11 盂ⅤA(陶) | Ub12 盒ⅢA(陶) | |

| 初 唐 | | | | | | | | | | 盛 唐 | | | | | | | | | |
|---------------------|----------------------|----------------------|-----------------------|----------------------|-----------------------|-------------------------|--------------------------|-------------------------|-------------------------|---------------------|-----------------------|------------------------|----------------------|-----------------------------|-----------------------|-----------------------|--|--|--|
| Ab (初唐) 広東曲江 文献106 | Bc (唐早期) 安徽繁昌 文献205 | Da (643) 遼寧朝陽 文献432 | Dc (初唐) 河北邢臺 文献367 | Gb (671頃) 福建泉州 文献118 | Ha (7C後半頃) 遼寧敖漢旗 文献95 | Ka (694) 江蘇伍松超墓 文献119 | Ma (672~706) 河南鞏義 文献435 | Na (706) 河南宋祐墓 文献9 | Nb (708) 河南李文淑墓 文献440 | Pa (709) 河南李嗣本墓 文献9 | Ra (738) 河南李景由墓 文献132 | Sa (741) 陝西慶山寺地宮 文献484 | Sb (742頃) 陝西西安 文献272 | T (~8C中) 陝西何家村 文献16-310-488 | Vc (750) 河南鄆縣 文献9 | Wa (761) 河北史思明墓 文献392 | | | |
| Ac (初唐) 河南鞏義 文献235 | Ca (638) 湖北楊氏墓 文献352 | Db (7C中頃) 湖南長沙 文献101 | Dd (7C末頃) 河北琉璃河 文献448 | Gc (673) 遼寧左才墓 文献478 | Ja (684) 湖北李徽墓 文献365 | Kc (7C末~8C初) 陝西耀州 文献248 | Mb (7C中~8C初) 陝西西安 文献2 | Nc (708) 河南李延楨 文献116 | Oa (708) 陝西西安 文献2 | Pb (718) 河南李珣墓 文献9 | Rb (738) 河南王仁波墓 文献274 | Sc (744) 遼寧韓府君墓 文献82 | Td (8C中) 河南鄭州 文献412 | Vd (8C中) 河南鄭州 文献412 | Wb (763) 湖南鄭州君墓 文献103 | Wc (765) 河南神倉墓 文献396 | | | |
| Ba (620) 河南裴氏墓 文献97 | Cb (唐早期) 湖南長沙 文献73 | | Eb (655) 寧夏史道洛墓 文献33 | | Jb (689) 山西崔寧墓 文献364 | Lb (7C末~8C初) 河南鞏義 文献235 | Mc (7C末~8C前半) 河北蔚縣 文献136 | Ob (709) 河南李延楨 文献116 | Od (7C末~8C初) 河南鄭州 文献412 | Pd (8C前) 福建浦城 文献131 | Qa (731) 河南鄭州夫人墓 文献9 | | | | Wd (8C前~中) 江蘇鎮江 文献119 | | | | |
| Bb (625) 浙江羅州 文献125 | | | | | | Lc (7C末~8C初) 江蘇徐州 文献183 | | Oc (7C末~8C初) 河南鄭州 文献412 | Qc (731) 河南鄭州夫人墓 文献9 | | | | | | | | | | |

瓶・壺・細頸壺
貯蔵具
唾壺
有柄壺・有柄注壺
注器
罐・瓮
煮鍋
煮沸具
錐壺・錐斗
熨斗
爐・燈
雜器



中唐

晚唐

五代・十国時代

- Aa (778) 河南鄭州文獻181 Bb (796頃) 遼寧昭盟 文獻16-262 Ca (中唐前) 江蘇趙氏墓 文獻145 Da (824) 河南齊國太夫人墓 文獻492 Ea (中唐) 河北石家莊 文獻120 Fc (中唐後~晚唐前) 湖南長沙窯 文獻208 Ka (850頃) 陝西背陰村 文獻16-307 La (856) 河北劉府君墓 文獻378 Ma (9C後半) 江蘇丹徒 文獻16-342 Nc (901) 江蘇水丘墓 文獻16 Pa (晚唐) 廣東和平 文獻195 Qa (909) 河南高麗塋墓 文獻417 Ra (939) 浙江康陵 文獻515 Sa (941-952) 浙江吳越王墓 文獻88
- Ac (784) 河南洛陽 文獻283 Bc (797) 河南鄭州 文獻412 Cb (中唐前) 陝西青龍寺 文獻266 Db (826) 江蘇殷府君墓 文獻119 Eb (中唐) 江蘇揚州 文獻141 G (840) 河南崔府墓 文獻9 Kc (836-854) 山西高微墓 文獻496 Lb (858) 河南李煥厚墓 文獻9 Mc (846-879) 陝西白敬宗墓 文獻249 Ob (晚唐) 福建廈門 文獻202 Pd (晚唐~五代) 河北臨城 文獻378 Qb (918) 四川王建墓 文獻1 Sb (955~960) 河南洛陽 文獻416
- Bd (中唐早) 河南鄭州 文獻412 Cc (814) 河南鄭州方墓 文獻132 Ee (中唐) 河北邢家 文獻367 I (845) 河南李存墓 文獻116 Ld (868) 河北張氏墓 文獻146 Md (9C末頃) 陝西西安 文獻16 Oa (9C中~10C初) 江蘇鎮江 文獻119 Pc (晚唐~五代) 湖南長沙窯 文獻208 Qc (932) 福建王審知墓 文獻389 T (五代~北宋初) 河南鞏義 文獻235
- Be (中唐前) 湖南長沙窯 文獻208 Ef (中·晚唐) 山西大同 文獻457 Ja (847) 河南穆穆墓 文獻9 Le (9C後半) 陝西咸陽 文獻16 Na (881-882) 河南李杼墓 文獻9 Oc (晚唐) 陝西臨泉 文獻268 Pd (晚唐~五代) 內蒙古清水河 文獻425

貯蔵具
壺
甕
注器
罐・瓮
釜・鍋
三脚罐・熨斗・三脚鍋
雜器
爐・燈

